ランドスケープデザイン Designing environment and scenery for public.

隔月刊 December 2018

LANDSCAPE DESIGN

No.123

場で生まれるコミュニティ

Community born in the place

CLOSE-UP

川和保育園の移転計画

里山を残し、活用する方法を探る



Honda環境・安全ビジョン

「自由な移動の喜び」と「豊かで持続可能な社会」の実現

次世代のために、今できること。これからすべきこと。Hondaは常に考え、積極的に行動していきます。

BLUE SKIES FOR OUR CHILDREN

子どもたちに青空を

Hondaは「『自由な移動の喜び』と『豊かで持続可能な社会』の実現」をグローバル環境・安全ビジョンとして定めています。1970年代、当時最も厳しい排出ガス規制とされた米国マスキー法のクリアにチャレンジしたHondaの技術者は、「子供たちに青空を残したい」という想いのもと、開発に取り組みました。「自由な移動の喜びを次世代（for our children)に伝えていきたい。だからこそ、豊かで持続可能な社会（blue skies)を実現させたい」。これまでも、これからも変わらないHondaの環境への取り組みに対する想いの象徴です。

HONDA
The Power of Dreams

LANDSCAPE DESIGN
No.123 2018年12月号

［目次］









緑を踏み締める感動を、
もっと多くの人に知ってもらいたい。

Green Turf Project

グリーンタープロジェクト

最高のピッチ・コンディションを維持する



ベルマーレ設立当初から、グラウンドキーパーとして競技場の芝生を整備してきた、『チーム・GT』こと湘南造園の整備スタッフたち。彼らの整備する平塚競技場は、日本でもトップクラスのピッチ・コンディションを維持しています。この競技場でプレーした選手を引き付けて止まない良好な芝生は、現在６人のグラウンドキーパーによって守られ、他に平塚球場・馬入ふれあい公園サッカー場・川崎フロンターレ練習グラウンドなども整備をしています。

馬入サッカー場の天然芝を小学校へ移植



2005 年に馬入サッカー場の芝生を天然芝から人工芝へ張り替える際、平塚市は子供たちに『芝で遊び、親しんで欲しい』と、市内の希望する小学校の校庭に、サッカー場の天然芝を移植するプロジェクトを提案・実行しました。そのうちの富士見小学校では、ベルマーレの選手・関係者と一緒に子ども達が緑のタイルを敷き詰めました。その後、芝はしっかりと根付き、一面の緑のカーペットが広がっています。

www.shonan-ls.co.jp

TEL.0463-32-5030

石と緑のエキスパート

SHONAN 湘南造園株式会社

【本社】神奈川県平塚市万田 596-1 〒 254-0913



ランドスケープデザイン No.123
2018年12月発行

編集・発行人
丸茂 喬

［『ランドスケープデザイン』編集部スタッフ］
編集長
小林哲也

編集・デザイン
丸茂弘之
中村桂祐

営業・広告企画
松田清江
中村桂祐

販売促進・海外事業
一ノ瀬健介

［協力スタッフ］
デザイン
村上 和（目次, P. 116–118）

ロゴタイプデザイン
春口浩一郎

印刷・製本
㈱ローヤル企画

取次店
トーハン、日販、大阪屋栗田

発行所
㈱マルモ出版
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8
南平台アジアマンション708
TEL.03-3496-7046 FAX.03-3496-7387
E-mail: design@marumo-p.co.jp

HP: http://www.marumo-p.co.jp
twitter:
http://twitter.com/marumo_p
instagram:
https://www.instagram.com/marumopublishing

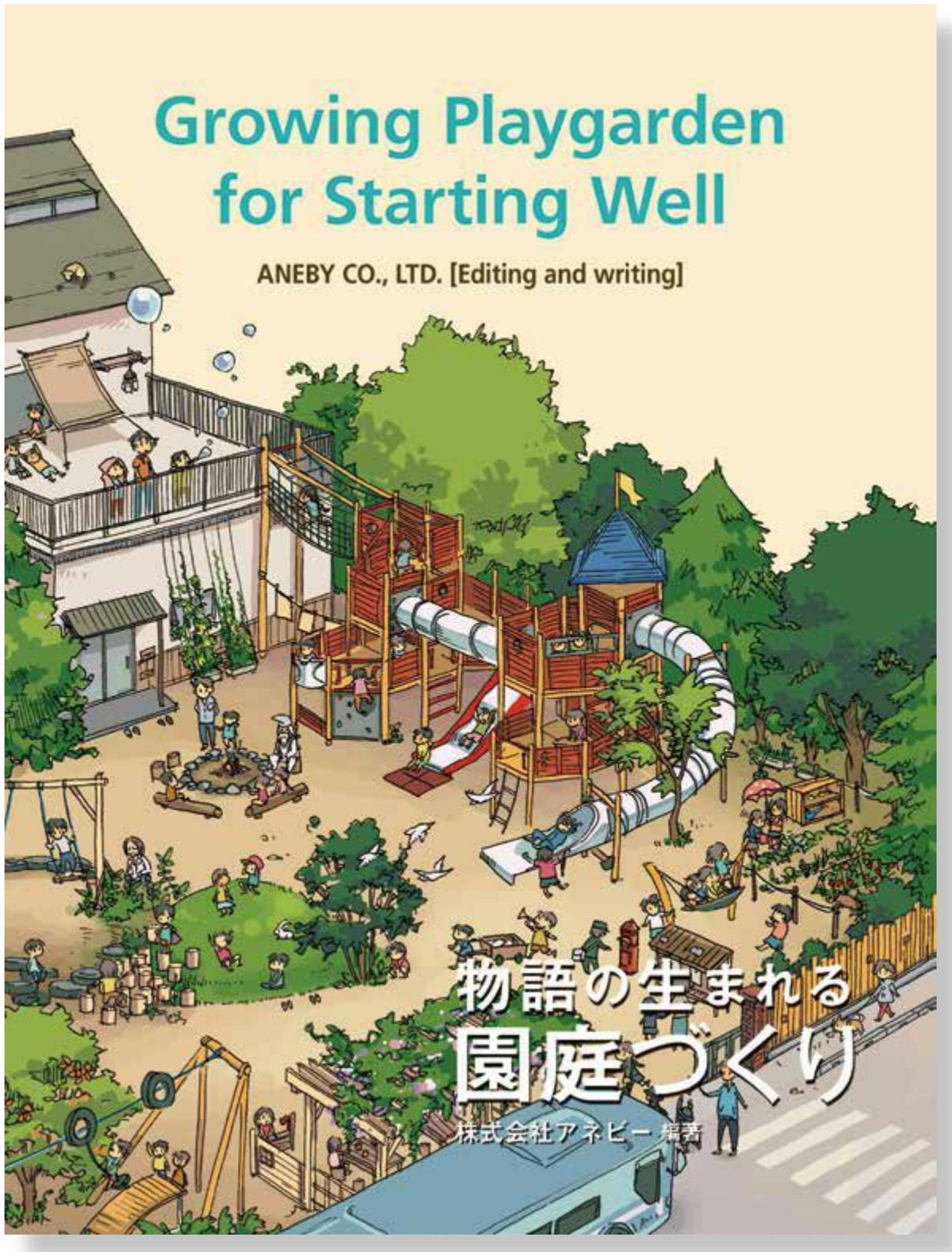
ISSN 1341- 4747

表紙写真提供
（株）グランドレベル

今までなかった！日本独自の園庭づくり実例集

物語の生まれる園庭づくり

株式会社アネビー／編著



幼児教育（保育）の質を問われる今日
世界最高水準の教育を実践している施設を紹介する

【第1章】園庭を創造する

●川和保育園　●大森みのり幼稚園
●認定こども園 福井佼成幼稚園　●円乗寺保育園
●小立野善隣館こども園

【第2章】さまざまな園庭

【第3章】園庭を組み立てる

A4 変型（W225mm × H297mm）
オールカラー
本文：176 頁

価格
2,500円（税込・送料別）

お申し込み方法：下記の欄に必要事項をご記入の上、FAX でマルモ出版までお申し込み下さい。その後商品と払込取扱票をお送りします。
銀行振込をご利用の方は、上記金額に送料 170 円（1 冊）、500 円（2 冊以上）を加えた金額を下記 1 の口座にお振込下さい。
郵便貯金口座をご利用の方は、届きました払込取扱票を用いて下記 2 の口座にお振込下さい。
お振込先：1. 三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店　（普）5294495　株式会社マルモ出版
2. 郵便貯金口座 口座番号：00170-4-70822　株式会社マルモ出版　※振込み手数料はご負担下さい。

お問合せ先：ご不明点・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡下さい。

㈱マルモ出版　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8 南平台アジアマンション 708 号
TEL. 03-3496-7046　FAX. 03-3496-7387　E-mail：maru@marumo-p.co.jp

ご注文日　年　月　日			ご注文冊数
ご注文者	会社名・お名前	ご連絡先（TEL）	冊
	ご住所　〒		

LANDSCAPE DESIGN

No.123 December issue, 2018

[CONTENTS]



LANDSCAPE DESIGN No. 123
December, 2018

editing publisher
Takashi Marumo

[LANDSCAPE DESIGN editorial staff]
chief editor
Tetsuya Kobayashi

editor & design
Hiroyuki Marumo
Keisuke Nakamura

sales
Kiyoe Matsuda
Keisuke Nakamura

sales promotion & international affairs
Kensuke Ichinose

[cooperative staff]
design
Kazu Murakami (contents, P. 116–118)

logo design
Koichiro Haruguchi

printing
Loyal Planning Co., Ltd.

agency
TOHAN, NIPPAN, OSAKAYAKURITA

publishing office
Marumo Publishing Co., Ltd.
Nanpeidai Asia Mansions 708, 4-8, Nanpeidaicho,
Shibuyaku, Tokyo, 150 0036
phone: +81 (0)3 3496 7046
FAX: +81 (0)3 3496 7387
E-mail: design@marumo-p.co.jp

HP: http://www.marumo-p.co.jp
twitter:
http://twitter.com/marumo_p
instagram:
https://www.instagram.com/marumopublishing

ISSN 1341- 4747

Cover Photo provided
GROUND LEVEL INC.

CLOSE-UP

【座談会】
川和保育園移転計画 里山を残し、活用する方法を探る

出席者
井出敦史 × **加藤克彦** × **関さやか** × **田瀬理夫**
（sum design）（tenjin studio）（sum design）（プランタゴ）

司会進行＝丸茂 喬（マルモ出版代表取締役）
写真・資料提供＝sum design、アトリエR 畑 亮*、編集部**

【Disscussion】
Kawawa nursery school relocation plan Exploring ways to utilize SATOYAMA

[attendees]
Atsushi Ide (sum design co., ltd.) × **Katsuhiko Kato** (Tenjin Studio Co., Ltd.) × **Sayaka Seki** (sum design co., ltd.) × **Michio Tase** (PLAMTAGO Inc.)

Moderator: Takashi Marumo [CEO of Marumo Publishing Co., Ltd.]
Photos and Materials Provided by sum design co., ltd.、atelierR Ryo Hata*、Editorial Desk**

子どもが自主的に遊ぶことができる環境づくりで知られる川和保育園の移転建替計画。新園舎と周囲の森を含めた環境づくりは、園の保育理念が新しい場所と空間で今まで以上に力強く継続するためのデザインであり、更には今後の園の保育活動を通じて、子どもが自主的に遊べる環境づくりの重要性を広く知ってもらうための基盤のデザインでもある。自然地形に囲まれた敷地形状に合わせて園庭を囲うように園舎を配置し、園庭や森と密接した関係を築いた。
豊かな環境の中、子どもたちに様々な居場所をつくりだす大らかなプラットフォームが完成した。
今回は、本移転計画に携わったチームが、完成に至るまでの経緯を話しあった。

井出敦史（sum design）

書院から川和保育園を見る*







本計画地（2015年時）には母屋や書院、蔵が残っていた

敷地俯瞰（上／施工前。下／施工後*）



里山を残すことから始まった川和保育園の移転計画

井出敦史（以下井出）：川和保育園（以下川和）の移転プロジェクトは、2005年に、川和町にある本計画地の地主が所有の土地、約15,000㎡（山林部約7,800㎡）の有効活用を希望したことに始まりました。「里山を残す計画を」との要望があった為、SUM建築研究所所長である父、井出共治所長（以下井出所長）と田瀬さんとで、地形を活かすように、二棟を空中廊下で繋ぐ集合住宅計画を提案しましたが、地主との調整に難航して実現には至りませんでした。

巡り巡って保育園移転計画に形を変えましたが、根幹となる当初のコンセプトは強く受け継いでいます。

移転計画への転換点は2014年に地主から保育園移転の相談を受けたことでした。移転前の川和保育園（以下旧川和）の土地も地主のもので、本計画地の道路を挟んだ対面に位置しています。

地主は江戸時代からこの地域で有力な商家で庄屋の役割も担う名家だったそうで、川和の保育に共感し、地代は負担の少ない金額だったと聞いています。

加藤克彦（以下加藤）：ただ時代が変わり、本来なら旧川和のあった土地は工業地域なので工場等への賃貸の方が良い条件の為、本計画地に隣接した当初の移転予定地への移転を希望していました。当初予定地は日当たりが悪く、団地も近いため旧川和としては保育環境が良くなく、合意を得るには至りませんでした。

川和では園庭を中心とした保育を行うため、園庭環境が大きな役割を担っています。そのため、木々が大きく育った旧園の園庭に代わるような既存環境の魅力的な土地を移転先に提案する必要がありました。

そこで私たちは、地主の自宅があった場所（本計画地）が相応しいと考え、「道路側に商業施設などをつくり、奥の里山に囲まれた土地を川和に貸し（里山も）管理してもらえば、収益を得られて環境の保全もできるのではないか」と地主に対して土地利用の提案をしました。

井出：まず、園舎をつくり、商業施設、分譲集合住宅（当初案）、福祉等の建設（当初案）というように、それらを順番に建築していきます。この方法は各計画面積が小さく、開発行為に該当しない為、大規模な土木工事を行う必要がありません。

結果、建築主、地主への金銭的負担軽減に繋がり、既存緑地の保全された、統一感のある計画となります。

—それはとてもメリットがありますね

井出：一般的には、事業主は短期借入れをして事業計画を立てますが、今回のケースは地主保有の土地なので、長期計画でも問題ありません。

田瀬理夫（以下田瀬）：通常は金利を払わなくてはならないので、早く開発をする必要があるんです。

井出：地主には提案に共感をいただき、自宅の立ち退きも承諾してくれました。

加藤：旧川和のあった場所は周囲に工場関連の建物が建ち並んで、園庭に西日がほとんど入らなくなっていたので、園側も移動したいという気持ちが強くなってきていました。

井出：工場からの騒音も許容の範囲を超えはじめてきていました。

—そういう意味では移転のタイミングは良かったと言えますね。

井出：私達はまず、川和と地主の敷地の区分けから始めました。

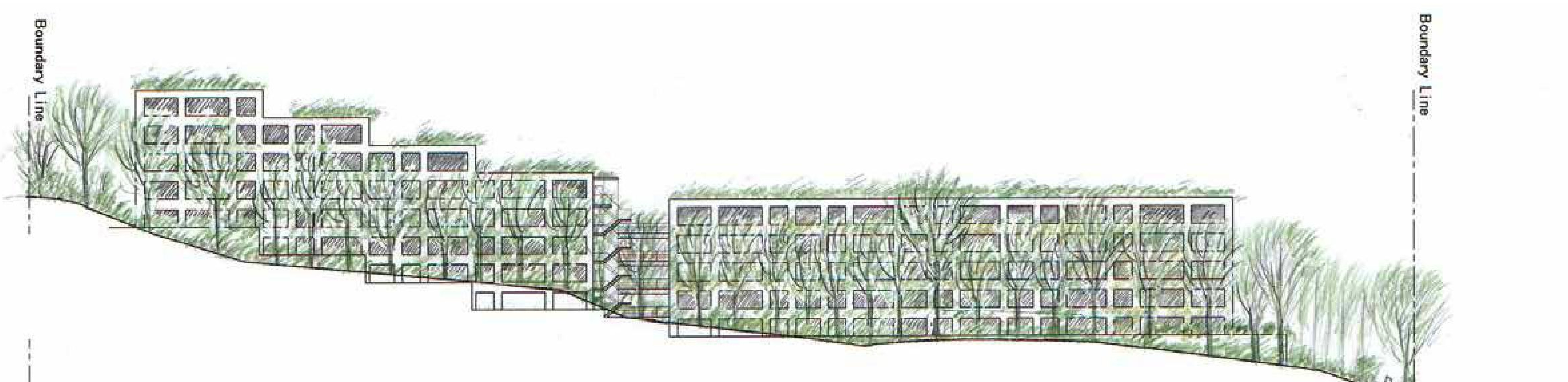
敷地南東の里山を覆うように川和の敷地をレイアウトしました。里山は接道させず、将来的に所有者が代替わりしても、里山が無造作に伐採、開発される心配がないよう考えました。

最終的な土地利用計画は、川和、書院（地主が使用）さらに、地主の要望から残すこと



当初（2005年）の集合住宅計画



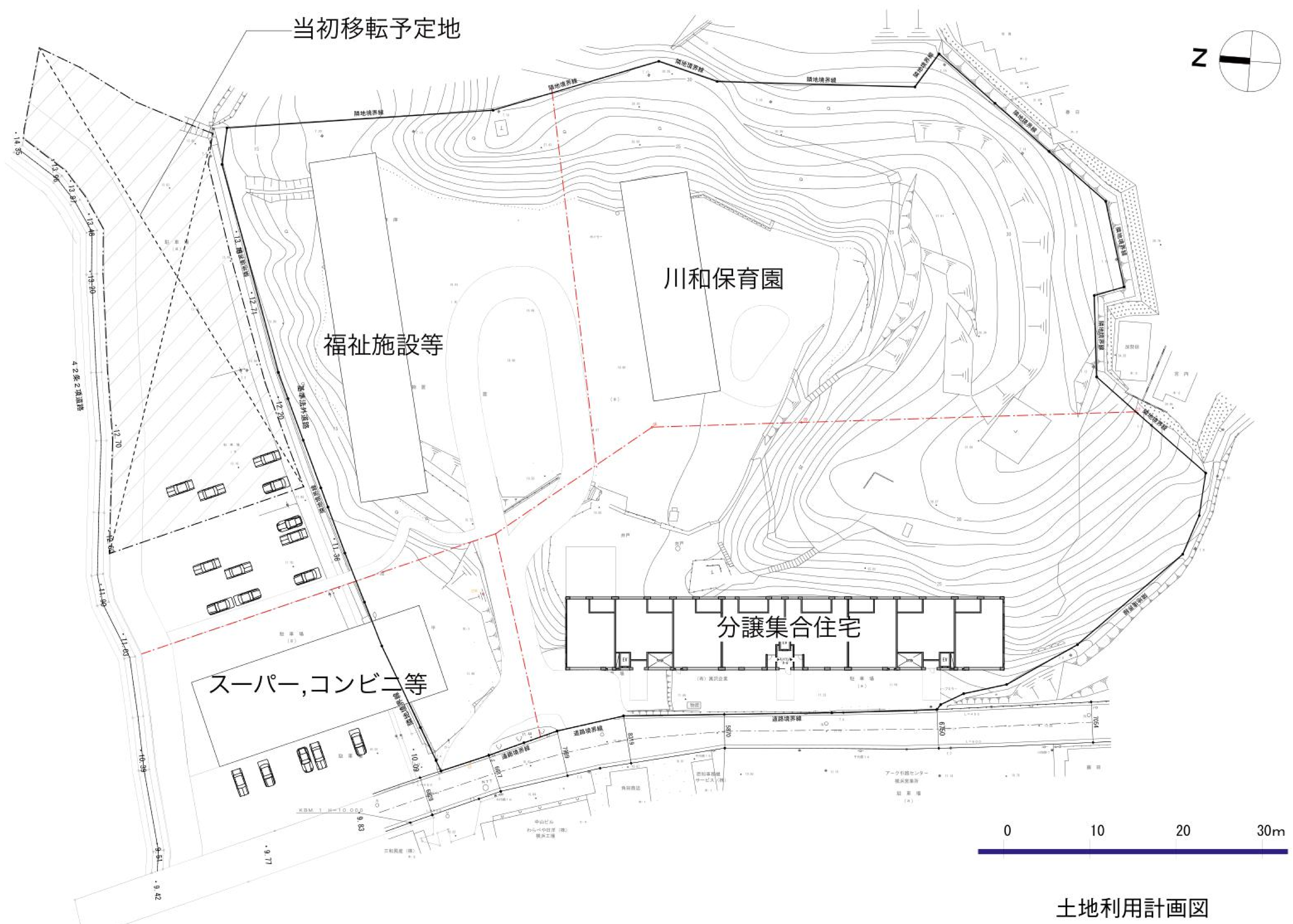


地形を活かした、二棟を空中廊下で繋ぐ集合住宅計画（2005年）（上／模型。下／立面図）



広域配置図


旧川和園庭。成長した木々が園庭を包み込んでいる（写真＝宮原洋一）



土地利用計画図

になった蔵の有効活用が主となり、福祉施設、集合住宅等の建設は中止としました。その理由は、可能な限り元の土地の姿のまま保全したいとの地主の要望からでした。

加藤：その後、土地の区分の最終協議を経て、2015年の夏頃から川和の設計が本格的にスタートしました。

井出：また、設計と並行して、地主側の先行工事に着手しました。

田瀬：敷地には母屋や書院、蔵が残っていました。蔵は解体しましたが、書院は曳き家にしました。

井出：書院の他に、店蔵、醪蔵、8号蔵と呼ばれる既存蔵を3棟保全しました。園舎の配置は「西日を園庭に取り込みたい」という川和からの強い要望がありましたので、そこを十分配慮しました。

子供を遅くまで預かるので、できるだけ長い間園庭で遊ぶためには夕陽が長く見え、西側が空いていた方が良いということです。

加藤：旧川和の園庭では、西日が一番当たる状態にしておいて、暑い日には自分たちでオーニングやターフなどを使って調整していたようです。

井出：我々は当初、全く異なる提案をしていて、周りが山なので回遊できるようにレベルを合わせて屋根を介して、山と園舎をつなげて遊べるようにしたいと考えていました。

—その提案もすばらしいと思います。

加藤：しかしそれだと西日が入らないため最終的には園の考えを尊重しました。

現地調査から見えてきたもの

田瀬：この場所は商家であり、庄屋さんの山だったので、調査を続けていくうちに文化的で品のある暮らしをしていたことが分かりました。昔は庄屋といえばそのような役

割があったのかもしれませんが、そういう痕跡がそのままの形で残っているのがとても良いんです。

―「ランドスケープデザイン No.63」に掲載されている田瀬さんと井出共治所長(以下井出所長)との対談の中で今回のプロジェクトの前身のような話をされていましたね。

田瀬：よく覚えています。茂原の庄屋さんの築160年の民家を改修して週末別荘のようにしました。しかし、うら山は竹やぶになっていたため、それを何とかしてほしいと頼まれた。とにかく竹を切って田んぼ等に戻したんです。クライアントは私よりも4〜5つ上の方ですが、高校まで庄屋の息子さんで、今は都心で弁理士をされているようです。

民家は改修して住めるようにした。母屋には小さな庭があったんです。その背後の田んぼになっている場所がどうなっていたかわからないとのことだったので、杉や竹を切ってから昔を思い出せるような風景をつくりました。ですが、昔の景色をつくるだけでは面白くありません。その方はゴルフが大好きだったため、ゴルフができるようにしたいとの依頼がありました。それから田んぼを掘って水をためてため池にしたりして、難易度の高い9ホールのショートコースをつくりました。最終的には全くゴルフ場には見えない庭になりました。

まだ今でも少し手直しに通っています。裏のお稲荷さんが崩壊しはじめているので、一昨年から山を崩して低くして元に戻しはじめました。今は大震災で階段が落ちてしまったため、途中にあったお稲荷さんのところには行けなくなっています。そこにアクセスできる階段をつければ終わるんですけどね。

―そういう場所はメンテナンスが不可欠ですよね。

田瀬：メンテナンスは工事を手掛けた植木屋さんが時々しますが、クライアント本人が草採りなどをすることも大切です。新しくつくったものは一見、おもしろみはありませんが、昔から受け継がれてきたものには意味があり、楽しいはずです。今回の計画地においても昔からのものがたくさんありました。解体したときに出てくる発生材なども再利用しています。

あるものはすべて使う
発生材の再利用

―田瀬氏と関氏は具体的にどの段階から入ってどのように現場を管理されたのでしょうか。また、発生材の再利用のきっかけを教えて下さい。

加藤：川和の移転が決まり、敷地の区分けについて地主から了承を得た時点で入っていただきました。

井出：当初地主側の引き渡し前の工事として、書院の曳き工事業者や内装工事業者、造園工事業者、母屋等の解体工事業者が入り乱れて作業していました。

良い業者ばかりでしたが、設計の全体像を各社が掴んでいないまま、それぞれの作業を進めている状況でした。

この現場の状況に危機感を持ち、プランタゴ(田瀬さん)には園側の設計が始まるタイミングで入ってもらう予定でしたが、時期を早めて設計監理をお願いすることにしました。

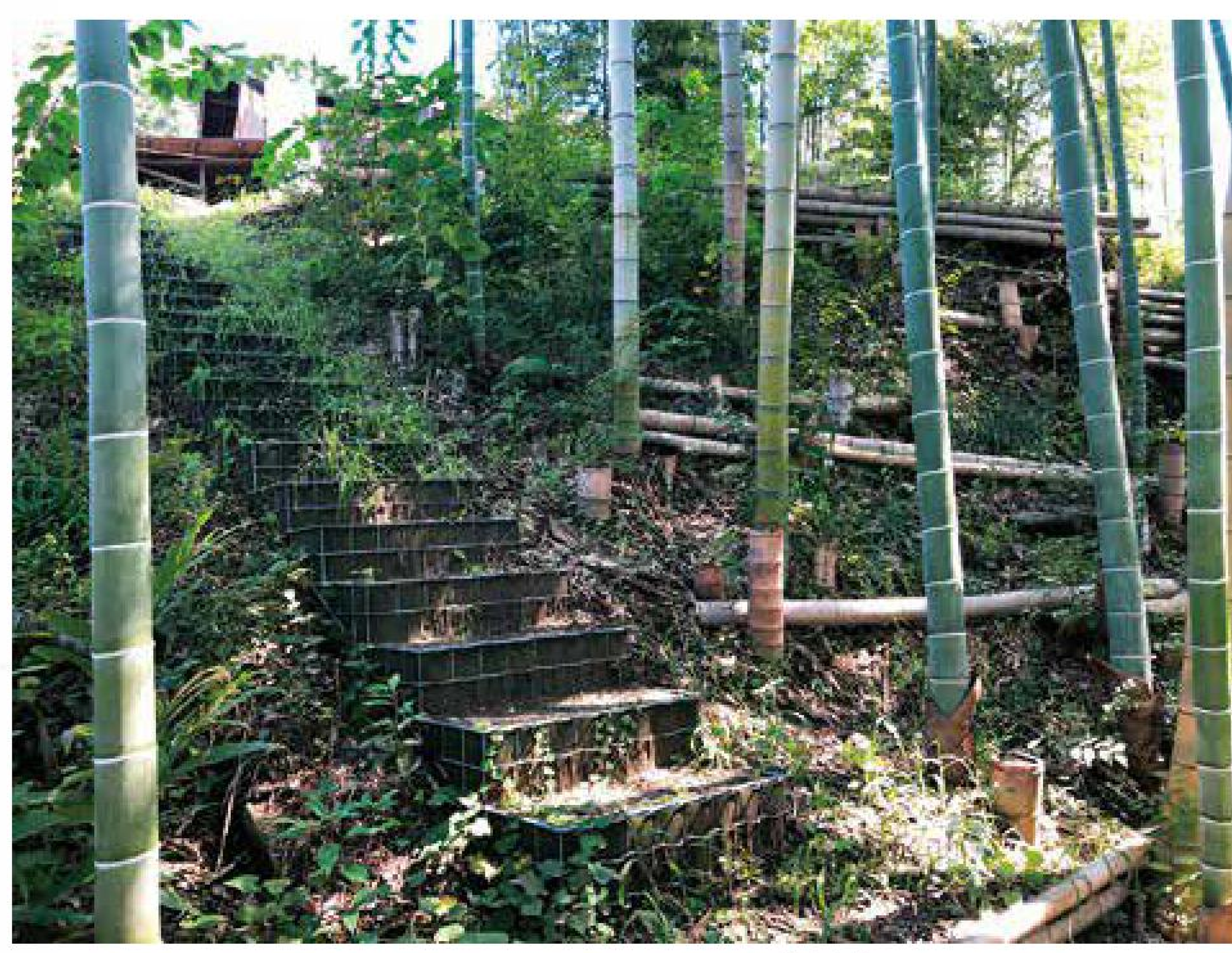
工事業者の方々は、指示系統が急に変わり現場が少し混沌とした期間もありましたが、最終的には、快く作業を進めてくださいました。

田瀬さんたちがいなければ、書院周辺は今の川和のような一体的な敷地にはなっていなかったと思います。

同じタイミングで田瀬さんから、「里山を元の姿に戻す為には、竹も伐採する必要がある」とアドバイスをいただいたので、地主へ里山保全・管理の趣旨を説明したところ、理解していただき、数千本の竹の伐採も実施しました。これらの竹は場外処分せず、排水トレンチの材料、バイオネストなどで再利用しています。



タケ伐採範囲計画図


タケ伐採後

加藤：発生材の再利用については、母屋を解体する際に発生するガラなどがきっかけだったと思います。

田瀬：とにかく解体や調査などで出た使えそうなものを全てとって置くようにしました。それを関さんにしっかりと調べてもらってリスト化して仕分けをしました。その時は何をどこに使おうかということまでは考えていませんでした。工事の段階で斜面のコブがあって少し危険な感じがしたので切土し、その土で書院のベースの盛土をしました。また、植物もリスト化し、モミジをたくさん植えて西側はモミジ山にしました。マツやウメなどいろんな木があったので、後はどこに何を植えるかを考えました。

―発生材のリストがあるんですか？

田瀬：ありますよ。石は形や大きさまでまとめています。

―発生材のリストはその都度増えていったのでしょうか。

井出：そうですね。設計の材料として情報提供していただき、それをもとに図面を描きました。各所にお社があったので、それを同じ場所に移してお社を新しくつくりました。その時に周りにあった那智黒石も関さんが一生懸命収集していました。

関さやか(以下関)：宝探しみたいで楽しかったです。最初は良く分からなかったので、探してきて田瀬さんにその価値を聞きながらリスト化していきました。

―草もとってありましたね。

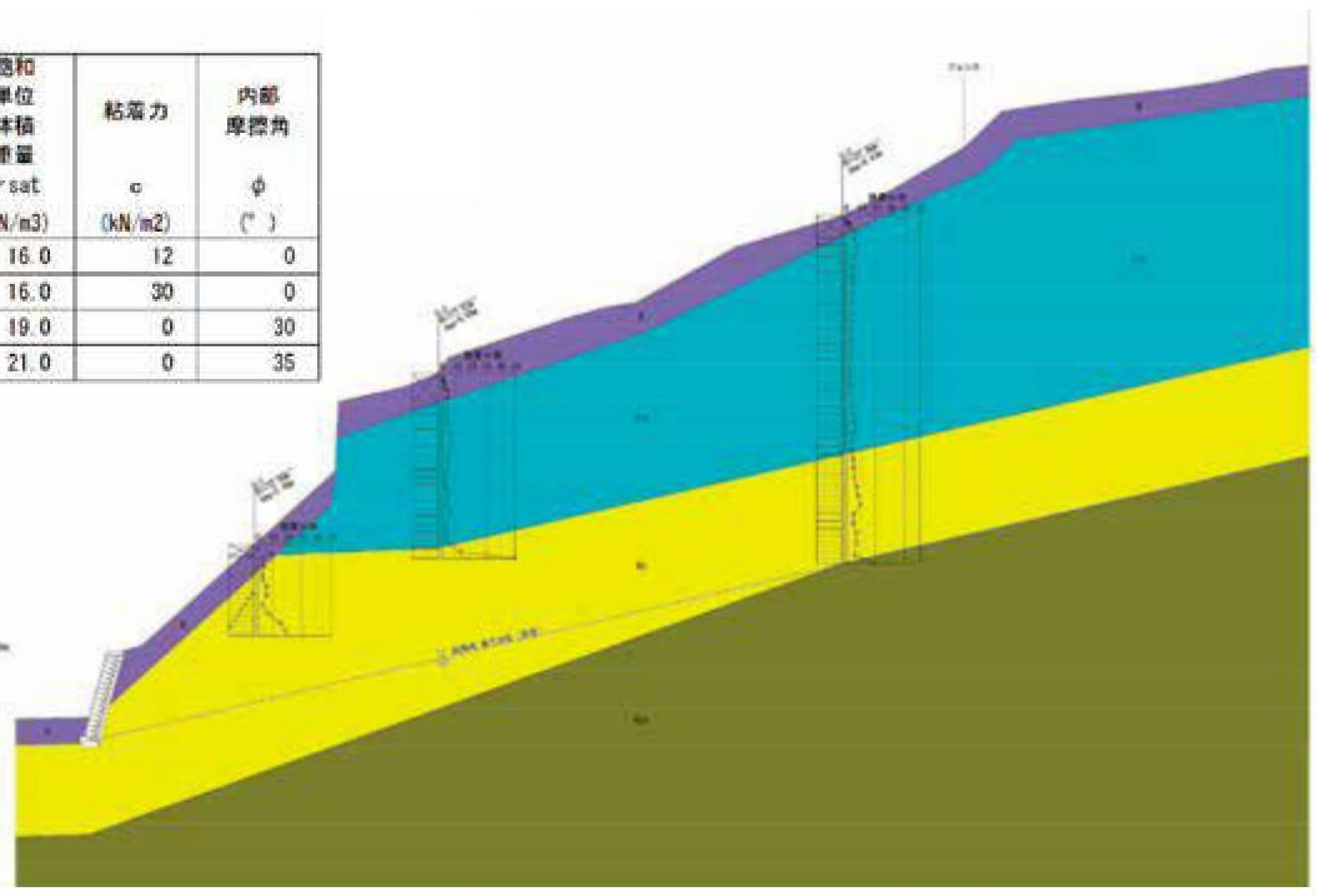
田瀬：在来種と外来種の雑草が混ざっていても、外来種を後から除外すれば使えます。

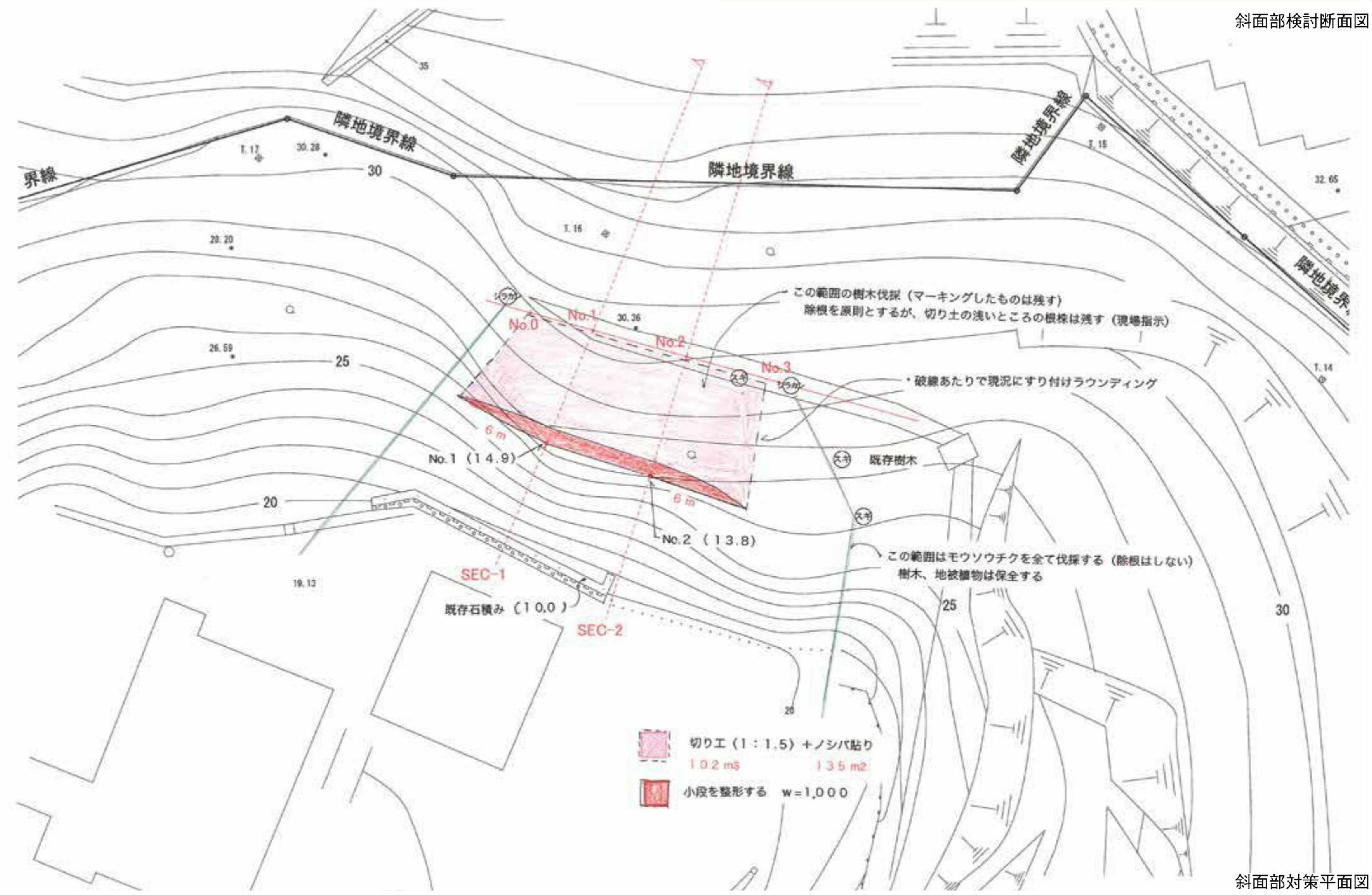
現場・場所・地域を活かすという手法は


斜面部対策後

■設計用地盤定数一覧表

地層名		記号	設計 N値 (平均)	湿潤 単位 体積 重量 γt (kN/m3)	飽和 単位 体積 重量 γsat (kN/m3)	粘着力 c (kN/m2)	内部 摩擦角 φ (°)
表土	粘性土	B	2	16.0	16.0	12	0
相模層群	粘性土	Dsc	5	16.0	16.0	30	0
	砂質土	Ds	7	18.0	19.0	0	30
上総層群	砂質土	Kas	50以上	20.0	21.0	0	35


斜面部検討断面図



斜面部対策平面図


書院の曳き工事


新しくつくったお社


曳き工事での移動が終わった書院**

基本的にはそういう仕事です。それを経験しているかいないかの違いは大きいと思います。移植するのはできますが、それがどのような場所になっていくかを想像できる人は意外と少ないです。

—そこにあるものをどういう風に利用していくかが重要だと思います。特に竹をここまで徹底して使い込んだ例はあまりないと思います。

田瀬：ここの母屋はしっかりしていました。基礎も延べ段もいい石を使っていて、庭園や庭木もありました。豊臣秀吉は庭園をつくる時は他人の庭からもってきたりしました。石も使いまわすんです。カタチは変わってもそこにあったものは全て使うという考え方です。

井出：発生材リストがあり、保管場所の指示もいただいていたので、いざ使う時にはすぐ使える状態でした。発生材の建材は工事後半に足りなくなるほどでした。

—解体屋さんに対する対応はいかがでしたか？

井出：指示をただ出すだけではなく現場で粘り強く説明しました。関さんは造園の現場をしっかり見てくれていました。

関：最初の頃は苦労しましたが、通い続けるうちに話を聞いていただけるようになりました。

井出：最初は、これは何のためにやっていることなのか理解してもらえないんですよね。

加藤：全て捨ててしまって新しく買い入れた方が効率が良いと思っているから、何で取って置くのかが分からないのです。

関：理解してもらうまでに時間がかかりました。

田瀬：やっている内に分かってくるんです。

関：そうなんです。分かってくるとすすんで協力してくれるようになりました。

加藤：先行して敷地の整理をしていただいたことで、川和の工事に着工する段階では既にそのような理解が現場に共有されていました。

田瀬：枝が当たるような木でもできる限り切りませんでした。

加藤：斜面も崩壊の危険性がある部分がありましたが、田瀬さんの「斜面部対策」の提案により、擁壁をつくらずにすみました。樹木に関しても関さんが全て状況を確認し、抵触しそうな樹木を移植したりしてくれたので、不安な要素が払拭され、敷地が整った状況で建築に移行することができました。

樹木の移植について考える

田瀬：書院の前に植えられていた木などは、基本的に全て使いました。

—最初の現場取材で書院の前にやけに目立った赤い花の木が植えられていました。

田瀬：セイヨウシャクナゲですね。最終的には移植しました。

井出：曳き工事が大変だったので移植しました。園長も気に入っていたようです。

田瀬：非常に派手だからね（笑）。他の花と開花時期が異なるので余計に目立つんです。面白い木ですよね。

井出：現場に何年も通い続けて分かったことですが、田瀬さんは「つくられている庭の木と里山の木は違う」とおっしゃっていました。里山に庭の木を植えれば違和感が生まれますが、庭には新たに木を植えてもいい。セイヨウシャクナゲもそんな場所に植えているからおかしくはないのかなと思いました。



板石
400×300×t100　38枚



切石
880×380×210　1個



板石
770×600×t100　4枚



根府川石 サイズ
700～600×300～350×t30～50　6枚

石リスト（一部）

■草本類

1		アオイスミレ	
2	要確認	アザミ	
3		アズマネザサ	
4		アマチャヅル	
5	貴重	イチヤクソウ	
6		イヌワラビ	
7		（ヒナタ）イノコヅチ	
8		イワニガナ	
9	帰化	ウラジロチチコグサ	
10		オオカモメヅル	
11		オオハナワラビ	
12		オカトラノオ	
13		オッタチカタバミ	
14		オニタビラコ	
15	帰化	オニノゲシ	
16	帰化	オランダミミナグサ	
17		カニクサ	
18		カラスビシャク	
19		キヅタ	隣地
20		キランソウ	
21	貴重	ギンラン	
22		クズ	
23		コナスビ	
24		コヒルガオ	
25		コブナグサ	
26		コボタンヅル	
27	貴重	ササバギンラン	
28		シオデ	
29		ジャノヒゲ	隣地
30	要確認	シロバナイナモリソウ	
31		スイカズラ	
32		スミレ	
33	帰化	セイタカアワダチソウ	
34		ゼンマイ	
35		タチツボスミレ	
36		チゴユリ	
37		ツボスミレ	
38	貴重	ツルボケ	
39	植栽?	ツワブキ	
40		トウバナ	
41		ドクダミ	
42		ナガバジャノヒゲ	
43		ナツヅタ	隣地
44		ナルコユリ	
45		ニガナ	
46	要確認	ヌスビトハギ	
47		ノゲシ	
48		ノササゲ	
49	帰化	ハルジオン	
50		ビナンカズラ	隣地
51	帰化	ヒメムカシヨモギ	
52		ヒヨドリバナ	
53		フキ	
54		ベニシダ	
55		ホウチャクソウ	
56		ホソバシケシダ	
57		ホタルブクロ	
58		ホンモンジスゲ	
59		ミツバアケビ	
60		ミョウガ	
61	帰化	ムラサキカタバミ	
62		メアオスゲ	
63		ヤブガラシ	
64		ヤブカンゾウ	
65		ヤブタビラコ	
66		ヤブラン	
67		ヤマノイモ	
68		ヤマユリ	

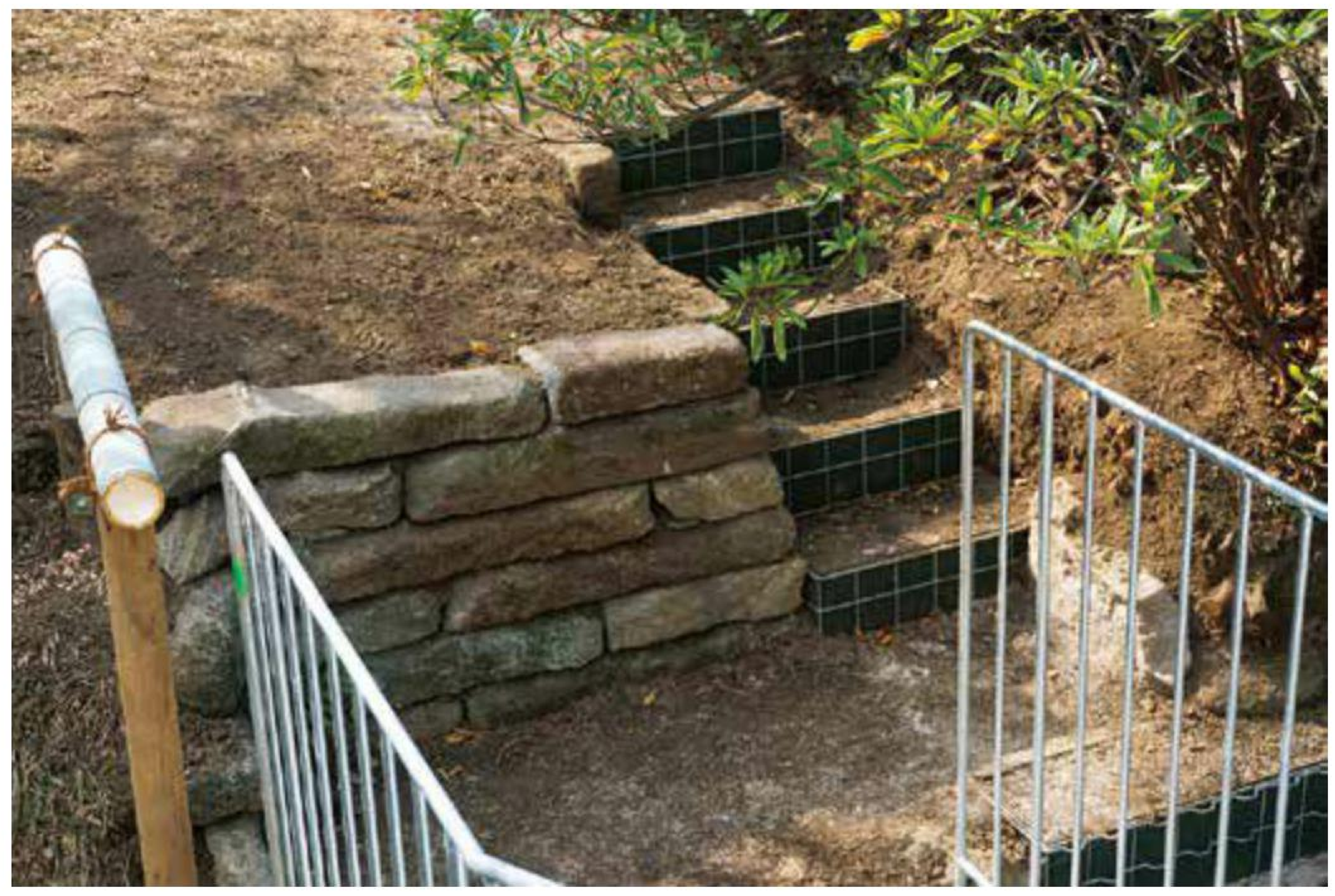
■木本類

1		アオキ	
2		イロハモミジ	実生あり
3	実生	エノキ	
4	実生?	ガマズミ	
5	実生	クサギ	
6		クスノキ	実生あり
7	実生	クヌギ	
8		コナラ	実生あり
9	実生	サンゴジュ	
10	実生	シラカシ	
11		チャトウジュロ	
12		ナンテン	
13	実生	ネズミモチ	
14	実生	ハリギリ	
15		ヒサカキ	
16	実生	マンリョウ	
17	実生	ムクノキ	
18	実生	ムラサキシキブ	
19		ヤツデ	
20		ヤブコウジ	隣地
21		ヤブソテツ	
22		ヤブツバキ	
23		ヤマザクラ	実生あり

植物リスト（2016年5月12日調査）



バイオネスト（剪定や草刈りで生じたものを、円形に積み重ねて腐食を促進すると同時に多様な生物の住環境を創設する。）



発生材の再利用**



移植検討のための現地調査



園長の希望で新植した樹木（川和園庭内）**

―庭の木にはそれなりの幅（自由度）があっていいということでしょうか。

田瀬：植える人の気持ちがこもっているということです。セイヨウシャクナゲは庄屋さんらしく住んでいた頃に植えられたものでしょう。その昔はキクを植えられていたようです。当時、これは新しいシャクナゲでした。外国のものですから選んで植えたのでしょう。それはここに暮らしている人が育て続けたものです。川和もまた木に対して色々な思い入れがあるはずです。それは里山に合わないという意味とは異なると思います。実は川和を象徴する木が何本かあり、園長は、それは必ず植えたいという希望でした。

―思い入れがある木は残しておきたいですよね。

井出：記念樹があるようです。

田瀬：かなり前から鉢上げしてありましたが、全て植えました。卒園記念樹でも幼木の状態でした。根回しをしたのは大きいトチノキ1本のみでした。

水の流れを設計する

―今回の件に関しては副園長に全て任せたと園長にお聞きしました。詳しくお話しいただけますか。

関：園長は書院の工事の時から見にきていました。見ているうちに田瀬さんの水への考え方が確認でき、園長・副園長共に、最終的に「これなら任せてもいい」と思ったようです。

―自分たちの考えと合致したのかもしれませんね。

井出：副園長はものを捨てるのであれば「それはどこにどうやって捨てられているのか」を考える人です。建築を造るものとして、解体発生材を再利用する事まで考える事に共感してくださっていました。

田瀬：今回、新しく購入した建材は排水トレンチに使われるプラスチック穴あきパイプと舗装の砂利、アースワークの金網類くらいです。

―かなりのコストダウンになったのではないでしょうか。

田瀬：捨てる費用で施工費ができます。人にお金をかけるのはとても良いことです。今は全く正反対で、建材にお金をかけている。

井出：川和の子供たちにもこれらの建材の発生した経緯も語ることができますし、触ることで質感も体験できます。

今回、建築の基本設計の段階から、田瀬さんに入ってもらい、水の流れを考慮し、外構設計していただきました。単純に塩ビ管で繋ぐ雨水処理をせず、屋根から流れ出た水を下のトレンチで受けて流しています。

田瀬：それだけで景観が変わってくる。

井出：水路は川和の敷地をぐるりと一周回ってどこからでも井戸水が利用できます。敷地の北西隅に池があるのですが、かい掘りをして、水がうまく流れるようにしました。池と公共水路とのオーバーフローが機能していなかったので、穴を空けて繋ぎ直しました。池の底にあったゴミは全てとって、トレンチで受けた水の流れをうまく誘導するように外溝部を設計しなおしました。井戸水が常に流れている環境となった為、水はどんどん綺麗になっていっています。今は旧川和から引っ越してきたアヒルが二羽います。園児はそこに餌をあげに行きます。こういうことが全体の造園計画、ランドスケープデザインだと思いました。

加藤：田瀬さんに助言いただき、園舎の樋（とい）をほとんどなくし、屋根の一部を斜面側に突き出して大きな吐水口としました。屋根に降った雨水はそこに集められて地表に落ちるので、水の流れが見えるようになりました。

田瀬：大雨の時は入り口に雨水が落ちてきます。そうすると子供たちがビショビショになって遊ぶ風景も見られるかもしれませんね。



書院の前に植えられていたセイヨウシャクナゲの木**

加藤：それを楽しめる保育園だと思います。

―旧川和では、水の流れのシステムは副園長がつくり、園長が提案をしていました。今回、田瀬さんが設計された水のシステムも興味を引かれたのではないでしょうか。

加藤：副園長はそういうことにとても詳しくて、基本的にメンテナンスから修理まで全て自分でされるので、田瀬さんの設計はとてもシンプルで分かりやすいと感心していました。

井出：全部見えているのでメンテナンスも修理も簡単にできるんですよね。

周囲の環境づくりを考える

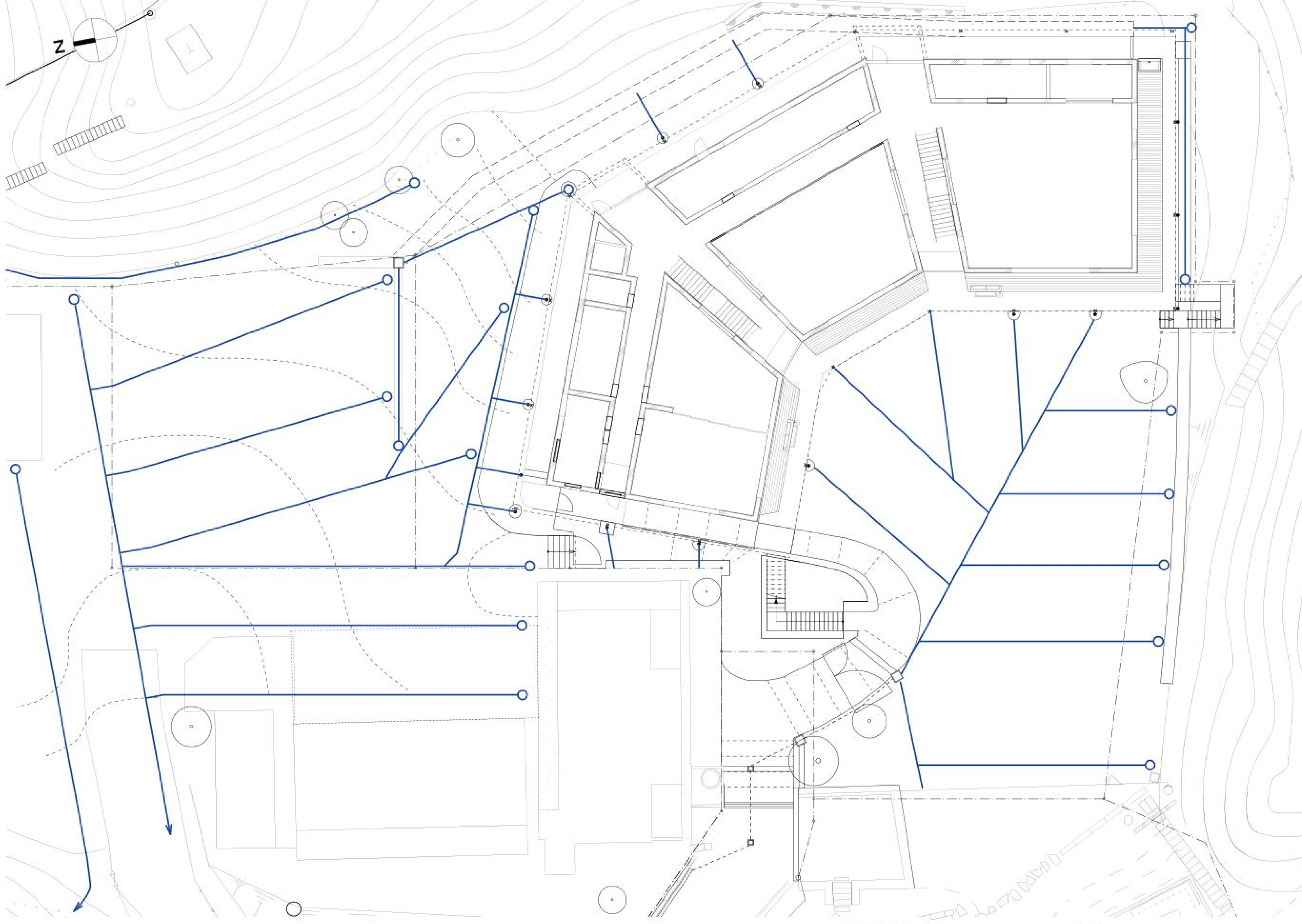
―川和の周囲の環境づくりに関してはいかがでしょうか。

井出：今回の移転計画がきっかけとなり、開放的なコミュニティが形成されればいいなと思っています。計画地にもともとあった書院と蔵が2018年4月に横浜市認定歴史的建造物に指定され、2018年9月現在、横浜市指導のもと、当時の施工方法で外壁を補修している最中です。地主は書院を一般公開する構想もあり、蔵でカフェを経営したい方や陶芸をしたい方も出てきていると聞いています。

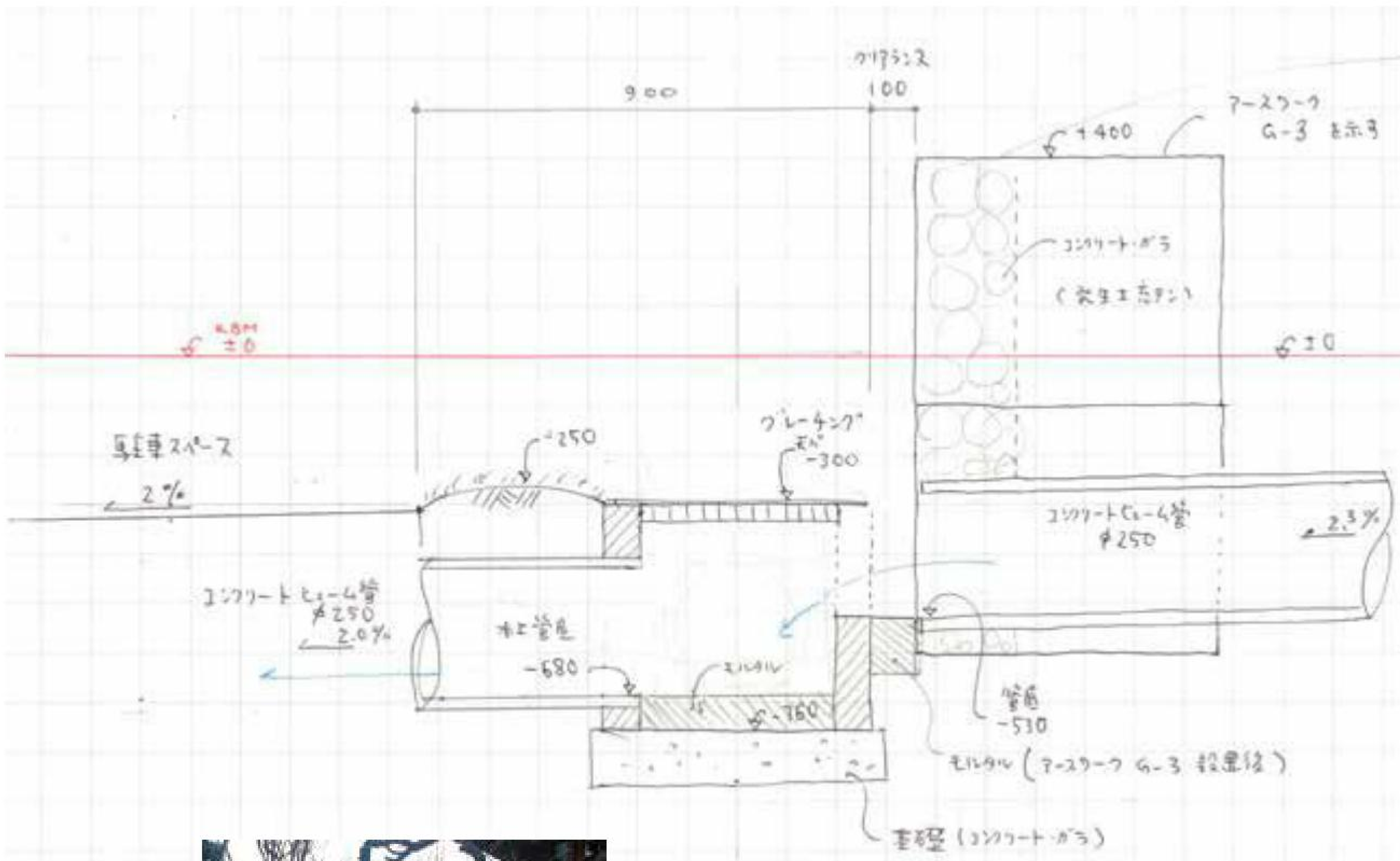
加藤：副園長が「ここに学童保育ができたら



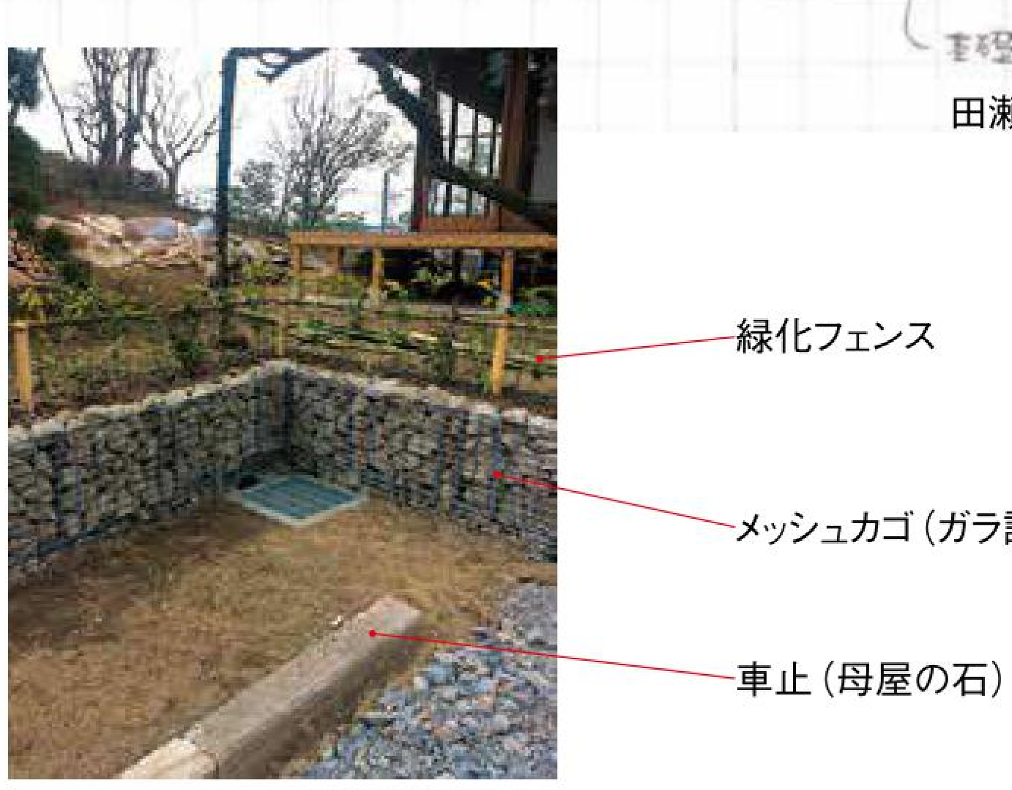
雨水排水トレンチ設置工事



雨水排水トレンチルート図



田瀬氏が描いた雨水排水路のディテール図





屋根の雨水は直接地上に落下する**





左／井戸水の用水路。右／伐採したタケの排水トレンチの断面（2点とも**）



川和保育園は将来、アクティブでアクロバティックな使い方ができる場所になる可能性がある



簡易なフェンス／勾配に自在に対応できるGDMフェンス（ゴバイミドリ）

いい」とおっしゃっていました。今のところ、園児は裏山には一人で行くことができません。何人かでまとまって保育士さんが同伴して散歩をするような感じです。学童の子どもたちくらいであれば裏山で自由に遊べるし、園児と一緒に遊ぶこともできるかもしれない。ここで遊ぶことができたら最高でしょう。

井出：現在、園庭内にも滑り台等の遊具が設置されていますが、里山へ園庭範囲を広げることで、もっとアクティブでアクロバティックな使い方が出来る場所になる可能性があると思っています。

きっかけをつくる シンプルな園舎の設計

井出：川和の園児は「帰り靴」と「遊び靴」と呼んでいる2種類の靴を持参しています。帰り靴は登園下園用で、棟間に設けられたホールで園児の受入をします。遊び靴は保育室から直接園庭に出られる場所に置いてあり、1回登園すれば下園時まで遊び靴しか使いません。旧川和の構成は1棟ずつ増築していった結果、ホールを介した3棟編成となっており、園の保育に合理的に機能していました。

―園舎と園庭を明確に仕切っていないんですね。

井出：そうですね。登園後、直ぐ園庭に飛び出せるような配置にしています。また、新川和の設計においては旧川和が増築であったことによるデメリット、「コミュニケーションがとりづらい」「動線が長い」等の問題を整理しました。風通をよくする意味もありますが、保育室とホール間に、開口を設け、コミュニケーションを簡易にしています。導線計画も明確に、どこにいても子供達が、何をやっているかが一目でわかります。踏襲する部分と改善する部分を整理してできるだけシンプルに設計しています。川和には空間や環境を創ることができる能力があるので、建築はベースを用意しているだけです。

加藤：きっかけづくりですね。あまり建築側で行為を規定するのもどうかと思う。例えば梁を出して空間を区切ることができる可能性をつくったり、保育士さんが手を加えて変えることができるようなきっかけをつくっています。

　環境との関係性では、背面が斜面なので、園庭と斜面が分断されることを危惧していました。3棟に分けたことと、外廊下を廻し屋上に行けるようにしたことで、ある程度軽減できたかなと思います。建物のどこにでもアクセスでき敷地を一望できるので管理やメンテナンスがしやすく、将来、屋上で保育する可能性も考えられます。屋外にもきっかけをつくることを意識して設計しています。

―どこからでも見えるんですね。

井出：副園長は自分が退職された後のメンテナンス作業を危惧されていたので、設備類は可能な限り可視化し、使用頻度の高い金物類は廃盤になり難い需要の高い製品を選定しています。また、初めて手に触れるものは本物が良いという園の方針から、建材は可能な限り本物を使用しています。着飾ってはいませんが、丈夫で健康な建築となりました。

―井出所長は「建物は箱なのでシンプルなままでいい。使い方は使う人が決める」という考えで、決して気取ったものをつくるということではありませんでした。お話からもその考えが一貫して伝わってきます。

井出：それはうれしい言葉です。父は「居場所をつくらない」と言っていました。居場所は人がつくるもので使い方に応じて変化するんです。

―川和は考え方がしっかりしているので、場があればいくらでも可能性は広がっていくと思います。

造園と建築の一体化を目指して

加藤：川和も魅力的な敷地が見つからなければ移転はしなかったと思います。川和はこの敷地に移転することによって豊かな保育環境を得ることができ、逆に川和がメンテナンスすることによって里山を維持することができます。



―その土地のもつパブリック性はこの事例に限らず、これから大事にしていかなくてはいけないことだと思います。ランドスケープで考えれば土地の歴史が重要です。昨今ではそれを排除してしまうような開発が目立ちます。

井出：広い範囲で考えてもらいたいですよね。



上／園舎は登園後、すぐ園庭で遊ぶことができる設計になっている。下／新しい園庭で水を使って遊ぶ園児たち（2点とも*）

―造園と建築の一体化はそういうところからはじまるわけです。「必ず先に土木業者が入って、素晴らしい敷地・景観を全て造成・ひな壇にし、平場にして、良い木も全て伐採する。そこに建築家が建物を建てて空いたところに造園屋が木を植える。それは非常にもったいない。」と井出所長がよくおっしゃっていました。

井出：切って盛ってを繰り返すので地盤も悪くなります。擁壁をつくらず斜面のままでも少しだけ抑えてあげればいいんです。そ





田瀬氏の熱海の事務所にて（2018年9月）**

田瀬理夫（たせ みちお）
造園家。1949年東京生まれ。'73千葉大学園芸学部造園学科卒業。'73〜㈱富士植木勤務。'77 ワークショップ・プランタゴを開設。'78〜'86 SUM建築研究所の集合住宅プロジェクトに参加。'90〜㈱プランタゴ代表、'08〜農業法人㈱ノース代表を兼務。

関さやか（せき さやか）
1983年茨城県生まれ。'06 千葉大学園芸学部卒業。造園施工会社に勤務後、'10 SUM建築研究所入所。'11〜'14 sum design 勤務。'15 〜 sum design、TENJIN STUDIOの造園設計に携わる。

加藤克彦（かとう かつひこ）
1974年東京都生まれ。'98 東京理科大学理工学部建築学科卒業。2000年同大学大学院修士課程修了。2000年〜2002年 複数の設計事務所に勤める。'02〜'09 SUM建築研究所。'10 加藤克彦建築設計事務所設立。'12 現事務所に改称。

井出敦史（いで あつし）
1971年東京都生まれ。Wentworth Institute of Technology 理工学部建築学科卒業後、丹下健三・都市・建築設計研究所を経て、'02 井出共治が主催するSUM建築研究所に入所、'10 sumdesignに改称、代表となり、多岐に渡るプロジェクトに携わる。'18 キッズデザイン賞受賞、'18 グッドデザイン賞受賞。

うすれば山に近い宅地造成もできると思います。

—田瀬氏も以前手掛けられた「堂ヶ島洋らんセンター」で、あまり木を切らずに林の中にはめ込む手法で、建物を奥につくり、道をつくって海が見える景観をつくっていました。田瀬氏から見て今のランドスケープはいかがですか？

田瀬：土木は土木、住宅は工務店というようにやることが区切られてしまっている。そんなことでは景観はつくれませんが、建築の人もランドスケープの人も今回のような仕事をする機会が少ないんじゃないかと思います。

井出：本計画完成には、携わってから13年を要しました。父もこのプロジェクトは最後までやり遂げたかった仕事なので、無事終り肩の荷が降りた気持ちです。構成や建物は変わりましたが、田瀬さんに参加していただいて、基本コンセプトである「里山を残す」ということはしっかり踏襲され、最良の形で仕事をすることができたと思っています。

関：私も今回はとても良い経験になりました。

田瀬：ここの地主さんは私の選択除草※にも参加されました。参加すると草採りの考え方が変わると思います。結果的に草採りが面白くなります。

加藤：今までは全て雑草にしか見えなかったですが、ものの見方が変わってきますよね。

田瀬：当たり前のことをすれば里山の価値は失われない。これは江戸時代、庄屋さんの時代には普通に行われていたことのように思います。

—これからの川和や周辺の動きが楽しみですね。第2弾では川和の園舎・園庭の詳細とその後の活動について取り上げたいと思っています。本日はありがとうございました。

文責＝編集部

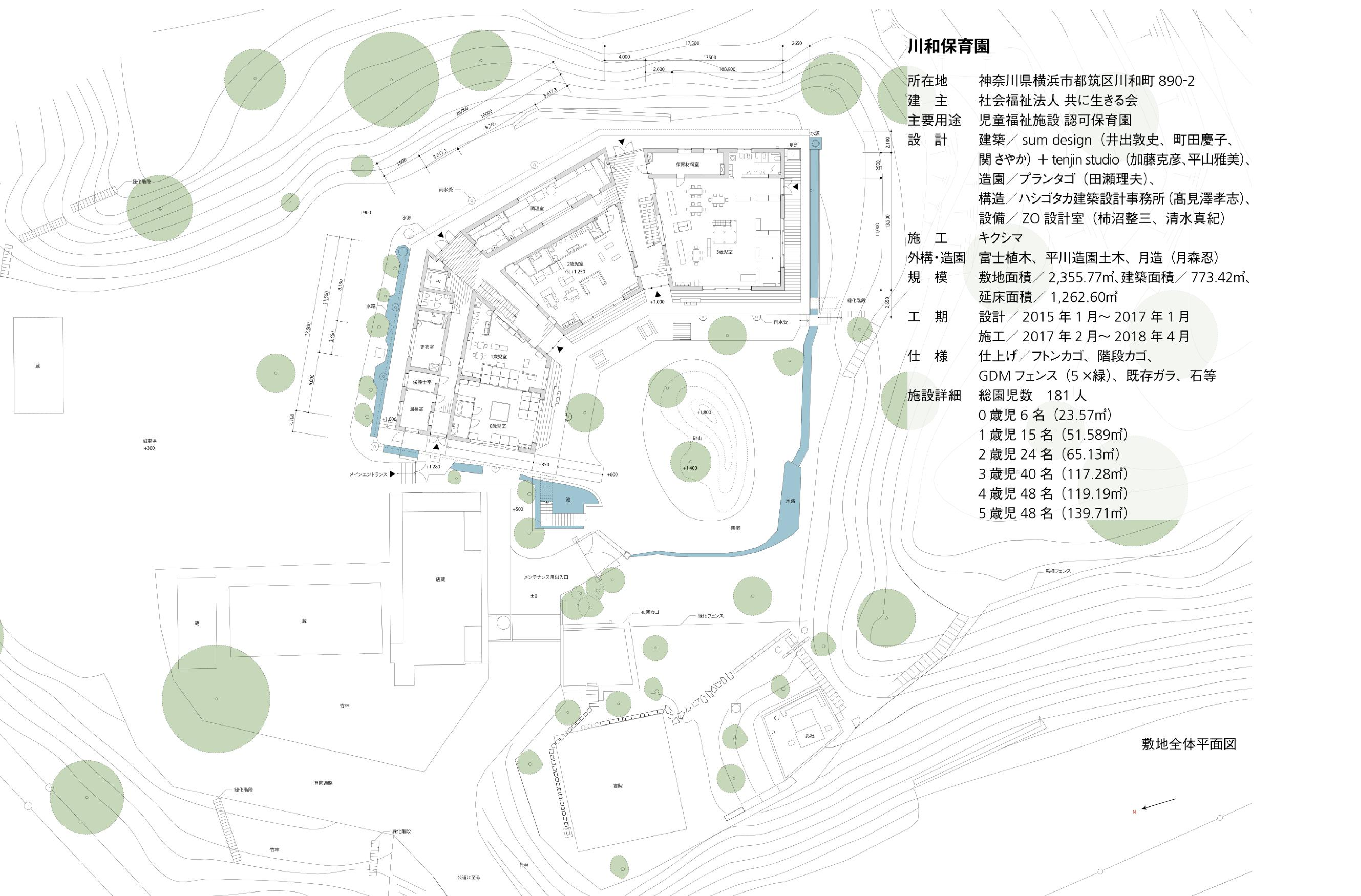


新川和保育園園舎の裏山（里山）の風景**

※田瀬氏が富士植木、ゴバイミドリと協力して主宰。定期的に行っているオフ・キャンパスプログラム。年々変化する在来種草本草地（原っぱ）の状況を観察し、体感する。（ランドスケープデザイン No.98　p43で紹介）



*



川和保育園

所在地	神奈川県横浜市都筑区川和町 890-2
建　主	社会福祉法人 共に生きる会
主要用途	児童福祉施設 認可保育園
設　計	建築／ sum design（井出敦史、町田慶子、関 さやか）＋ tenjin studio（加藤克彦、平山雅美）、造園／プランタゴ（田瀬理夫）、構造／ハシゴタカ建築設計事務所（髙見澤孝志）、設備／ ZO 設計室（柿沼整三、清水真紀）
施　工	キクシマ
外構・造園	富士植木、平川造園土木、月造（月森忍）
規　模	敷地面積／ 2,355.77㎡、建築面積／ 773.42㎡、延床面積／ 1,262.60㎡
工　期	設計／ 2015 年 1 月～ 2017 年 1 月 施工／ 2017 年 2 月～ 2018 年 4 月
仕　様	仕上げ／フトンカゴ、階段カゴ、GDM フェンス（5 ×緑）、既存ガラ、石等
施設詳細	総園児数　181 人 0 歳児 6 名（23.57㎡） 1 歳児 15 名（51.589㎡） 2 歳児 24 名（65.13㎡） 3 歳児 40 名（117.28㎡） 4 歳児 48 名（119.19㎡） 5 歳児 48 名（139.71㎡）

敷地全体平面図

特集

場で生まれるコミュニティ

いくつかの自然災害を経験し人と人のつながりや地域との結び付きの必要性が再認識され、「コミュニティ」という言葉が一気に注目されるようになった。一方で、これまで地域コミュニティの象徴であった町内会や自治会とは異なるコミュニティが様々生まれている。その多くはハードを主体としたトップダウン型のコミュニティではなくソフト重視のボトムアップ型ではないであろうか。地域や職場以外のつながりを求める人は多い。出会いの場があれば人はつながり、やがてひとつのコミュニティが生まれる。それはどんな場から生まれるのか。
考えるきっかけにしたい。









ajirochayaから
人と街の新しいつながり方を考える

三島由樹（株式会社フォルク 代表取締役）

写真=牛尾幹太（特記を除く）



写真=稲田玲奈

三島由樹
株式会社フォルク代表取締役。
1979年八王子市生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業。ハーバード大学大学院デザインスクール・ランドスケープアーキテクチャー学科修了。マイケル・ヴァン・ヴァルケンバーグ・アソシエーツ（MVVA）ニューヨークオフィス、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教を経て、2015年株式会社フォルク設立。都市・地域・パブリックスペース・コミュニティに関するプロジェクトに国内外で取り組みながら、慶應義塾大学、芝浦工業大学、千葉大学、東京大学、日本女子大学、前橋工科大学にて非常勤講師を務める。
http://www.f-o-l-k.jp

三島由樹氏は、ランドスケープアーキテクトとして、人と人、人と街をゆるやかにつなぐ場のデザインを心掛けていると話す。ajirochayaのプロジェクトでは、「無色であり多色の庭」という考え方と、老舗茶舗を営んでいるクライアントの「ここを茶屋のような場所にしたい」との言葉を起点とし、オープンスペースのこれからの社会におけるあり方を具体のデザインで示すことを試みた。このajirochayaがプロトタイプとなり、街に小さなパブリックスペースが拡がっていくことを想像しながら。
果たして、ajirochayaの庭は街に開かれ、誰もがさりげなく、そして心地よく過ごすことができる街の庭となった。切妻屋根の建物が重なったような建築のフォルムと蔵、そして活き活きとした街の庭の存在が個性豊かなテナントを自然と呼び寄せた。テナント全員でつくるajirochaya working group（AWG）を通じては、2017年7月に開催されたオープンイベントを皮切りに、これまで様々なイベントが街に新しい賑わいをもたらしてきた。テナント達による小さなコミュニティの創意工夫が街へと滲み出し、そのことにより小さくてゆるいネイバーが新たに生まれる連鎖が実現されつつある。三島氏は、このプロジェクトを通して現代における民有地と街との新しい関係を示そうとした。ajirochayaにおける庭と街と人の関係性と、そこから生まれる新しいコミュニティのあり方について話を聞いた。



まちとのつながり。ユーロードから繋がる小路と蔵が中へと誘う



まちとの関係。庭の前の長いベンチはつい腰掛けたくなる

（写真／三島由樹）

八王子とパブリックスペース

八王子生まれの私がajirochayaのプロジェクトに関わり始めたのは2015年の初頭くらいですが、現地調査で敷地を訪れた当時、八王子の中心市街地には誰もが気持ちの良くすごせる広場や、ベンチなどの座れる場所がほとんどないという状況に見えました。これは、僕が子供の時からそんな感じだったと思います。都市計画の歴史の視点から見ると、JR八王子駅周辺は戦災復興の際に石川栄耀氏（都市計画家。1893-1955）が計画に携わるなど注目をあつめたエリアで、ajirochayaの南側に面するユーロードは、市街地のグリッドの上にズバッと斜めにレイアウトされた、当時では斬新な道路計画だったと思いますし、反対の北側に面する甲州街道は江戸時代に大久保長安によってつくられた、歴史的にとても重要な道路です。

このように八王子の中心市街地には魅力的なインフラが骨格としてたしかに存在するのですが、その一方でパブリックスペースが街の中心部に近代以降に十分につくられてこなかったことで、街の中での暮らしの豊かさを感じにくい場所になっている気がしていました。

街に開かれた、ほどよく親密な小さな場

良質なパブリックスペースが街の中に少ないとは言っても、開発の済んだ密度の高い市街地にまとまった面積の公園やオープンスペースを今後つくっていくことは、行政としても難しいことだと思います。そうであれば、民間の事業において小さな公園のようなスペースを連続的につくり出し、その結果、点としてのパブリックスペースが集まって面やネットワークになっていくという考え方の方が、今日においては合理的なのではないかと考えました。小さな点の集合体が街のクオリティをやがて上げていくということ、そんな流れをつくるプロトタイプとなり、少しずつ街に波及効果をつくっていきたいということを最初に考えていました。

また、オーナーの網代さんとお会いして間もないころ、この場所を「茶屋」のような、誰もが腰掛けてお茶を飲める道路空間の延長にあるような場所にしたいというお話を伺ったことを覚えています。それは私が当初思い描いていた場所のイメージと、とても近いものでした。大きな木が一本あって、その下で人が思い思いに過ごしている。1階にはカフェがあり、そのテーブルや椅子が敷地の外にまで置かれてしまっていて、道と敷地、そしてカフェの中までが一つの連続した関係になっているような状況を、このプロジェクトの地上レベルで実現したいと考えていました。また、誰もが心地よく居ることができるパブリックスペースのような私有地とはどうあるべきかを考え、それは友人の家の庭に入っていくような、ほどよく親密な感覚を持った空間なのではないかと。パブリックすぎず、クローズドなプライベートな空間でもない、ちょうどよい親密さとあたたかみのある場所。思い出すと自分が子供の頃の八王子の街はそんな場所が多かったようにも思います。網代さんがご自身の土地を地域のために開くというお気持ちを、ほどよい親密さというかたちで、シンプルにランドスケープで表現することを意識して全体をデザインしていきました。



庭はカフェの利用者でなくても使用ができるパブリックなスペースとなっている

人と人との小さなつながりを生む場

また、このプロジェクトで最初に考えたコンセプトのひとつに、「誰向けでもないし、誰向けでもある場」と言う、街は誰に対しても寛容な場所であるべきだという想いがありました。つまりそれは、きちんとしたコミュニティをここで生みだすということではなく、いろいろな人たちが小さくゆるやかにつながっていくような場所であればいいという考えです。コミュニティと言うと、そこに属している人たちというイメージですが、必ずしも属す必要はなくて、そこに行けば自分をなんとなく知ってくれている人がいて、自分が居たくなる場所がある。「顔見知り以上コミュニティ以下」くらいの人のつながりの心地よさをイメージしていました。コミュニティをつくり、そこに属する会員のような人を増やしていこうということではなくて、小さくて新しいつながりがたくさん自然に生まれてほしい。その小さなつながりがいくつもできて、そのぼんやりとした総体としての空気が、街の暮らしやすさにつながっていくといいなと思っていました。
このように、小さなつながりが生まれていく空間の親密さや寛容さをその場所で表現するには、そういう考えを例えば文字で書いて掲げるのではなく、さりげない「気配」として感じてもらうことが大切だと考えました。その気配をつくるツールになるのが植物で、たとえば下町の路地に置かれた、手間暇かけて大切に育てられた鉢植えの植物たちからは、そこに持ち主がいなくても、その人の気配やほどよい親密さを感じとることができます。そういう鉢植えたちが、総じて下町の親しみやすい空気を生んでいるようにも思うのです。私も植物のメンテナンスをしているときに、たびたび街の人にさりげなく声をかけてもらいます。手間のかけられた植物は、空間にほどよい親密さを表現するための、ちょうどいい媒体なのだと考えています。
ajirochayaが昨年7月に竣工した後、テナントさんが決まってきたところで、私から皆さんにajirochaya working group（AWG）という運営のグループを立ち上げることを提案し、必要に応じて皆で集まることをさせていただいています。このグループの主な目的は、ajirochayaの施設運営の考え方をみんなで考えていこうというものですが、施設運営においても、管理人のような誰かの強力なリーダーシップではなく、小さくてゆるやかなつながりを運営のベースにすると、テナントメンバーの個性や自発性がクラウド的に発揮されて、施設全体の魅力アップにつながり、また、息切れせず持続可能な施設運営が出来ていくのではないかと感じています。

「コミュニティ」と「ネイバー」へ

私はajirochayaだけに限らず、ランドスケープのデザインを



イメージスケッチ（三島由樹）

考える上では、なんにでも使える場所、もしくは、どのようにも解釈できる場所をつくることをいつも志向しているように思います。ある人が見ると公園に見える、別の人にとっては庭に見える、あるいは1階のカフェの一部に見えるというように、見る人によって様々な見え方ができる無色のようで多色のようでもある場所づくりをajirochayaでは考えていました。デザインの意図を意匠として明確に見せると、その意匠にピンとくる人のみを受け入れる場所になってしまいます。誰か特定の人のための場所ではなく、誰もがそこに居てみたいと感じてくれる、多義性と多用性のある場所にしたいと考えていました。庭の前面には、3.5mの長さのある、宮大工さんに金輪継の技法でつくってもらった大きな木のベンチがあるのですが、そこを見ていると、ホームレス風の方がいて、その横に高校生のカップルが座っているような光景を良く目にします。このベンチもそうですが、街の暮らしの豊かさやその街の人の美しさを風景として顕在化させるのがパブリックスペースの機能のひとつだと思う時があります。ヨーロッパなどでは、街の外部空間で時間を過ごす人が多いですが、楽しそうにしている様々な人たちが街の風景の一部となっている道を歩くのはとても楽しいことです。外部空間でポジティブな活動が行われていることと、それぞれの敷地が街に開かれていて街の暮らしが可視化されていることが街の魅力を共有する上で重要だと思います。そういう街の中のひとつひとつの場が持つ寛容性から、従来のコミュニティを補完するような新しい人と街の小さなつながりが生まれるのだと感じています。「まちづくりとは何か」、と以前考えていたのですが、ひとつの考え方として、まちづくりは「手づくり」と似ているのかなと思います。手づくりとは当たり前ですが手「を」つくることではなく、手「で」つくるということですが、まちづくりも街をつくることだけでなく、いかにまち「で」つくる状況をつくるかということなのではないかと考えています。これは、まちを「コミュニティでつくる」という力の入ったものよりは、もう少し関わり方がカジュアルでゆるやかな「ネイバー(neighbor:ご近所)」でつくるというニュアンスの方が近いと思います。

そういう状況を生み出すために、デザインやランドスケープの考え方で何ができるのか。「街のみんなで何かをやろう」とか「街のことをみんなで考えよう」という活動に対して、特定のコミュニティが熱心に行動するだけではなく、これまで関心がなかったような人たちを含めてより多くの人たちが無理なくネイバーとして関わり、新しい人と街の風景を生みだしていく場や機会とはどのように実現できるのか、今後も考えていきたいです。

(2018年10月9日 FOLKオフィスにて。文責=編集部)

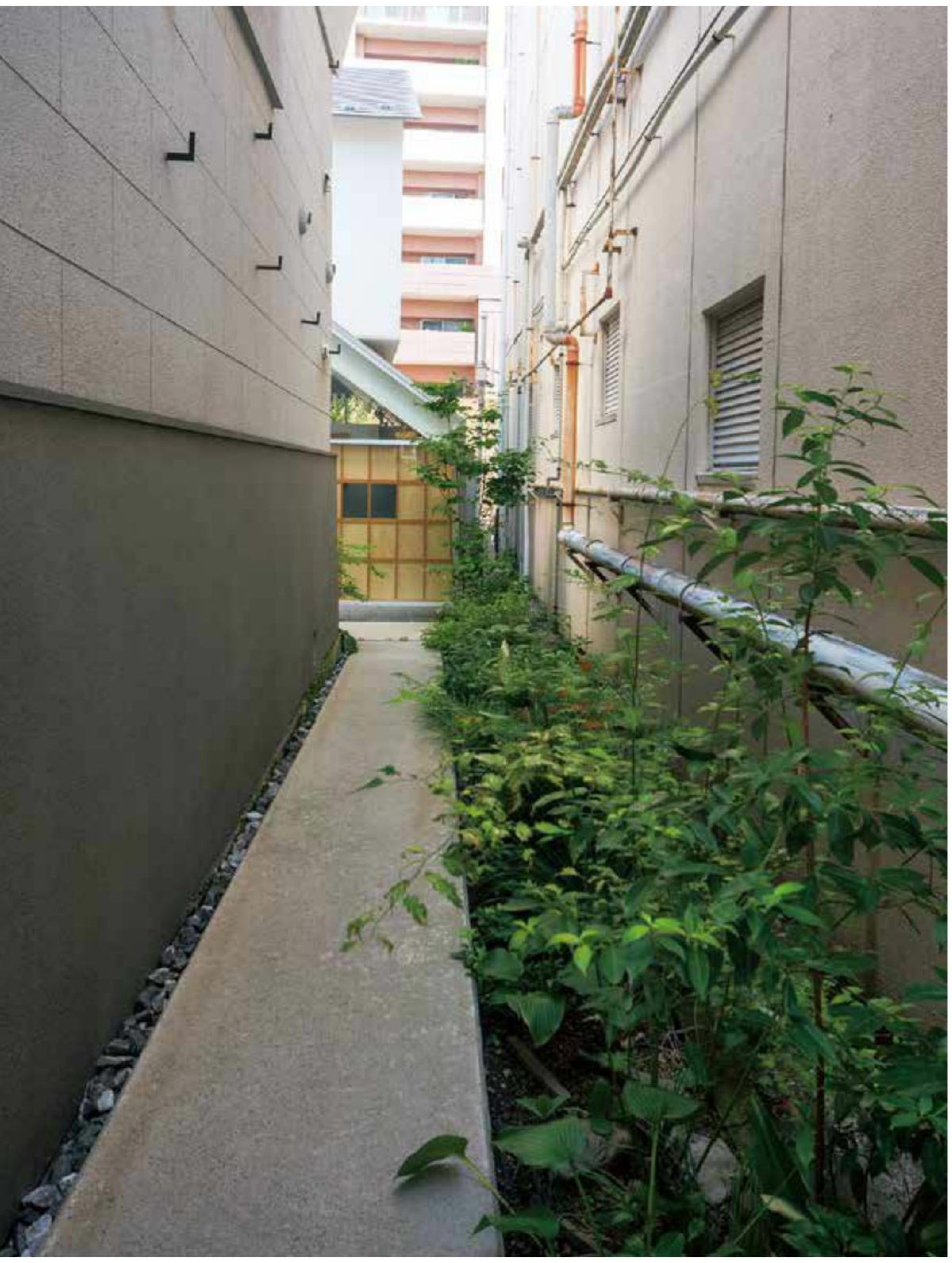
写真(4点とも)=本宮誠/caffs


宮大工による金輪継の技法でのベンチ作成


蔵を使ったイベント


夏のイベントのひとコマ


テナント集合





ユーロードと甲州街道を結ぶ路地。他人の敷地にお邪魔する感覚は少しの遠慮と親しみやすさを生む



サインも極力目立たないようにし、商業施設であることを意識させない工夫が



庭からユーロードを見る







100種ほどの植物を入れているがあえてテイストを持たない植栽デザインを施している。また人の気配を感じてもらうため灌水パイプは使用せず、水やりは1Fの珈琲やが受け持つ。商業施設のガーデンではなく、家庭的な親密感をもてる庭を目指した











気兼ねなく座れる庭に置かれたベンチ。井戸はオーナーの母のたっての望みで設えた。災害時などに地域の方々に利用してもらえるようにとの想いからだ。通常の使用も可能



甲州街道側から見る。切妻屋根の建築と外に対してオープンな店舗。２階のbeuty salonも通りから中の様子がうかがえる







ajirochayaを象徴する蔵



写真＝三島由樹

改修前の状況

ajirochaya

所在地	東京都八王子市横山町10-14
事業者	株式会社網代園
主要用途	商業・文化複合施設
設　計	【建築】松葉邦彦（株式会社TYRANT） 【ランドスケープ】三島由樹（株式会社フォルク）
竣　工	2017年7月
規　模	敷地面積550㎡
植　栽	アオダモ、アンズ、カキ、オリーブ、ヨモギ、チャノキ、イロハモミジ、ヤナギ、アロエ、ローズマリー、ワレモコウなど約100種の植栽からなる。

Tenants in "ajirochaya"

ajirochaya working group のメンバーたち



Ho'inana ／ hula & space
http://www.hoinana.com/



坂本呉服店／ kimono shop
http://www.sakamoto-gofukuten.com/



ミシン／ beauty salons
https://beauty.hotpepper.jp/slnH000411054/



CAFFS ／ community design company
http://www.caffs.co.jp/



珈琲や／ cafe
http://coffeeya.co.jp/



chateau Lalis ／ french restaurant
https://lalis.net/

自然に何かが始まるajirochaya

話＝網代邦子氏（株式会社網代園）

蔵を残したい

バブル時代の前から、この周辺ではマンションがどんどん建てられていました。この網代園も終戦直後に建て直した建物でずっと営業を続けてきており、老朽化も進み建て直しが必要であることは分かっていたのですが、なかなか踏ん切りがつかないでいました。と言いますのも、創業以来使われている古い蔵がふたつあり、その蔵を壊して四角い建物を建てることに抵抗があったのです。

そんな時に、ある勉強会でお世話になった先生（田中正國氏）から蔵を曳いて残す方法があることを教えていただきました。その後、群馬県で蔵の改修をされた若手建築家（松葉邦彦氏）が八王子出身ということでご縁がつながり、明治から平成の4つの建物が混在する斬新な建築が実現しました。その松葉先生が三島さんをご紹介してくださり、今のような素晴らしいガーデンと、甲州街道とユーロードをつなぐ路地が出来上がったのです。関わってくださったすべての皆様に感謝しています。

テナントさんが始めたイベント

2017年7月のグランドオープンイベントを皮切りに、いくつかのイベントが開催されていますが、これらイベントはすべてテナントさんたちが自然に始めたことなんです。なぜか、「何かやりたい」という人たちばかりが集まったようで、特別な募集をしたわけでもないのに、個性的な方たちばかりがテナントとして入っていることが不思議です。あるテナントさんが「こんなことをやりたい」と言うと、他の誰かが「こんな協力ならできるよ」というような温度で話が進んでいくのですが、私はその感じは好きですね。何かをすることが好きな人たちがなんとなく集まってきて、自然に何かが始まる。ある意味無計画なんですが、とてもいいなって思っています。ただ、三島さんにはajirochayaの運営についても積極的に携わっていただいていますが、それによりイベントがより充実したものになっているところはあると思います。私の目から見ても「ちょっと楽しそうだな」と思えるイベントが多いので、周辺にも良い影響を与えることができているかなと感じています。

（2018年8月20日網代園にて。文責＝編集部）



網代邦子氏

ajirochaya ／ http://ajirochaya.com　**株式会社網代園**／東京都八王子市横山町10-14 Tel.042-643-0333 http://www.ajiroen.jp

地域を醸す

油原祐貴（合同会社 EDGE HAUS 代表社員）

写真提供＝合同会社 EDGE HAUS



写真＝編集部

油原祐貴
合同会社 EDGE HAUS 代表社員。
1979 年茨城県生まれ。2003 年株式会社リクルート入社。クーポンマガジン「ホットペッパー」柏編集部の立ち上げ、創刊に参画。2009 年よりボランティア団体ストリート・ブレイカーズのメンバーとして「柏神社てづくりての市」を運営。2013 年合同会社 EDGE HAUS を設立。
https://www.edgehaus.jp

地域の感性豊かな人財や美しい自然、文化、伝統、食、そしてエネルギー。これら地域に内在する力、すなわち「地元力」を見直し必要であれば作り直し活性化することで、新たに持続可能なコミュニティの創造を目指す。この過程を合同会社EDGE HAUSは「地域を醸す」と表現する。故に、彼らが目指すのは「顔が見える、おかげさまサイズのローカルコミュニティ」だ。それは油原氏自身の体験から得た街づくりに対する考え方が色濃く反映されている。学生時代に青春を謳歌し、そして社会人として数年過ごした中で、目の当たりにしてきた柏の市街地の変遷は、このままでは柏らしさを失ってしまいかねないという危惧を抱かせた。だからこそこだわる「地元力」。その中でも、特に興味を惹いたのが“人財”であった。「柏には面白い人がいる。そんな人たちが集まれば、きっと何かが起こる」。そんな思いから、面白い人たちが集まれるカフェをつくり、色々な人が集まれるような仕組みを考えた。案の定、個性豊かな人たちが集まり、カフェ自体がひとつのコミュニティを形成した。特筆すべき点は、そのコミュニティが固まってしまい排他的な雰囲気を持ち始めたときに、コミュニティをかき混ぜ柔らかくするための行動を起こしたことである。このことにより、誰に対してもオープンなコミュニティが誕生した。形成されたコミュニティを内から柔らかくすることで、持続可能なコミュニティが形成されることを油原氏は示してくれた。油原氏が考えるコミュニティとは、そして合同会社EDGE HAUSはどこを目指しているのか、自身の経験から得たことを語ってもらった。


HAVE A GOOD RUN
JINRO



「人が人を呼ぶ場」づくり

柏は私にとって特別な街です。青春を謳歌した街ですし、会社員時代に赴任した街でもあります。私が柏に着任したのは2003年でしたが、ちょうどその頃、個人経営のおしゃれなダイニングバーが注目され始め、柏でも例にもれず雰囲気のあるバーがいくつもオープンするような時代でした。私の仕事は、街の飲食店のPR誌をつくることでしたが、ナショナルチェーンよりも隠れ家的な個人経営のお店に惹かれ、そういう店舗を中心に営業をしていました。いわゆるタイアップでPRする仕事だったのですが、掲載することで集客が増えたお店のオーナーや店長からも「効果があったよ。ありがとう」とお礼を言われることも多く、仕事としては順調に進んでいました。

ところがある時、PR誌を見た新規の客が増えたことで、これまでとは雰囲気が変わってしまったお店の実態を知りました。それまで通い続けていた常連さんの居場所がなくなり、足が遠のいてしまったお店もありました。個性的なお店は、オーナーや店長のキャラクター、内装、BGMなど様々な要素により個性を出し、それに惹かれて通う常連客も店の雰囲気をつくる一翼を担っていると思うんです。例えば、利用する側から言いますと、一人で行って店長との静かな会話を楽しみたいときはこの店、友人とじっくり語り合いたいときはあの店という具合に行く店を選ぶわけです。ところが、新しい客がそんなことお構いなしに押し掛けると、店の雰囲気が損なわれてしまいます。そのお店の魅力をできるだけ多くの方に知ってもらいたい、良かれと思ってやっていたことが、結果として店の魅力を壊してしまったと自責の念に駆られ、オーナーさんや店長の「ありがとう」という感謝の言葉すら苦しいと感じる自分がいました。そして、私は会社を辞めます。

そんな時に屋台村に出会いました。様々な種類の屋台があることで、それぞれの好みに応じたお客さんが来る。席を共にすることでコミュニケーションが始まり、とてもオープンなコミュニティが形成される。そして口コミや知人を介して新たな客を呼ぶ。まさに「人が人を呼ぶ場」を屋台村に感じました。

この屋台村のような店をこの柏でやりたいと考えていましたが、借りられたのは小さな物件で、それが現在も営業を続けている「YOL cafe Frosch（以下、Frosch）」です。この小さな店に様々な人が集まってくれるためにはどうしたら良いかと考えを巡らしていたときに知ったのが「日替わり店長」というスタイルです。ただし、日替わり店長が主役となり自由にやってもらうのではなく、私やスタッフは必ず毎日います。これは、以前放送されていました「笑っていいとも」方式とでも言いましょうか、我々スタッフがタモリさんとなり日替わりのゲスト（日替わり店長）を迎え、彼らのサポートをするわけです。つまり曜日（日替わり店長）という縦軸に、タモリという横軸を通すことで、曜日ごとに縦割りになってしまう日替わり店長というスタイルを、横にもつなげていこうと。お客さんにはFroschに来るという意識を持ってもらうことが大事だと考えました。幸いにして狭いがゆえに相席をしてもらうことも多いのですが、するとそこで新しい出会いが生まれ、お客さん同士のコミュニケーションが始まり、屋台村のスモール版みたいなことが起きたのです。こうしてFroschは柔らかいコミュニティを形成し始めました。







YOL cafe Frosch。「笑っていいとも」方式と固まりそうなコミュニティをほぐすことでフラットなつながりが生まれた

コミュニティをほぐす

しばらくすると、Froschの中にいくつかのクラブ活動が生まれました。店を核とし、お客さんが形成したコミュニティが活発に動き始めたことを意味する出来事だとは思いますが、それに伴い、店のコミュニティが排他的な雰囲気を持つようになってしまったんです。それこそコアな常連さんしか楽しめないようなお店になってしまうと危惧しました。このままでは新規やときどき来るような人たちが立ち入れない雰囲気が出来上がってしまいます。そこで私たちが行ったことは、硬くなってしまったコミュニティをほぐすことです。お客さんを限定してしまうようなイベントは止め、また常連さんをことさら特別扱いしないようにし、さらに申し出があればアーティストなどにギャラリーのように使ってもらうなど新たなゲストを受け入れながら、ゆるいコミュニティであることを維持することに努めています。今では、常連さんが新規のお客さんにFroschの説明をしてくれるなど、とてもオープンでウェルカムなお店の雰囲気をつくってくれています。私が当初に目標とした「人が人を呼ぶ場（店）」は現実のものとなりつつあると実感しています。

そうした中で、柏にはものづくりやクリエイティブな仕事をしている方、またそれを目指している若い人たちが結構いることを知り、彼らが集まることができる場をつくれば、なにか新しいことが生まれるのではないかなと考えたんです。そのために、木造の賃貸アパート、2階建て6室ほどをまるまる一棟借りて、カフェとアトリエが混在する、いわゆる「ときわ荘」のようなアパートができたらきっと何かが起こると思い物件を探し始めました。ですがそう簡単には見つからず、いろいろと当たっている時に、現在私たちが運営しているコワーキングスペース「Noblesse Oblige（以下、Noblesse）」が入居するビルのオーナーさんを紹介していただき、私の考えていることをお話ししましたところ「それをこのビルでやろう」ということになり、このビルの1フロアーをお借りすることができたのです。こうして、柏の市街地において2つの事業を展開しているところです。

人が集まれば何かが起こる

私たちは、私たちが今日まで行ってきた活動を「コミュニティの創造」という言葉で表現されるものではないと思っています。EDGE HAUSの企業理念は「地域を醸す」ですが、「コミュニティの創造」に替わる私たちなりの表現が「醸す」なんです。日本酒をつくるとき、米と麹菌が混ざり合って発酵しますよね。それに水と酵母菌を加えて樽に入れ杜氏が状態を見極めながら温度などを調整します。簡単に言いますと、地域の水と米を使い杜氏が環境を見極めながら管理することでその土地ならではのお酒が生まれます。私たちも柏という土地と、そこに住まう人々（米）を、私たちが杜氏となり菌を入れ温めたり冷ましたり、混ぜたりしながら発酵させていく。そうして出来上がるのがその土地ならではのコミュニティであると考えています。

ですが、何が生まれるか分からないところもあるのがコミュニティで、それこそ人が醸しだすものだと思うんです。加熱しすぎて沸騰しないようにすること、逆に冷めすぎてしまわな







コワーキングスペース「Noblesse Oblige」は、ワーキングスペースのほかレンタルスペース、フューチャーセンターとしての利用もできる

いようにすること、そして日々の生活の中で足りていないことがFroschやNoblesseに来ることで、少しでも満たされたらいいなということを意識して活動しています。
人が集まれば何かが生まれ、何かが起こる。ですが何が起こるかは私たちにも予測不可能です。大事なのは、そこで起こったことを、小さなことでも大きなことでも、それをしっかりキャッチアップする人間が必要だということ。その役割を私たちが担えたらいいなと考えています。

小さなおせっかいを焼く

そこで生まれたモノやコトが、地域に派生していくととても良い効果を生むことがあります。たとえば「アディショナルタイムズ」という柏地域のフリーペーパーがありますが、Jリーグの柏レイソルの試合がある日にビジターチームのサポーターにそれを配っています。「ようこそ柏へ。せっかく柏に来ていただいたので、おいしいものを食べて帰ってください」と飲食店やサッカー好きが集まるお店を紹介しているフリーペーパーです。シーズン中は月2回ほど発行されていますが、実はNoblesseで知り合ったサッカー好きのライターやシステムエンジニア、グラフィックデザイナーたちがつくっているものです。柏にはそういうクリエイターたちがいるのに、これまで知り合うきっかけがなかった。けれども人が集まれる場があることでこういうことが生まれやすい状況ができます。それは、決して私たちの手柄でもなんでもなく、人が集まれば何かが起こるということの証ではないでしょうか。
僕らができることは、少しおせっかいを焼くこと。例えばどこかに旅行に行くと、その感想とか誰かに伝えたいこととかありますよね。でもそれを自ら手を挙げて話すことは粋ではない。第三者が「旅行に行って来たんですってね、どうでした?」と聞くととても話しやすい状況が生まれます。また、とても気になっているけれど入りにくい店があるという人に、「エッジハウスに教えてもらってきたって言えば良くしてくれるよ」と伝えれば、とても入りやすい状況が生まれます。そういうおせっかいを焼くことも、地域を醸すうえで大事なことだと考えています。ですから場を提供すると同時に、そこで起こることをただ見守るのではなく、ちょっとおせっかいを焼く。その役割をEDGE HAUSが担うという感覚です。
EDGE HAUSの姿勢として、頼まれごとはなるべく引き受けています。誰の言葉かは不明なのですが「頼まれごとは試されごと」という言葉があります。大変なこともありますが、頼まれたことは引き受けることも大事にしていることのひとつです。



柏レイソルのサポーターがビジターサポーター向けに発行しているフリーペーパー「アディショナルタイムズ」。人と人の出会いが生んだフリーペーパーである

その先に見える新しい窓を待つ

現在、EDGE HAUSは、コミュニティーカフェ「YOL cafe Frosch」、コワーキングスペース「Noblesse Oblige」の事業に加え、市内手賀沼周辺地域での「奥手賀ツーリズム」というグリーンツーリズム事業、そして柏の葉にオープンしたランニングステーション事業の4つの事業を展開しています。
柏の中心市街地、手賀沼周辺地域、柏の葉という性格の異なる3つのエリアと関わることで、それぞれで関わる人や情報を混ぜ合わせることができるのではないかと、そして上手に混合すればきっと面白いことができると考えています。経営の視点で話しますと、それぞれの事業が単独で黒字化することが大事だと考えていますが、そのうえで、この3つの地域で4つの施設を持っていることを強みとした新たな事業展開を模索しているところです。
お話ししましたように非効率的で面倒くさいことではありますが、「小さなおせっかい」と「頼まれごとを引き受ける」ことは私たちにとってとても大事なことであり、苦労してフロントチームが築き上げてきたものを別のチームが活かしていくことで、EDGE HAUSとして成長していけるのだと考えています。今やっていることを活かせる別の窓を持つことが大事で、EDGE HAUSはそれを持てる環境にあると思っています。そのひとつが、さまざまな人たちとのアクセスポイントを持っていること、人が集まる場を持っていること、さらには地元企業とのつながりといった私たちの強みを活かし地域経済が発展する仕組みをつくることです。それはEDGE HAUSの仕事だと思っていますし、EDGE HAUSだからこそできることだとも考えています。
私たちは「おかげさまサイズ」と呼んでいますが、地元力を活用し活性化する、すなわち地域を醸すことで顔の見える持続可能な地域コミュニティの創造と、そこから生まれる「何か」を、おせっかいを焼きながら地元力につなげたいと考えています。その先には必ず、新しい窓があるはずです。

(2018年8月17日Noblesse Obligeにて。文責=編集部)

奥手賀ツーリズム

「心を耕す休日」を誰もが自由に過ごすことができるフィールドをコンセプトに、収穫体験やカヌー体験のほか、かかしづくり体験、バードウォッチングとアウトドアランチ、大人の星空ナイトキャンプなどユニークな企画を提供する。柏の市街地から車で20分ほどのところで自然体験ができる。バーベキューガーデンやカフェ、ドッグラン、釣り堀などの施設もあり、休日ともなれば柏市民のみならず埼玉、茨城からも利用者が訪れる。
■所在地／千葉県柏市曙橋1
■https://www.okutega-tourism.jp/











ランナーズステーション&カフェ
Bunny Burrow

柏の葉にオープンしたランナーズステーション&カフェ。ロッカーやシャワールーム、休憩スペースを備えたランナー向けの施設。カフェは、ランナーのみならず誰でも利用できる。YOL Cafe Frosch のような気軽に立ち寄れる場所、柏の葉に来たらとりあえず寄ってみたいと思ってもらえるようなカフェを目指している。
■所在地／千葉県柏市若柴185-1
柏の葉かけだし横丁D棟20

EDGE HAUS STAFF



油原祐貴
合同会社 EDGEHAUS 代表社員



千葉あずさ
Bunny Burrow ディレクター



細谷恵美子
Noblesse Oblige ディレクター



森 文子
Noblesse Oblige チーフディレクター



小原江梨子
Bunny Burrow チーフディレクター



行政翔平
ゼネラルマネージャー

EDGE HAUS KASHIWA



杉田文香
YOL Cafe Frosch ディレクター



禿 信恵
ディレクター



関本有佑
奥手賀ツーリズムチーフディレクター



武井佑介
YOL Cafe Frosch マネージャー

コミュニティは煙が立つように生まれるもの

田中元子（株式会社グランドレベル 代表取締役社長）

写真提供＝株式会社グランドレベル（特記を除く）



田中元子
株式会社グランドレベル代表取締役社長。
1975年茨城県生まれ。独学で建築を学び、2004年大西正紀氏とクリエイティブユニットmosakiを共同設立。建築やデザインなどの専門分野と一般の人々をつなぐことをモットーに建築コミュニケーター・ライターとして活動。2010年よりワークショップ「けんちく体操」に参加。同活動で2013年日本建築学会教育賞を受賞。2014年建築タブロイドマガジン「awesome!」を創刊。同年より都市部の遊休地にキャンプ場を出現させる「アーバンキャンプ」を各地に展開。2015年よりパーソナル屋台の活動を開始。2016年株式会社グランドレベル設立。著書に「マイパブリックとグランドレベル—今日からはじめるまちづくり」株式会社晶文社刊／ 2017年12月発行がある（本誌P.123にて紹介）。
http://www.glevel.jp

田中元子氏が代表取締役を務める株式会社グランドレベルは、1階に、地面に、ひとびとの営みを取り戻し、市民や企業、行政とともに、そこにある問題を解決しながら、幸福的かつ健康的な「ひと・まち・日常」をつくることを目的としている会社である。
「1階づくりはまちづくり」をモットーに1階のグランドレベルがもっと人が佇める、発生する会話の多い場所になれば、子どもからお年寄りまで、人々の小さな“やりたい”が、建物や施設など、あらゆる街の1階にあふれる。そのためには、人の気持ちに寄り添い、間違いのないデザインが必要だと話す。
2018年1月にオープンした「喫茶ランドリー」は、同社の考えを反映し企画運営するカフェである。
ベビーカーも犬も車椅子も入店OK。来店者には、「店内では、基本自由にやりたいことをしてください」と伝え、また、接客やサービスを効率化し、人とコミュニケーションが生じてしまうように設計されている。結果、ここでは日々、大小さまざまな活動に利用され、その合間に自然と知らない人同士の会話が生まれ、コミュニティが育まれているという。
田中氏が話すように、「人の気持ちに寄り添い、間違いのないデザイン」をすれば、自然にコミュニケーションが生まれ、自由で、誰にとっても気持ちの良いコミュニティが育まれることを教えられる。
田中氏の考える、コミュニティを生む場のあり方とそこで育まれる人と人のつながりについて話を聞いた。


sewing machine week
LAUNDRY ROOM



名前を知らなくても人はつながる

この喫茶ランドリーにお越しになるお客様の中には「私もコミュニティカフェを運営しています」と言われる方もいらっしゃって、その度に「ここはコミュニティカフェではないんですよ」と答えているのですが、それほどコミュニティという言葉が汎用され過ぎていて、コミュニティの意味について問い直すことが必要なのではないかと感じているところです。
私は、パーソナル屋台（田中氏の命名による）なるものを曳いて街に出てコーヒーを無料でふるまうということをやっているのですが、それによってコミュニティをつくりたいと考えたことは一度もなく、単純に街に出ることが好きということと知らない人とコミュニケーションが取れたら楽しいだろうなと始めたことです。一日中街でボーっと立っていたり、不特定多数に声を掛けたりすると怪しまれますが、コーヒー屋台を介することでそれらの行動が許されてしまう。それが楽しくてやっているところがあるので、出会った人の名前や連絡先を聞くとか、つながりを求めるようなことはまったくしていません。名前も知らないまま長い時間お話をすることもありますが、それ以上のことはお互いに期待しなければ、求めもしない。でもこうして話をしていることは楽しい。この「ふるまう」という行為は大事で、「ふるまう」ことで第三者との接点が生まれやすくなります。パーソナル屋台を曳いていて気が付いたことでもあるんですが、ふるまうことで「ふるまう方」も「ふるまわれる方」も互いにアクセスしやすい状況を生み出します。
名前を知っていることから始まらないと知り合いになれないというのは寂しいことですよね。飲み屋でよく見かける人がいるけれど「誰なんだろう」から始まって繋がることがあってもいいですし、実際ありますよね。そういうつながり方が様々な場所で気楽にできない街は、寂しい街なのではないかというのが私の考え方です。また、つながる人はエリア限定ではなくて、そのエリアに遠くから働きに来ている人とか、その日たまたま遊びに来た人とか様々な人とのつながりがあっていいいと思っていますので、ローカルに根差したつながりという考え方もしていないです。一期一会、その場限りのつながりも楽しいものです。

自然に生まれたコミュニティは居心地が良い

この近所に私がよく行くコンビニエンスストア（以下、コンビニ）があります。そこはDJイベントを開催したりするこの界隈では有名な少し変わったコンビニですが、店長やお客さんとお互いニックネームで呼び合うような関係ができていて、気軽に立ち寄って気楽に人と話しができる環境です。ほぼ毎日のように通っていますが、このコンビニのような気楽なコミュニティが私は居心地がよくて、喫茶ランドリーもスタッフとお客さんの間やお客さん同士の間にそういう関係が生まれる場であったらいいなと思っています。



パーソナル屋台でコーヒーを「ふるまう」。街の小さなヴォイドに賑わいをつくり出し、その体験や風景が記憶となり街のことを改めて考える小さなきっかけとなればうれしい

「私は、今まさにコミュニティの中にいる」ということを意識することってほとんどないですよね。ただそこにいて、人との会話なり交流なりを楽しいと感じているだけだと思います。自然な形でコミュニティが発生している場というのは、まるで煙が立つように生まれると思います。開かれたコミュニティは、あたかもここでつくってくださいと迫るようなコミュニティスペースから計画通りに生まれるものではないはずです。大事なことは、どんな人も受け入れるコミュニティであることだと思います。

決まったコミュニティに属したいと思わない人もいますよね。そういう人が今日は誰かと話がしたいなと思ったときに、友人に連絡をして約束をしなければいけないとか、あるいはあきらめて一人で食事をするという選択肢しかないのではなく、ある店に行けば一人や二人は知った顔がいて、気楽に話ができる。いくつか選択肢を持っていて、その時の自分の状態で行動を選べる。その選択肢が多ければ、楽しいですよね。そういうつながりも重く捉えてしまうと、集まった人たちと同じテンションでいることをなかば強制されるような空気になりがちで、それが息苦しいと感じる人も結構多いと思います。そう感じる人は、結局一人で食事をする選択肢しかなくなってしまいます。

喫茶ランドリーを利用したことがない人も存在は知ってくれている人がいる、また店の前を通るだけですがガラス越しに目が合えば会釈をしてくれる人もいる。そんなお付き合いができることは大事なことだと思います。

どんな人も受け入れられる環境をつくりたい

実は、個人的にあまり好きではない公園がありまして、いかにも富裕層と思しき若いママやニューファミリーが子どもを連れて来ていて、みんな笑顔でしあわせ…みたいな空気が伝わってきてしまって、ここには自分の居場所はないなと感じてしまうんです。そういうテンションにちょっとついていけない時にも、ちゃんと居場所があるのが「公」のつく公園であって欲しい。公園はすべての人を受け入れられる場でないといけないと思います。公園づくりとか街づくりのワークショップなどに顔を出す機会があるのですが、必ずと言っていいほど話されることがホームレス対策です。彼らを排除するにはどうしたらいいかという話を聞くたびに寂しくなります。必ず抵抗しますが、公園はホームレスでも居られる場所であって欲しい。もちろん安全面とか、衛生面など問題が無いわけではありませんが、デザインで解決できることはあるはずです。「公園」と名乗るからには、何かを排除しようとする考えはおかしいと思いますし、社会においても誰もが安心して生きていけるためには、誰も排除しないという姿勢が大事です。

喫茶ランドリーは、寂しい気分の人も、楽しい気持ちの人も、おじいちゃん一人でも抵抗なく居られる場所を目指していて、人の数よりも様々な種類の人たちが居合わせることができる







洗濯機や乾燥機、ミシンやアイロンなどが備えられている「まちの家事室」。一般的なカフェでは見ることのできない光景が生まれる。近所の主婦たちのたまり場としてうってつけの場所にもなる

ことを私は大事にしたいんです。街にはいろいろな人がいるにも関わらず、店や場所がターゲットを決めて棲み分けさせてしまうと、サラリーマンしかいない街という印象を与えてしまったり、年寄りしかいない街だという印象を持たれてしまったりということもあります。喫茶ランドリーは、そんな街の偏りを見せるのではなく、街の縮図を見ることができるような場にしたい。テンションが高い人たちも、今日はテンションが低いから一人でいたいという人も共にそこに居られる。「お互い、いろいろあるよね」という気づかいがあれば同じ空間を共有できるはずです。ですから、店をつくる際に、いろいろな人がいて、いろいろな状態があるということをみんなが許容できる空間とは何だということはすごく考えたところですが、空間やここにある物、そしてスタッフも含めたすべてがそれを支えてくれるものだと思います。

「喫茶ランドリーにはなぜ洗濯機が置いてあるの?」とよく聞かれますが、洗濯機やコーヒーがきっかけになって様々な人が集まり私設の公民館みたいな使われ方をされたらいいなと考えていて、そのためには多様な機能を持った空間であるということを認識してもらうことが大事であり、私が「こうであればいいのにな」と願う都市の姿や公園の姿を少しでもここで実現することができたらいいなと思っています。洗濯機もときにはお待ちいただくこともあるのですが、ランドリーが目的ではないしコーヒーがお好み焼きに変わってもOKです。

良質なコミュニティを生むグランドレベル

人がつながる場として適しているのは、やはりグランドレベルです。ビルの4階の密室でパーソナル屋台をやったところで、外には広がらないですよね。地上でやることに意味があって、良いグランドレベルであればさらに広がります。ですから、建物の足元や1階部分は街に開いて欲しいと願っています。日本の都市のグランドレベルは決してオープンであるとは言えないですよね。大事なのは、そこに集まる様々な人たちの様々な行動をお互いが許容する空気が生まれることです。そこはランドスケープアーキテクトの方たちに期待するところでもありますが、仮にそういうオープンスペースができたとしてもそれはスタートに過ぎなくて、その後のマネジメントによるところが大きいと思います。例えば、マンションの管理人はそのマンションのためにだけ働いていますよね。でも私は、街にとって大事なことは街とマンションがいかに繋がっていくかということであって、そのためにはマンションの運営管理というマネジメント業はクリエイティブであることが必要だと考えます。マンションの居住者のポテンシャルを引き出してマンションの内と外を繋ぐことができれば、街のグランドレベルの質は向上します。グランドレベルの善し悪しは街や社会の善し悪しに繋がるものです。善い街の不動産価値は上がります。そして、善い街には良質なコミュニティがまるで煙が立つように自然と生まれるのではないでしょうか。

(2018年8月27日喫茶ランドリーにて。文責=編集部)

喫茶ランドリー
株式会社グランドレベルが企画、運営を行うカフェ。
築55年のビルの1階をリノベーションし開業。カフェにはランドリーやアイロン、ミシン、裁縫箱と編み物道具も用意されている。スペース貸もする。
OPEN / 10:00～20:00(イベント開催日はイベントに準ずる)
東京都墨田区千歳 2-6-9 イケマンビル 1F ≪ http://kissalaundry.com/ ≫


改修前







photo by John Dalton

参考にしたい海外のグランドレベル



2017年11月3日に開催された「シブヤパブリックサーカス」(主催／ co-lab、春蒔プロジェクト株式会社、企画／株式会社グランドレベル、協力／渋谷キャスト)の賑わい。出展者(演者)は来場者(観客)にパフォーマンスや体験を無料でふるまうことで売り手と買い手というヒエラルキーが生まれない。結果、良質なコミュニケーションが発生する

コミュニティの力を高めて災害に備える。

株式会社コトブキ

写真提供＝株式会社コトブキ



災害や緊急時など特に初動においては近隣の人々がともに助け合う「共助」が重要である。
そのためには、日ごろからのつながりである「地域コミュニティ」は欠かせない。昨今の自然災害を目の当たりにし、防災に対する意識が高まっていると考えられるが、では実際その状況になったときに人々はどれだけ冷静に対応できるかということにおいて、誰もが不安を持っているのではないであろうか。その不安をできるだけ小さくするために、自治会や町内会など地域コミュニティを中心に防災訓練が活発に行われるようになったと聞く。そういった場を通じて、コミュニケーションをとり地域の繋がりがより強くなることが期待できる一方で、昨今公園などに積極的に導入されている防災ファニチャーの使い方を体験することもいざという時のためには必要である。例えば、実際にかまどベンチを組み立て炊き出しをすることは、イベントとして楽しみながらいざという時の対処方法とその使い勝手を確認できる。この防災ファニチャー体験はイベントとしての楽しみといざという時の備え、そしてより強い地域コミュニティをつくる一助になると考える。

「コミュニティ力」を高めて、災害に強いまちづくりへ



コミュニティ活動と防災

近隣住民が助け合っての災害対策。「共助」の力を高めることは、安心･安全の基盤づくりに繋がる。



自治会活動

町内会や自治会、商店街を中心とした地域の自主防災組織による訓練を通じて、いざという時に備え住民参加により街を強くしていく。



災害対応力を高める連携

人と人のつながりが最大の防災力。また行政、消防、警察、自治会それぞれの連携を深め防災力を高める。

「防災まちづくり」における地域の連携
自助 + 共助によるコミュニティ防災を推進



納入事例



のぞみ野中央公園
かまどベンチ｜収納ベンチ



守谷サービスエリア
かまどベンチ｜シェルター



立川２丁目緑地広場
収納ベンチ｜パーゴラ



上植野城公園
トイレスツール



厚木市若宮公園
トイレスツール（使用時）



鈴鹿市桜の森公園
シェルター＋シェルター用テント（使用時）



第10回キッズデザイン賞「経済産業大臣賞」受賞
「防災ファニチャーによる啓発活動への取組み」

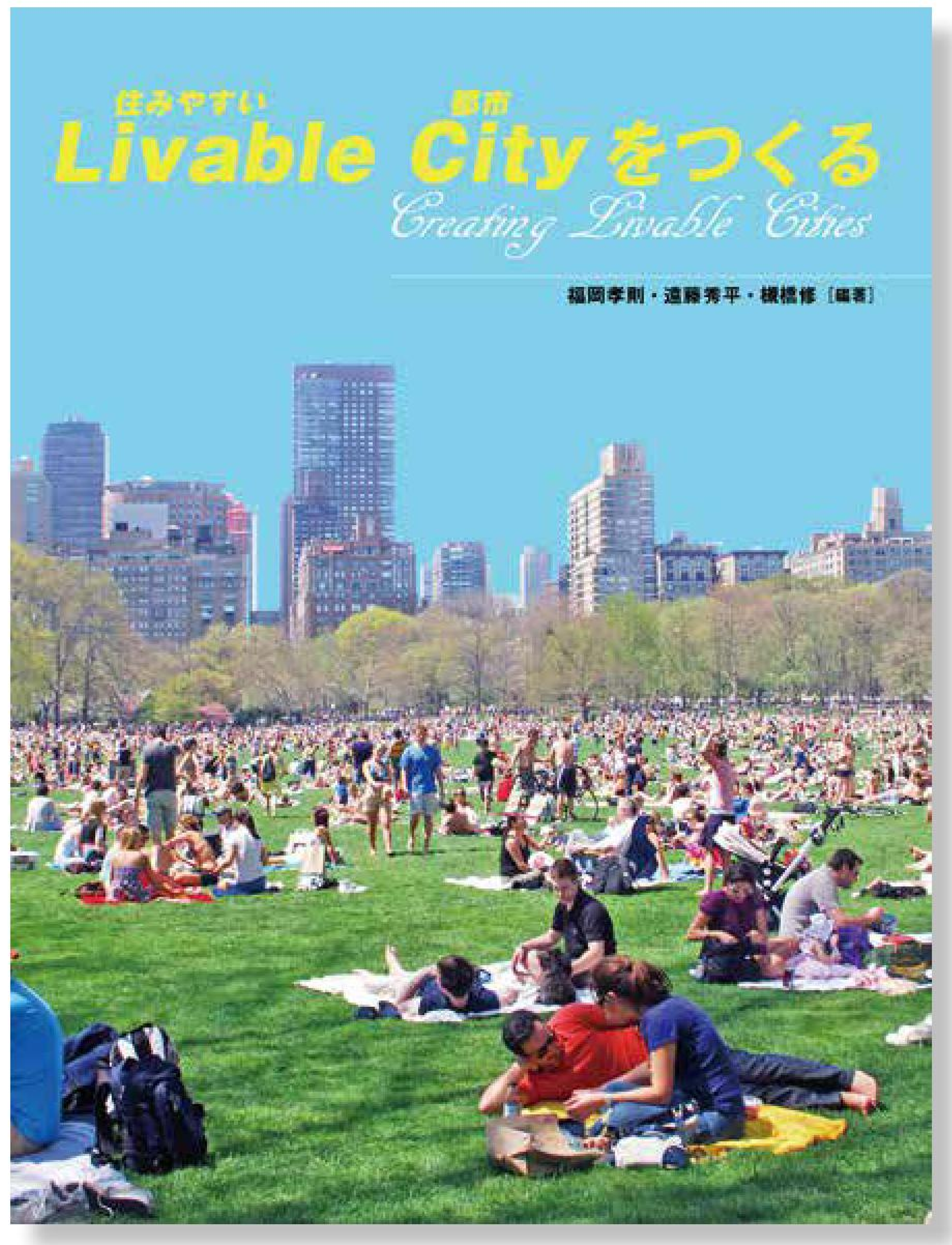
災害が発生した場合に、どうすれば自分自身や家族を守り、少しでも犠牲者を出さないようにできるのか。
万が一のときの対応のノウハウ、思考力･判断力を養うこと。
災害の疑似体験をしたり、防災ゲームやシミュレーションを通じて関係者同士が仲良くなることも大切です。
日頃子どもたちが集う学校や公園で防災ファニチャーを通じて、生活の中で防災を意識し、安全な避難場所、方法を確認。
子どもや親たちが地域と共に防災を学び、地域と人をつなぐ防災ファニチャーは人の結びつきにもつながっています。（株式会社コトブキ）

townscape.kotobuki.co.jp

住みやすい都市 Livable City をつくる

福岡孝則・遠藤秀平・槻橋修／編著

本当に生活の質が高く、豊かに生きられる、住みやすい都市とは何か？
「Livable City（住みやすい都市）」という新しいコンセプトに基づき、世界の行政担当者やデザイナーが語るリバブルシティのビジョン（戦略）とアプローチを紹介し、国内外のパブリックスペースから展開される最新のリバブルシティ事例や提案を解説。都市に住む豊かさや新しい価値を探し、行動するあらゆる人のための一冊。



A4 変型（W225mm × H297mm）
オールカラー
本文：144 頁

価格
2,916円（税込・送料別）

第 1 章 リバブルシティのビジョンとアプローチ

■リバブルシティをつくる　福岡孝則［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 持続的住環境創成講座（積水ハウス）特命准教授 / Fd Landscape 主宰］■ニューヨーク市の Livable City 戦略：パブリックスペースからはじめよう!　ジェフリー・シューメーカー［ニューヨーク市都市計画局　都市デザイン・ディレクター / チーフ都市デザイナー］■人、場所、それともモノ?　ジョージーン・セオドア［ニュージャージー工科大学建築デザイン学部 准教授、Interboro Partners パートナー］■メルボルン市のリバブルシティ戦略と都市ランキングースマートでリバブルな未来の都市創成に向けてー　オースティン・レイ［元メルボルン市　スマートシティオフィス・プラクティスリーダー , Planning for Change］■‘場所を共有する’ー人間のためのパブリックスペースと都市をつくるー　サーシャ・コールズ［オーストラリア・シドニー市　ASPECT Studios ディレクター］■人が人を集める。住みやすい街と移住論　小泉寛明［Lusie Inc. 代表、神戸 R 不動産］■［パネルディスカッション］Livable City のつくりかた　パネリスト：遠藤秀平 × 槻橋修 × 小泉寛明 × オースティン・レイ × サーシャ・コールズ、モデレーター：福岡孝則、通訳：山田知奈■アジアのサステイナブル・シティー水循環から発想する都市環境デザイン　レオナルド・ウン［ランドスケープアーキテクト　Ramboll Studio Dreiseitl Singapore 代表］■ドイツのサステイナブル・デザインー気象と環境性能から建築・都市を構想する　ヤン・メナート［クライメイト・エンジニア Transsolar, Germany］■ポートランド市のグリーンインフラ（GI）戦略最前線ー夢から実践へ　30 年間の GI 展開について語る　ドーン・内山［米国ポートランド市環境局アシスタント・ディレクター（グリーンインフラ担当）］

第 2 章　パブリックスペースからリバブルシティを考える

■ Bottiere-Chenaie Eco District —水から発想するエコロジカル街区のデザイン、パブリックスペースを核にした「健康的な都市の創成」、パブリックスペースからの都市再生 —ニュー・オールド・マーケットスクエア、ブラウンフィールド（工業跡地）を活かしたリバブルシティ、Water for All —水を媒介とした人間、都市、自然の新しい関係性、コートヤード HIROO —多様な価値観をもつ人々が混じり合うオープンでソーシャルな場所をつくる—　福岡孝則■都心の公園を育てるこころみ —リバブルシティをめざして—　村上豪英［一般社団法人リバブルシティ イニシアティブ代表理事（アーバンピクニック事務局長）］

第 3 章 リバブルシティのつくり方　提案編

■減災デザイン都市　・コルゲート鋼板を用い段階的供給による拡張可能な災害時仮設住宅の提案　遠藤秀平［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 教授、建築家］、神戸大学大学院 遠藤研究室・景観とのバランスを目指した津波避難タワーの提案　遠藤秀平、高麗憲志［神戸大学大学院工学研究科 技術職員］■リバブルシティの新しい条件 レジリエントな社会を導くデザイン手法　槻橋修［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 准教授、建築家］、神戸大学大学院 槻橋研究室　1.「失われた街」模型復元プロジェクト、2. 気仙沼みらい計画大沢チーム、3. 氷見朝日山公園コミュニティデザイン、4. SANNOMIYA2016 プロジェクト 〜つくりながら考える〜■持続的雨水管理を核にしたグリーンインフラ　福岡孝則■神戸大学×モナシュ大学　国際ワークショップ ‘Livable City KOBE’ LIVABLE CITY 神戸の提案

お申し込み方法：下記の欄に必要事項をご記入の上、FAX でマルモ出版までお申し込み下さい。その後商品と払込取扱票をお送りします。
銀行振込をご利用の方は、上記金額に**送料 170 円（1 冊）、500 円（2 冊以上）**を加えた金額を下記 1 の口座にお振込下さい。
郵便貯金口座をご利用の方は、届きました払込取扱票を用いて下記 2 の口座にお振込下さい。

お振込先：1. 三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店　（普）5294495　株式会社マルモ出版
2. 郵便貯金口座 口座番号：00170-4-70822　株式会社マルモ出版　※振込み手数料はご負担下さい。

お問合せ先：ご不明点・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡下さい。

㈱マルモ出版　〒 150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8 南平台アジアマンション 708 号
TEL. 03-3496-7046　FAX. 03-3496-7387　E-mail：maru@marumo-p.co.jp

<table>
<tr><td colspan="3">ご注文日　　　　年　　月　　日</td><td>ご注文冊数</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ご注文者</td><td>会社名・お名前</td><td>ご連絡先（TEL）</td><td rowspan="2">冊</td></tr>
<tr><td colspan="2">ご住所　〒</td></tr>
</table>



LANDSCAPE WORKS

photo by Makoto Yoshida [Yoshida photo studio]

静岡県富士山世界遺産センター

静岡県富士宮市

ランドスケープデザイン＝オンサイト計画設計事務所
建築設計＝坂茂建築設計
写真＝オンサイト計画設計事務所、吉田誠（吉田写真事務所）＊

Mt.FUJI World Heritage Center, Shizuoka

Fujinomiya city, Shizuoka

Landscape design by studio on site
Architecture design by SHIGERU BAN ARCHITECTS
Photos by studio on site & Makoto Yoshida [Yoshida photo studio]





水鏡に富士山、逆さ富士の建築、大鳥居が映り込む（＊）


ミース・ファン・デル・ローエ
（バルセロナパビリオン）


カルロ・スカルパ
（ブリオン・ヴェガ）


イサム・ノグチ
（カリフォルニア・シナリオ）

水盤のもつ水平性は、20世紀ランドスケープの中で繰り返しデザイン探求された空間言語である。ミース・ファン・デル・ローエがバルセロナパビリオンに実現した水盤。それは池ではなく、水平に浮かべられた屋根スラブと呼応する抽象的水平面として扱われている。ディテールの魔術師カルロ・スカルパは、極限まで細められた影を操り、空間に緊張感を与えるため水面の上下数インチの造形にこだわった。彫刻家であるイサム・ノグチも、水面を石畳と拮抗する面として対峙させるディテールを用い、敷き込まれた砂岩の重量感を際立たせる試みをしている。彼らに共通するのは、水を素材そのものとしてより、物象的な面として立ち現わすことにより、風景のスケールを映しこむリフレクターとして用いていることである。そしてそれを実現するためのディテールにそれぞれのエフォートを注いでいる。このプロジェクトでも、富士山という雄大な風景スケールに呼応するため、そして水盤が風景のフラクチュエーションを映しこむ空間言語となるよう、水面のディテールへの挑戦から始まり、全てはそこに終始した。

水盤を可能な限り広げることが、設計チ ームのデザイン提案である。コンペ要綱では建設可能エリアは西側に限られ、敷地東側の駐車場に関しては積極的な提案は求められていなかった。しかしながら、設計チームは、「富士山」という風景資産はランドスケープのスケールなくしては表象され得ないと直感した。コンペ質疑応答でも「具体的な利用方法については現段階で定まっていないことから、今回プロポーザルにおいては…外構整備の提案は求めないこととしています」と回答があったが、われわれの提案は敷地東側を大きく改変し、浅間神社湧玉池から豊かに流れる神田川に連続する水の空間を広げることにあった。コンペ要綱の求めない改変を提案の主眼とすることは、審査の当落から考えれば危険を伴うが、しかしこの広がりがなくしては建築が実現されても意味ある発信力を持たず、落選ならばそれでいいと覚悟を決めて応募した。最終的に県が当案を採用し、さらに諸方面の調整を行ってくれたことはありがたい決断であった。

しかし、事業計画の想定を超える規模のランドスケープの実現は当然コストとの戦いになる。そのような状況の中で死守したのが、水面だけの空間に徹することに加え、水盤を支える広場が黒い花崗岩の敷き込みであることである。「水は光である、したがって背後は黒い石がよい」とは設計者として若かりし頃、ヒデオササキから何回か諭された言葉である。この教えを回想しながら、予算内での石材舗装を実現するため様々な検討を経て、石材施工者の採石の山探しと運搬合理化により実現した。

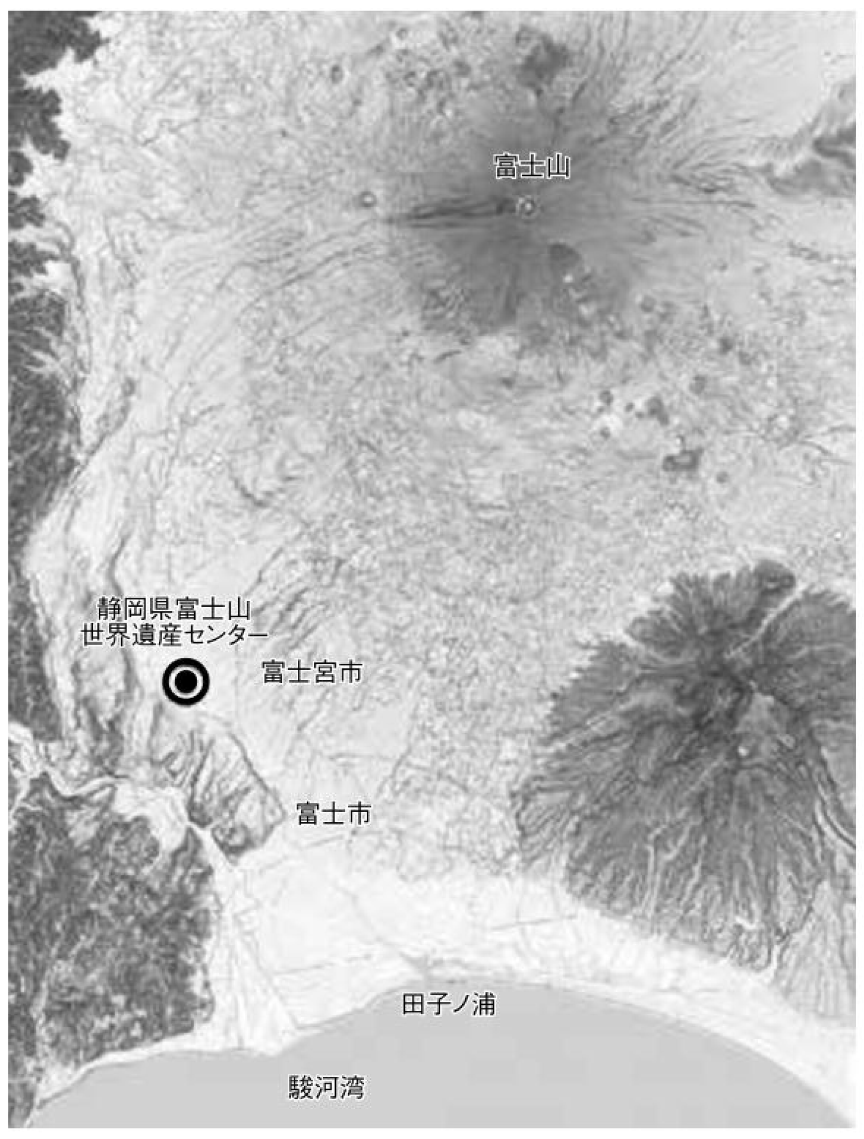
また、単一な水盤を実現するためには、様々な方面の調整が必要であった。催事においては水盤を無くし一体的な広場として利用できる機能性をもつこと、水盤の水平性を確保する支持地盤の構造検討、複数地権者の管理区分の問題を解決すること、既存の大鳥居からの参道をどのように確保するかについての浅間神社との協議など、大きく簡潔なものを目指すほど乗り越えるハードルは数多い。これはランドスケープの常である。

いくつかの経緯を経て姿を現した水盤であるが、水という素材を用いると、どのプロジェクトでも思わぬ効果に驚かされる。設計当初より、新しい建築を映しこみ実像と鏡像で一つの景をつくることはもとより、既存の鳥居自体が映ることも想定していた。しかし、建築、鳥居、富士がひとつのセットとなり水盤に現れてみると、それが物理的な景観としてだけでなく、富士の文化的文脈を表象することに気がつかされたのである。さらに驚かされたのが、影の反射による効果である。日中特定の太陽高度になると、鳥居の影が水盤で反転して建築の逆さ富士構造に映り込む。大きな光と影の鳥居形が建築に浮かび上がるのである。

水盤が全くの静水面であることは少ない。その時々の風の向きによりさざ波をまとい、映し出された空や風景に一期一会の表情を与えてくれる。水という素材が、鏡映による風景を記号的に見せるだけではなく、瞬間の環境を伝える身体的なメディアとなって経験を与えてくれるのである。建築内部のアトリウム、カフェテリアから顧みれば、水盤の広がりはちょうど書院と方丈庭園のようなプロポーションを持つ。今はまだ周囲を囲んだ生垣、高木が低いが、将来想定の規模に成長してくれれば直近の街区から独立した空間となり、さらに静かな現代の庭として鑑賞されると期待している。

（文＝三谷 徹）

（※上段モノクロ写真3点＝三谷 徹）



広域地図（地理院地図から加工）



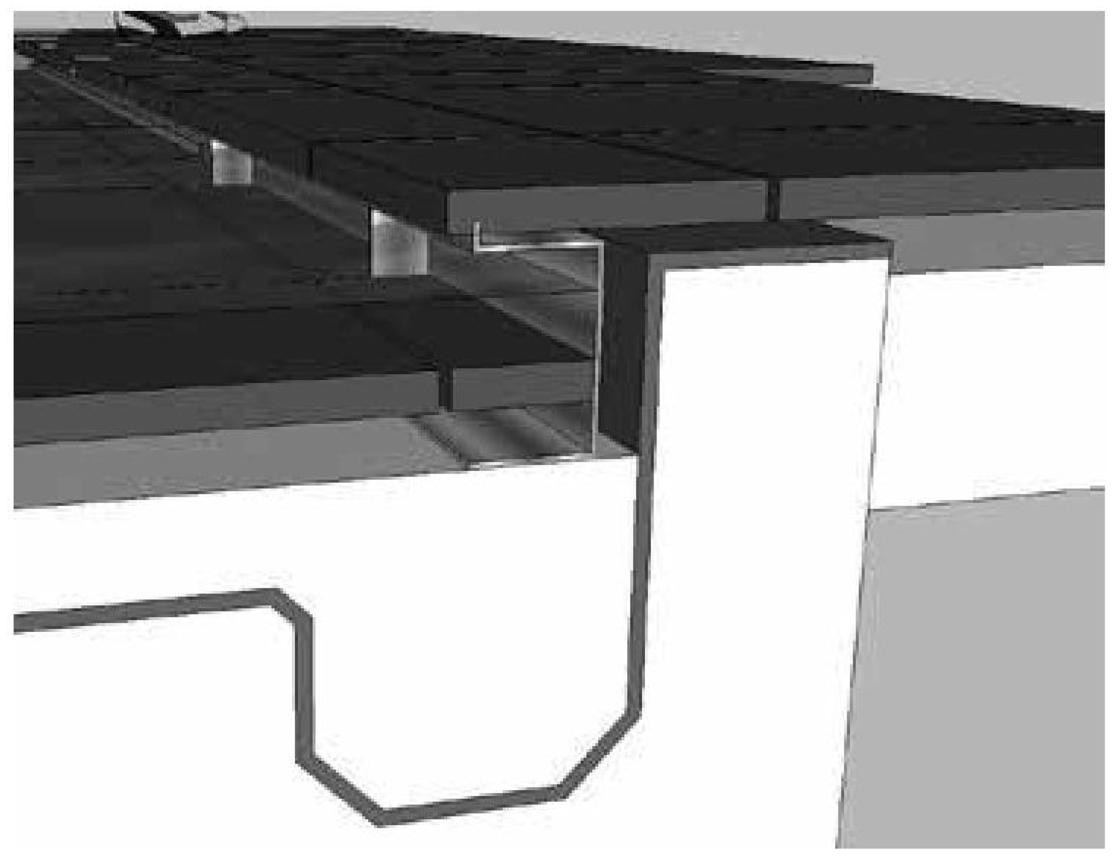
世界遺産センターと浅間大社の位置図



コンペ時平面図


神田川越しの俯瞰〈*〉

水鏡のつくりかた ～影を薄く見せるディテール～



水盤エッジのスタディー

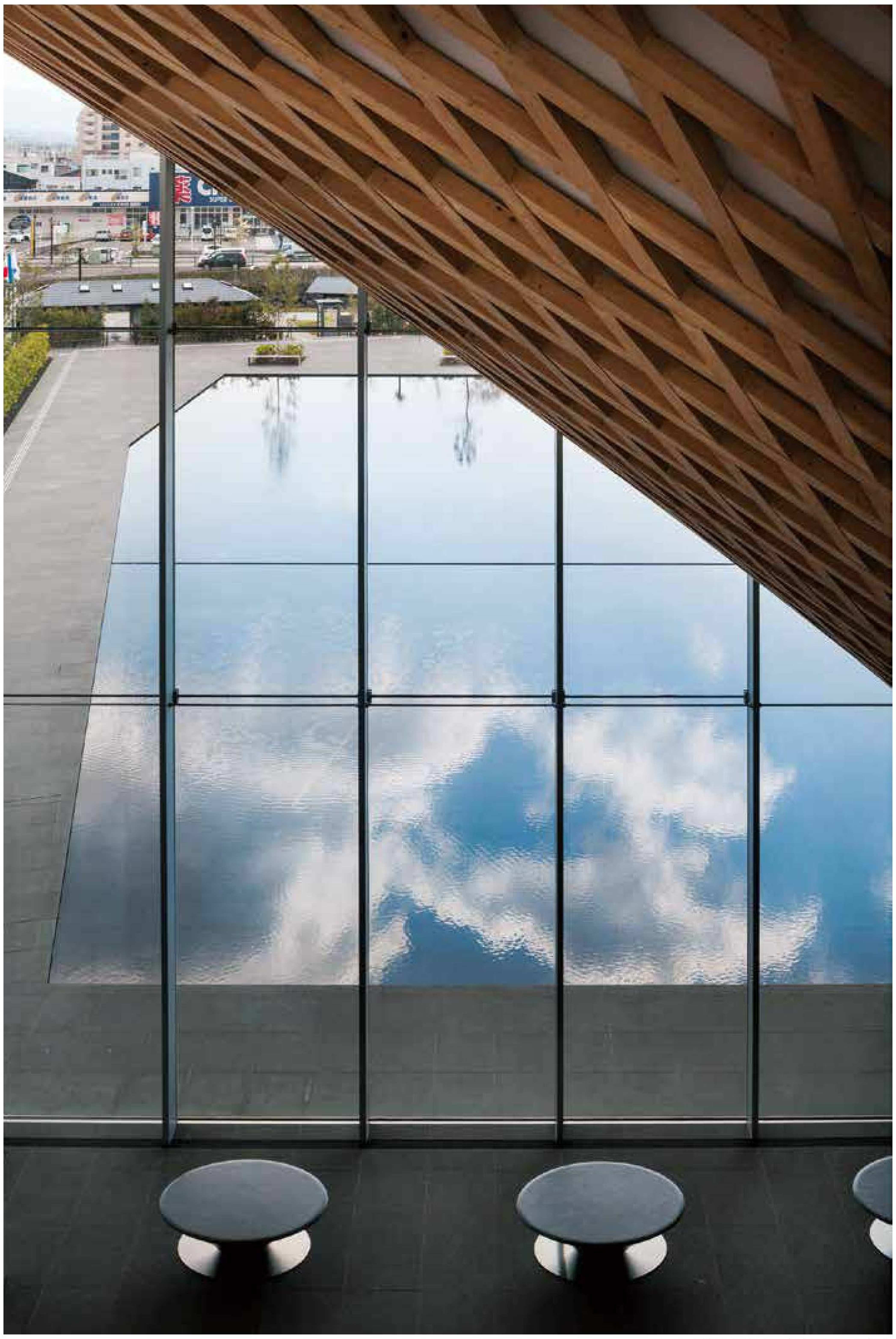
逆さ富士の建築を美しく映し出す水盤のつくり込みはこのプロジェクトの要である。水盤を形成するには、取水口、排水口、などの水景設備だけでなく、建築取合い部分の複雑な収まり、防水との取合い、舗装と一体になった仕上げ、水中照明など、様々な納まりの存在感を消しながら、「水平な水面」それだけの印象を人々に認知させて、水鏡としていかに強調できるかという点に集中してディテールの検討を進めた。

中でも水面と舗装面との境界にあたる護岸部分は最も複雑さを極める部分である。見せ方はシンプルに石厚の下に水面が入りキャンチレバー状態とするため、このディテールを成立させるにはコンクリートスラブと軽量鉄骨の混交構造形式による防水の納まりと、ところどころに出てくる桝納まりなどの工夫をしている。吐出口や水口などは石目地に合わせて空隙を作りながら蓋を構成し、落ち葉やゴミの清掃管理にもしっかり対応できるような工夫を行いつつも可能な限りシンプルに見せることができた。サインのある離れた池はサイフォン原理によって水を連続させている。

また、大きな水盤を作る際に最も考慮しなければいけないのは今後起こりうる圧密沈下への配慮である。Arupによる構造検討によって池の躯体は250mmのスラブマットを200本を超える地盤改良杭で支えている。それでも2000㎡を超える仕上げ面の施工誤差や沈下による許容値を水深30mmとして設定し、ポンプ稼働時には10mmの水膜が全体に渡って循環するように初期値を設定した。

県と市の敷地で水盤は2つの池として独立しているため、どちらかを抜いたり、両方抜くことも可能である。こうして水盤はイベントなどの活動の場としても利用可能なように計られている。技術的にも巨大な水盤を成り立たせ、水盤内に浅間神社参道の第三鳥居が建立できることを可能にし、世界遺産センターの館名板と共存することで、富士山を背景に互いに補完的な関係をつくりだし、水盤を象徴的な場として長く愛されることを願っている。

（文＝鈴木裕治）



建築内部より水鏡を見る〈*〉



水盤エッジ



水鏡のゆらぎ



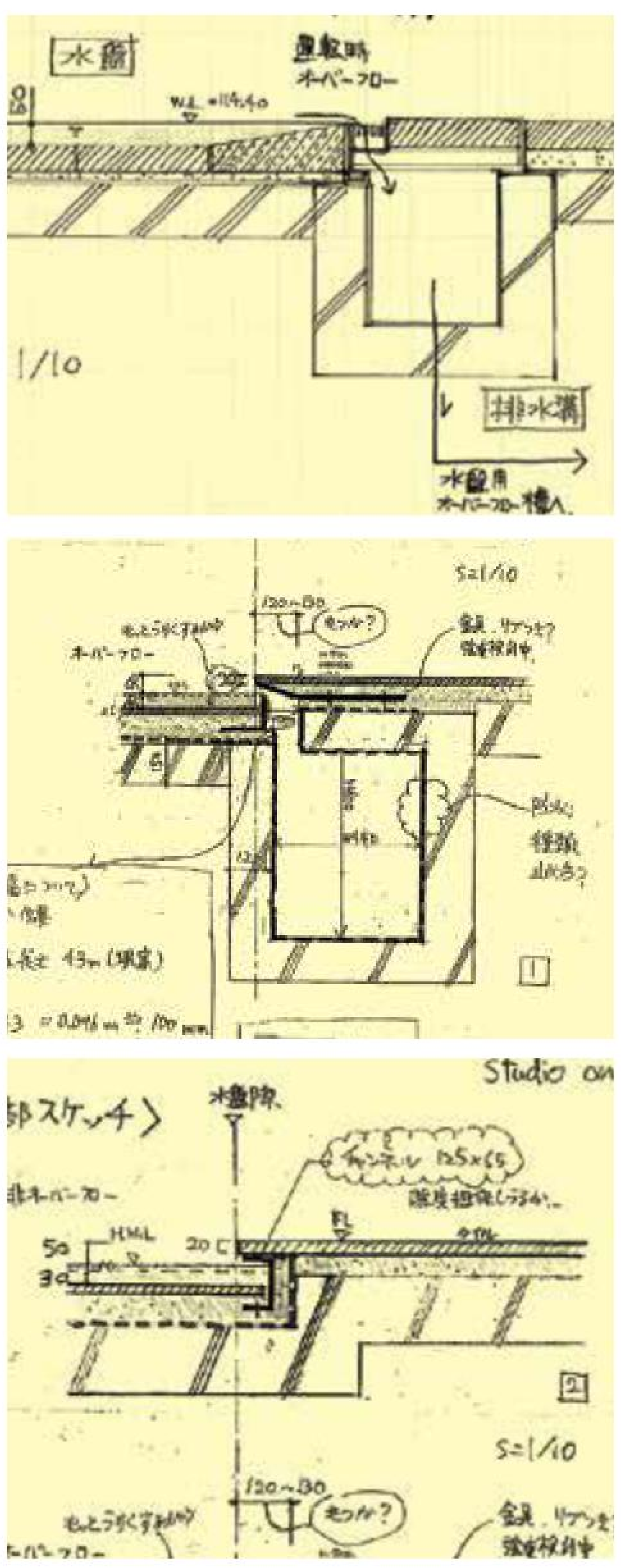
柱状改良体杭による基礎工事



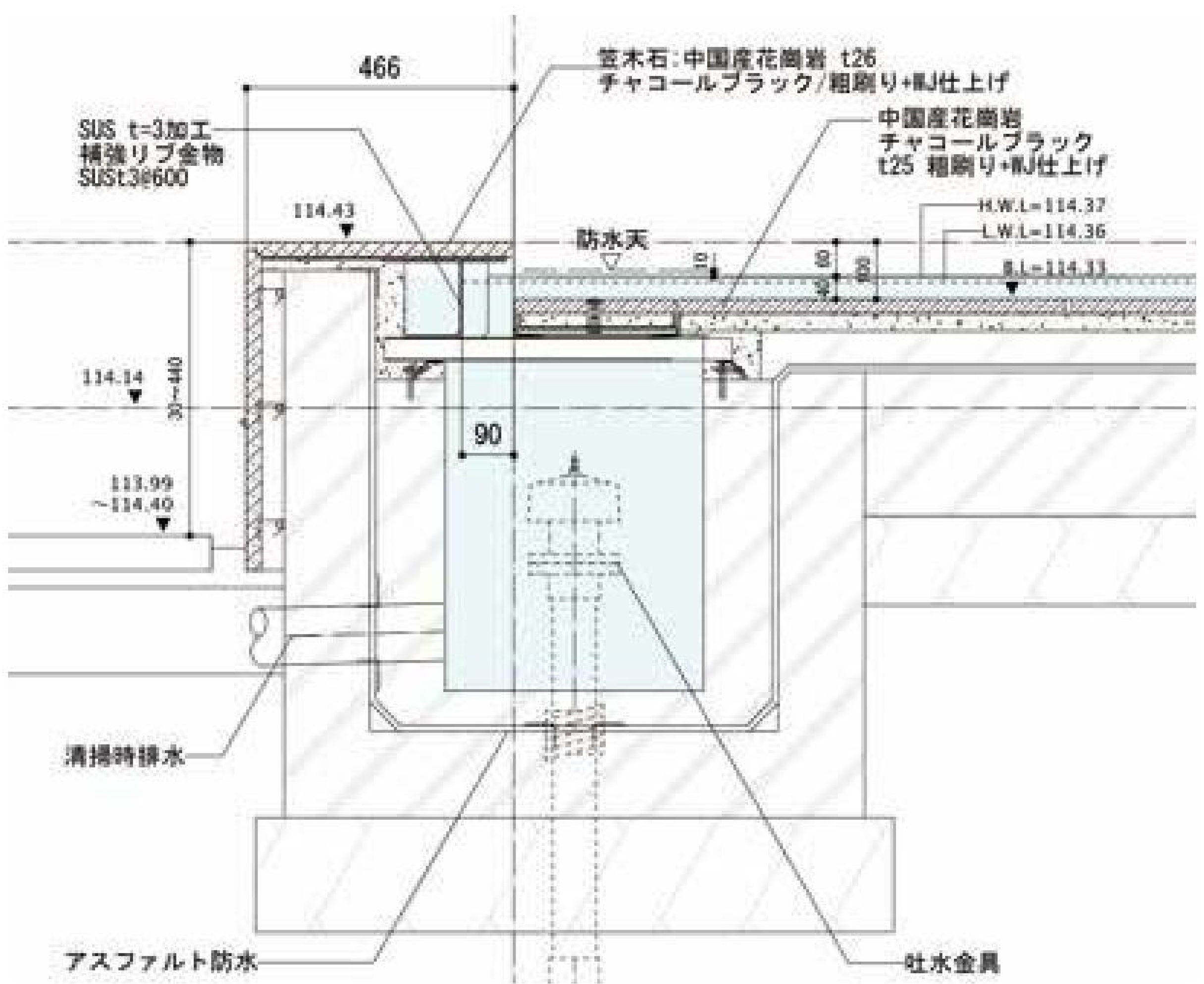
不同沈化に留意した配筋



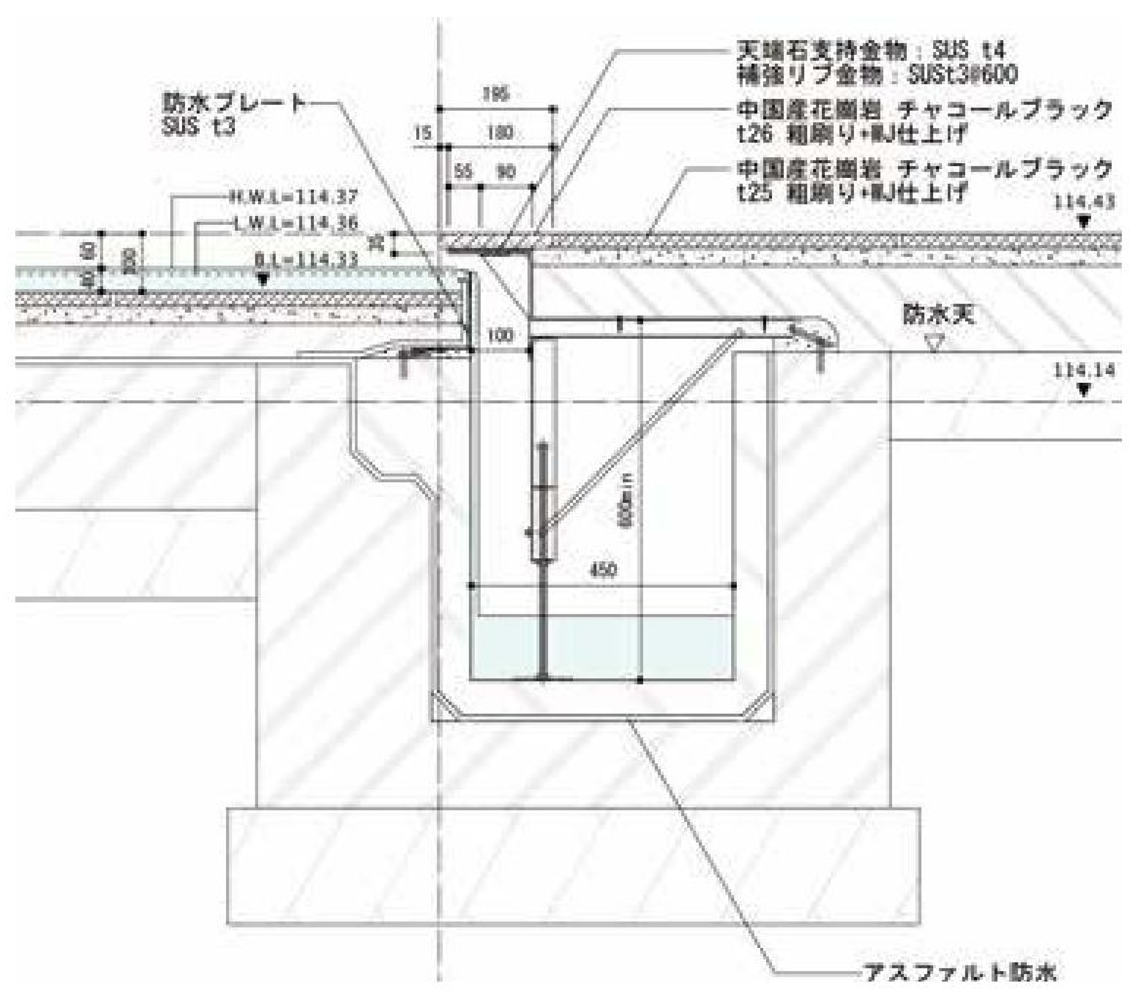
壁泉の現場モックアップによる検討



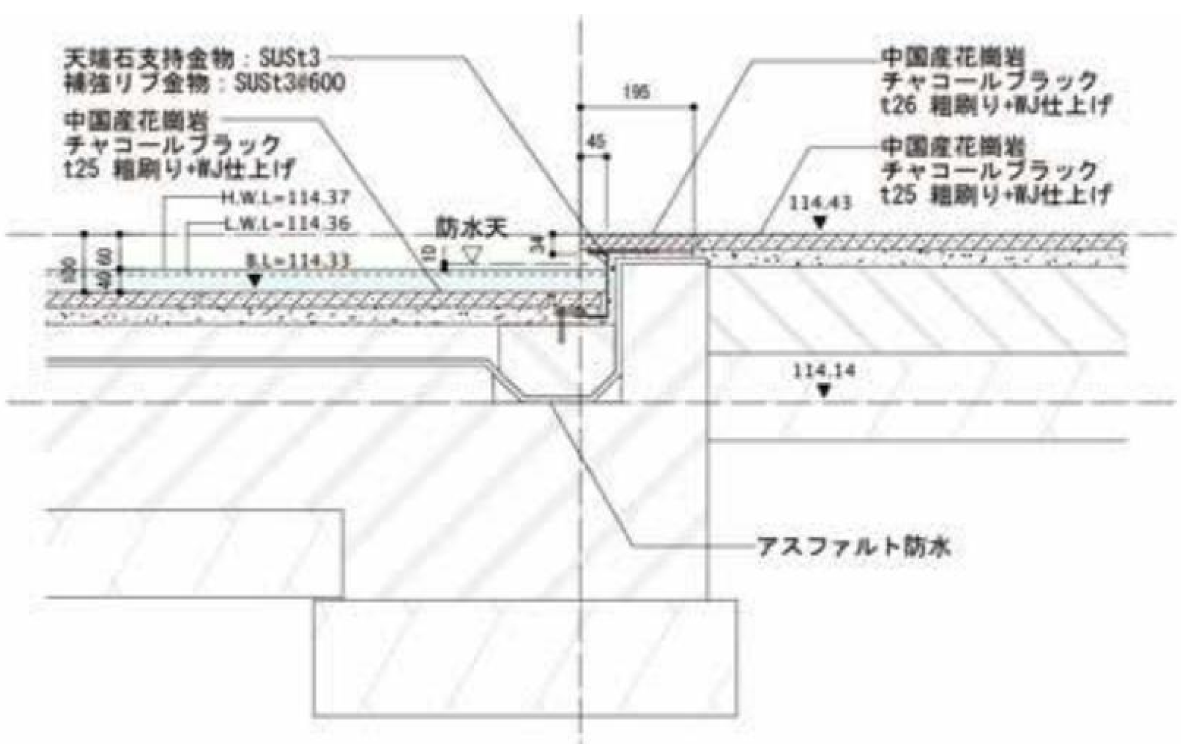
水盤エッジ詳細のスタディー



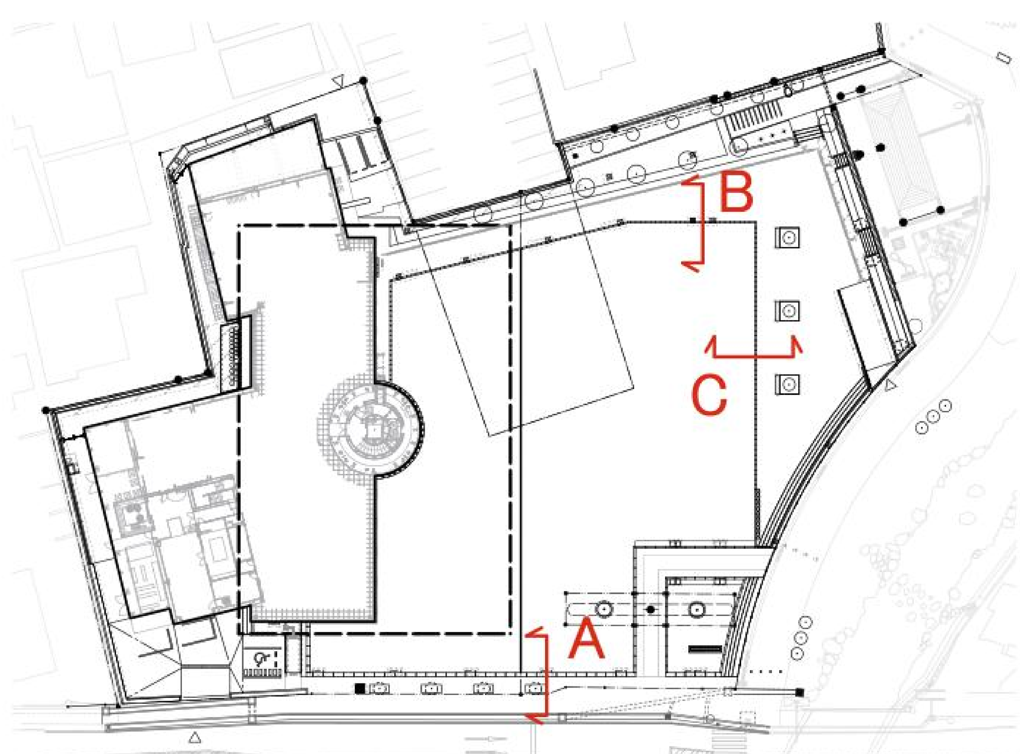
【水盤エッジ－A 詳細図】



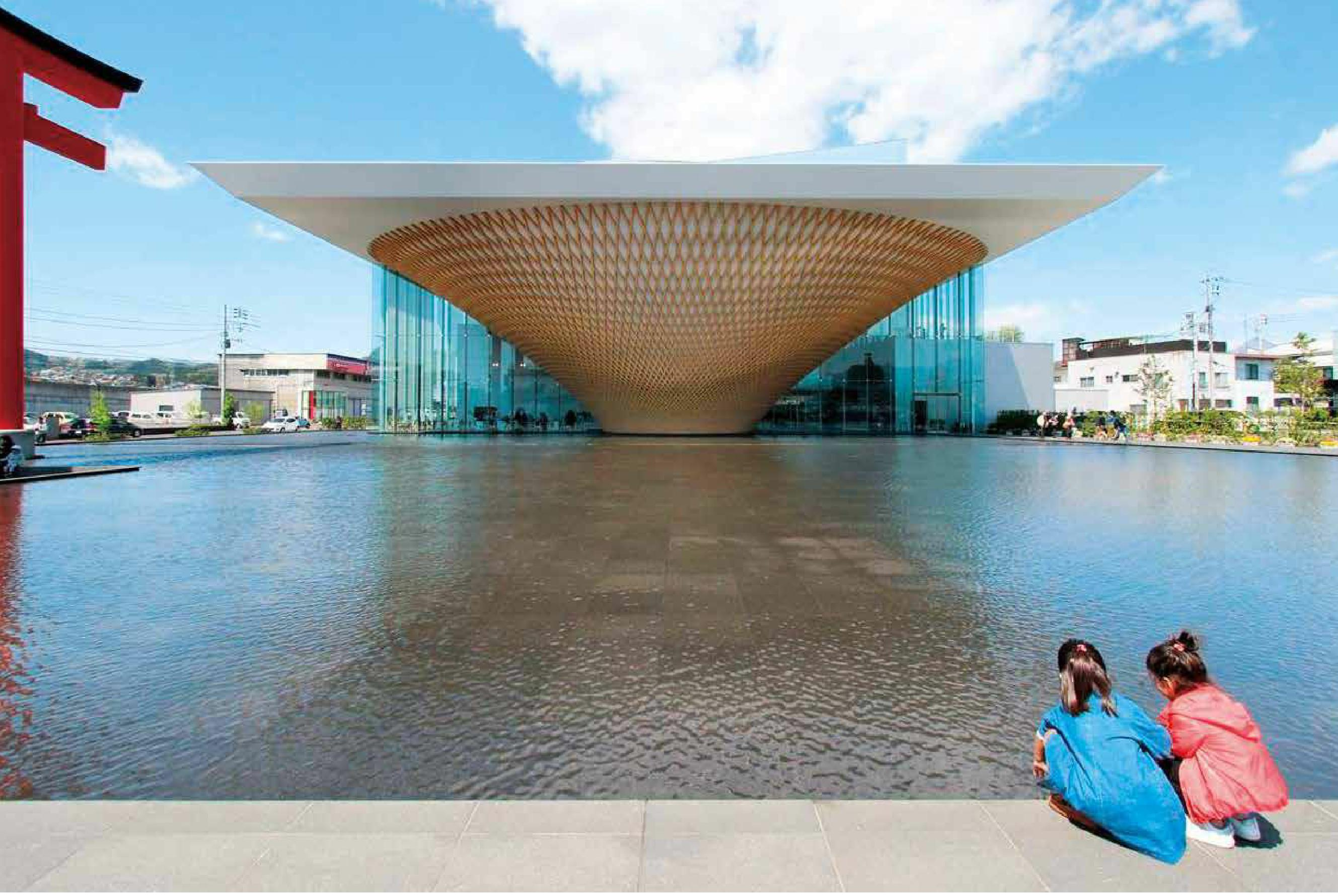
【水盤エッジ－B 詳細図】



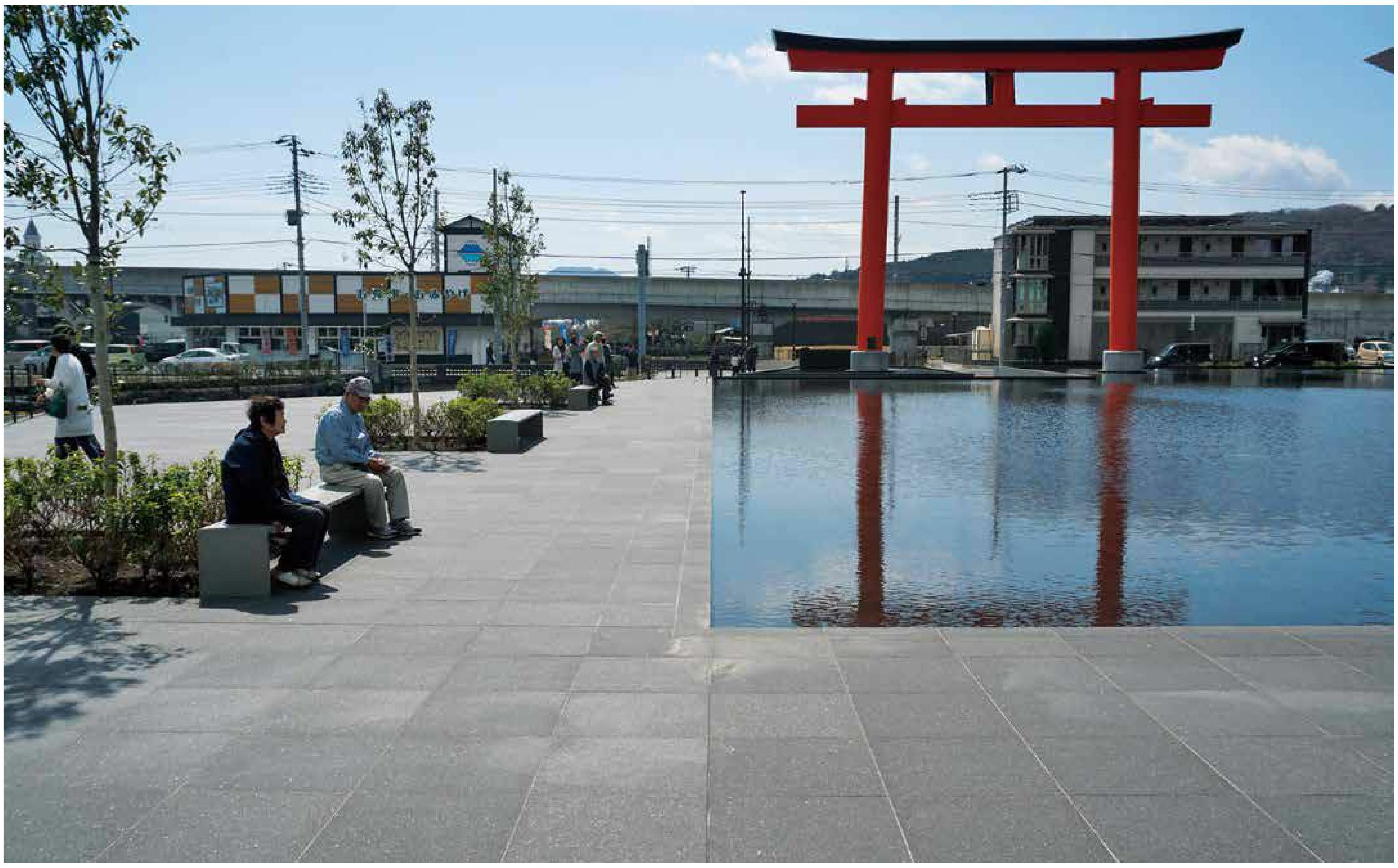
【水盤エッジ－C 詳細図】



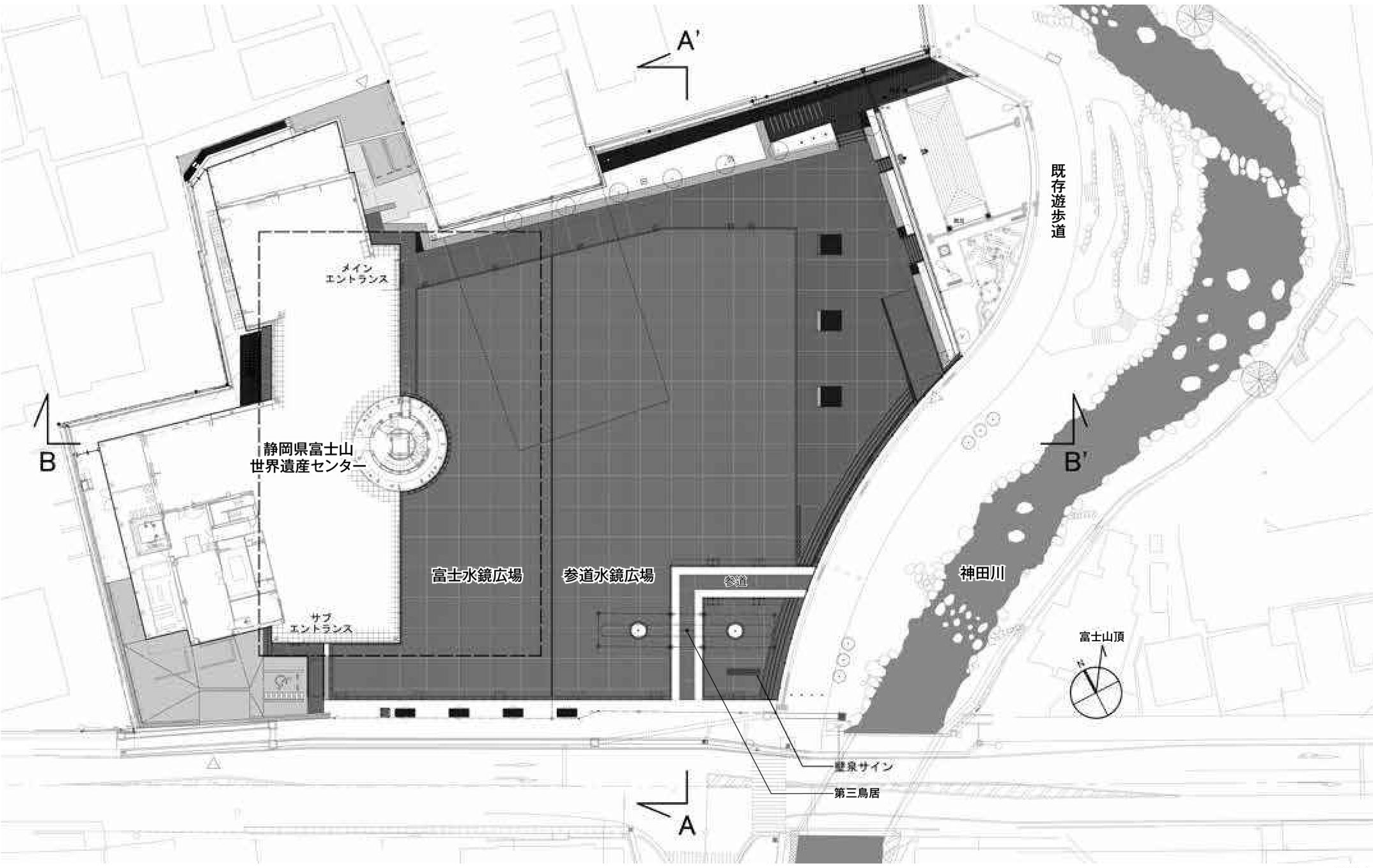
KEY PLAN



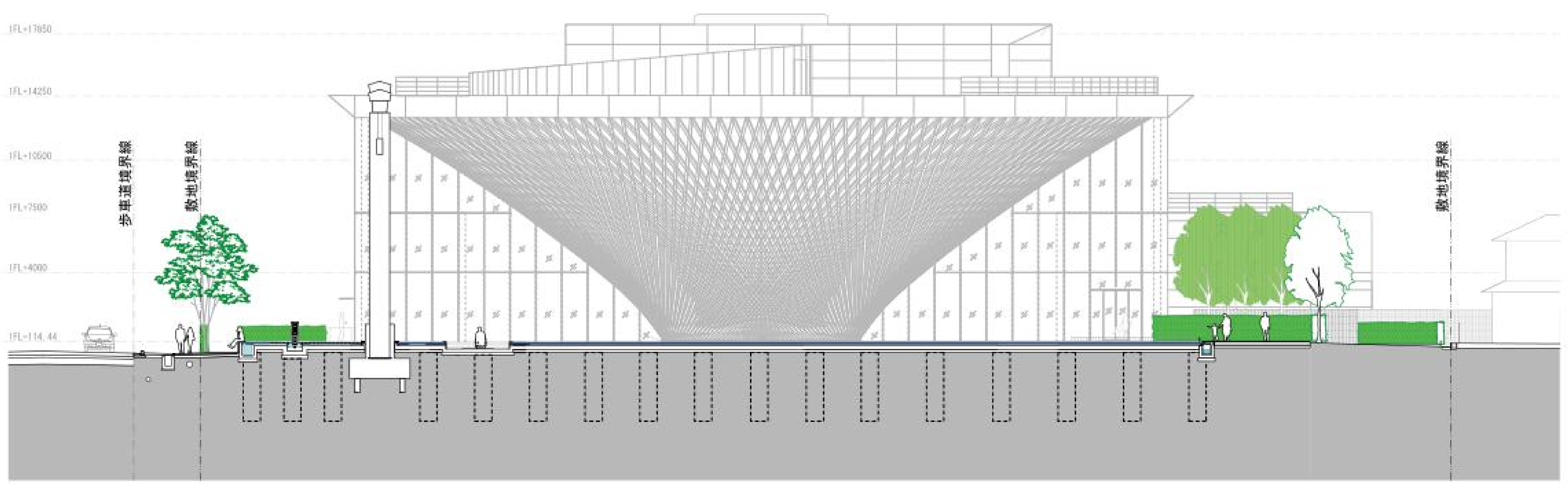
逆さ富士の建築と水鏡



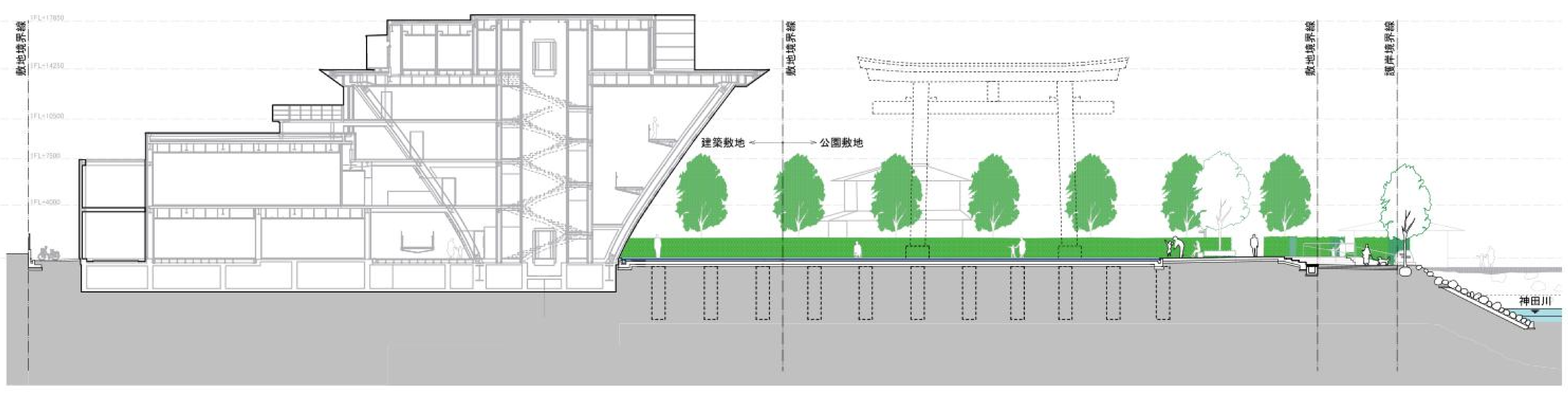
大鳥居と水鏡



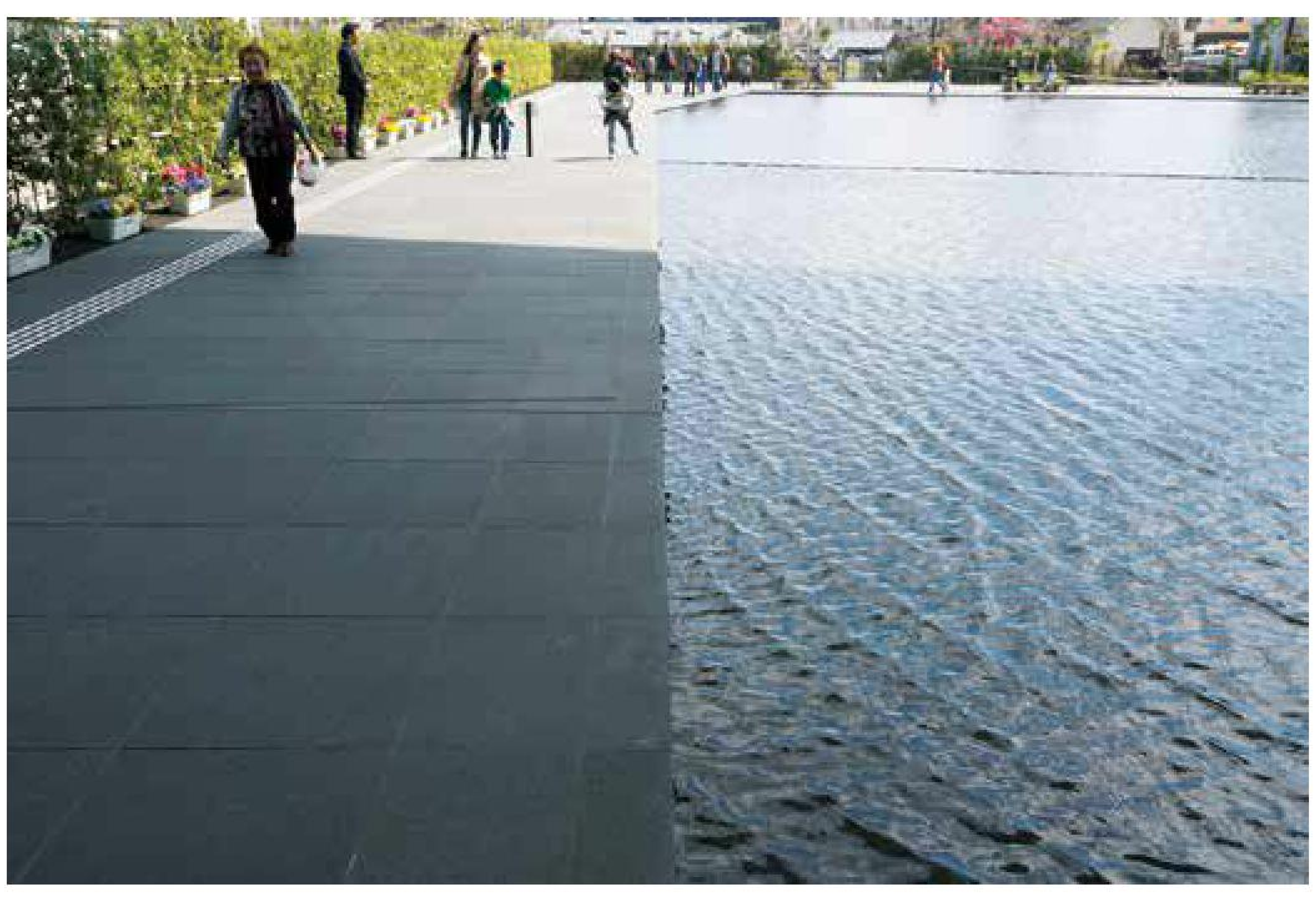
平面図



A－A' 断面図



B－B' 断面図



静岡県富士山世界遺産センター

所在地	静岡県富士宮市宮町5-12
発注者	静岡県（知事／川勝平太）
主要用途	博物館
設計・監理	〈ランドスケープ設計〉オンサイト計画設計事務所（三谷徹／千葉大学、鈴木裕治、丹野麗子、須貝敏如、本田亮吾）、〈建築設計〉坂茂建築設計（坂茂、平賀信孝、菅井啓太、矢田康順、坂木渡、田所真、エルナン・コムチャエムリシ＊、小此木祐介＊、渡辺大輔（協力））（＊元所員）、〈照明デザイン〉ライティングプランナーズアソシエーツ（面出薫、窪田麻理、矢野基世、本多由実）
施　工	佐藤工業
仕　様	舗装、水盤／中国産花崗岩 チャコールブラック（花国技建）、水盤エッジ金物／SUS カチオン電着塗装（第一機材）
規　模	敷地面積6,086.70㎡　建築面積2,030.90㎡
竣　工	2017年11月
植　栽	アラカシ、スダジイ、イヌシデ、キンジョウギョクチク、スソノザクラ、フジザクラ、モチノキ、シラカシなど

がん研有明病院
「庭園いろどりプロジェクト」
東京都江東区

デザイン設計＝東光園緑化株式会社＋有限会社グランツ
写真＝牛尾幹太、髙松智明*
資料提供＝東光園緑化株式会社、有限会社グランツ

The Cancer Institute Hospital Of JFCR
"Garden Irodori Project"
Koto-ku, Tokyo

Design by Tokoen Ryokuka Co., Ltd. + GRANTS INC.
Photos by Kanta Ushio, Tomoaki Takamatsu*
Material Provided by Tokoen Ryokuka Co., Ltd.、GRANTS INC.





庭園イメージスケッチ（左／庭園2、右／庭園1）

「庭園いろどりプロジェクト」チーム発足

がん研有明病院「庭園いろどりプロジェクト」チームは、病院棟の屋上庭園を大規模リニューアルしました。

プロジェクトのきっかけは当院で治療を受けられた患者さんのお嬢様である中村友里也さんからの一通のメールでした。内容は、ご自身が主催するランニングイベントで募った寄付を「患者さんやそのご家族が笑顔になれるような温かい場作りに充てて欲しい」というものでした。

「がん治療中に患者さんが抱える痛みや辛さを少しでも和らげられるよう、心安らぐ時間を過ごせるよう、ご支援をどう活かすのが良いだろうか」と、スタッフが議論を重ねる中で閃いたのが、「病院棟の屋上庭園を色とりどりの花で彩られる、笑顔溢れる空間に生まれ変わらせよう！」というアイデアです。このアイデアを後押ししてくださった清水多嘉子看護部長（以下清水看護部長）にリーダーをお願いし、プロジェクトチームが発足しました。また、折しも当院募金課では、個人寄付獲得の拡大方法としてクラウドファンディングの導入を検討していたこともあり、そのテーマとして、当プロジェクトを取り扱うこととしました。

クラウドファンディングは、2018年1月30日～3月16日までの45日間実施しました。当院にとって、クラウドファンディングは初めての挑戦であり一抹の不安もありましたが、開始直後より温かいメッセージとともに多くのご支援が集まり、強く励まされることとなりました。結果として、目標を大きく上回る355名の方々より7,883,000円のご支援をいただきました。当初の計画は目標金額300万円で、緑一色の樹木優先の庭園内に、季節を華やかに感じる"シーズンフラワープランター"と患者さんを中心にご家族が語らい合うことのできる"テーブルセット"を設置し、その後1年に数回、花の植え替えをするというものでした。しかし、たくさんのご支援が集まり、目標金額を大幅に上回るかたちでクリアすることができたため、当初の計画よりもより魅力的な庭園への改修を目指すこととなりました。





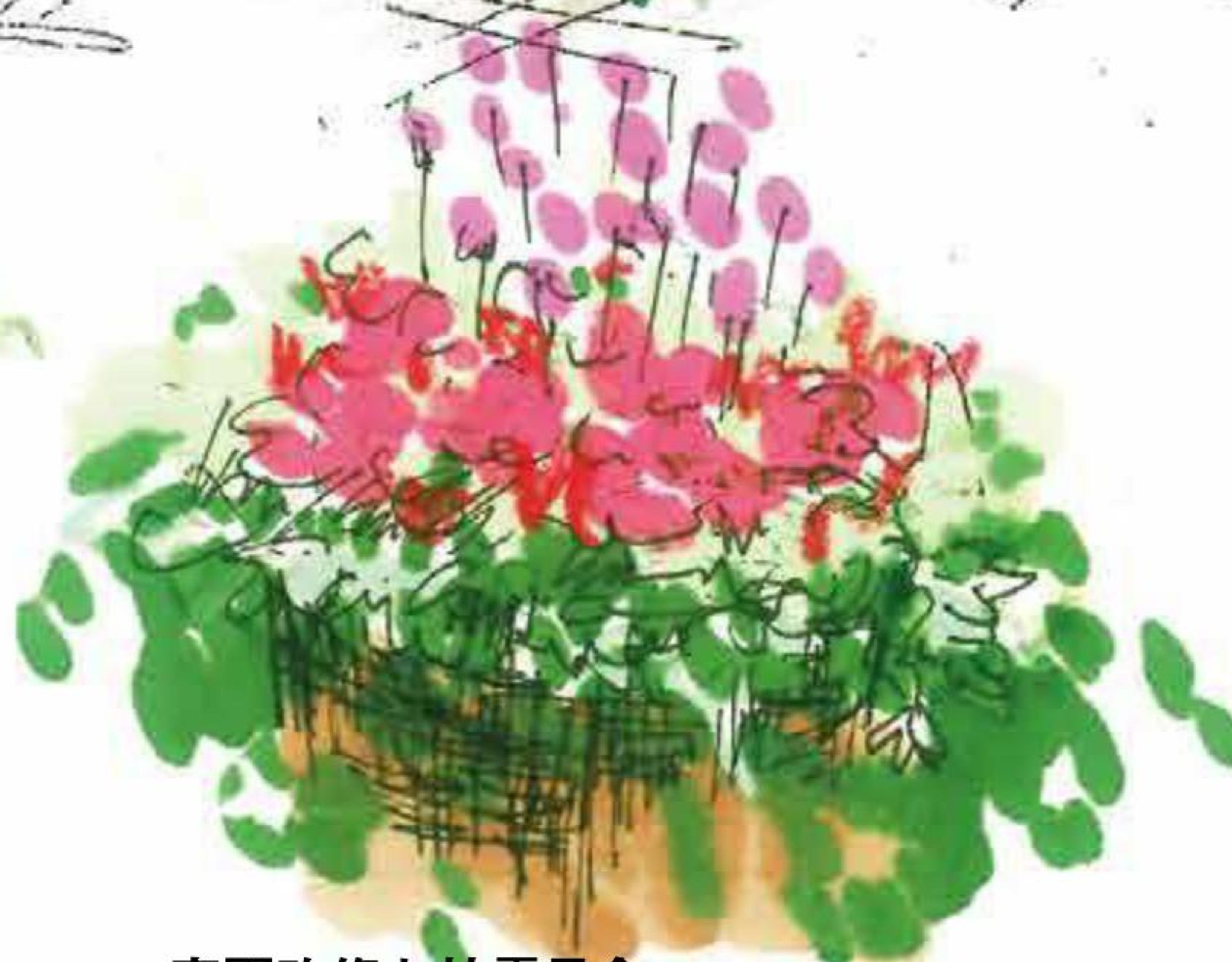


左上・左下／チャリティランニングイベントの様子（サンディエゴ）。右／中村友里也さんたちが立ち上げているランニングクラブのウェブサイト（https://kenrokovrc.wixsite.com/home）





寄付者銘板



庭園改修お披露目会

2018年7月9日に庭園改修お披露目会が開催され、猛暑の中、クラウドファンディング募金寄付者の方々をご招待し盛大に催すことができました。

当院理事長の挨拶の後に、今回の庭園改修のシンボルとなったパーゴラの前でテープカット、感謝盾の贈呈、植樹式が行われ、「庭園いろどりプロジェクト」リーダーの清水看護部長からの御礼の挨拶で締めるかたちで無事に式典が終了しました。ご参加いただいた皆様からは美しく仕上がった東側庭園やお花の中の散歩が楽しくなるウッドデッキをあしらえた西側庭園に感嘆の声が上がり、また、『寄付者銘板』に顕彰されたご自身のお名前をご覧いただくなど大変喜んで頂きました。

嬉しいことに、「がんと闘う患者さんとご家族のために、笑顔溢れる空間を！」というテーマのもと進められた本プロジェクトチームに対しても、予想以上の出来栄えに沢山のお褒めの言葉を頂きました。

その後、今回の庭園改修のきっかけとなった中村友里也さんとお母様より、がん研有明病院屋上庭園での亡きお父様との想い出、そしてご列席の皆様に向けて庭園改修が実現できた事に対する御礼の言葉が贈られました。

皆様の温かいご支援と想いが詰まったこの屋上庭園は、彩り豊かな花に囲まれて、くつろげるスペースを確保すること。また、リハビリの為のお散歩が楽しくできるよう、デッキや植え込みなどを工夫し回遊スペースを設けることに主眼を置き改修を行いました。その結果、がんと闘う患者さんのみならず、そのご家族のお気持ちが少しでも晴れやかになるような庭園となりました。そして、生まれ変わった屋上庭園が一過性に終わることなくいつまでも素敵な庭園であり続けるには、皆さんのご協力が不可欠です。『庭園いろどりプロジェクト』はこれからも続きます。今後とも応援の程、よろしくお願いいたします。

がん研有明病院『庭園いろどりプロジェクト』チーム





上／お披露目会テープカットの様子。下／がん研究会「庭園いろどりプロジェクト」チーム

庭園への概念

庭園は人がいて庭園となる。
人が存在しなければ庭園にはならない。
自然に手を加えることで庭園となる。
景色を感じ、風景を取りいれることで庭園となる。

人が場・事・生、時と混ざり合ってできている空間が庭園であると思う。

人＝感じる・考える・つくる・過ごす
場＝その場・地域・環境
事＝もの・目的・出来事
生＝植物・生長・成長

場（環境）をつくり、活動（生育）していくのは私たち人や植物である。そして人や植物が活動していくために、その場が心地良い環境でなくてはならない。

私たちは意識よりも前の感覚の中で自然と、美しさや、やさしさを感じとっているのではないか。それは日常の積み重ねによって、日々の生活や仕事、交流の中で少しずつ生まれてくるものであり、さらに成長していくものである。

数々ある古来の庭園は時代を超えて植物が生長し続け、本来の目的から使用用途が変化するものやしないものがあり、そこに人が何らかのかたちで関わり続けている。
庭園が美しいのは、つくられた時から現在に至るまでの時間のなかで様々なことが加わり、見ためや印象は同じでも実際には常に変化し続けているからである。
変化とは継続であり、維持であり、私たちの生活のなかにおいて重要な要素のひとつである。

庭園本来の美しさには時の流れ、植物の生長、植物と人に合った環境づくりのための取り組みが不可欠であり、永遠と繋がっていくものである。

庭園を美しく維持していくことは、変化しつづけることが大切だと考えている。

本庭園は眺めるだけでなく、感じる庭園としてもつくられている。
植物の生長、美しさ、季節を感じ、維持管理、そして、変化することで見る、眺めるから、さらに近づき、触れあい、感じられる。そういった過ごしやすい場になれば良いと思う。

文＝髙松智明（有限会社グランツ）





庭園1：全景



庭園1：パーゴラから見た風景＊



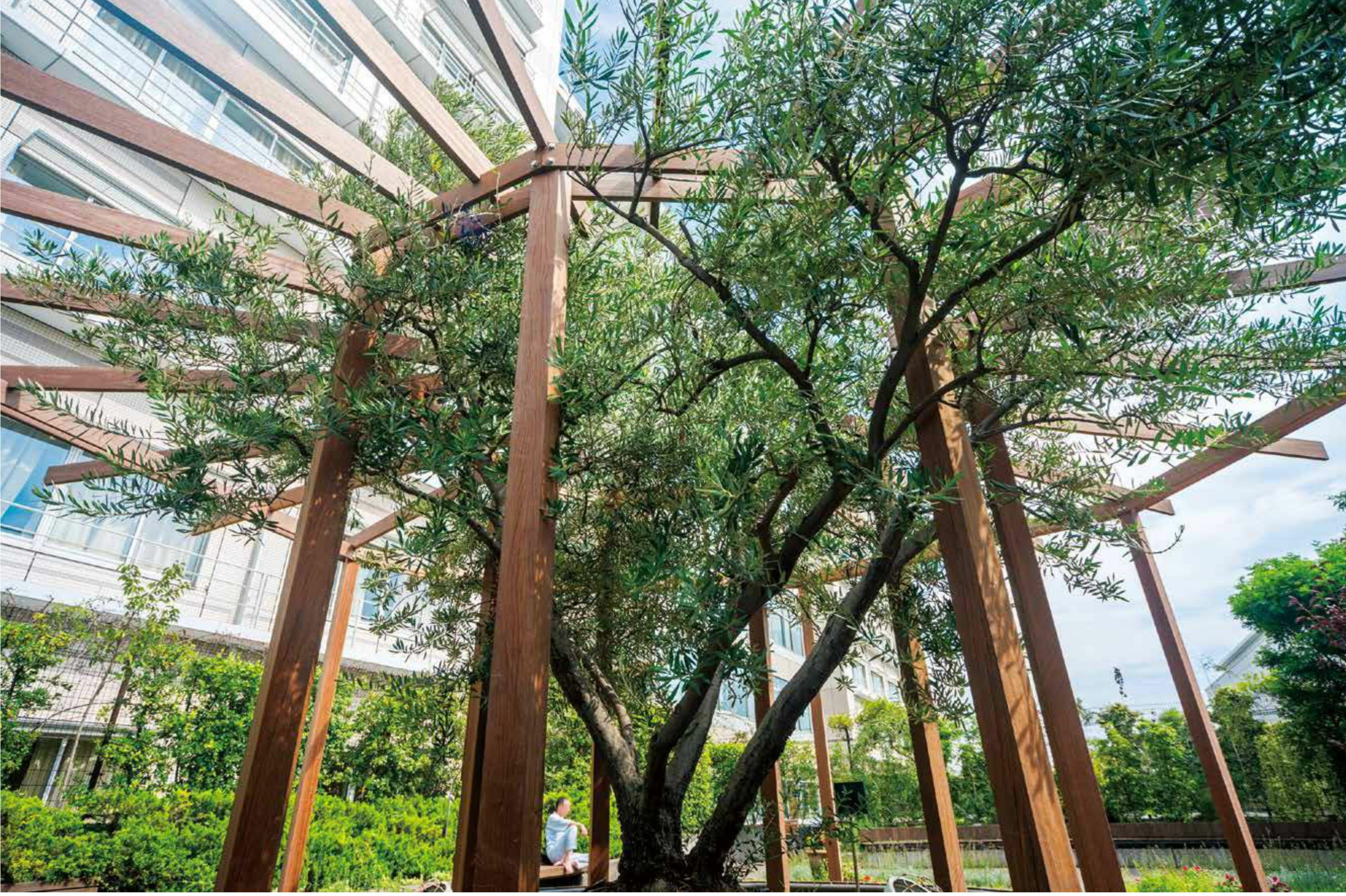
庭園1：施工前＊



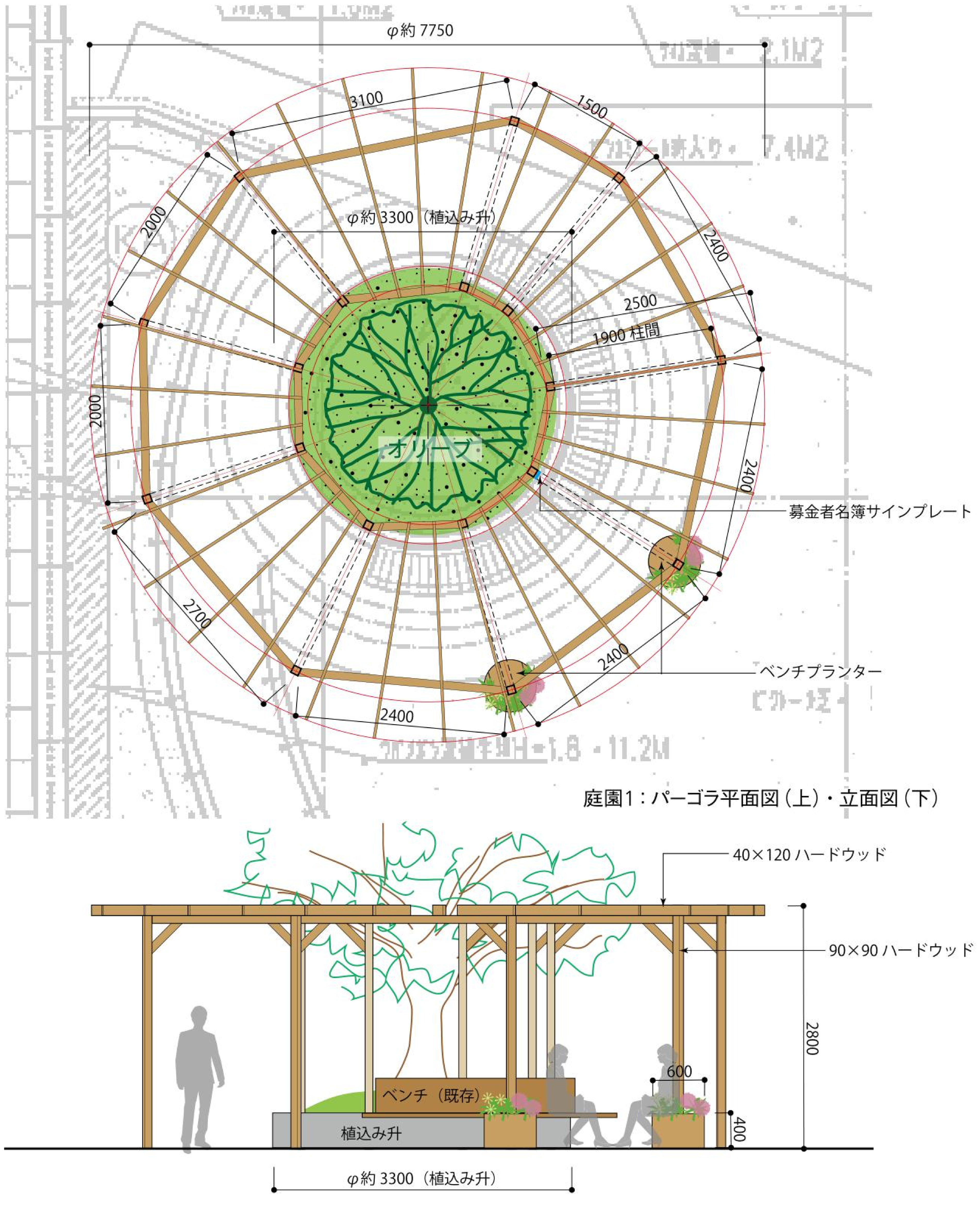
ベンチプランター（庭園1）：既存のベンチと向かい合って使用することができる



庭園1：既存アール型ベンチの背景を四季を彩る植栽へ



庭園1：パーゴラを見上げる



庭園1：パーゴラ平面図（上）・立面図（下）



庭園1：パーゴラでおしゃべりをする



庭園2：全景



庭園2：施工前＊

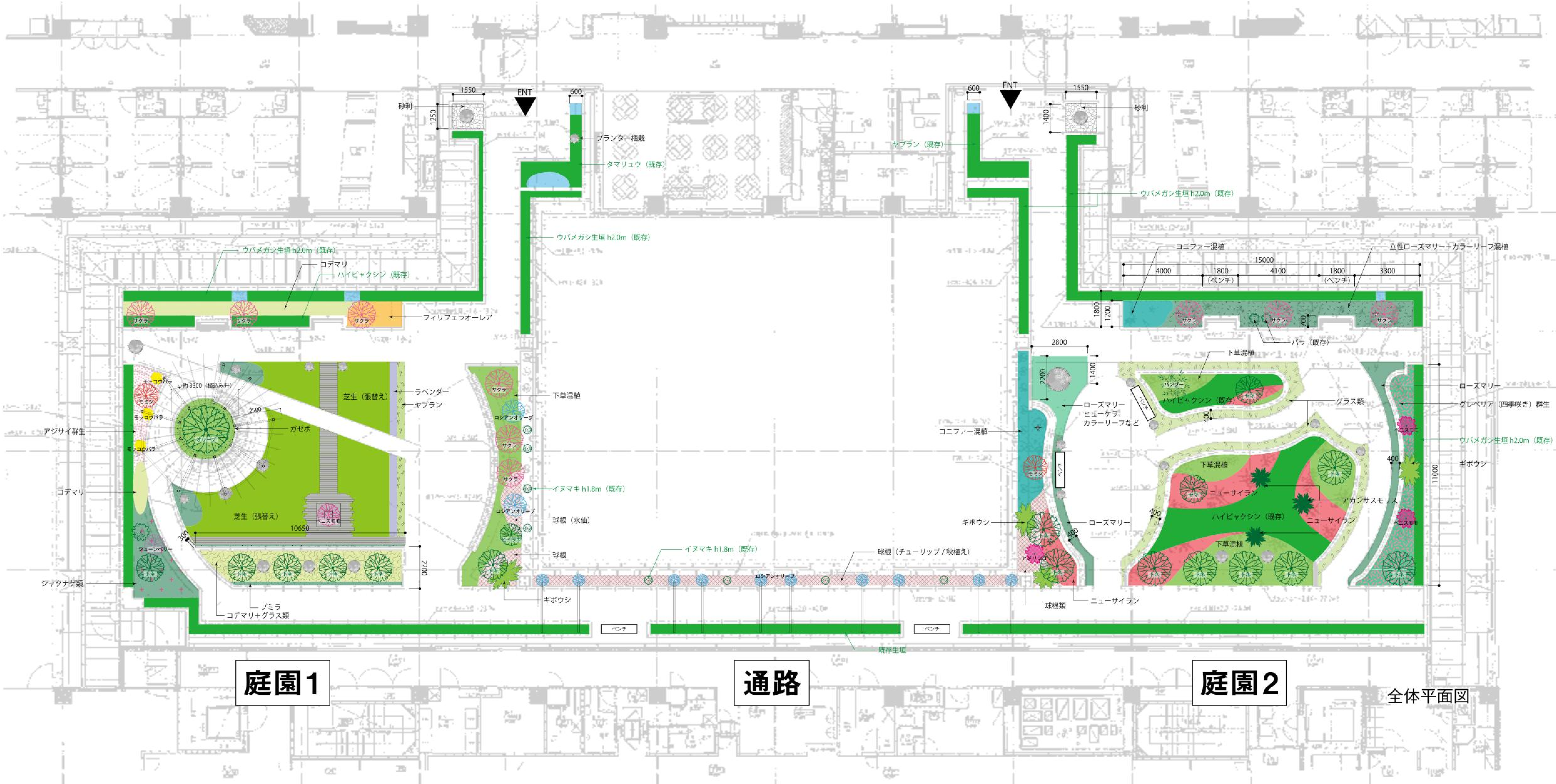


庭園2：エントランス





メンテナンスをする（庭園2）：
左／通路。右／グラスエリア



全体平面図

プランターを置く事で視線を動かすポイントをつくる。
プランター部には季節の花を植え、季節感を演出し、より庭と人との関係性を感じることができる。


ベンチプランター


ベンチプランター＆デッキカウンター


ハイプランター




俯瞰写真：
上／庭園1
下／庭園2


庭園1と2をつなぐ通路。目線近くに球根類を植え、頭上にはアーチ状の並木道をつくり、木漏れ日豊かな導線を計画中

がん研有明病院 屋上庭園改修

所在地	東京都江東区有明 3-8-31
事業者	公益財団法人 がん研究会
用　途	屋上庭園
設　計	東光園緑化株式会社 有限会社グランツ（髙松智明）
設計協力	jnk design（田中順子）
工　事	東光園緑化株式会社 有限会社グランツ
管　理	東光園緑化株式会社
工　期	2018 年 6 月 2 日～ 2018 年 7 月 9 日
竣　工	2018 年 7 月
規　模	敷地面積／ 20,000㎡、建築面積／ 9,203㎡
協　力	KiKORi（本田正明） コバ造（小林進郎） Botánico8（井澤佐恵子）



髙松智明 [Tomoaki Takamatsu]
ランドスケープデザイナー
有限会社グランツ代表
1969年神奈川県生まれ。株式会社東光園、現：株式会社グリーン・ワイズを経て、2005年に有限会社グランツを設立。

プラウドシティ塚口
兵庫県尼崎市

ランドスケープデザイン＝株式会社長谷工コーポレーション
文＝佐々木優（長谷工コーポレーション）
写真＝野村不動産株式会社、株式会社長谷工コーポレーション

PROUD CITY TSUKAGUCHI
Amagasaki-city, Hyogo

Landscape design by HASEKO Corporation
Text by Masaru Sasaki [HASEKO Corporation]
Photo by NOMURA REAL ESTATE DEVELOPMENT Co.,Ltd. ,HASEKO Corporation



森と暮らす歓びを、ずっと住みたくなる街

JR塚口駅前に新しい街が誕生する。利便性の高い駅前立地では約8万㎡もの広さがある場所を見つけることは大変難しいことである。我々はその希少な場所を、子どもたちも高齢者もいつまでも暮らしやすい、緑溢れる森を中心とした街づくりを目指した。

「ZUTTO CITY」は総開発面積約8.4ha、最寄りのJR宝塚線「塚口」駅からJR「大阪」駅まで電車で約10分という利便性の高い立地に多機能で高い利便性を有する、関西最大級となる駅前複合開発プロジェクト（都市型コンパクトタウン）である。

開発区域内には、多彩な商業施設を集積したJR塚口駅ビル「VIERRA塚口」、スーパーやクリニックなどで構成される「ミリオンタウン塚口」、分譲戸建て「プラウドシーズン塚口」（71戸）などの整備が完了し、多機能で高い利便性を有する複合再開発であり、「プラウドシティ塚口」は、その中心に位置する。





ZUTTO CITYを俯瞰する



駅前ロータリーからプラウドシティ塚口を望む。写真左下がロータリー

木陰をつくる樹木による街の骨格づくり

JRの線路沿いのサクラは特に以前から地域の人々に親しまれており、既存樹を活用しつつソメイヨシノを列植し街の記憶の継承を図った。新たに整備した駅前ロータリーのシンボルツリーには尼崎市の木であるハナミズキ、街のイメージを決定するメインの道路沿いには、駅ビル・スーパー・提供公園も含めて木陰をつくるのにふさわしいケヤキを採用し、木漏れ日が心地良い空間とした。中央部交差点、ロータリー東側のマンション用地内車寄せのシンボル、東西メイン道路東側突き当りの街角には、常緑樹でシンボリックなセンペルセコイアを計画。阪急神戸線は沿線に桜が多いこともあり、ヤマザクラ・サトザクラ等、樹種を変え北側沿道の魅力付けを図った。東側沿道は他の道路沿いと比べ緑地の奥行きが少ないこともあり、常緑樹のシマトネリコを列植することにより緑量を確保した。



「ZUTTO CITY」平面図



新たに整備した駅前ロータリー。JR塚口駅側から見る


道路両側にケヤキを植えたメインストリート(南北道路)。右の建物はミリオンタウン塚口


移植した桜の並木


移植した桜と新たに植えた桜による並木



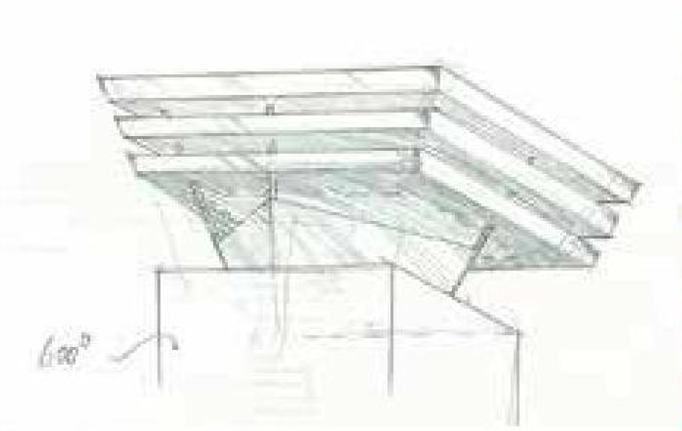
木陰が心地よいメインストリート（東西道路）

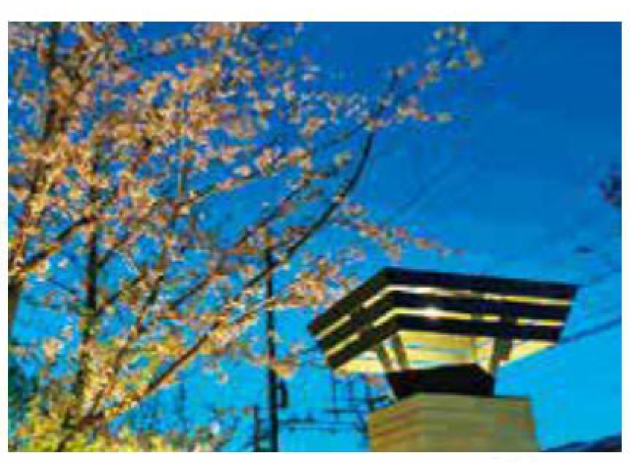
統一感のある景観形成

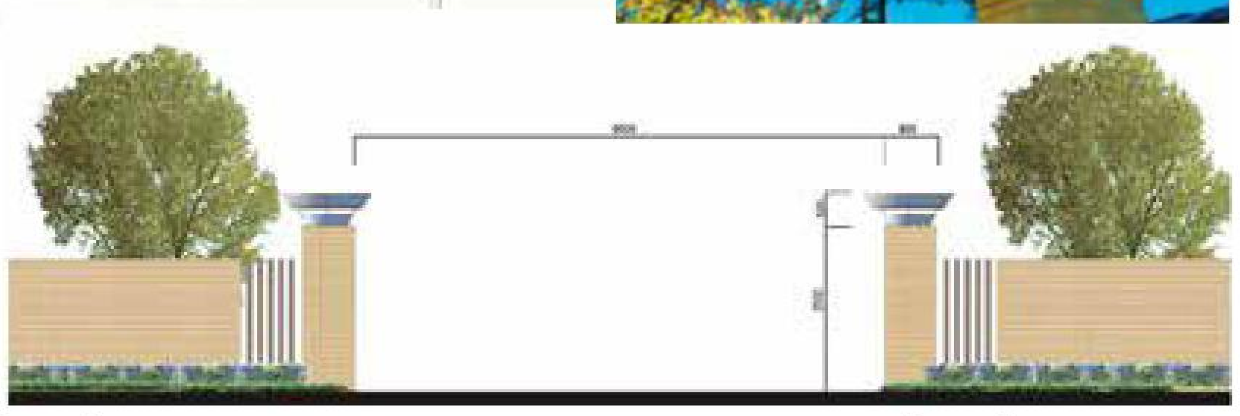
マンション及び戸建エリアの各出入口にはゲート及びデザインウォールを設置し、街の共通イメージを形成するとともにプライベート空間との境界の明示とした。また、ゲート頂部はライトアップさせ、夜間の視認性をさらに高めた。道路に面する遊歩道の植込みの形状は緩やかなカーブを描いた線形にて統一。舗装パターンやカラーについても各街区共通のデザインを提案し統一を図った。各敷地のコーナー部分に共通の御影石の立上りを設置し街の領域を明確化。立上りはベンチとしても機能させ、街角の賑わいを演出した。



北側阪急電車沿いの遊歩道（桜並木）







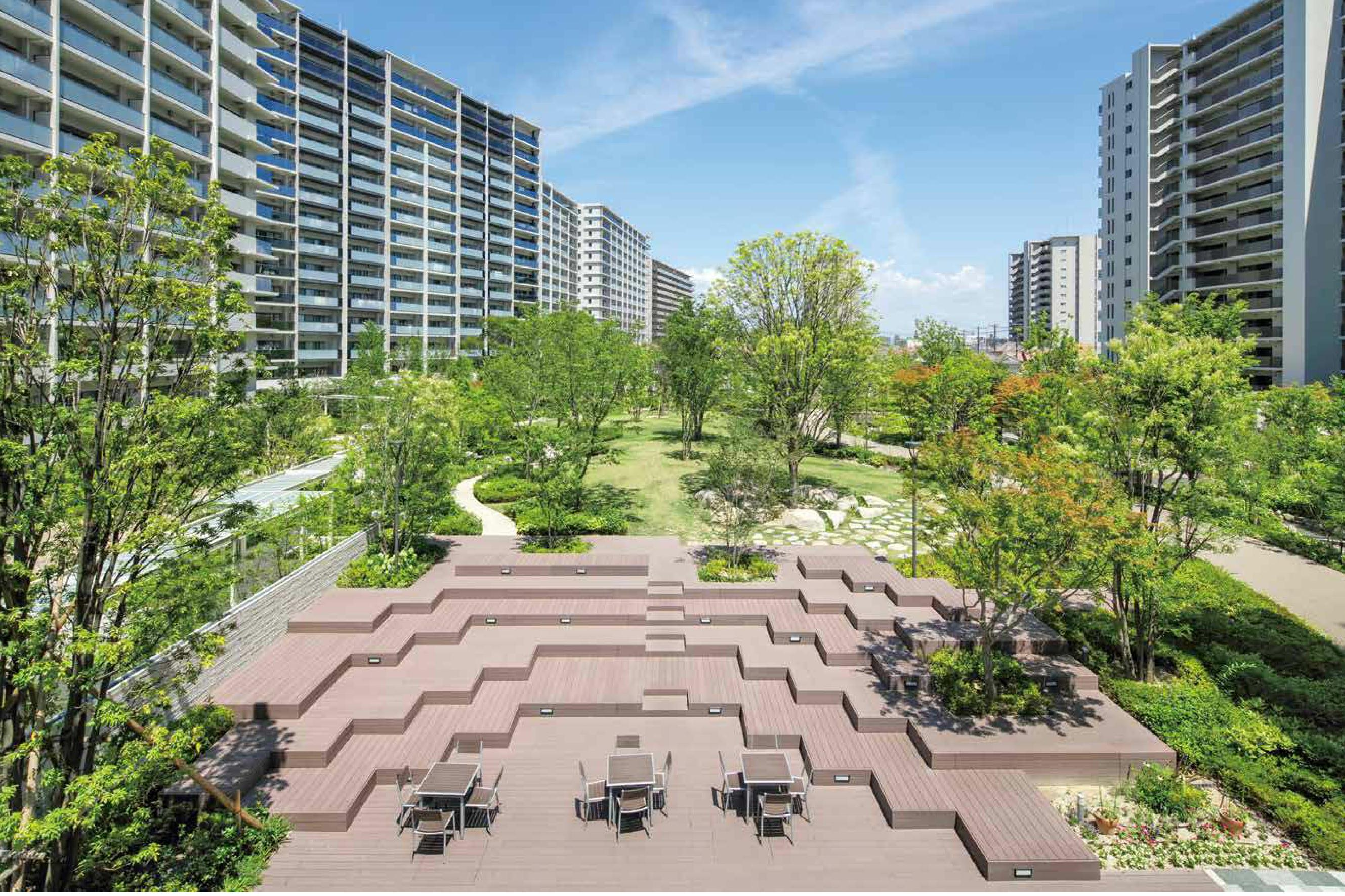
【上段】ゲートイメージスケッチとゲート頂部のライトアップ。【下段】ゲート立面図







【左】東側の並木とサブゲート。【右上】メインストリート（東西道路）のケヤキ並木とゲート。【右下】戸建エリア入口


階段状のデッキテラス

みんなの森

街の真ん中には、みんなが集まれる森『みんなの森』を配置。マンション及び戸建の居住者のみが利用できるセキュリティ内の安全で安心な空間とした。約8,000㎡もの大きな森で、「本当に駅前？」と聞きたくなるような別世界が広がる。大きなピロティのある共用棟に面しては階段状のデッキテラスを配置し、様々なイベントに対応できる。森には回廊も通しており、雨の時でもJR塚口駅から傘を差さずに自宅へ辿り着くことが可能である。森は緩やかな勾配のある仕掛けいっぱいの楽しい空間に設えている。
植栽は、春はサクラをはじめ、市の花であるハナミズキ・コブシ等が花を咲かせ、夏にはサルスベリ・アガパンサス・斑入りヤブラン、秋にはイロハモミジ・ハウチワカエデ・ヤマボウシ等の紅葉が、冬にはクリスマスローズ・ツワブキ等が花を咲かせ四季を通して人々を癒す。また森にはバーベキューのできる広場、足湯、みんなの森を見渡せる見晴台、丘の上の広場などがあり、それぞれが園路で結ばれ、子供達は森を元気に駆け回ることができる。その他、ちょっとおかしなベンチ、自然石や円形の石、平板など舗装にもこだわり、歩くのも楽しい空間となっている。


みんなの森シンボルツリー



せせらぎと桟橋。せせらぎは夏にはクールスポットとなり水遊びもできる





【上】共用棟ピロティからデッキテラスを望む。【下】森の中の足湯



せせらぎと芝生広場



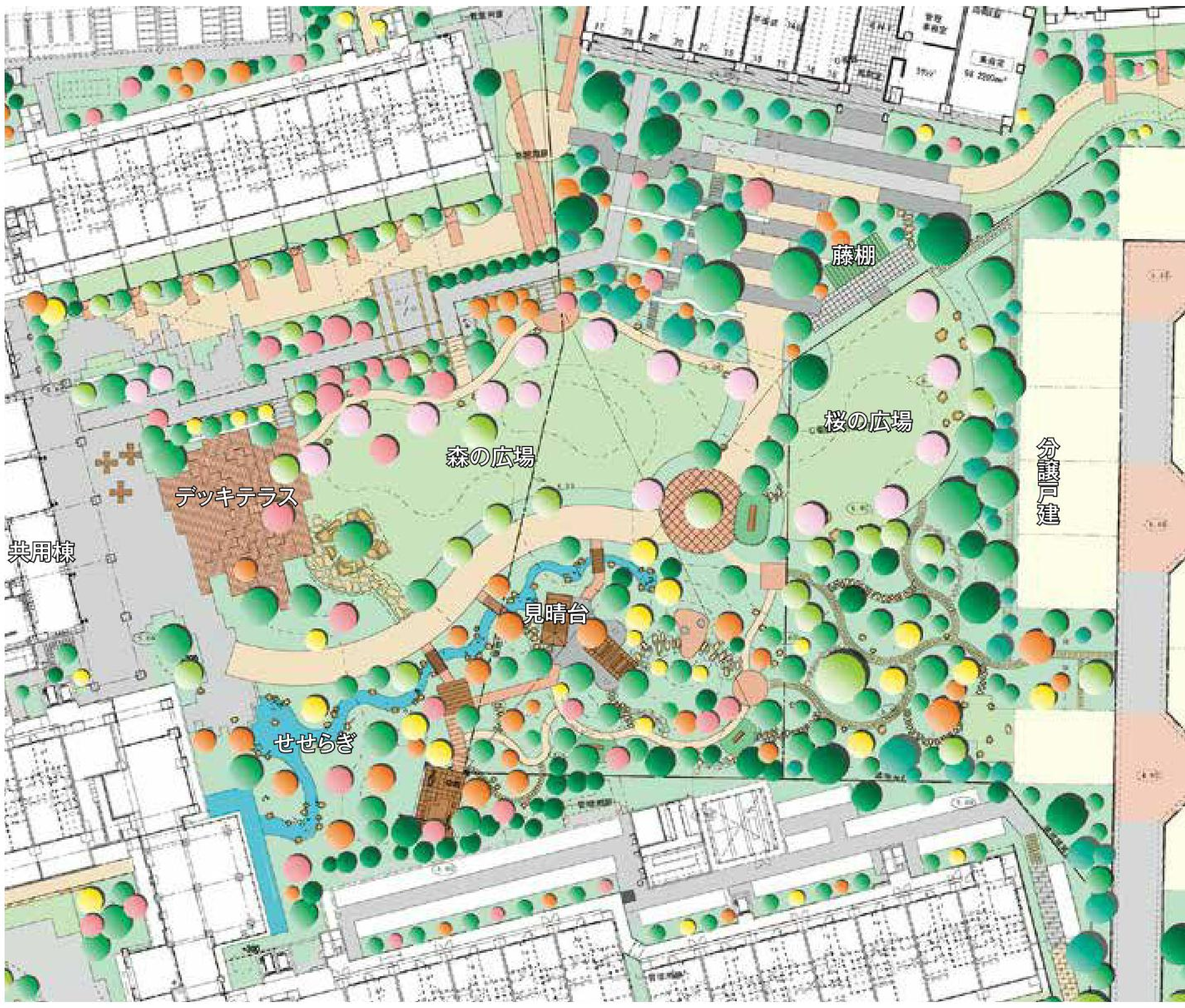
【ベンチアラカルト】左から「大きなベンチ」、「ラブラブベンチ」、「だんだんベンチ」



みんなの森遊歩道







みんなの森平面図

【上】森の広場
【下】起伏のある遊歩道

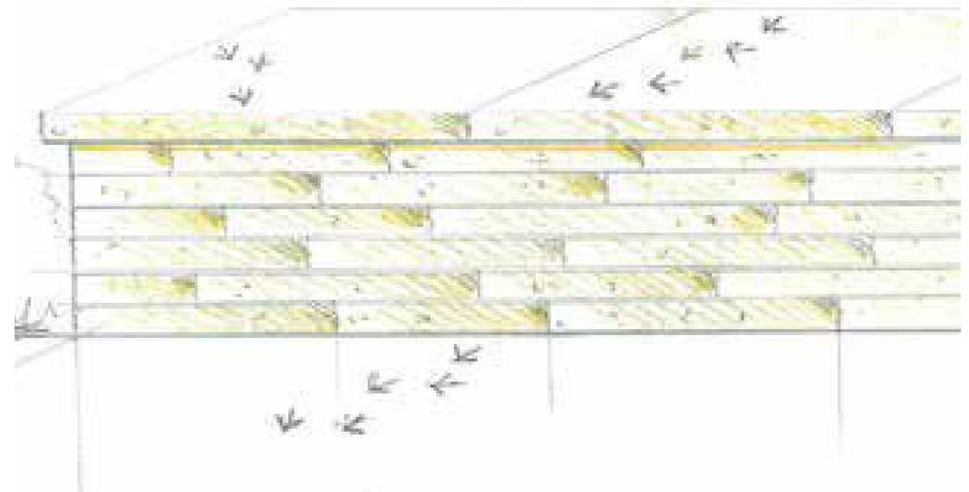
永く愛されてきた「森永タウン」

この地は約100年つづいた森永製菓工場跡地。周囲に甘い匂いを漂わせていた森永製菓のお菓子工場があり、春の花見や夏の盆踊りなど、広大な敷地は地元の人たちの交流の場としても親しまれてきた。また敷地内のグラウンドは、少年野球やサッカークラブの少年たちの練習場として利用され、子供たちの成長をずっと見守ってきた。そういった街の歴史を引継ぎ、ずっとずっと笑顔がつづく街となるよう、「森永タウン」ならではのキャラクターをモチーフとし、その面影を至るところに散りばめている。森永製菓の協力を得て、そのシルエットや足跡は本物そのものとなっている。



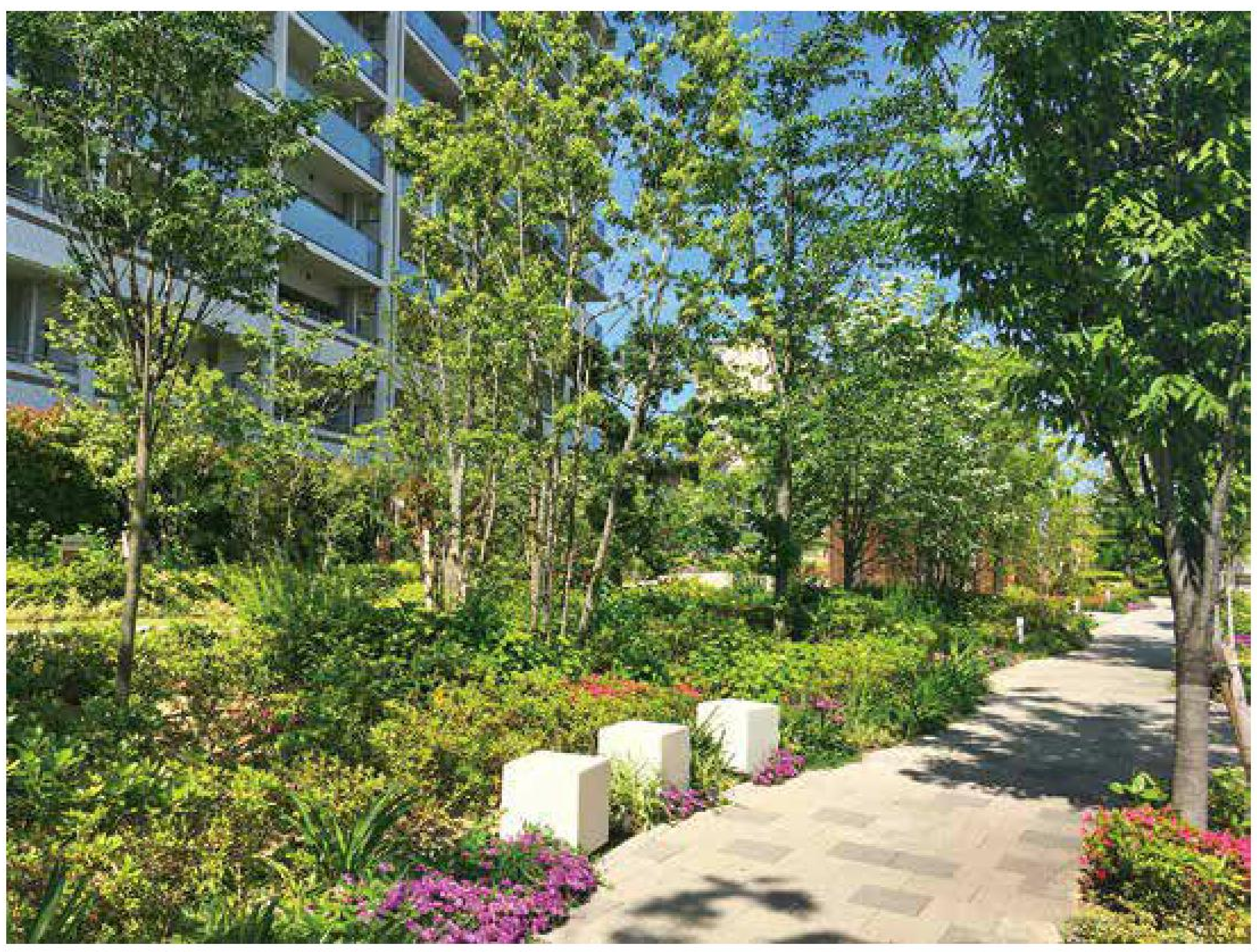














歩道に設置した照明スツールも
夜になるとキョロが浮かび上がる







プラウドシティ塚口

所在地　兵庫県尼崎市上坂部1丁目
事業者　野村不動産株式会社、JR西日本不動産開発株式会社、株式会社長谷工コーポレーション
主要用途　共同住宅
設　計　株式会社長谷工コーポレーション
〈ランドスケープ〉佐々木優、〈建築〉美濃部幸治、仮屋健司、〈計画〉中島正平、〈構造〉森脇幸司、〈電気設備〉中島史雄、〈機械設備〉大和啓之、〈監理〉西 孝明、〈外構総合図〉島 智之
施　工　株式会社長谷工コーポレーション
〈総合〉酒井 薫
〈マークフロント所長〉橋本賢司
〈マークフォレスト所長〉東 正道
〈マークスカイ所長〉三宅伸征
施　工　〈造園〉(株)日比谷アメニス、〈外構〉田中工業(株)、〈外構施設〉(株)タイキ、〈オブジェ〉(株)B･プレイス、〈水景施設〉関西トースイ(株)、〈照明〉イグロ電気(株)
竣　工　2018年3月
規　模　敷地面積：マークフロント／ 9,329.66㎡、マークフォレスト／ 23,182.43㎡、マークスカイ／ 14,220.52㎡、総戸数／ 1200戸
植　栽　高木／ソメイヨシノ、ヤマザクラ、ケヤキ、ハナミズキ、コブシ、ヤマボウシ、センペルセコイア、シマトネリコ、シラカシ、ナナミノキなど　中低木／サツキツツジ、ヒラドツツジ、フイリアオキ、コクチナシ、ユキヤナギなど　地被／フイリヤブラン、アガパンサス、クリスマスローズ、ツワブキなど



フソウテクノセンター

香川県高松市

ランドスケープデザイン＝フィールドフォー・デザインオフィス
文＝大久保敏之（フィールドフォー・デザインオフィス）
写真＝ナカサアンドパートナーズ

FUSO TECHNO CENTER

Takamatsu-city, Kagawa

Landscape design by FIELD FOUR DESIGN OFFICE
Text by Toshiyuki Okubo [FIELD FOUR DESIGN OFFICE]
Photo by Nacása & Partners inc.



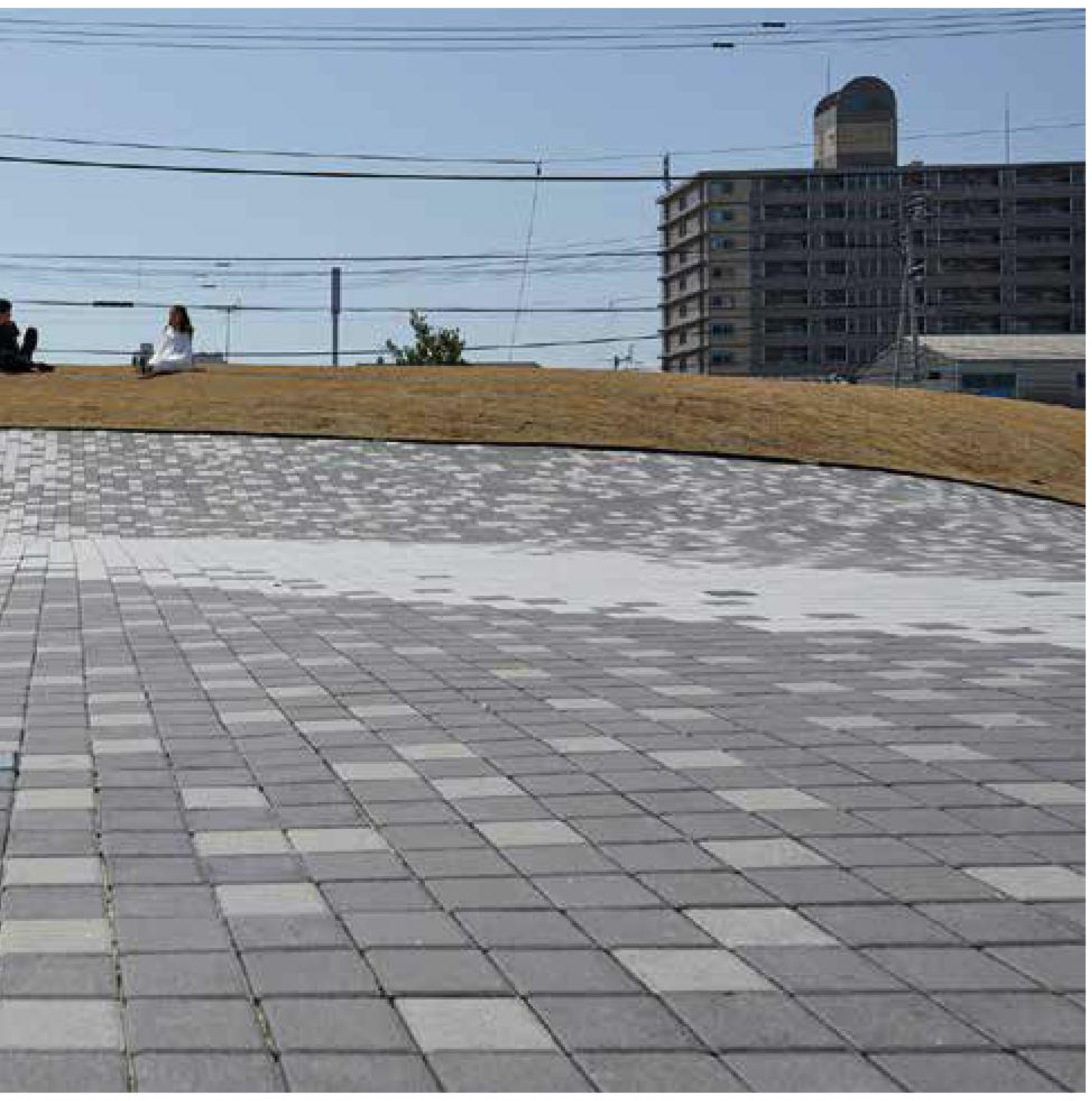








【上段】水の流れをイメージした屋根と大地の起伏
【下段左】起伏に富んだ中庭のシンボルツリー
【下段中】フソウ製品である耐震性貯水槽を埋設した丘
【下段右】日差しにより様々な表情を見せる起伏のある中庭





「ひとつながり」のデザイン

フソウは、1946年創業の水環境の設計・施工・運用・メンテナンスを一貫して行う、水の総合企業である。創業70周年の節目に造られたフソウテクノセンターは技術開発と人材育成の拠点となる次世代を見据えた新社屋であり、地域コミュニケーションの場として食堂を一般に開放し、BCPを考慮すると共に、防災拠点として体育館を一時避難所や津波避難ビルとして地域に貢献する。

水の流れをイメージする大屋根は分節された執務空間や研究施設、体育館、食堂ボリュームを繋ぎ、大屋根から連続する起伏に富んだ地形で建築の内と外、水盤、レインガーデン、地中埋設型の耐震性貯水槽設置スペース、オープンな境界といった様々な要素をつなぐ「ひとつながり」のランドスケープは、従業員や地域の方々が集い、さまざまなコミュニケーションを生み出し、「水と共に生きる」企業のシンボルとなっている。

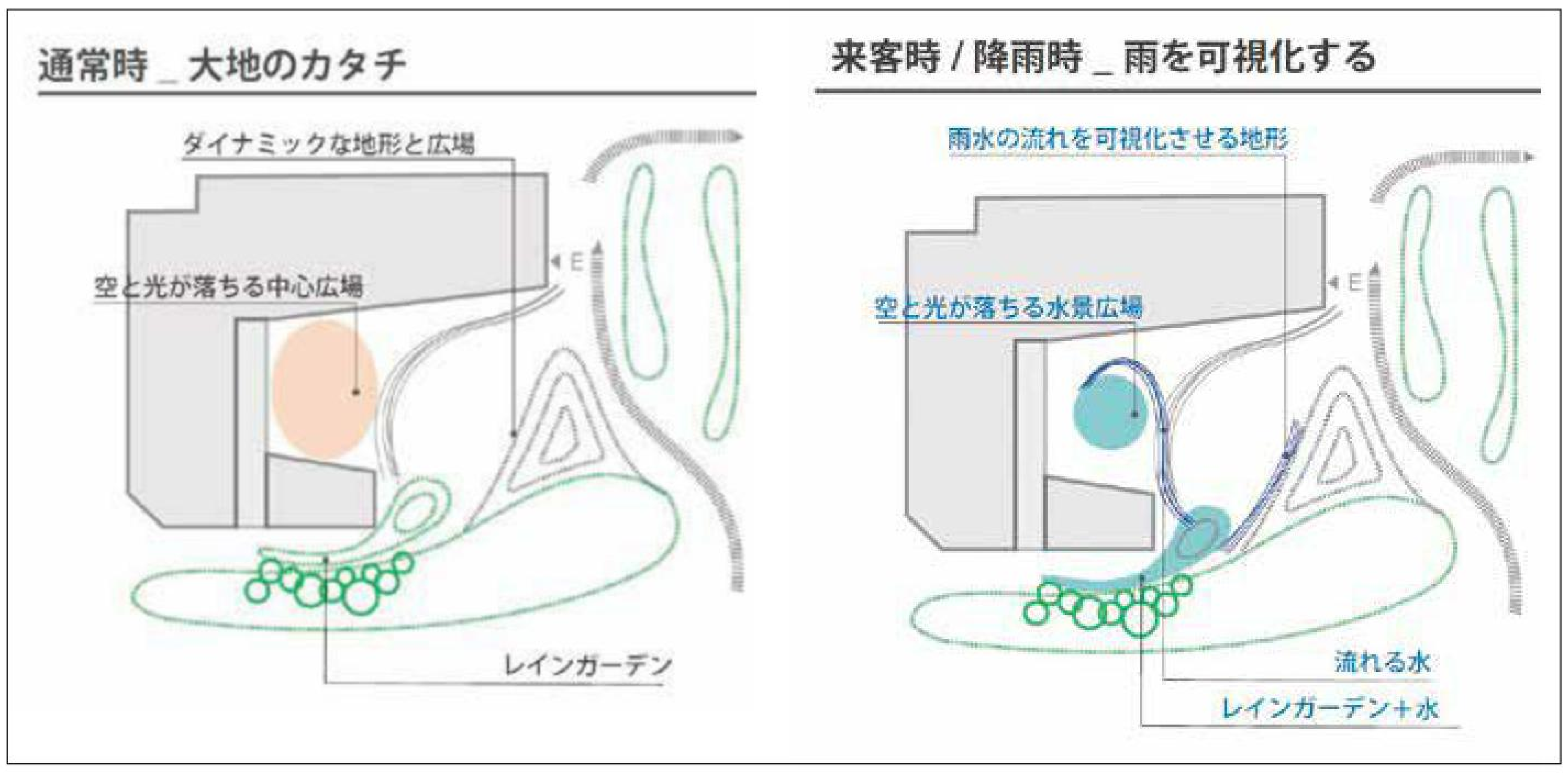
近年、大型案件においてデザイン領域の分業専門化が済み、エリアやプロセスが分断される傾向にあるなか、フィールドフォー・デザインオフィスではインテリアとランドスケープチームが協働する「ひとつながり」のデザイン提案を心掛けている。本案件の「ひとつながり」のデザインは、施主内の設計部署、建築設計者であると共に施工者である清水建設、そしてフィールドフォー・デザインオフィスの領域横断的な「ひとつながり」によって生まれた。我々は、配棟計画のタイミングでプロジェクトの参画依頼を受け、初期案の中庭を囲む分棟配置案に対して、シンボルとなる流れをイメージする大屋根でつなぐ提案をおこない、屋根の起伏と大地の起伏が呼応する水のランドマークを目指した。

A “Linked” Design

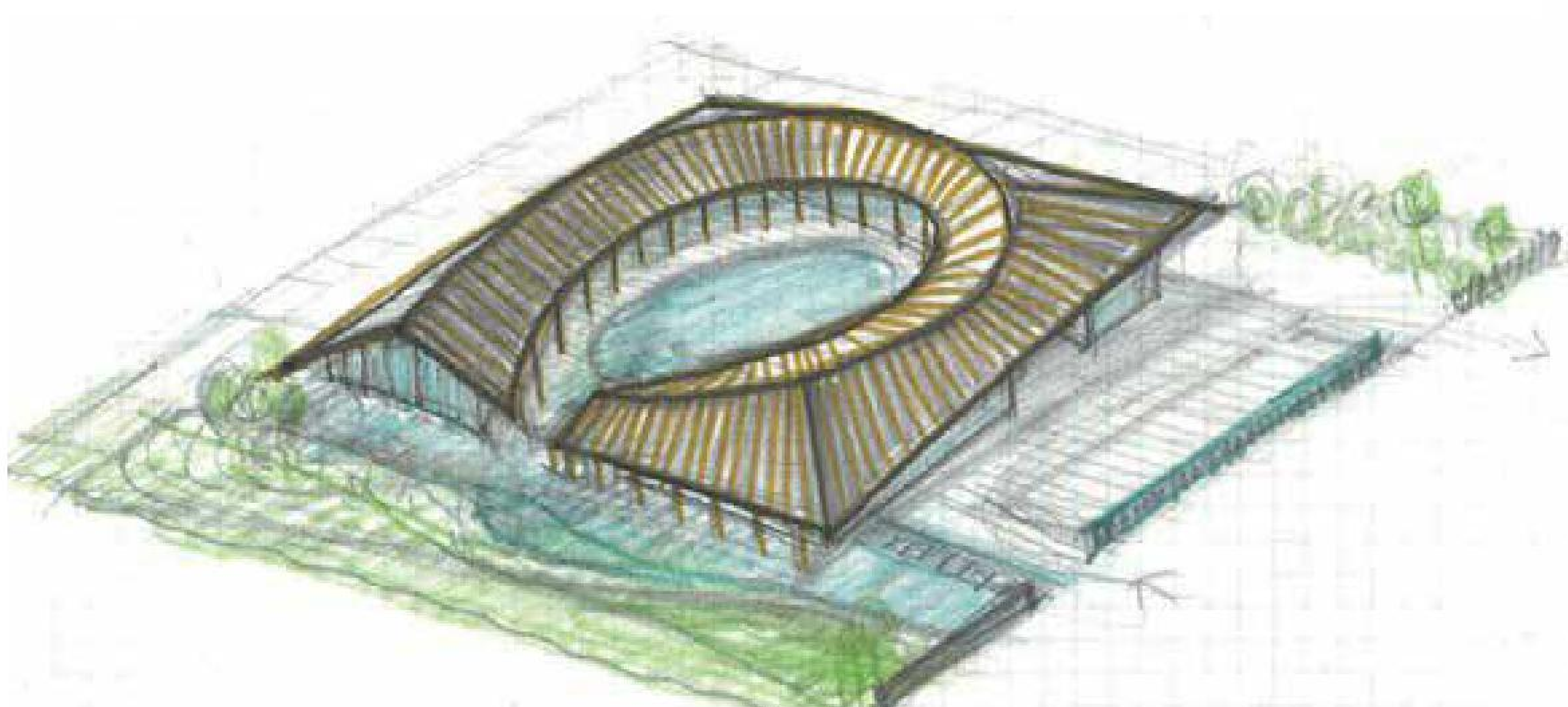
Fuso is a comprehensive water enterprise established in 1946, providing design, const-ruction, operation and maintenance of water environments. The new company building, Fuso Techno Center, was built at the milestone of the 70th anniversary as the base for technological development and human resource development meeting the needs of the next generation. The cafeteria is open to the public enhancing local communication, and while ensuring BCP, Fuso Techno Center is contributing to the local community as a temporary evacuation center and tsunami evacuation building.

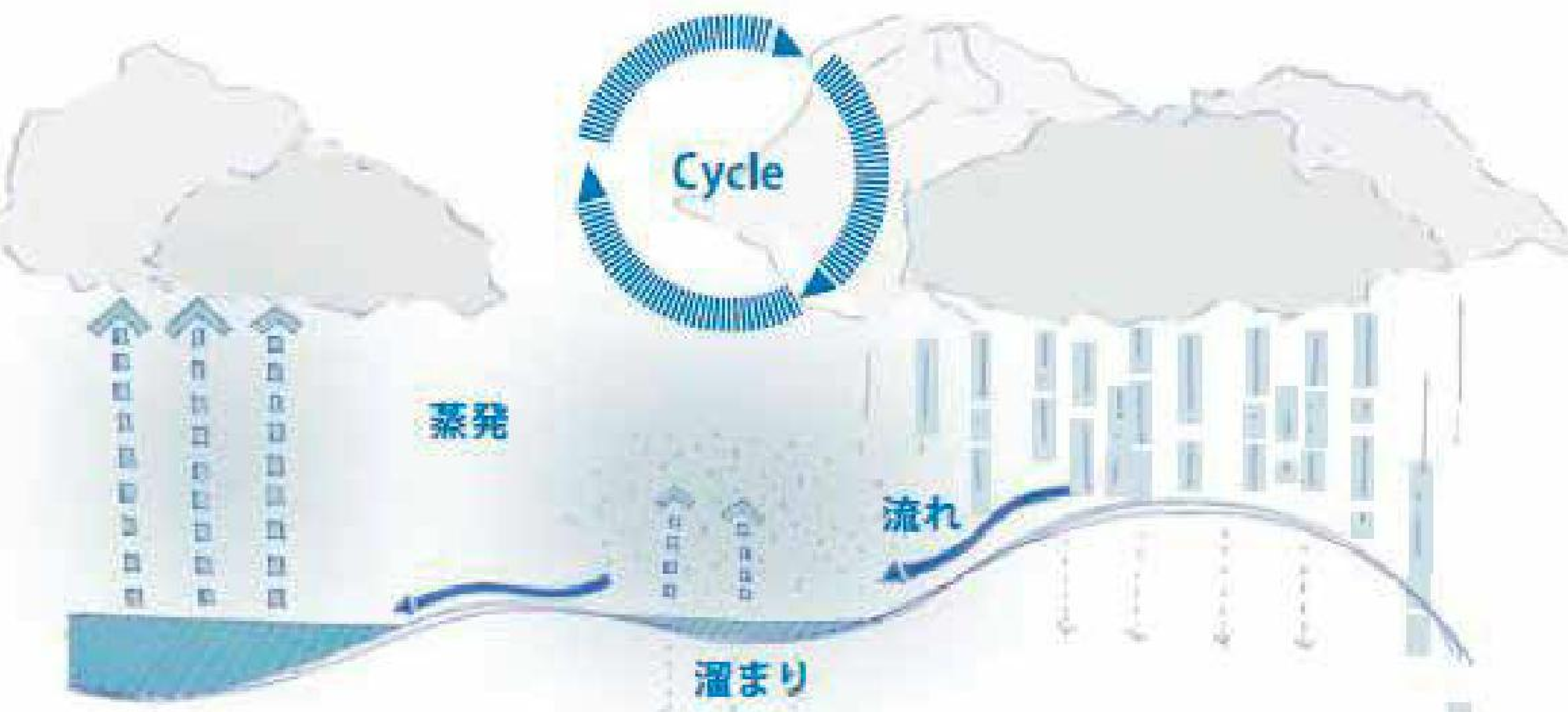
The large roof inspired by flowing water connects the areas of segmented office space, research facilities, the gymnasium and the cafeteria. Continued from the large roof are various indoor and outdoor facilities such as the water basin, the rain garden, an underground earthquake resistant water storage tank space, and open boundaries laid out on the rugged terrain. The landscape with various elements “linked” together creates a variety of communication among employees and local people who gather and symbolizes the corporate message, “Live Together with Water .”

In recent years, the design work for large-scale projects tend to be divided in specialization, separating areas and processes. At the Field Four Design Office, we aim to propose design that is “linked”, where the interior and the landscape team co-operate. The “linked” design seen in this project was born by cross-sectional links of the design department of the client, Shimizu Corporation, who was in charge of the architectural design and also the contractor, and Field Four Design Office. We received a participation request for the project at the point of the layout planning. In contrast with the initial plan of each facility surrounding the courtyard, we proposed to connect the facilities with a large roof, creating a flowing image with the gently undulating roof and the natural landscape, to become a suitable symbol of the landmark of water.



変化する風景


初期段階の大屋案スケッチ



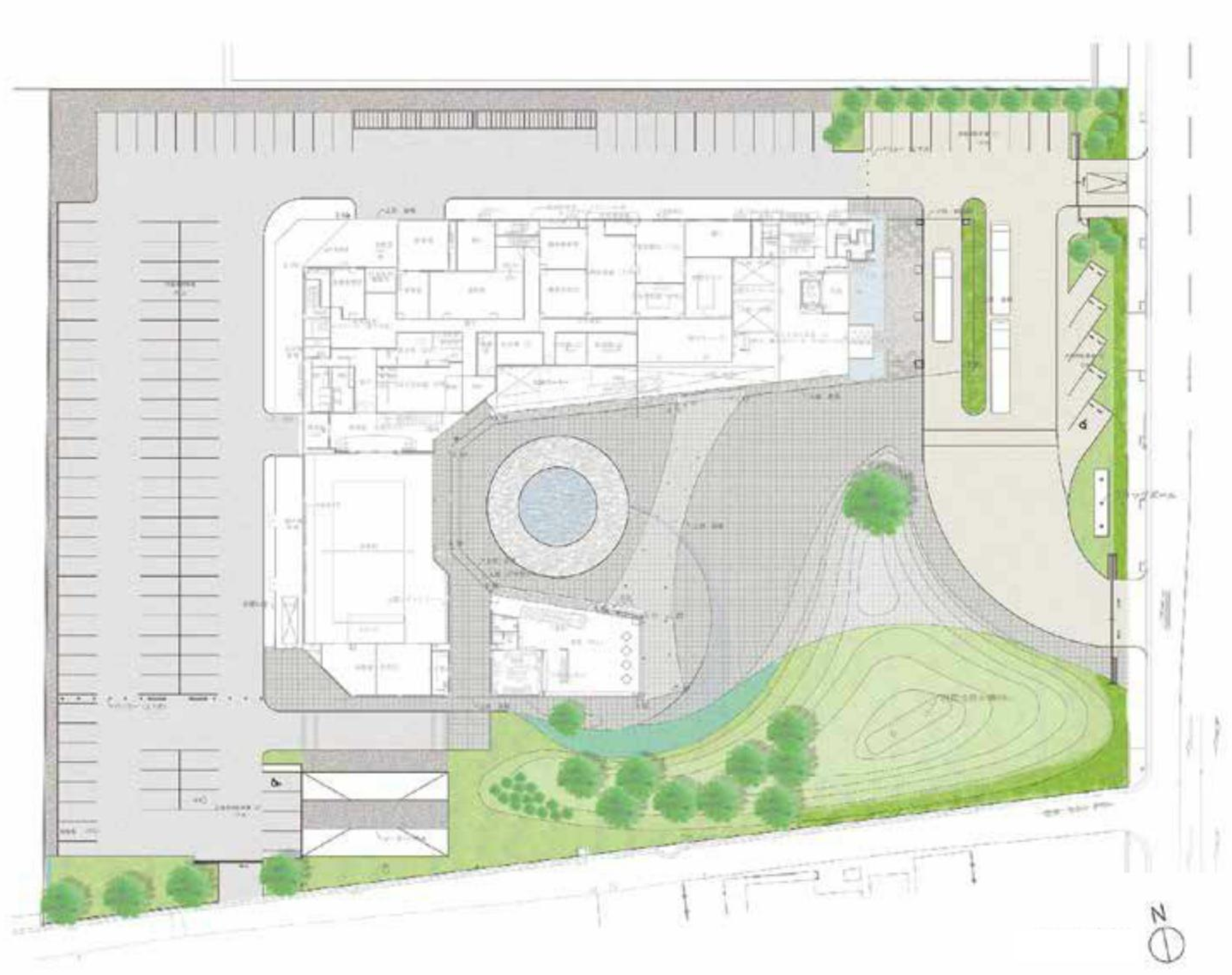
断面コンセプトスケッチ



大屋根で迎える車寄せとメインエントランス。
正面のガラス面には滝を利用したマイクロ水力発電を設置



地域に開放される社員食堂に隣接するレインガーデン。
大地の起伏による降雨時の水の流れに沿って配置



フソウテクノセンター

所在地	香川県高松市郷東町792-8
事業者	株式会社フソウ
主要用途	事務所、体育館、飲食店（食堂）
設計・監理	【建築】清水建設株式会社＋株式会社フソウ 【ランドスケープ】フィールドフォー・デザインオフィス（小澤亮太、北島暢哉、大久保敏之） 【建築・ランドスケープ実施設計】清水建設株式会社（鳥居健一、芦田裕二、中村譲、南野友子） 【照明デザイン】宮地電機株式会社（田部泉）
施　工	清水建設株式会社
仕　様	造園／山地宝松園、舗装／インターロッキングブロック、御影石調半たわみ舗装、淡路五郎太石、石材／庵治石（洗い出し、栗石敷き）、那智黒砂利洗い出し、照明／屋外用スポットライト、ソーラー床埋込照明、風力・太陽光発電付ポール灯
竣　工	2016年10月
規　模	敷地面積13,406.41 ㎡
植　栽	高木／クロガネモチの木（中央のシンボルツリー）、オオシマザクラ、ヒメウソウチクなど、中低木／マルバシャリンバイ、ヒラドツツジ、ウバメカシ、アラカシなど、草本地被／コグマザサ、コウライシバ、カキツバタ、ハナショウブなど





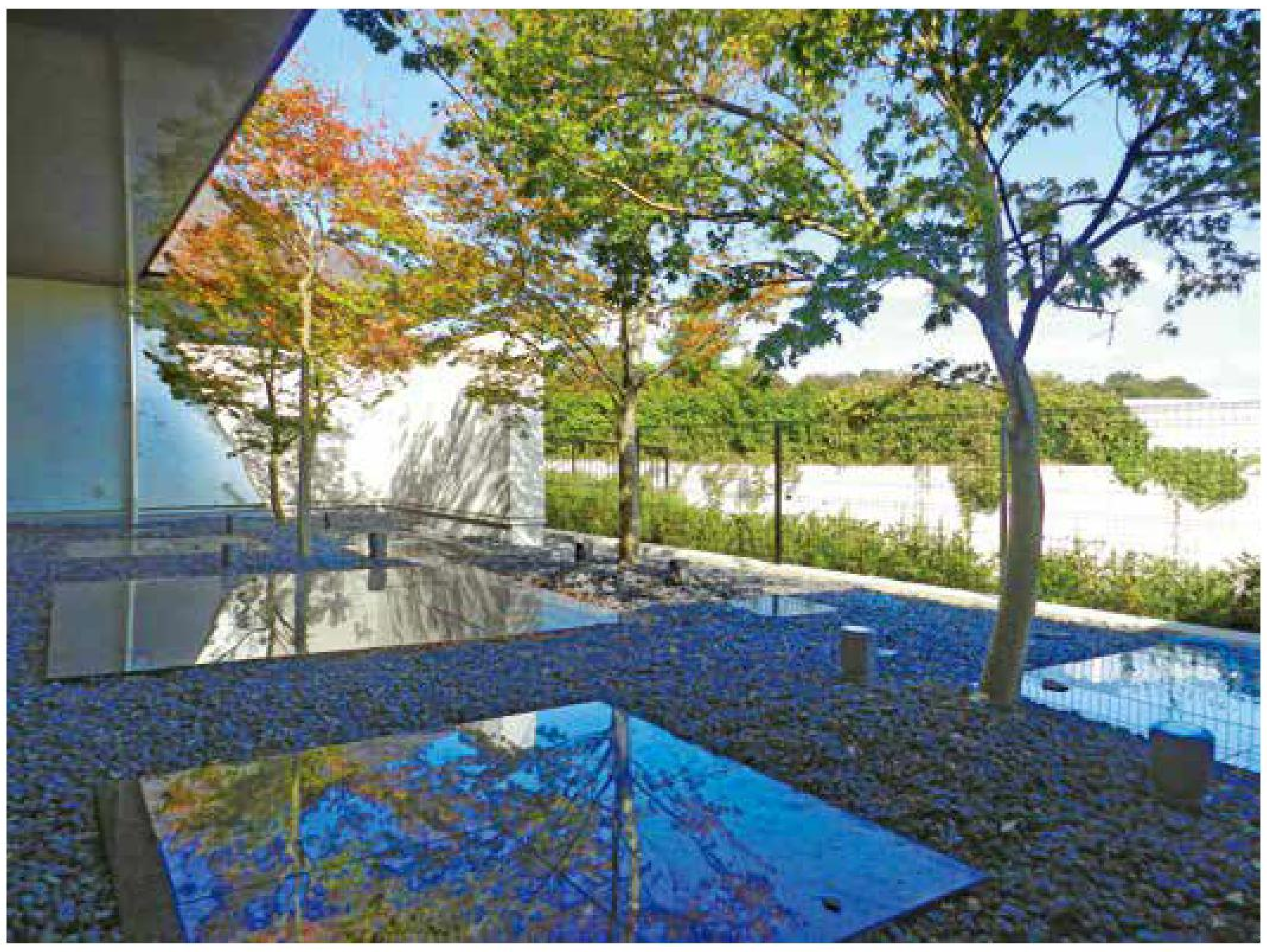
水の流れをイメージしたパターンが大地の起伏を強調し、中庭シンボルツリーからメインエントランスへと導く

WORKS MOVEMENT

ここでは、ランドスケープデザインに関する現在進行形のプロジェクトや、
ブランニュープロジェクトをいち早くお届けします。

日野こもれび納骨堂

横浜市





左／4本のヤマモミジが彩る庭。水盤のような敷石には“逆さモミジ”が映り、雨上がりには一層見栄えがする　右上／室内からクロマツの庭を眺める。室内外の連続性にも配慮　右下左／献花台には黒の花崗岩を使用。デザインはSTGK Inc.が担当　右下右／現場でプレートを並べて施工した外周フェンス





墓園でありながら横浜市内でも有数の豊富な緑を有する日野公園墓地に隣接して、今年４月にオープンした新しい納骨堂。入口をくぐり、受付を済ませ、祈りを捧げる……これらの納骨堂での一連の“流れ”の中で、四季を映し出す大小様々な庭が視界に入るように設計されている。庭の数は８つ。面積はもちろん、植栽や敷石などに明確な差をつけ、室内からでもその違いが瞬時にわかるデザインとなっている。例えば植物の場合、1つの庭ごとに植栽される樹木を１種に限定し、ヨコハマヒザクラ（横浜在住の園芸家が作出）、ヤマモミジ（都筑区の木）、ハナミズキ（港北区の木）など、いずれも横浜市に縁のある樹種を採用。敷石・砂利についても、同じ種類の石材を素材としつつも、8つの庭それぞれで表面仕上げや砂粒の大きさ等に変化をつけている。利用者はこれらの庭を通じ、参拝の記憶と同時に「季節の記憶」もまた深く意識に刻み込まれることであろう。一方で祈りの場らしく、視線をコントロールするような心配りも見られ、庭においては袖壁を配置して隣接する住宅地や墓所が見えないようにしている。数百枚に及ぶプレートをドミノのように並べた外周フェンスも“遮る”効果を持つが、一方で角度を変えると向こう側が見えるようになっており、ちょっとした散策の面白さに繋がっている。

●主要用途／納骨施設●運営団体（指定管理者）／清光社・横浜植木共同事業体●ランドスケープ／STGK Inc.●建築設計／㈱コンテンポラリーズ●敷地面積／3,745.70㎡●竣工／2018年3月●所在地／神奈川県横浜市港南区日野中央1-13-2

Camping Office Tamagawa

クリエイティブ・シティ・コンソーシアム

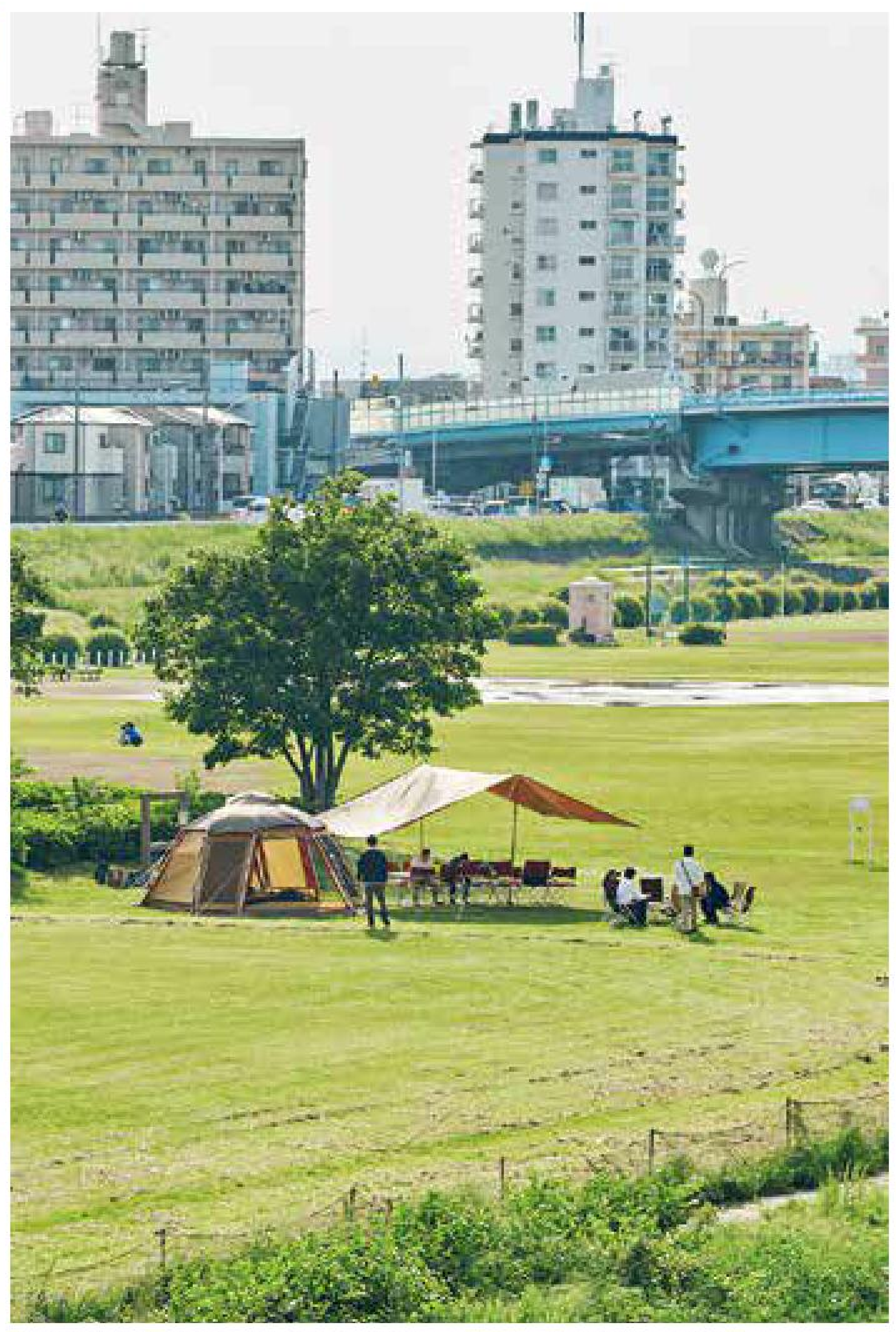
多摩川を挟み、東京都世田谷区と川崎市が向き合う二子玉川・二子新地エリアは、都市化が進んだ東京でも貴重な自然に恵まれたエリアである。玉川高島屋や二子玉川ライズ、楽天本社などの大規模開発が一段落した同エリアでは、あたらしい市民活動や社会実験などが活発になってきている。そうした中、東急電鉄㈱が中心となって組織した産官学の連携組織「クリエイティブ・シティ・コンソーシアム（以下CCC）」は、セグウェイの公道走行などの実証実験を行ってきた。そして2018年度にはスノーピークビジネスソリューションズと組んで、多摩川河川敷（右岸・川崎市側）において、屋外空間で働く社会実験「Camping Office Tamagawa」を実施している。開放的な空間で自由な思考を解き放ち、たき火を囲んで互いにフラットな立場で議論を行うというのは、実は東京においては大変貴重な場。これに端を発し、今後もCCCは河川敷の新しい使い方を模索する取組を継続していく。なお、「Camping Office Tamagawa」は国土交通省および川崎市の協力の下で実施している社会実験である。

●主要用途／屋外オフィス（実験）●事業主／クリエイティブ・シティ・コンソーシアム（東急電鉄㈱・㈱スノーピークビジネスソリューションズ）●実施期間／2018年7～11月（予定）●規模／タープ2張り・テント2張り・座席24～36席●所在地（実験実施地）／神奈川県川崎市高津区 多摩川河川敷（二子球場）









開放的な河川敷の芝生広場を、オフィスに転換。建物のいらない新発想のオフィスの可能性を探る。夜には焚火を囲って歓談も



潮入りの池の対岸より。江戸時代の建立時同様、3つの茶屋が横一列に並んで見られるようになった（中央が鷹の御茶屋）

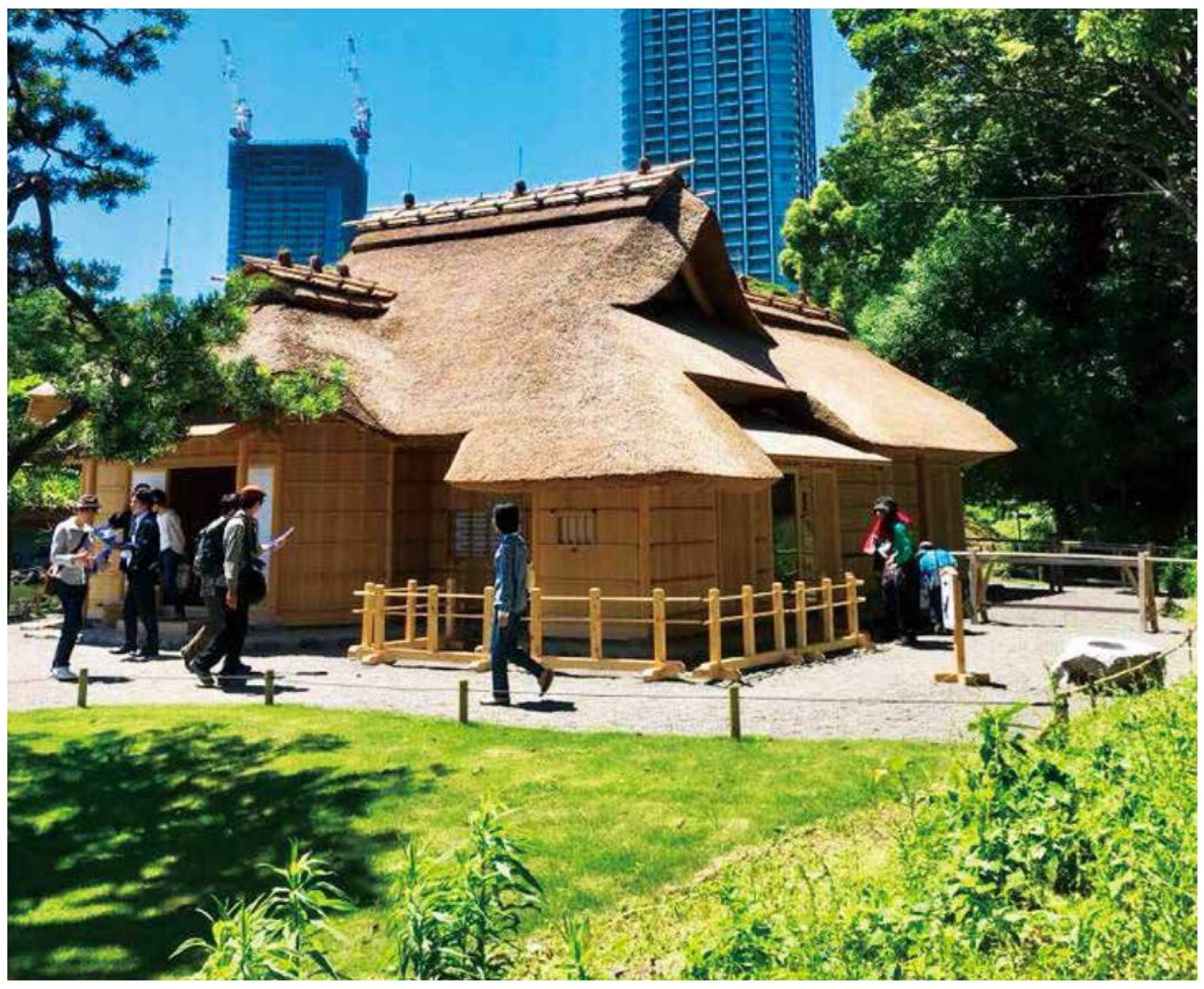
浜離宮恩賜庭園「鷹の御茶屋」の復元

東京都

平成16年度よりはじめられた浜離宮恩賜庭園の修復・復元工事の一環として、今年3月に3棟目の茶屋として竣工した「鷹の御茶屋」。徳川将軍家の鷹狩りの場として使われたことで有名な浜離宮であるが、茅葺屋根で農家の佇まいを残すこの御茶屋は、名前の通り鷹狩りの際の待合い・休憩所として利用されていたといわれている。江戸幕府11代将軍家斉の時代に、潮入の池の畔に「松の御茶屋（平成22年復元）」「燕の御茶屋（平成27年復元）」と共に建立され、鷹狩りの禁止された明治以降は外国の貴賓客等の接客の利用が主となった。その後太平洋戦争で焼失したが、このたび江戸時代に記された文献等を参考に復元された。建物東側には、狩りのパートナーである鷹を休ませるための「鷹部屋」が設けられており、今回の復元においても忠実に再現。一畳にも満たないスペースながら、鷹が安心して羽を休められるような仕掛けが見られる。既存の御茶屋と比較して、江戸時代の記憶をより色濃く現世に伝える建物と言えよう。

また、今年3月の文化財保護法改正の閣議決定に伴い、全国的に文化財を都市の中で積極的に活用していく方針ができつつある。平成になって復元された「松の御茶屋」「燕の御茶屋」は通常内覧はできないが、「鷹の御茶屋」は展示施設として一般公開し（月曜日はメンテナンスのため内覧不可）、来場者が江戸往時の雰囲気をより体感できる画期的な施設となっている。

●主要用途／日本庭園内の茶屋（史跡復元）●事業主／東京都●建物構造／木造平屋●建物の各部仕様／屋根：茅葺、柿葺　天井：竿縁天井、網代天井　壁：板壁　床：土間叩き（上段は畳敷）●延床面積／86.21㎡●高さ／6.215m●竣工／2018年3月（4月オープン）●所在地／東京都中央区浜離宮庭園1-1







上／江戸時代の外構を再現した建物の外観
下左／室内から下右／室内を見学する来園者
（写真提供：東京都建設局 竹内智子）

WORKS MOVEMENT 情報投稿募集

「WORKS MOVEMENT」コーナーでは、毎号につき最新のランドスケープデザインのニュースを取り揃えております。1年以内に竣工したプロジェクトや、今後オープンを迎えるプロジェクトなどを紹介します。ここで紹介したものの中で編集部として注目したいと考えた物件や、読者の反響の多かったものについては、「LANDSCAPE WORKS」での紹介へと繋げていきます。この機会に、ぜひ御社の関連プロジェクトをお気軽にご投稿ください。

『ランドスケープデザイン 124号』への掲載は
2018年11月15日（木）までに
データを揃えてメールまたは郵送にてお送りください。

＜掲載内容＞
・写真　1〜5点
・物件名
・ランドスケープ設計社名
・概要　300〜400字
・データシート　事業主／主要用途／設計／施工／規模／竣工／所在地をデータとしてまとめ、お送りください。
※写真解像度は、350dpi
※テキストデータは、docファイルまたは txtファイル

お送り先
〒150-0036　東京都渋谷区南平台町4-8　南平台アジアマンション708
TEL：03-3496-7046　FAX：03-3496-7387
E-mail：design@marumo-p.co.jp（中村宛）

［コラム］

異職種交流「テクネの集い」でのNeoランドスケープへのヒント

網本義弘（発想工学研究所主宰、九州産業大学名誉教授）

[column]

Hints to "The Neo Landscape" in the Different job Exchanges 'Gathering of Techne'

Yoshihiro Amimoto (Idea Engineering Laboratory Leader, Honorary Professor of Kyushu Sangyo University)

≪「地方創生」でなく「地方即世界」からの発想へ≫

紀元前までに既に世界最多の「人種のるつぼ」とも言えた日本、特に九州、更に紀元数世紀には大陸からの諸「文化のるつぼ」でもあった北部九州から、目下当然の如く謳われている「地方創生」などでなく、この地の持つグローバルな潜在力を基に、日本を越えてその母体であるユーラシア大陸の未来文明に何かお返しが出来ないかどうか。

そこで40年ほど前から続けている「そこに住む個人即世界」つまり「地方即世界」をモットーに、日本、アジア、時には宇宙までもテーマに、異業種交流と学際サロンを合わせた「異職種交流」とも言える「テクネ（ギリシャ語で、音楽から天文学までの夫々の「術」の意）サロン、集い」を福岡にて、去る8月4日、「未来ユーラシアへ向けて」の腹案のもとに行なう。

今回は、ゲストとして福岡県知事の後、全国知事会会長もされ、昨年旭日大綬賞を受けられた麻生渡氏と、エジプトの象徴とも言えるピラミッド研究者としてマスメディアでも活躍中の名古屋大学の考古学者、河江肖剰氏のお二人を交え、北部九州の各分野で活躍する重鎮から若手までの異色の面々が集っての持論・発想交換の場となった。



「テクネの集い」2018年 福岡　集合写真

≪ピラミッド建造から想うこと≫

目下の日本で大変な問題となっている自然災害と比較して、古代エジプトでは大河ナイル川の氾濫を予測する為に、当時最大に人間知力を発揮させて天文学･気象学を編み出し、その応用のもとに「恵み」の方を人間にもたらしたようである。そして王は、安全と永遠の生命のシンボルとしてのピラミッドや、国家の統治・統括の壮大な神殿建造に、「奴隷」としてでなく、「生活者」による為の安全な日常生活用のタウン造りを基礎としたことは、最近の発掘からも明らかだとされる。

その結果、特に大地に安定した四角錐型の形態は、地震の殆んど無いエジプトでは現在でもそのまま残り、ひょっとすると未来数千年以上、いや永遠とも言える存在になるかも知れない。と同時に今回、水平の大地に沈む夕陽に浮かぶ二つの巨大ピラミッド映像を見、日本の無数の有機的曲面体の連続的複合とも言える自然形態に埋没する諸人工物ランドスケープとの、絶大な相異を改めて痛感させられる。

≪自然災害国家日本の新ランドスケープ像に向けて≫

この未来にも通じるピラミッド建設の最新情報を聞くにつれ、その後多様な文明を生んだユーラシア大陸のこれからの未来像を考えるには、人類最初の大文明のエスプリを取り入れるべきと思われる。

それには日本では、自然災害少国のランドスケープを越える地上のシンボル・スケープ造り等でなく、あくまで自然大災害国であることを何よりも大前提にしての、全く異なる発想に迫られる。世界史的にも特異な文化を造り上げたと最近評価される縄文時代の人々は、早くも津波の恐ろしさに気づいて高台や洞窟に生活圏を設けたとされている。

特に昨今の日本では崖崩れや土砂災害で見るように、人命を守るだけでなく、「自然の姿」までも守らねばと言う、新たなランド（くに）のスケープ（かたち）造りレベルの大問題にも迫られている。

ともあれ、地震、津波、台風、豪雨から人間生活を防禦するには、これまでの「地上文明」に対して、AI、ドローン等の最先端技術を総動員しての全国地質調査による国土の硬軟度に基づき、防空壕から大都市地下街建設に到る伝統を生かし、水循環システム完備の地下生活空間開発による「地中文明」とでも言えるものに、思いきって転換した方が安全なはず。すると、視覚的自然を傷付けない新たな「自然と人工の一体化ランドスケープ」国の出現になるかも……

河江氏のピラミッド情報を聞きながら、私はふと以上の様なNeoランドスケープという、今後のユーラシア時代に役立つかどうか判らない妄想に耽ってしまったが、他の参加者は「地方即世界」の視点から、もっと多様で有効なことを考えられたに違いない。



夕陽のピラミッド　　　考古学者 河江肖剰氏

今後の集いとして、以前デザイン系の大学1年生に、「真・善・美を2次元で表現」という抽象の具象化的課題を出したところ、全員が多様でユニークな作品となったのに驚愕した経験から、各専門分野が、例えば軍事力に対して「平和力」を考えれば、どんなピース・スケープ、ランドスケープが出てくるかを期待とする、国際的なスケールでの〈和のユーラシア・サミット〉などを考えたりしています。



網本義弘（あみもとよしひろ）
1944年神戸市生まれ。東京教育大学（現 筑波大学）卒業後、長年九州産業大学で発想論、空間デザインを担当。『ギリシャ讃歌』『発想工学を知っていますか』『温故創新のアジアデザイン・パワー』等の著書の他、九州での「宇宙遊園地」（のちの「スペースワールド」）や「アジア太平洋博」の提案、1990年にはNASAに「月面地下生活空間」を提案等。また中国寧波での防災デザイン国際会議では「アジア型耐震デザイン教育」、2013年ユネスコ創造都市北京サミットでは、地震でも安全な「洋上オリンピック船」構想など、国内外で防災デザイン発想の講演や、雑誌等での論述を行なう。学際サロン「テクネ」代表。

来場事前登録受付中

～建築の屋外空間から、街路や広場、公園まで、
都市景観を形成するランドスケープ資材に焦点をあてた専門展示会～

Japan Home & Bulding show 2018

第2回 景観・ランドスケープ総合展





会期 2018 11.20(火)▶22(木) 10:00～17:00

会場 東京ビッグサイト 東展示棟（有明・東京国際展示場）

主催 JMA 一般社団法人日本能率協会

共催 一般社団法人日本建材・住宅設備産業協会／一般社団法人リビングアメニティ協会
一般社団法人住宅生産団体連合会／公益社団法人日本建築家協会

出展予定製品

- 舗装材
- 水景施設・設備
- 特殊緑化技術（屋上、壁面、生物多様性等）
- 緑化資材・緑化植物
- ファニチャー・遊具
- サイン
- エクステリア資材
- 屋外照明
- コミュニケーション（出版、WEB等）

来場対象

官公庁 / 自治体 / 不動産開発（デベロッパー） / 商業施設管理 / 公共施設管理 / 建設関係者 / 造園関係者 / 不動産オーナー / ほか

同時開催 Japan Home & Building Show 2018 ※Japan Home & Building Showを総称としてごらんの展示会も合同開催されます。

ジャパンホームショー　イノベーションオフィス　トイレ・バス・キッチン空間・設備フェア　団地・マンションリノベーション総合展

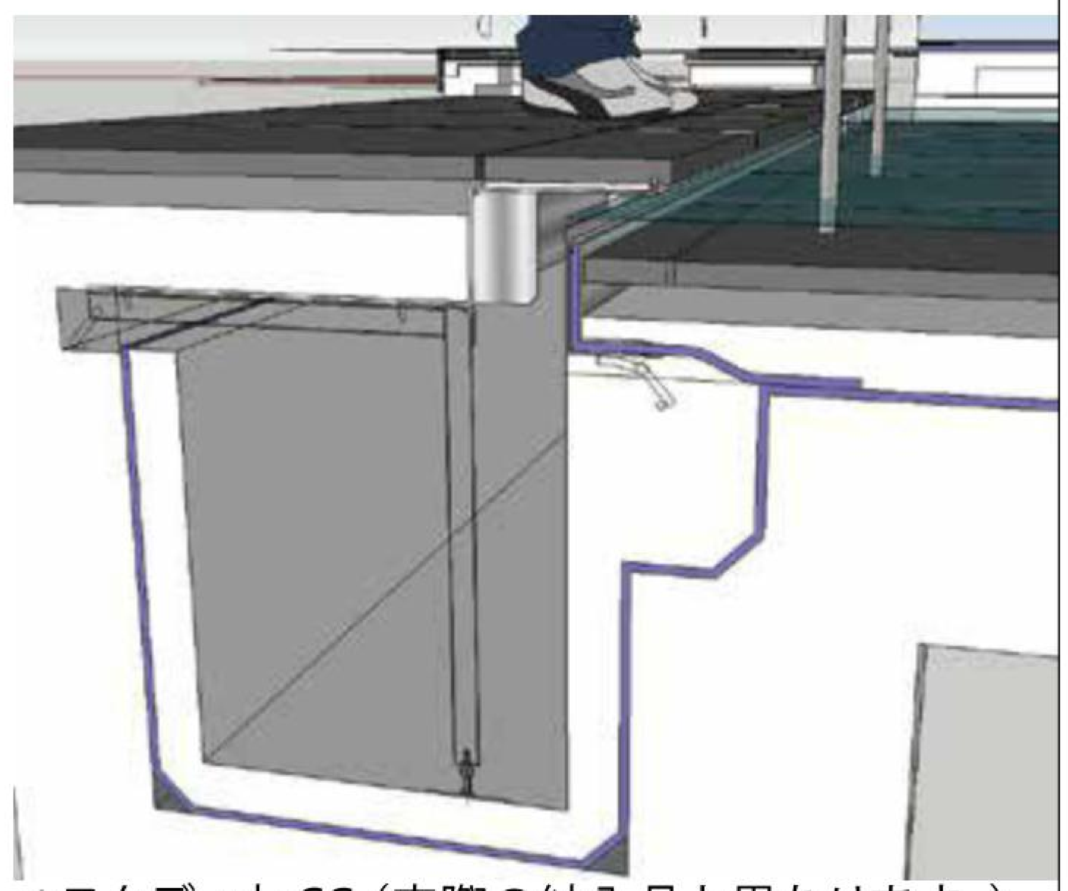
お問い合せ先
ジャパンホーム アンド ビルディング ショー
Japan Home & Building Show／
景観・ランドスケープ総合展 事務局

一般社団法人 日本能率協会 産業振興センター内
〒105-8522　東京都港区芝公園3-1-22
TEL：03-3434-1988　FAX：03-3434-8076　MAIL：jhbs@jma.or.jp
http://www.jma.or.jp/homeshow/

詳細・最新情報はコチラから
景観・ランドスケープ総合展 検索

見せない水際を縁取る





＊スタディ中 CG（実際の納入品と異なります。）

キャンチ構造の石舗装を支持し、防水層をフォローする為のエッジ金物。
１０種類以上の異なる断面があり、一部は設備ピットふた機能を持つ。
そして金物は、極限まで見せない.....
既製金物のみならず、様々なご要望にチャレンジ致します。

環境社会の道を拓く
DKC 第一機材株式会社
〒115-0045 東京都北区赤羽 1-64-11
TEL：03-3902-9841 FAX：03-3901-8505 http://www.dkc.jp





石垣島・フサキリゾートヴィレッジ

inaji 株式会社 稲治造園工務所

創る、育む、守る。私たちは地球の未来を真剣に考えています。

代表取締役社長　**稲治和彦**

【本　　社】 大阪市北区西天満3丁目1番6号　06-6365-9211
【本　　店】 大阪府箕面市新稲2丁目3番2号　072-723-0003
【東京支社】 東京都渋谷区恵比寿南2丁目3番13号　03-5734-1701

http://www.inaji.jp

記事投稿募集

本誌の各コーナーでは、読者の皆様からのご投稿を募集しております。投稿の際は、概要と写真・図面などのコピーを添えて編集部までご郵送ください。検討の上、掲載の場合はこちらからもご連絡させていただきます。また、記事広告スタイルの投稿も募集しております。自薦他薦を問わず、お気軽にお問い合わせ、ご投稿ください。

【特集 / 小特集】
ランドスケープに関する事例、執筆者の紹介など

【ランドスケープワークス】
ランドスケープ作品の紹介

【特別報告】
各種活動、イベント、独自取材ネタなどの自由投稿

【環境問題関連】
CSR や環境問題に関する事例の紹介

【キャンパスレポート】
学校や研究所、学生の各種活動などの紹介

【ニュース / 情報案内など】
パブリシティとしての様々な催事情報など



≪投稿およびお問合せ≫
株式会社マルモ出版　ランドスケープデザイン編集部（担当：小林、中村）
〒150-0036　東京都渋谷区南平台町 4-8　南平台アジアマンション 708
Tel：03-3496-7046　　Fax：03-3496-7387
Mail：design@marumo-p.co.jp　　URL：http://www.marumo-p.co.jp

白砂伸夫作品集 II Works of NOBUO SHIRASUNA
THE ROSE GARDEN

世界バラ会議2018　バラ書籍賞「Literary Award」受賞

第33回全国都市緑化よこはまフェアで統括アドバイザーとして
会場全体の構成と山下公園の「未来のバラ園」、
港の見える丘公園「イングリッシュローズの庭」「香りの庭」、
日本大通りの「フラワーフェスタ」の監修を手掛けた
白砂伸夫氏の作品集です。

【掲載作品】
I. アカオハーブ&ローズガーデン＜バラの協奏曲＞
II. ハウステンボス　＜バラの交響曲＞
III. 花フェスタ記念公園　バラのテーマガーデン＜バラの組曲＞
IV. 六甲アイランド CITY ローズガーデン
V.「10カ国の大使と大使夫人によるガーデニング」in ホテルオークラ東京



【THE ROSE GARDEN】
編・著／白砂伸夫
◆ フルカラー
◆ ヨコ220mm×タテ260mm
◆ 全文英語併記　◆ 122ページ
◆ **価格1,800円+税**
（別途送料がかかります）

【ご注文・お問い合わせはマルモ出版まで】
TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387　e-mail:maru@marumo-p.co.jp
株式会社マルモ出版　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8　南平台アジアマンション 708　http://www.marumo-p.co.jp

マルモ出版新刊のご案内

私たちが描く
次世代につなげたい
「未来の環境都市」

〈東京都市大学環境学部公開講座 企画委員会〉編著

CONTENTS

東京都市大学では 2016 年 6 月 4 日（土）を皮切りに全 6 回にわたる対話型講座「私たちが描く未来の環境都市」を二子玉川夢キャンパスにて開催した。本講座では、各分野の専門家と聴講者の対話をとおして、成長のための開発がもたらした自然破壊や生物多様性の危機を解決するため、高齢化や財政上の課題といった経済成長の限界を踏まえながら、成熟した“未来の環境都市”のあり様について、日本を取り巻く自然環境や伝統という本質に立ち返って考察した。本書『私たちが描く 次世代につなげたい「未来の環境都市」』は、公開講座全 6 回の講演内容をもとに編集・構成したものである。



【価格】**2,500円**（税込・送料別）

■ A4 変型（W225mm × H297mm）■本文：128 頁・オールカラー

【お申し込み方法】
下記の欄に必要事項をご記入の上、FAX でマルモ出版までお申し込み下さい。その後商品と払込取扱票をお送りします。
○銀行振込をご利用の方は、上記金額に**送料 170 円（1 冊）、500 円（2 冊以上）**を加えた金額を下記 1 の口座にお振込下さい。
○郵便貯金口座をご利用の方は、届きました払込取扱票を用いて下記 2 の口座にお振込下さい。

【お振込先】
1. 三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店　（普）5294495　株式会社マルモ出版
2. 郵便貯金口座 口座番号：00170-4-70822　株式会社マルモ出版　　※振込み手数料はご負担下さい。

<table>
<tr><td colspan="3">ご注文日　　　　　年　　　月　　　日</td><td>ご注文冊数</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ご注文者</td><td>会社名・お名前</td><td>ご連絡先（TEL）</td><td rowspan="2">冊</td></tr>
<tr><td colspan="2">ご住所　〒</td></tr>
</table>

【ご不明な点・ご要望等ございましたらお気軽におたずね下さい】

㈱マルモ出版　TEL. 03-3496-7046　FAX. 03-3496-7387　E-mail：maru@marumo-p.co.jp
〒 150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8 南平台アジアマンション 708 号 http://www.marumo-p.co.jp

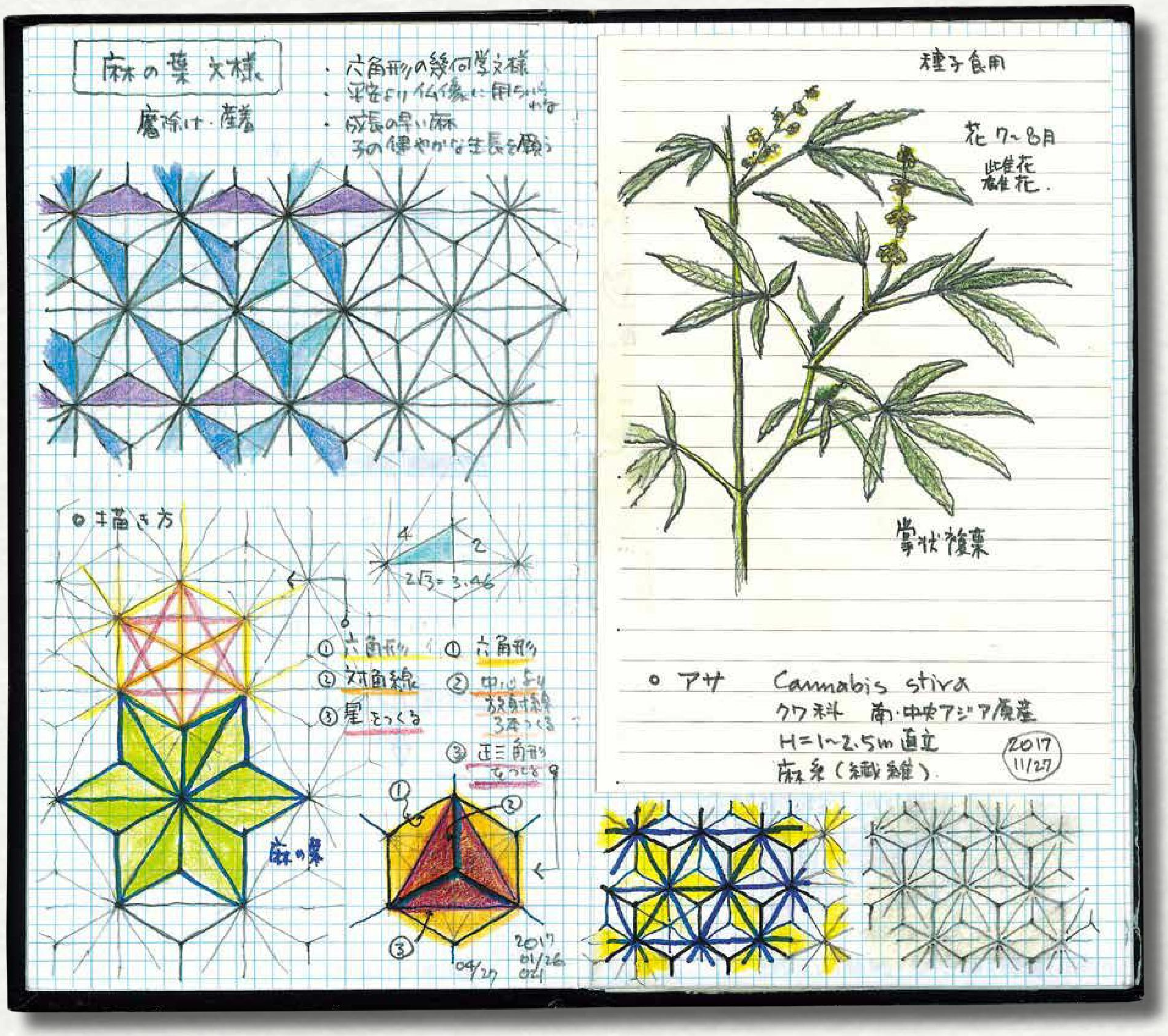
ランドスケープをメモる ❺

landscape design memo
mano note

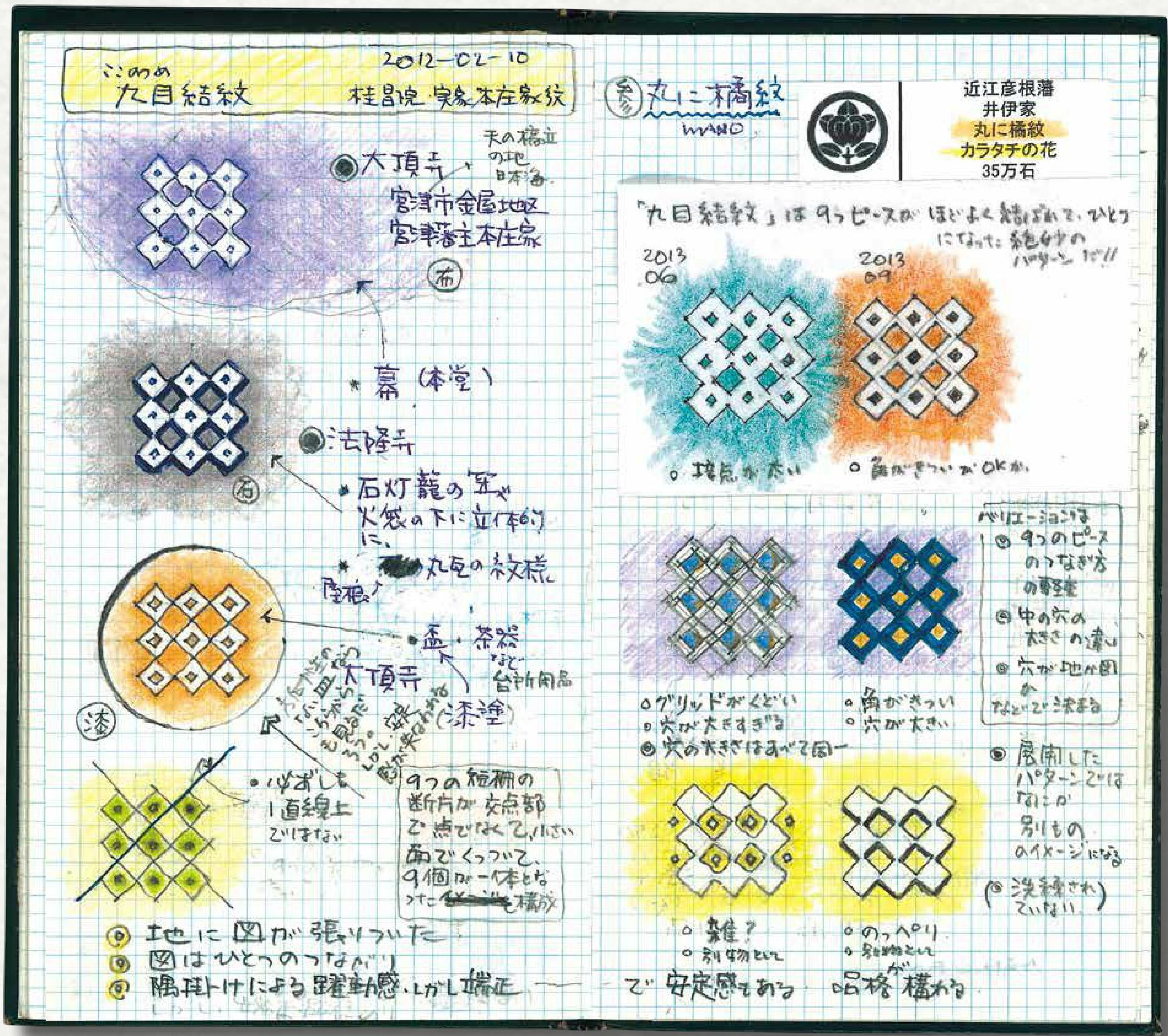
間野賢二

図形のこと

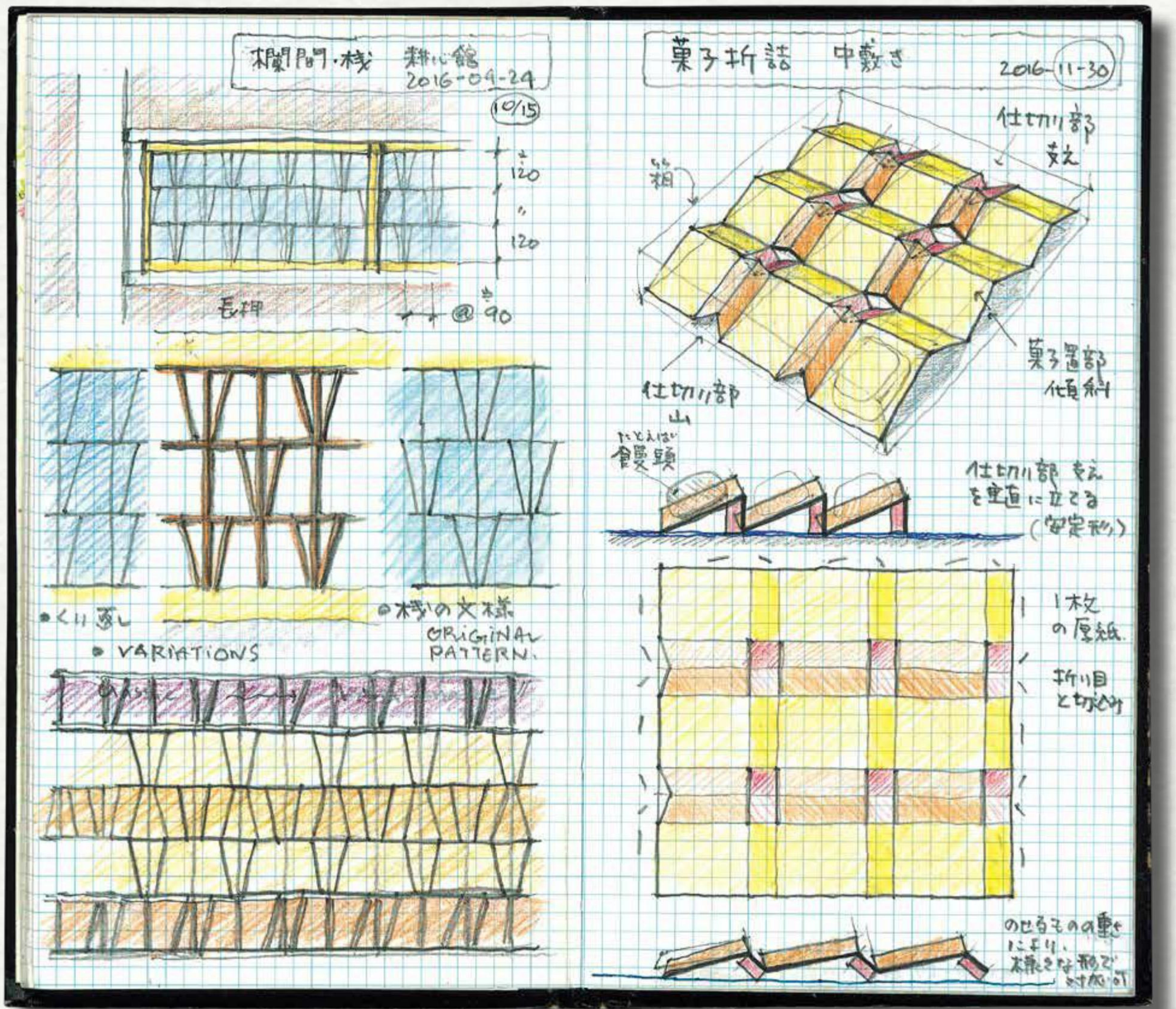
文様やパターンには、独特の美しさと不思議さがあり魅せられる。図形のもつ構成の妙が、見るもののイマジネーションを高め、図中の隠された秩序に謎解きに似た興味をいだかせたりするからだ。そんなことから、図学が造形の基本と認識しつつ、断片的なメモを記してきた。



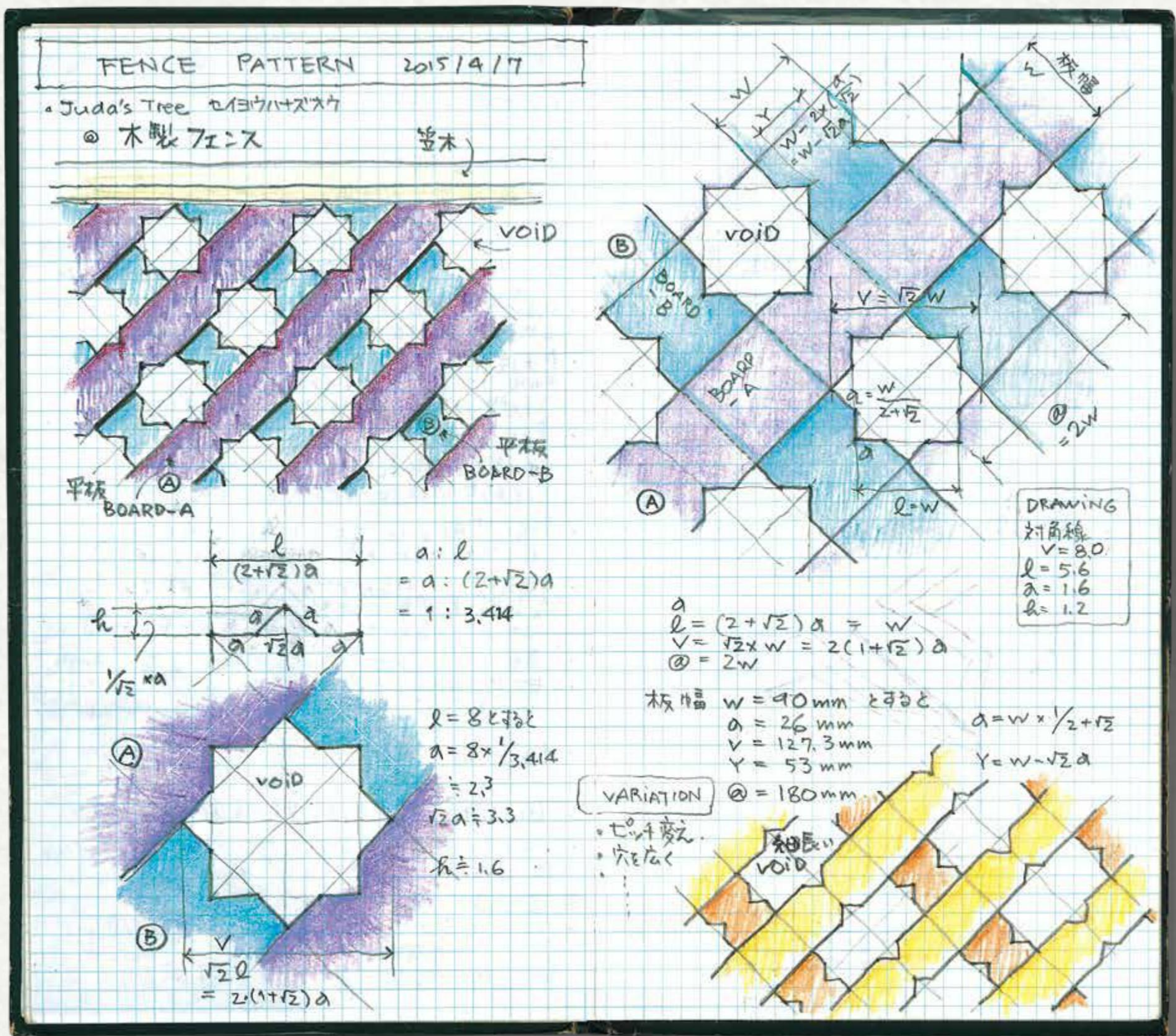
日本古来の文様「麻の葉」、その洗練された美しいパターンを描く。
しかし、その作図は見たほど簡単ではなく、法則を見つけることが必要だった。
図形は、シンプルにして複雑。いろいろ見方を変えると幾何学的模様の組み合わせが様々に浮かび上がってきて、興趣が深まる。
気になり植物自体も描き比べてみる、見事な抽象化に先人のセンスが光った。



こちらは家紋で「九目結紋」、桂昌院（５代将軍徳川綱吉の生母）の実家の家紋である。
鹿の子絞りの文様を図案化したといわれる目結紋の９個組みタイプで、もっとも造形的で美しい。
いろいろな形に展開してみたが、あらためてオリジナルのもつ質の高さに感銘を受けた。



訪れた東京郊外にある旧家で欄間が目につき、その桟のパターンをメモする。
これをもとに図柄を変形させたりして、少々展開を楽しんだ。
図形ではないが、菓子折りのパッケージデザインにも感心させられた。
手品のように1枚の厚紙からできる立体造形のすごさに、プロの技が冴えていた。



2枚の木の平板から、文様を浮かび上がらせたフェンスのデザイン。
板の切込みを組み合わせると、簡単に見事な星の図柄が生まれ出てくる。
多くの図形には、このような数学的仕組みが潜んでいて、見る人を飽きさせない。
デザインの遊び。ランドスケープでも、もっと遊び心がもてたら、と願った。

次回は空間のことについて紹介したい。



間野賢二　MANO kenji
ランドスケープアーキテクト
千葉大学園芸学部造園学科卒（1973年）
SHAH ALAM Central Park（Malaysia）
東京ディズニーランド・東京ディズニーシー（植栽）
合歓の郷・つま恋（YAMAHA Resort）
中央区築地川公園、新仙台天文台（外構）
岡谷市湖北火葬場（外構）など

デザインを読み解く

11

猿江恩賜公園の日本庭園を見る

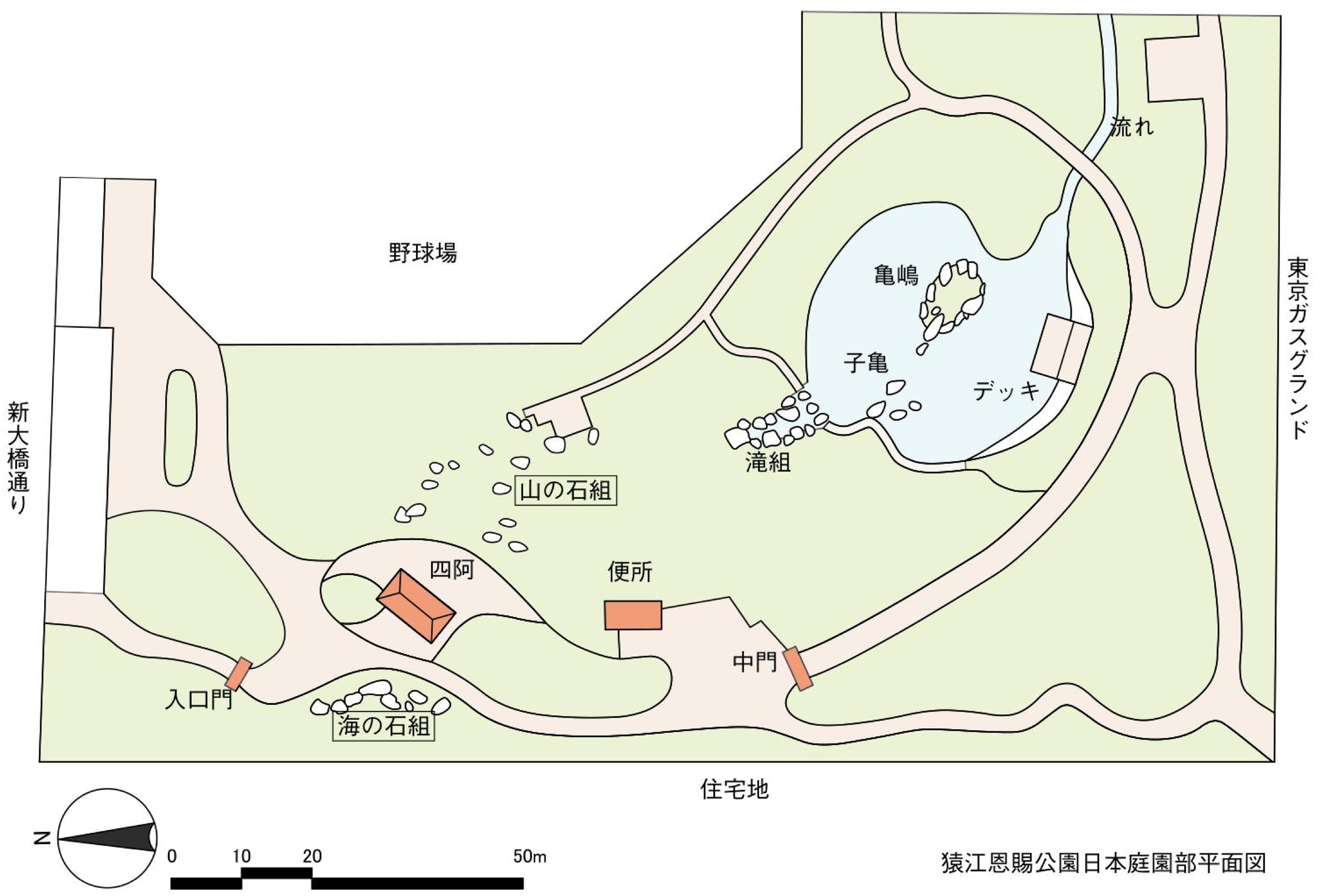
文・写真＝戸田芳樹（株式会社戸田芳樹風景計画）

協力＝猿江恩賜公園

ランドスケープデザイン誌の編集長、小林氏に誘われて江東区の猿江公園にある日本庭園を訪ねた。この地は江戸時代から続く貯木場で、後に明治政府の御用達となり、1932年にその一部（現在の南園部）が東京都に下賜されて公園となった。北側の地区は戦後しばらく貯木場であったが、1983年に公園として完成、現在の姿となった。公園は新大橋通りを挟み南北合わせて14.5haの規模を持ち、スポーツ施設、芝生広場、ジャブジャブ池等様々な施設によって、周囲の利用者に親しまれている、言わば何処にでもある都立公園である。その公園の中に日本庭園がどの様な空間として存在しているのか、興味津々で出掛けてみた。



西部の「海の石組」



猿江恩賜公園日本庭園部平面図

猿江恩賜公園

新大橋通りをはさんで野球場、庭園のある落ち着いた雰囲気の南園とテニスコート、広場、遊具のある開放的な北園に分かれる。大正13年に昭和天皇の成婚を記念して、現在の南側地区が明治政府より東京市に下賜され昭和7年に旧猿江恩賜公園として開園。北側地区は昭和21年の計画決定から38年後の昭和58年に全園開園した。

【問合せ】
tel.03-3631-9732
www.tokyo-eastpark.com

心を鷲づかみにする伊藤邦衛の石組群

日本庭園の入口部

「公園の南園部に怪しい日本庭園がある」と小林氏にささやかれて来てみたが、それらしい空間が見当たらない。探し歩いていると、通りに面した西の端にひっそり佇む門を発見して近づく。一般に入口付近の景観は「真・行・草」で表現すれば真のデザインを用い、カッチリした格調の高い空間が普通である。しかしこの入口は通路幅はだらしなく広い上にアプローチが長く、その上中途半端な形に曲がっている。どうにもしまらない景観で、これから新しい空間を訪れるという期待がまるで湧いてこない。

すごい石組みに遭遇

「ここはなんなんだ」と思いながら門を通って中に入ると正面右手にもの凄い量感の石組が現れた。さらに進むと左手に四阿があり、建物のフレームを通して石組が山畔に展開している。一瞬にして場の空気感が激変した。これは凄いと、先程の失望感から骨董市で掘り出し物を見つけたたような喜びがあふれてきた。

この石組群の第一印象は今まで見た事も無い異端の佇まいと感じた。ともかく迫力満点で、心を鷲づかみにしてしまうエネルギーがある。中心にある四阿は長方形の入母屋造りで、そこに座れば東西の石組が顔前に広がる。金縛りにあったが如くそこに腰を下ろし、東西の石組群をじっくりと観賞する覚悟を決めた。

四阿から見て西側の平坦地には20個程の石を集中して扱い、水平方向を強調した石組群となっている。石の表情は黒くて落ち着いているが、その奔放な姿はまるで狼の群れが狩りをしている様か、大波が岩に当たり砕け散るようにも捉えられる。

この石組を一筋縄で解けないのは四阿からの視線と、石組前面の通路からのシークエンスの見せ方があるからだ。この両方を満足する伊藤節満開の石組群には、その世界に没入して観賞するしかないであろう(後に伊藤邦衛作庭と確認)。

ひと時が経ち、江戸時代に当地は木材の貯木場であった事を思い出した。そうか、ここで表現しているのは「海の石組」ではないだろうか。確かに波の動きが石組から感じられ、特に左手の立石は見る角度により、まるで葛飾北斎の波頭のように激しい。

中心にひときわ大振りの立石を据え、左右に天端が平らな立石を従えた骨格とし、前面の伏石で流動感溢れる海の風景を表現している。左端にある石はあたかも高速で突っ走る舟石で、公園の進行方向を表す様に見せるのは伊藤の遊び心であろう。



白波が立っている石組の表現



この角度からは比較的穏やかな海の表現



アプローチと入口門

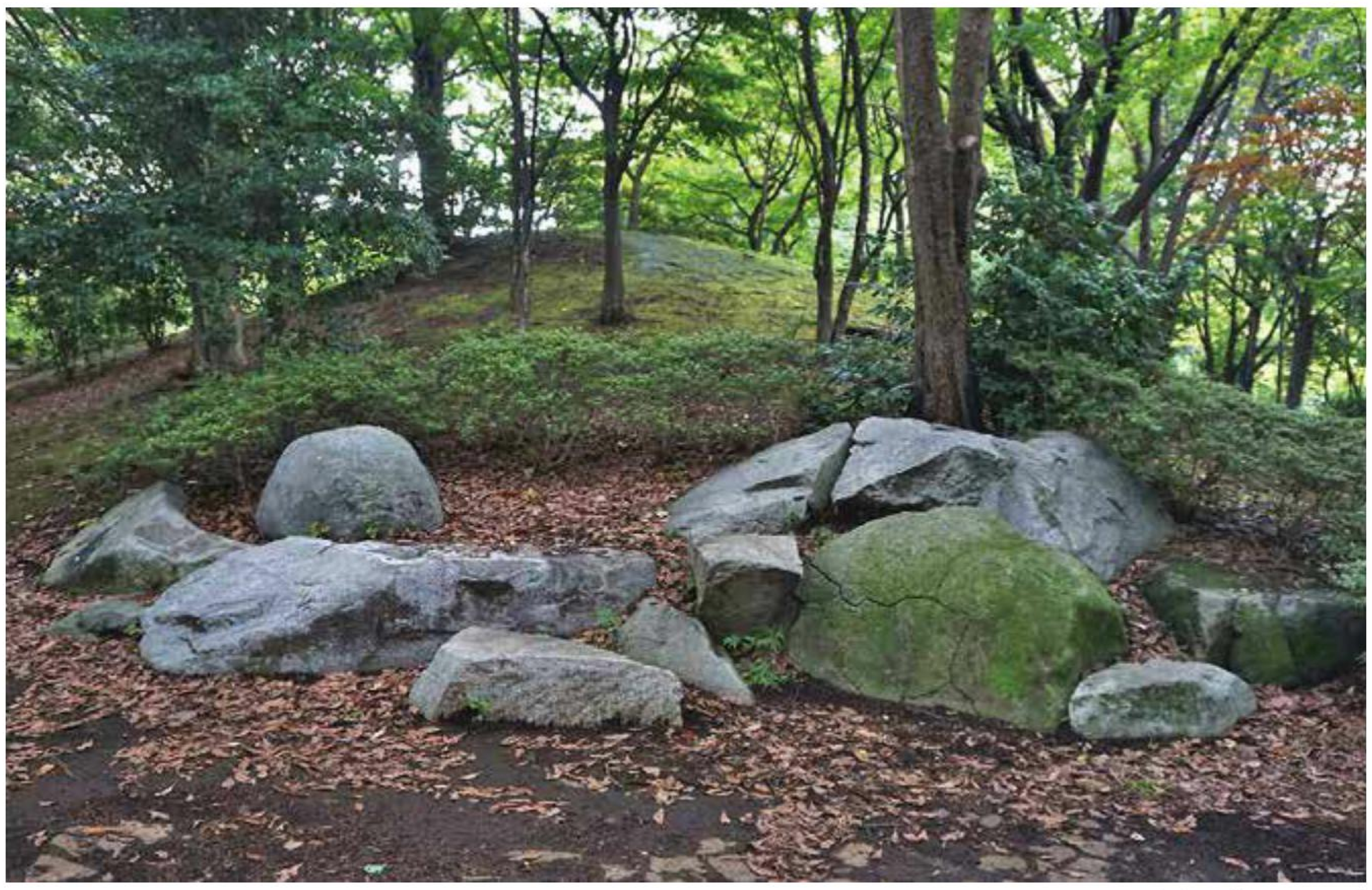
振り返って反対側の石組に目をやる。ここは築山に白い石を使い、四阿を取り巻く様に幅広く構成している。いくつかの石組群が高低差を付けて組まれ、離れたり、重なりあって複雑な石組景観を作り出している。見方によれば磐境の様にも見え、厳かな雰囲気もただよう。細かく石組を見てみると3石を基調とし、それに数石補強して景をつくっている。古くから日本庭園は3石組を三尊石と呼び、中心の石を高く据えていたが、伊藤の石組は全くのオリジナルである。

- ●左下部①の石組は3石を組み合わせ大きな1石を表現
- ●右下部②は中央石を低くし、石の節理の方向で動きを表現
- ●左上部③は3石を重ねて奥行きを表現
- ●右上部④は右側の石を極端に大きくし逞しさを表現

石組群を飛石に従って歩くと、石の重なりが変化するシークエンスと、囲われ感が素晴らしく、ここを「山の石組」と呼ぶ事とした。これらの力強い石組は中島健や小形研三、まして小川治兵衛の持ち味ではなく、ベテランの庭師の組み方でもない。伊藤邦衛しか出来ない石組と思ったがパンフレットには作庭者の記載がない。後に伊藤が作庭した事を確認したが、いつもの事ながら造園家の名前が記載されてなく、とても残念な気持ちだ。

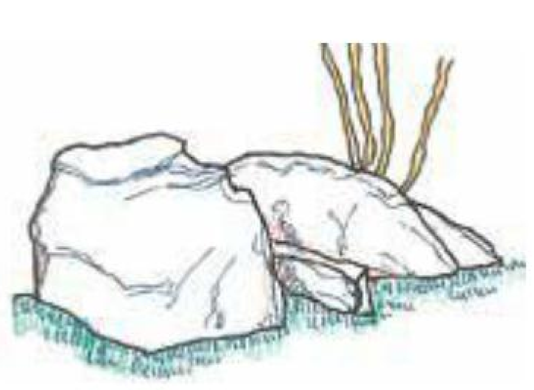


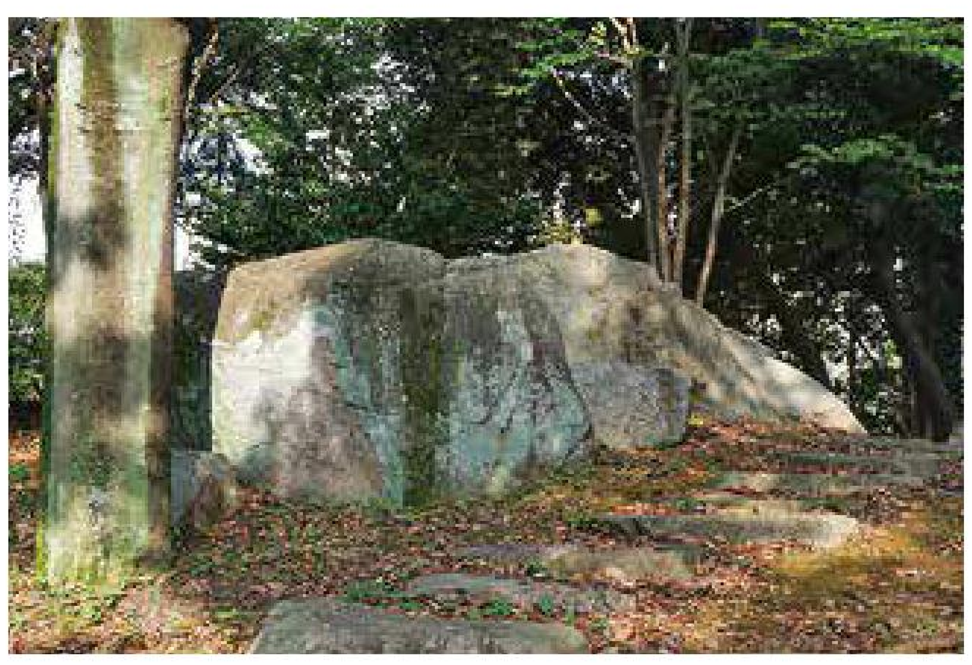
石組の間を歩く山の路



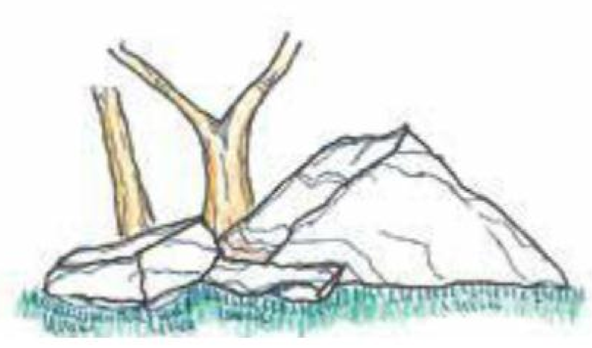
東部の「山の石組」

③左上部の石組



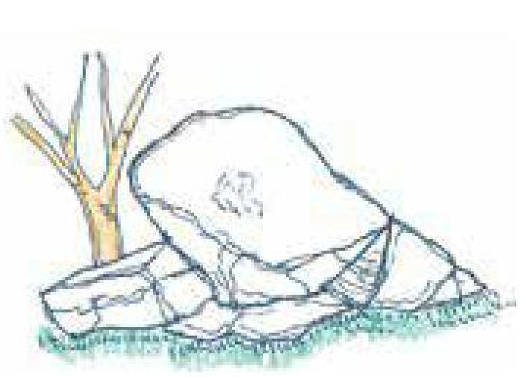


④ 右上部の石組



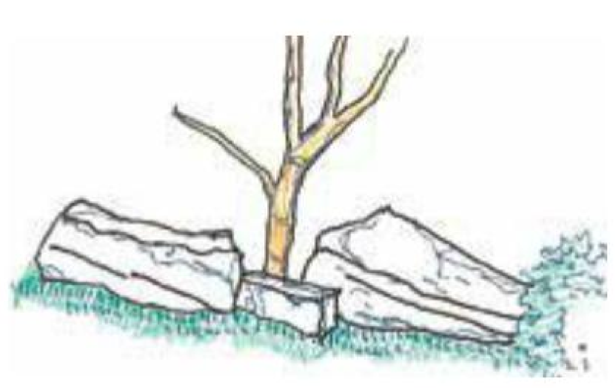


① 左下部の石組





② 右下部の石組





「あ・うん」の関係

東西、2つの石組群をよく観察すると「四阿」を挟んで日本の美特有の「あ・うん」の関係が見て取れる。西側の「海の石組」は貯木場であったオマージュで、東側の「山の石組」は日本庭園の原型、磐境へのリスペクトと読み取った。細かく見れば「海の石組」は黒石、「山の石組」は白石を、これも対比のひとつ。そしてワンセットの「海の石組」に対して、いくつか分節して組んだ「山の石組」。「海の石組」が荒々しい水平強調であれば、「山の石組」は優しく厳かな垂直強調に見える。この様な石組の相互バランスを「あ・うん」の美学で分かり易く構成した日本庭園は珍しく、数多くのヒントが秘められていた。

さらに石組を観察したが、古くから日本庭園で表現された、思想的、宗教的な事象の反映はなく、即物的で自然的な描写と見て取れた。しかし植治を代表とする近代の庭園に現れた伏石組の造形でもなく、重森三玲風の造形でもない、作者の強い意志表現が伝わってくる。まさに伊藤邦衛オリジナルな世界が展開した石組に思いがけないところで、私は出会った。

巨大な亀石組の出現

パワースポットの様な石組群を抜け、園路を進むと突然視界が広がり水面が大きく見えて来る。そこでもう一度驚かされる景観に遭遇。池の中島に亀島が見えるが、かなりデフォルメした構図で見せている。これはカメと言うよりも怪獣「ガメラ」では無いかと思える程の大きさだ。さらに大亀の頭から左先を見ると、体を沈めて頭だけを大亀に向けた小亀も配されている。鶴と亀のセットで吉祥を表わす最も伝統的な日本庭園の様式をここでは意図的にくずし、大亀と小亀で表現した創造力と破壊力がすばらしい。

それに対して護岸は石組が少ない美しい曲線で構成し、亀島だけを一点豪華に浮かび上げている。左手奥にある滝は3段落ちの豪華なつくりで、伊藤の腕の確かさがうかがえる。

園路側に作られたデッキは高さ、大きさ共に唐突で何かおかしなプロポーションである。


四阿から「海の石組」を見る


四阿から「山の石組」を見る


デッキと亀島


大亀と子亀の造形表現


真正面から見ると鼻の穴があった

計算されたデザインとは思えず、「もの」が置かれているだけに見えるのだが、伊藤がこの様な状況を許す訳がない。計画の途中で何か大きな問題が生じたのであろうか。この亀島石組も石組自体のクオリティは高いが、池空間全体のバランスを崩している。どこかの段階で伊藤は全体計画の内容より、石組だけに自身の力を集中したのではないかと、私は推察せざるをえなかった。

さらに水路は、豪華な亀石組がある中段の池から木橋の下を走り下段の池に向かう。園路に沿って、草に覆われた池の橋を渡ると、日本庭園の外に出る事となる。

歩いた結果、この庭園は廻遊式の日本庭園というよりは、通り過ぎる庭園だった事に気付いた。良い方に解釈すれば公園内を通過する新しい様式の日本庭園と見なせるが、庭園を見て廻ったという充実感がまるでない。その理由は全体構成、特に動線計画と庭園の物語性がばらばらである事に起因しているからではないだろうか。

しかし石組にのめり込んだ伊藤の造形美とその気迫は凄い。その凄さを庭師のみならずランドスケープアーキテクトの方々にも見ていただきたい最高の作品のひとつである。

人と石との関係

ここで石組に対して少し違う角度から述べてみたい。石を素材とした創作活動は古くから全世界で行われ、彫刻やレリーフの様に刻む事で作品を作り出してきた。それに対して日本庭園は自然のままに石を組み合わせ、物語を組み込んだ空間を作った。この自然石を使った芸術表現は日本独自のもので、飛鳥時代の遺構からもその姿を見る事が出来る。

その後、石組造形は時代の変化と共に様々な庭園を発展させ1500年も続いた。近代において、対比されるのは無隣庵を作庭した小川治兵衛と東福寺作庭の重森三玲である。一方は伏石が主体、一方は立石が主体だが、最も大きな違いは石組に思想性を内包させたかどうかである。重森は小川治兵衛を単なる自然の表現者であり創造者ではないと切り捨ててみせたが、どちらが庭園造形として好ましいかは各自の美意識のなせる感性であろう。

美意識は時代の空気により変化を続け、現代の石組は過去とはかなり違うようだ。イサムノグチの片腕として創作活動に参加した和泉正敏は建築家やランドスケープアーキテクトからの評価が高い。氏の表現は自然石と彫刻の中間領域の微妙な造形美を狙っていると私は思う。石を大きく割りその質感や組み合わせにより新しいスタイルを創作している。それは自然石そのものではないし、人間の意志だけで作ったものでもない。その上偶然性も加味された自然と人が共演した石組、言わばエアーポケットの様なタイルが今日のデザイナーから支持される。その理由は人間の感性が自然と切っても切れない関係にあるからではないだろうか。



少し見にくいが三段に落水する立派な滝石組

伊藤のこだわりの石組

ここで猿江公園の石組をもう一度見てみよう。伊藤が創作した石組を庭師達は「石組の原理」にかなってないと否定する可能性は高い。亀島の表現は日本庭園の亀の表現ではなく、映像に現れる「ガメラ」怪獣ではないかと思う程デフォルメしている。日本庭園の原理、原則はどうなっているのだと言われそうだ。しかし伊藤にとって日本庭園の様式・手法の枠はあまり意味が無く、自分の感性を信じて作庭しただけだ。亀島に対して鶴島を置くのではなく、池から頭だけ出して小亀を対峙させたのは、なんという大胆な挑戦であり皮肉だったのではあるまいか。

日本庭園は囲いがあり限定した空間で価値を発揮する。しかし取り留めもなく広がりのある公園において日本庭園を表現するには、これくらいのインパクトの強い演出性が必要と感じ、伊藤は作庭したのではないだろうか。面白さと危うさが同居しているこの庭園に、だからこそ私は惹かれたのかもしれない。

伊藤邦衛氏の逝去

伊藤のパッションと、サービス精神に溢れた日本庭園を見て、原稿を書いていた2年前の2016年9月29日に突然訃報が入った。その年の年賀状も、穏やかな日々を過ごしているとの書状だった。92歳という長寿を全うされたが、これで昭和の大作庭家が全て世を去ったという現実に直面させられた。日本が戦後の復興を成したと同時に文化力を高めた時代に、日本の伝統を絶えず注視しながら公共・民間を問わず新しい庭園空間やランドスケープ空間を作り続けた伊藤邦衛氏に、深い感謝を捧げたい。



曲線が美しい切石護岸



流れに架かる橋



草で覆われた下の池



手前は中国庭園で、雙秀橋と呼ばれる橋を渡って中之島にある日本庭園に入ります。
雙秀橋とは「二つの優れたものをつなぐ橋」という意味だそうです。

タウンスケープレポート

|第15回|
シンガポール
日本の手によって蘇るシンガポールの国立公園

文・写真＝中野 竜（株式会社コトブキ）

2017年1月に「日本のランドスケープ事務所が参加するチームが、シンガポールの国立公園の国際デザインコンペで最優秀賞を受賞した」という嬉しいニュースはいまだ記憶に新しいところだと思います。

シンガポールの西部にあるジュロンレイク地区は1960年代に工業団地とニュータウンを持つエリアとして開発されました。のどかな農村地帯であったこの辺りはシンガポールの工業化を図る上で重要な土地とされ、主要な経済特区として発展していきました。

国際コンペの対象となったジュロンレイクガーデンはジュロンレイク地区の中にあって、水と緑の豊かな国立公園として整備されました。長きにわたってシンガポールきっての憩いの場として親しまれたジュロンレイクガーデンですが、長期にわたって更新が行われておらず、入場者数も減少の一途をたどっていました。

ジュロン湖にはいくつかの人工島が築かれ、その中の一つに日本庭園「星和園」があります。地元では単に「Japanese Garden」と呼ばれており、国外にある日本庭園としては最も広い面積を持つ庭園と言われています。

星和園は国内外で活躍した作庭家、中根金作氏によって1970年台前半に造られた日本庭園で、12haもの広さを誇ります。熱帯の植物が多用され、最初は「これが日本庭園？」と思うような風景が広がっていますが、太鼓橋や鳥居など日本的な意匠もふんだんに取り入れられ、日本の文化を海外に紹介するという意味では非常に成功したと言われています。

ジュロンレイクガーデンが日本人の参加するチームによってどのように生まれ変わるのか、非常に楽しみです。



灯籠や石組みなど日本庭園の要素がありながらも、植栽が熱帯地方の植物で構成されているため、若干の違和感があります。







【右】参道でもないのに鳥居が置かれる違和感。鳥居がアイコン(象徴)として扱われ鳥居の意味をなしていないところは、ご愛嬌でしょうか。【左上】太鼓橋もきちんと作られていましたが、木部用塗料でした。【左下】鳥居の解説自体はしっかりなされていましたので、よしとします。

この記事は中野竜氏が海外を視察したレポートをフェイスブック「コトブキ タウンスケープ(https://www.facebook.com/kotobukits)」に掲載したものを再編集したものです。

Overseas Landscape Report_vol.09

Mill Creek Earthworks Park

Designer : Herbert Bayer　Location : Kent, WA　Year Built : 1982

Text [Japanese & English] & Photos by Hiroshi Ichikawa [Chiba University, Graduate School of Horticulture]

今夏、西日本を中心に全国的被害を与えた平成30年7月豪雨は、平成最悪の水害と言われている。被災された方々に思い馳せながらテレビの報道などを見る度に被害の大きさに言葉を失った。災害に対してはこれまでのグレーインフラだけではなく、グリーンインフラを織り交ぜた対策の必要性が議論され始めてはいるものの、日本での展開にはまだまだ時間がかかりそうである。100年に一度、1000年に一度という災害にどのように備えていくのかを考えた時、先行した海外のプロジェクトから学べることは少なくない。

ワシントン州シアトルの南に位置するケント市にある、ハーバート・ベイヤーが設計したMill Creek Earthworks Parkは、100年に一度、10000年に一度という水害を想定したデザインになっている。1982年に完成したこの公園は、以前紹介した（No.116）Robert MorrisのJohnson Pit #30と同様にEarthworks:Land Reclamation as Sculptureというシンポジウムを介して企画されたKing Countyのアースワークの中心プロジェクトである。

設計者のハーバート・ベイヤーは、バウハウスで教鞭をとり、芸術・建築など様々な分野での活躍で有名である。ランドスケープデザインのプロジェクトとしては、1973年にコロラド州のアスペンでAnderson Parkを設計している。晩年のプロジェクトであるMill Creek Earthworks Parkは、水害抑止という防災的役割と、公園という社会的役割の両点から完成度が高いプロジェクトとして知られている。

本プロジェクトの設計で特に留意されているのが水害である。設計以前から水害に悩まされていたケント市であったが、エンジニアの提案したダム案には満足していなかった為、ベイヤーのダムの機能を果たしながらも幾何学的で美しいデザインの公園の提案を快諾したとされる。本プロジェクトは、山の斜面の中腹にあり、豪雨時に調節池として機能しなければ、下流の市街地に被害が及んでしまう。普段は公園の脇を流れる川を分流させ公園内に引き入れ、公園の下流側で元の川に合流させているが、豪雨発生時には、ダムのように公園内に水を貯留し、写真にある大きな排水設備から少しずつ排水していくように機能する。100年と10000年に一度の豪雨の想定を行い、そのどちらにも対応可能になっており、豪雨時には公園内にある橋やマウントは高台として避難可能な場所となる。

実際に訪れた時にまず感じたのは、アースワークとしての造形の美しさである。これは、モリスのJohnson Pit #30にも共通することであるが、窪みを形成する傾斜が心地良い。造形の美しさが際立っているので、利用者は調整池としての機能に関して言われなければ気がつかないのではないであろうか。橋をくぐり公園の東側に進むと、ダブルリングの池よりも大きな池があり、カモの親子や魚の姿も確認できる。広々とした西側から東側に進んでいくにつれ、木々が生い茂りより自然的な印象が強い空間となっていく。30年以上前に設計されたという古めかしい印象はまったくなく、多くの人が公園として利用していることからもパブリックな空間としての完成度もとても高いと感じた。

Mill Creek Earthworks Parkでベイヤーは水害対策とパブリック利用という二つの役割を、幾何学的で美しい造形のアースワークで結びつけたのであろう。今後、西日本を中心に被害を与えた今回の豪雨対策として、防災と公園という二つの機能の両立は注目を集めると考えられるが、その二つを両立可能としたアースワークの造形力にも注目が集まって然るべきかもしれない。



下流側にある大きな排水設備



It is said that the heavy rain in July this summer that caused the nationwide flood damage mainly in the west side of Japan is the worst flood damage in the Heisei period. I feel sorry every time I saw TV news and newspapers. For these disaster prevention, it is said that implementing green infrastructure could be beneficial for flood prevention, but it seems it requires time to implement in Japan. Thinking about how to prepare for disasters like once in a hundred years and once in a thousand years, there are many overseas projects we can learn from about disaster prevention.

Mill Creek Earthworks Park designed by Herbert Bayer in Kent city located south of Seattle, WA, is designed to respond flood damages like once in a hundred years and once in ten thousand years. This park completed in 1982 is one of core projects of King County's earthwork symposium called Earthworks: Land Reclamation as Sculpture which is the same as Johnson Pit # 30 designed by Robert Morris.

Herbert Bayer was a teacher at Bauhaus and is famous for his works in various fields such as arts and architecture. As a project of landscape design, he designed Anderson Park in Aspen, CO, in 1973. Mill Creek Earthworks Park, which is his later years work, is well known as a project achieving both flood disaster prevention and public use.

Flood damage is a main concern for the design of this project. Kent city has a flood control problem for a long time but the city was not satisfied with the proposal from an engineering sector which suggest creating a dam, so that the city appreciate Bayer' s proposal of a beautifully designed geometric park which also work as a dam. This project is located at the middle of the hillside, and if this place does not work as a detention pond at the time of heavy rain, the downstream resident area will be faced flood damage. Usually, water in the park is diverted from a river flowing along the park and flow into the park, then join the original river on the downstream side of the park. However, in case of heavy rain, water is stored inside the park and gradually drain from large drainage facility. This park can contain water volume of heavy rain both once in a hundred years and once in ten thousand years. Also, during heavy rains the elevated bridge and mount in the park will work as evacuation spaces.

The beauty of modeling as earth work is my first impression when I visit this project. As the same as Morris' Johnson Pit # 30, the slope is well designed and comfortable. Since the beauty of modeling stands out, visitors might not notice that this park works as a dam while heavy rain occur. Going through the bridge to the east side of the park, there is a pond larger than the pond of the double ring and I can see ducks and fish there. As I walk from the west side to the east side, I can see lots of trees and green so that the east side of the park gives me more naturalistic impression. It is hard to imagine that this project is built in 1980s and since I see many people using this park, the quality of both flood protection and public park is very high.

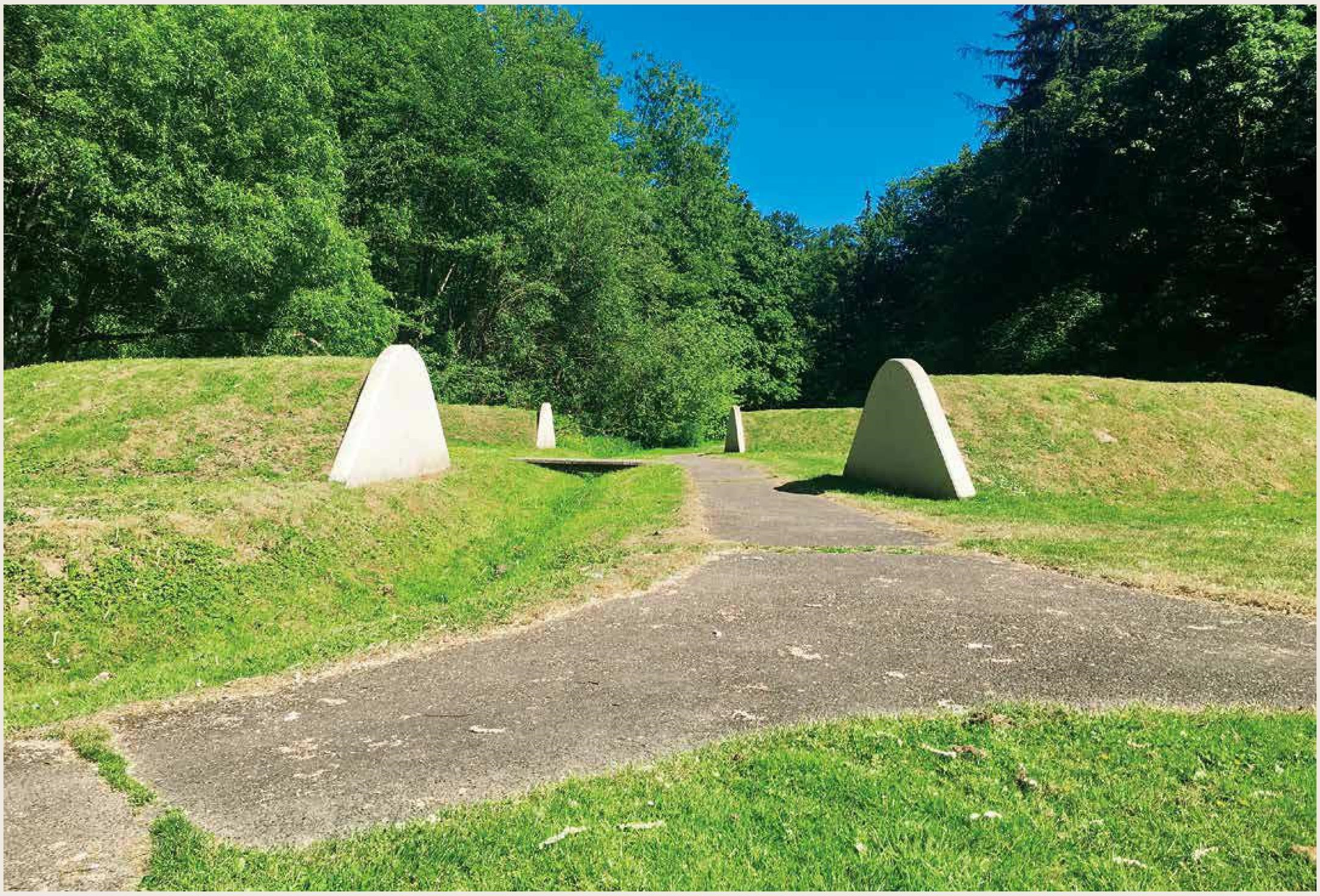
At Mill Creek Earthworks Park, Bayer has linked the two functions: flood control and public use, by using a beautifully modeled geometric earthwork. In Japan, for reacting the heavy rain in July, an argument of achieving two functions: flood control and public use in one place will be attracted people' s attention. However, we should not overlook the design power of earthwork which successfully achieved the coexistence of flood control and public use.

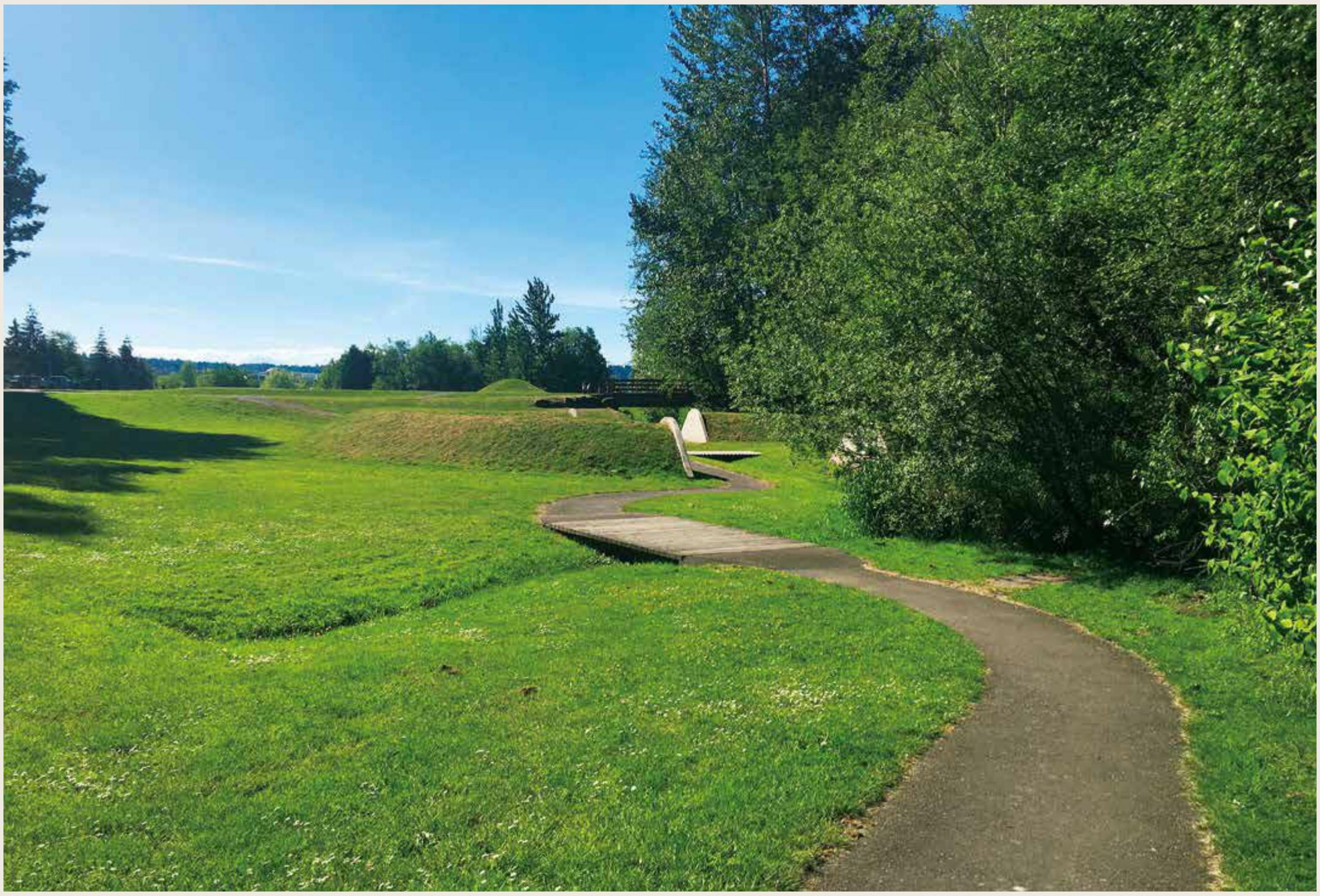



災害対策とパブリック利用を結びつけるアースワークの造形



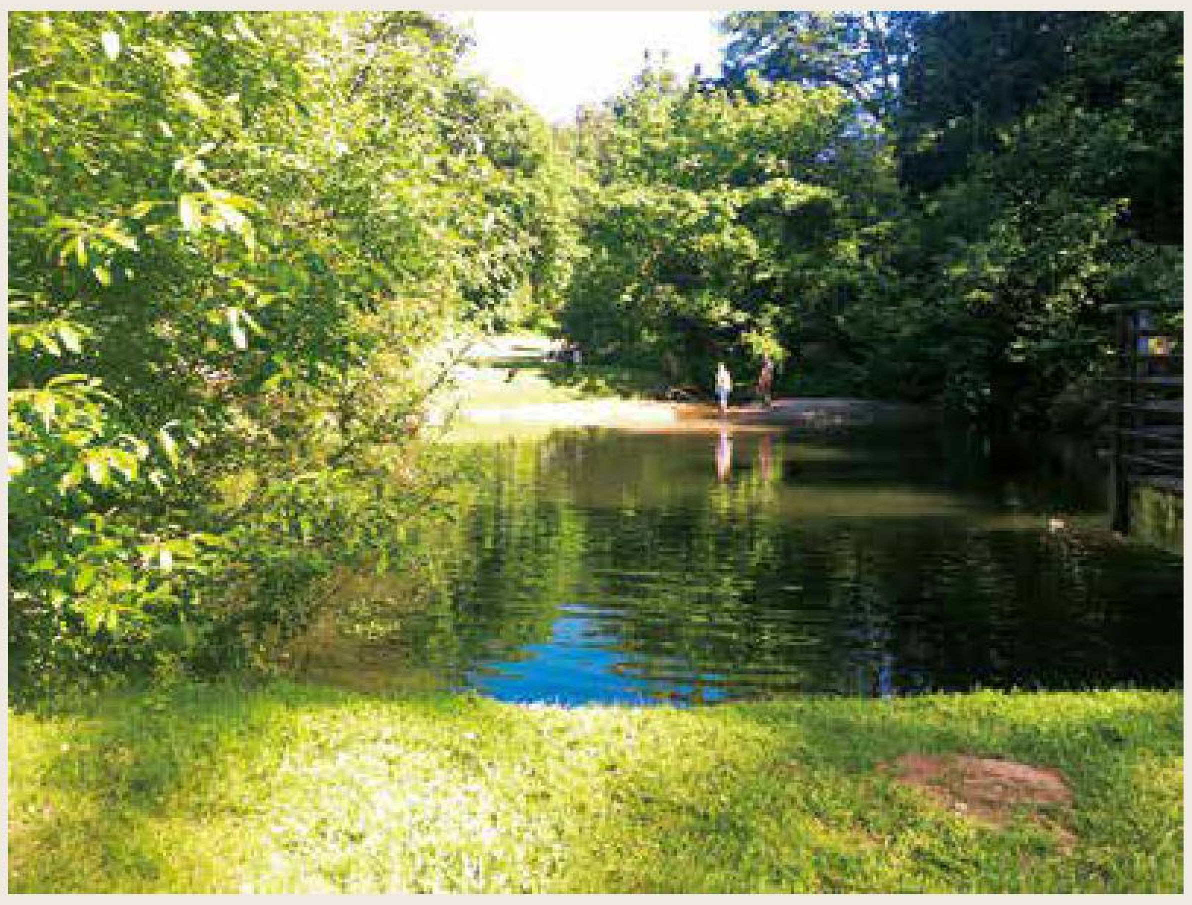
公園内にある橋（上）やマウント（下）は豪雨時には高台として避難可能な場所となる





公園内部から見ると高低差の付け方が観察可能である









【中段左】川から引き入れた水は公園内を流れる【中段中】東側にある池は通常時でも水が張っている【中段右】カモや魚の姿も見ることができる【下段】公園内を流れた水はダブルリングの池を通り本流に戻る



市川 寛 Hiroshi Ichikawa

国際基督教大学卒業、千葉大学園芸学研究科修士課程在学中。University of Sheffield、University of Washington MLA 過程への一年間の短期留学を経験。世界各地のランドスケープ作品を回りながら勉強中。

［Notable project in this issue］

ホテルで活きる歴史庭園の再生と保存

フォーシーズンズホテル京都（京都市東山区）

ランドスケープデザイン＝株式会社ランドスケープデザイン　文＝塚本英文（株式会社ランドスケープデザイン）
写真提供＝フォーシーズンズホテル京都、京都東山ホスピタリティアセット特定目的会社

FOUR SEASONS HOTEL KYOTO［Higashiyama-ku, Kyoto city］

Landscape design by Landscape Design Inc.　Text by Hidefumi Tsukamoto [Landscape Design Inc.]
Photo by Four Seasons Hotel Kyoto, & Higashiyama Hospitality Asset Tokutei Mokuteki Kaisya



京都市内の東山地区に建てられた外資系ホテルのランドスケープである。計画地は東山の山麓と市街が接する場所で、古くから皇族・貴族や武士の保養地として親しまれてきた。敷地には平家物語に平重盛の山荘と記された積翠園(しゃくすいえん)と呼ばれる庭園を含む。

本ホテルの計画にあたっては、以下のような課題が挙げられた。

●国際的な歴史観光都市において、インターナショナルブランドホテルがどう「京都らしさ」を表現するか？

●平安時代にまでさかのぼる歴史庭園をどう保存・再生するか。ホテルの一部としての歴史的庭園の再整備、維持管理、公開のあり方。

●L形でかなりの高低差がある敷地の処理と、妙法院側の歴史的景観の取込み。

本記事では、これらの課題に建築設計者、ランドスケープ設計者、造園施工者がどう対処していったかを記すことで、プロジェクトのユニークさを浮かび上がらせたい。

塚本英文（株式会社ランドスケープデザイン）



周辺環境

計画地は東山の山麓と市街が接する場所で、周辺は大規模な寺社が多い。東山とは比叡山から南の稲荷山まで続く山並みの総称であり、東山山系の自然と、市内への眺望の良さから古くから皇族･貴族や武士の保養地であり、湧水による池泉庭園が数多く見られる。



東山山麓全景

敷地条件

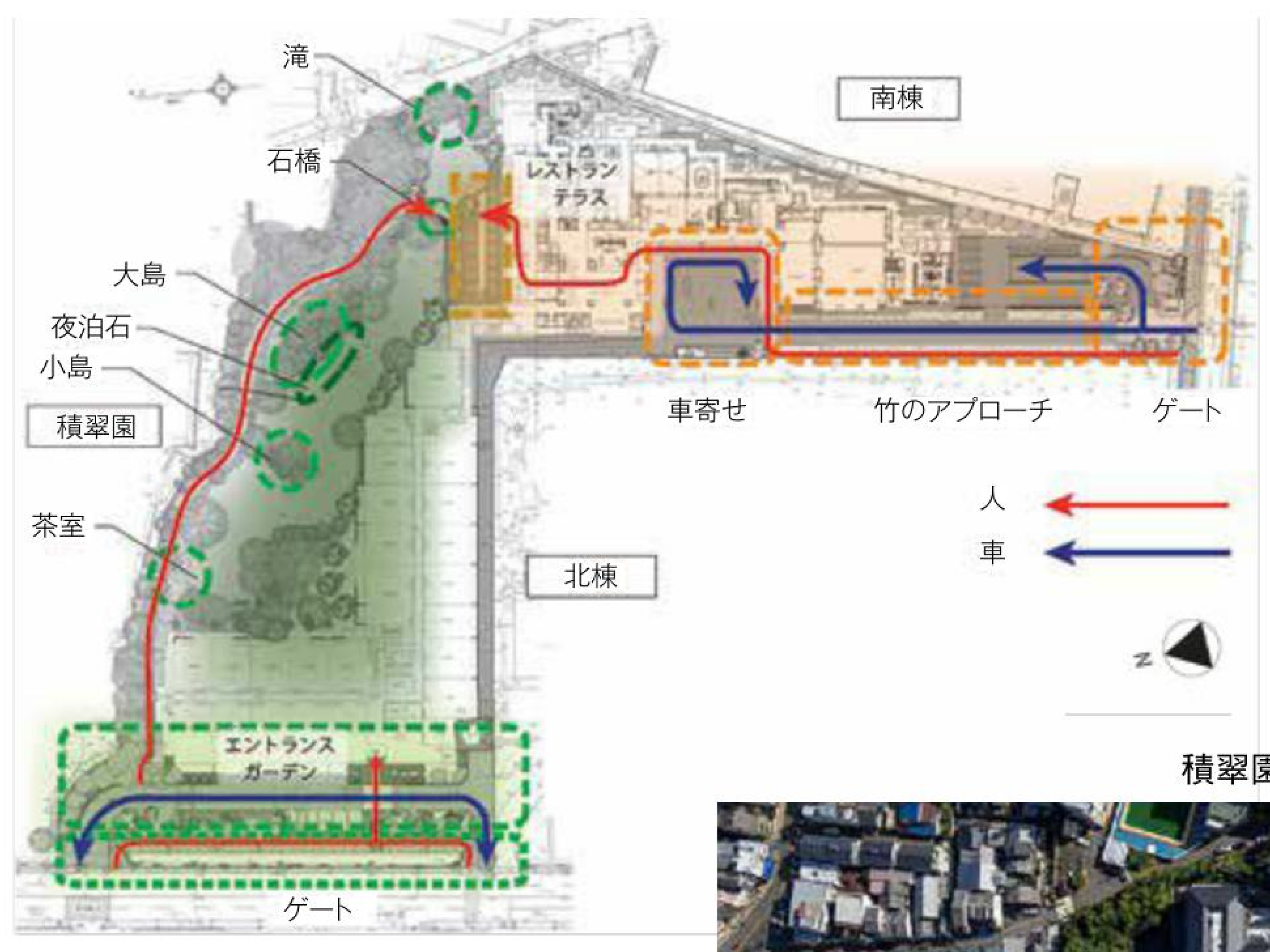
敷地は従前の病院跡地からのL型変形敷地で、東大路通りと豊国廟参道（通称女坂）に接道し、寺院･大学･支援学校に挟まれている。本来は妙法院の敷地であったため、東大路通り側から、南側のホテルゲートまで、妙法院の築地塀が連なる。妙法院側の景観は、鬱蒼とした境内林と寺院の屋根並みが期待できたが、大学および支援学校側は校舎が近接し、景観およびプライバシーへの配慮が求められた。



東大路通側上空より

2つのシークエンスとゾーニング

アプローチする方向により、ホテルの2つの側面が体験できるよう、南棟からのアプローチ沿いのシークエンスと北棟の積翠園沿いのシークエンスが、レストランテラスで融合する計画とした。南棟側は、ゲート、竹のアプローチ、車寄せの3 段階でゲストを迎え、ロビーからレストランへ続く動線の先に、積翠園がゲストを迎える。北棟は、既存の築地塀のゲートに始まり、正面の車寄せ全体を前庭ととらえ、積翠園の西端に新設された茶室から、園路をめぐり、小島･大島を見ながら石橋を渡り、レストランテラスへつながる。



配置計画と眺望

積翠園、京都市内、妙法院の3つの眺望を最大限に享受できるように客室が配置された。北棟のエントランスは東大路通り側に設けてあるが、ホテルへのメインアプローチは南側のゲートからとなり、車寄せはかなり奥まった位置にある。南棟は建築ボリュームが、道路からかなりセットバックしているため、近接する大学との圧迫感を緩和している。

積翠園と妙法院の庭園に挟まれた客室群





蓬莱思想に基づく直線状に並ぶ夜泊石と大島

1.現地調査と課題

計画に先立ち、従前の施設が撤去された状態で、水系·植栽·護岸·隣地との境界等の状況を調査し、以下の課題が浮かび上がった【図-1】。

①庭園としての植栽の再整備
②水系システムのリニューアルと水質改善
③滝の再生
④石組み、石橋の保全
⑤園路の整備

＜文献に基づいた再生方針＞

再生にあたっては、1937（昭和12）年に行われた重森三玲氏の実測図とその後の著述を手掛かりに進めた。文献では、平安時代の池泉舟遊庭園の特徴である蓬莱思想に基づいた大島、船を模した夜泊石、小島の石組、荒廃した滝石組に対し、鑑賞する庭としての整備の必要性が論じられている。これらの平安期の庭園の石組みの保全、水景の再生、中低木を中心とした植栽の層形成を整備方針とした。



【図-1】現地調査と課題



既存の石組みを使用し再生された滝

2.水系の回復と滝の再生

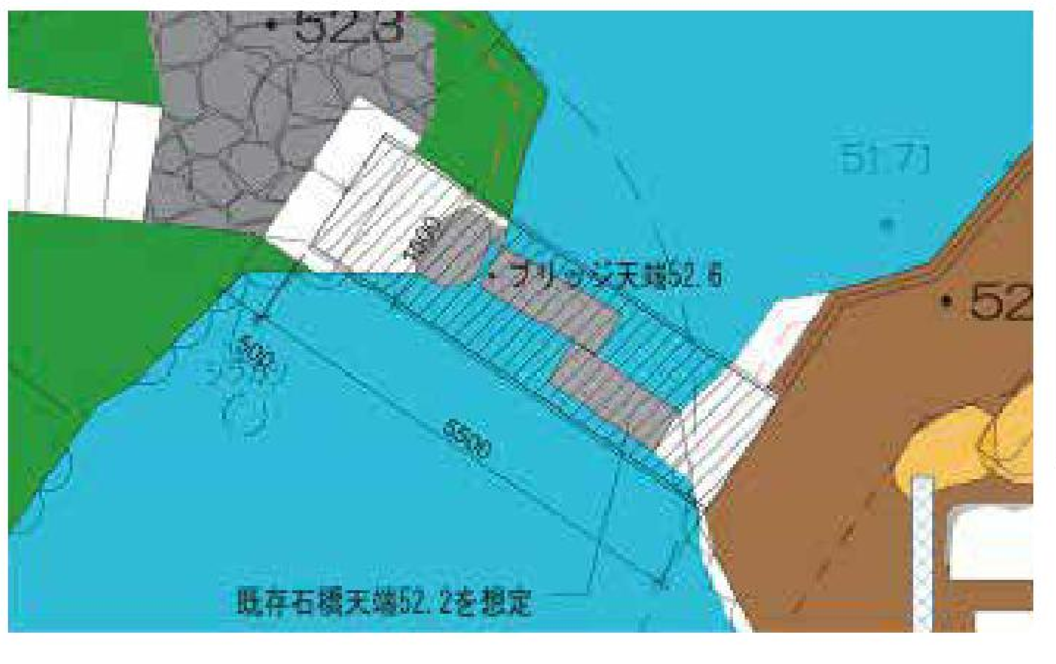
荒廃した滝の石組みを再利用し、布落式の滝を再生した。50日程度で入れ替わっていた池への地下水の供給量を見直すとともに、給水先を滝口に移設することで、東山の山麓から池に水が流れ込むことになり、渓谷の沼地を使用して作庭されたであろう本来の水景の在り様が再生された。

3.石橋の保全と機能の両立

対岸をつなぐ2つの橋のうち、保全が必要であり、唯一の動線である東側の石橋は構造的に脆弱であり、通行に使用するには安全ではなかった。このため、様々な保全・補強案を検討したが、最終的には強化ガラスで覆い、石橋を床面に垣間見ながら、安全に渡れる橋とした。

再生された池の流れ







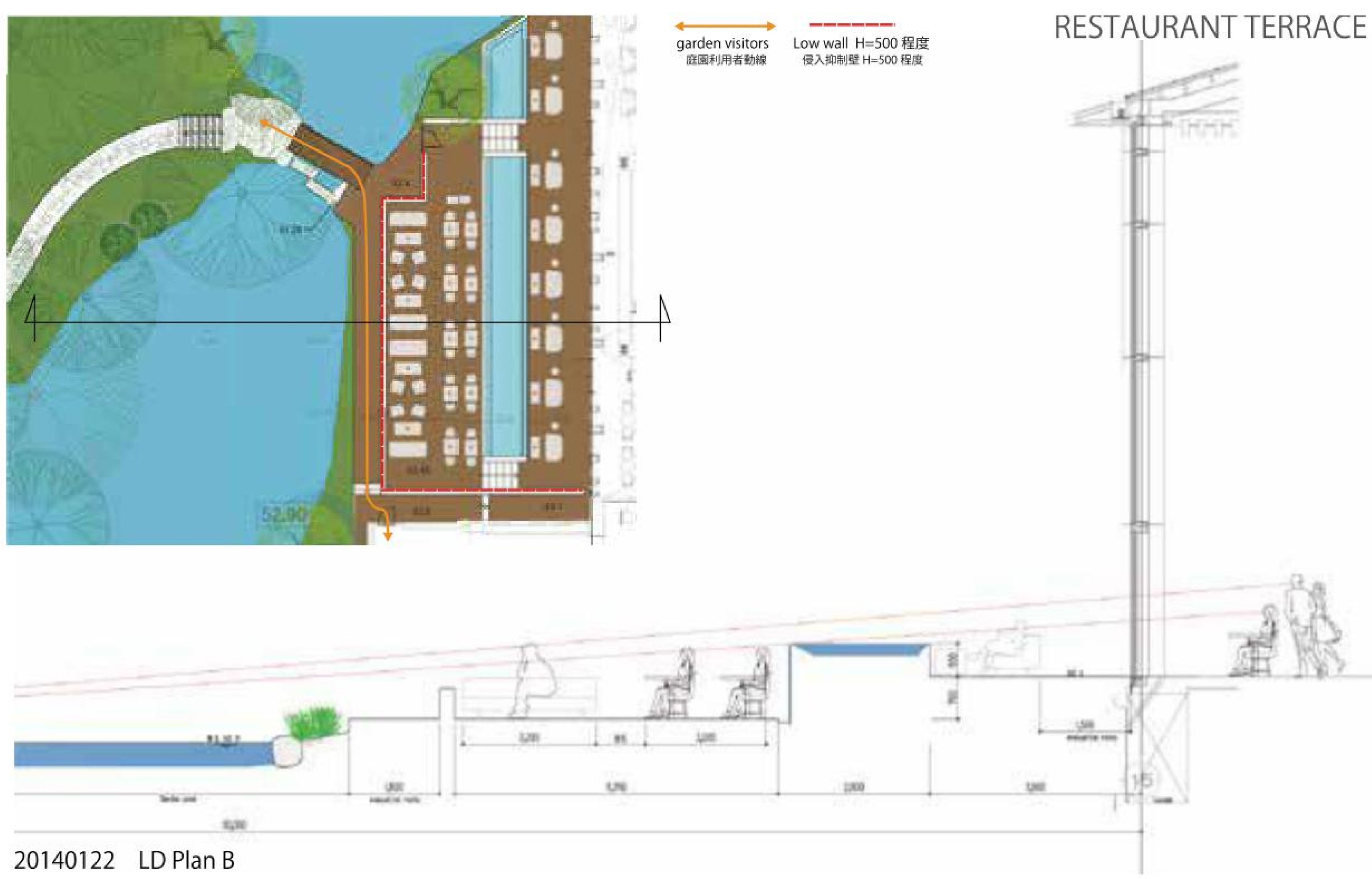
【検討案】
既存石橋を補強したり迂回ルートを設けるなど、保全と安全性の面から様々な案を検討した



既存の石を保全したガラスの橋

4.ゲストを水面に近づける

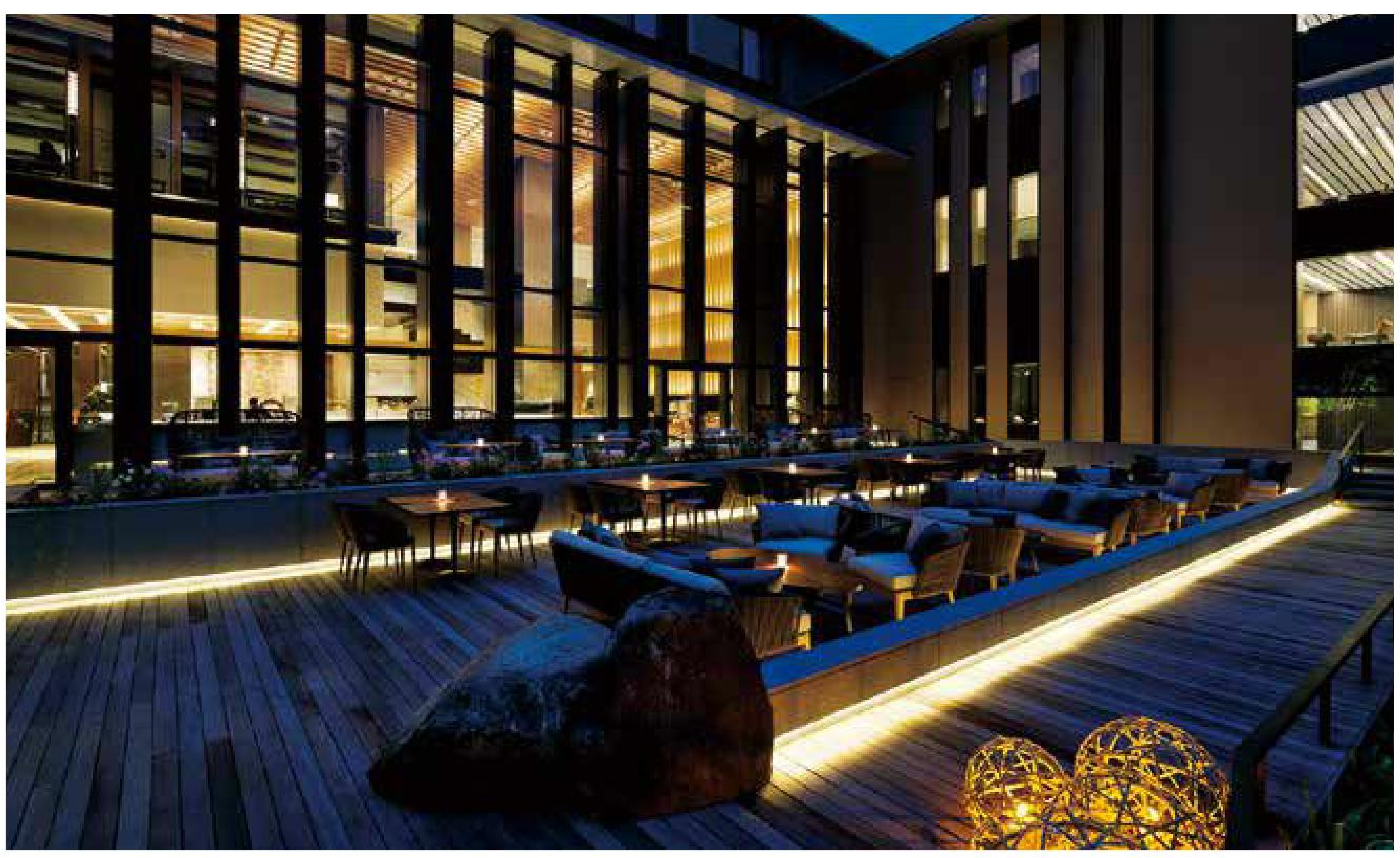
計画ではレストランテラスと茶室が庭園の回遊の起点となる。特にレストランテラスは、最もパブリックな場所であり、すべての来訪者が積翠園を最初に見る場所である。このため、テラスに段差を設け、下段はなるべく水面に近い位置から庭を鑑賞できるとともに、上段のテラスからは視線を邪魔されずに、庭を鑑賞できる断面構成とした。



レストランテラス計画断面図



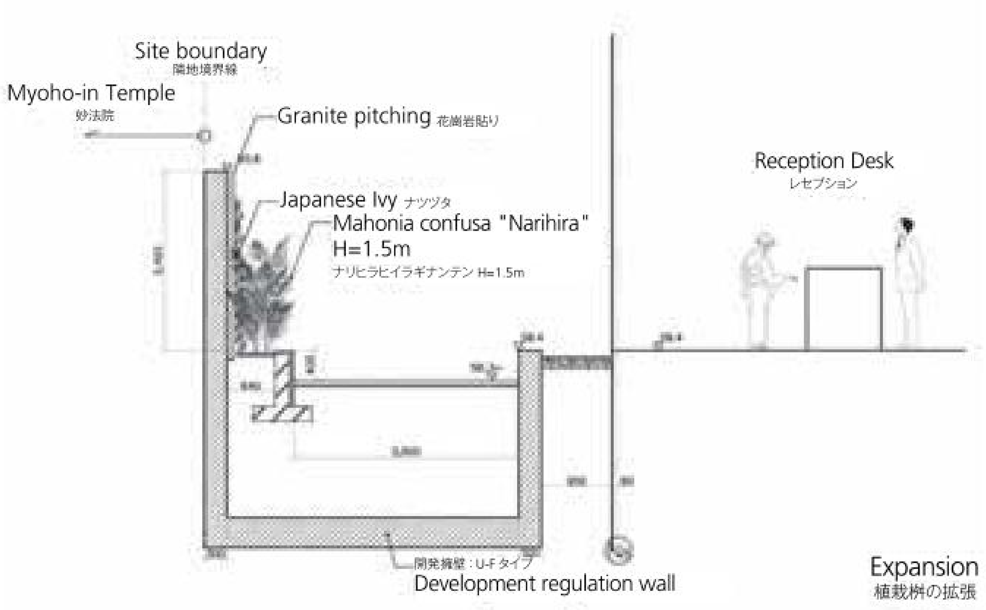
レストランテラスか中段からの積翠園

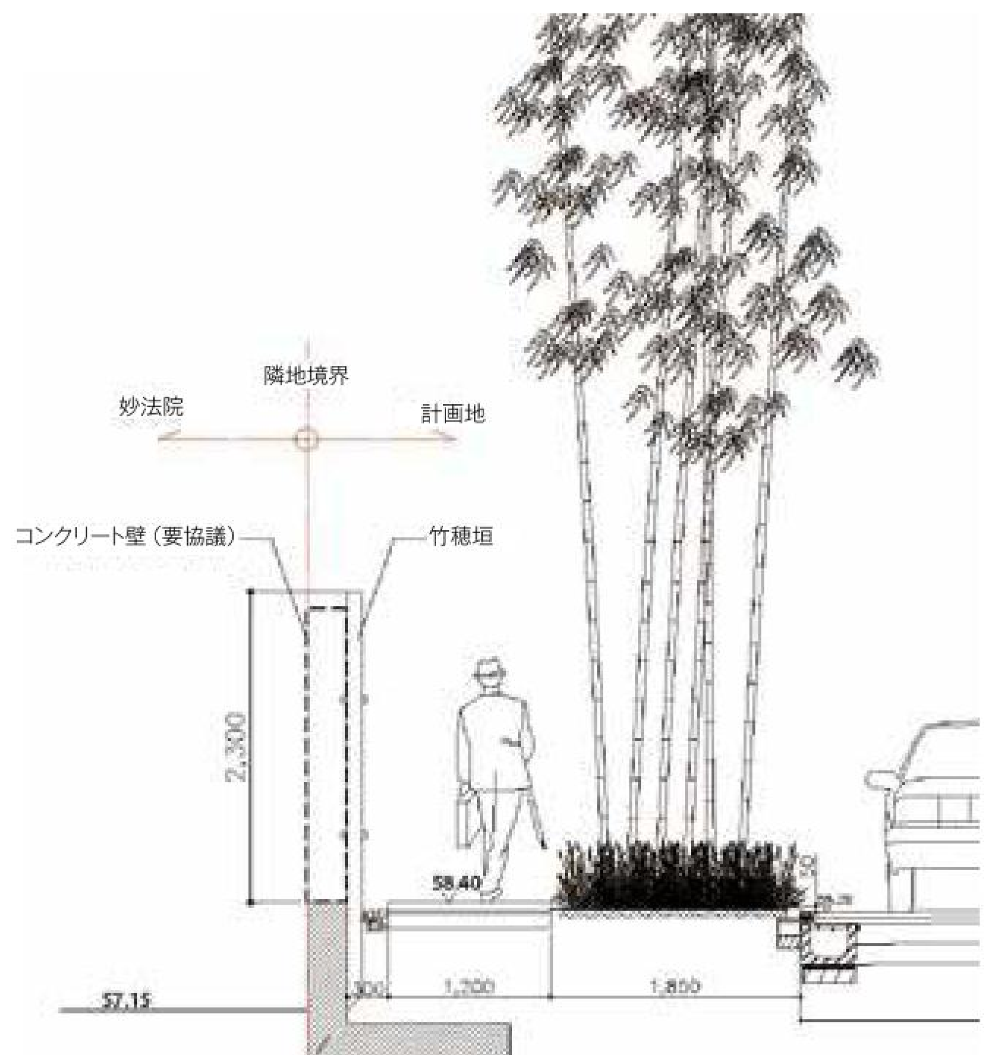


レストランテラス夜景

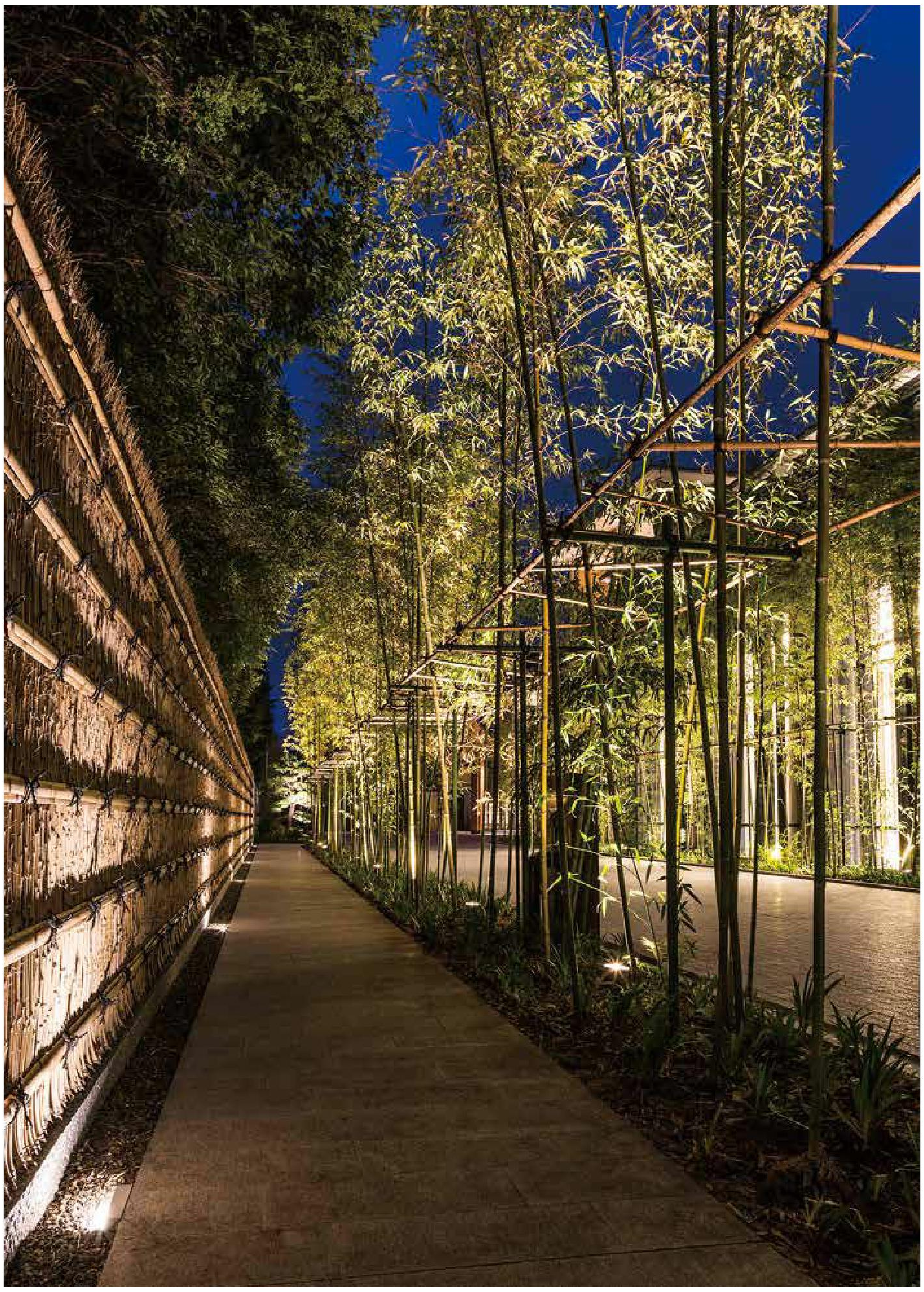
境界のデザイン

ホテルの客室やパブリック施設には、様々な方向に開口部がある。また、敷地に接する延長距離が長く、隣地の状況も異なっていた。室内から見たどの風景も、全体コンセプトを整合するよう素材･植栽をシームレスに組み合わせた。





竹穂垣断面図



妙法院の園林を借景とする竹穂垣とアプローチ園路



客室前の擁壁と植栽桝、板塀を組み合わせ圧迫感を和らげた境界壁

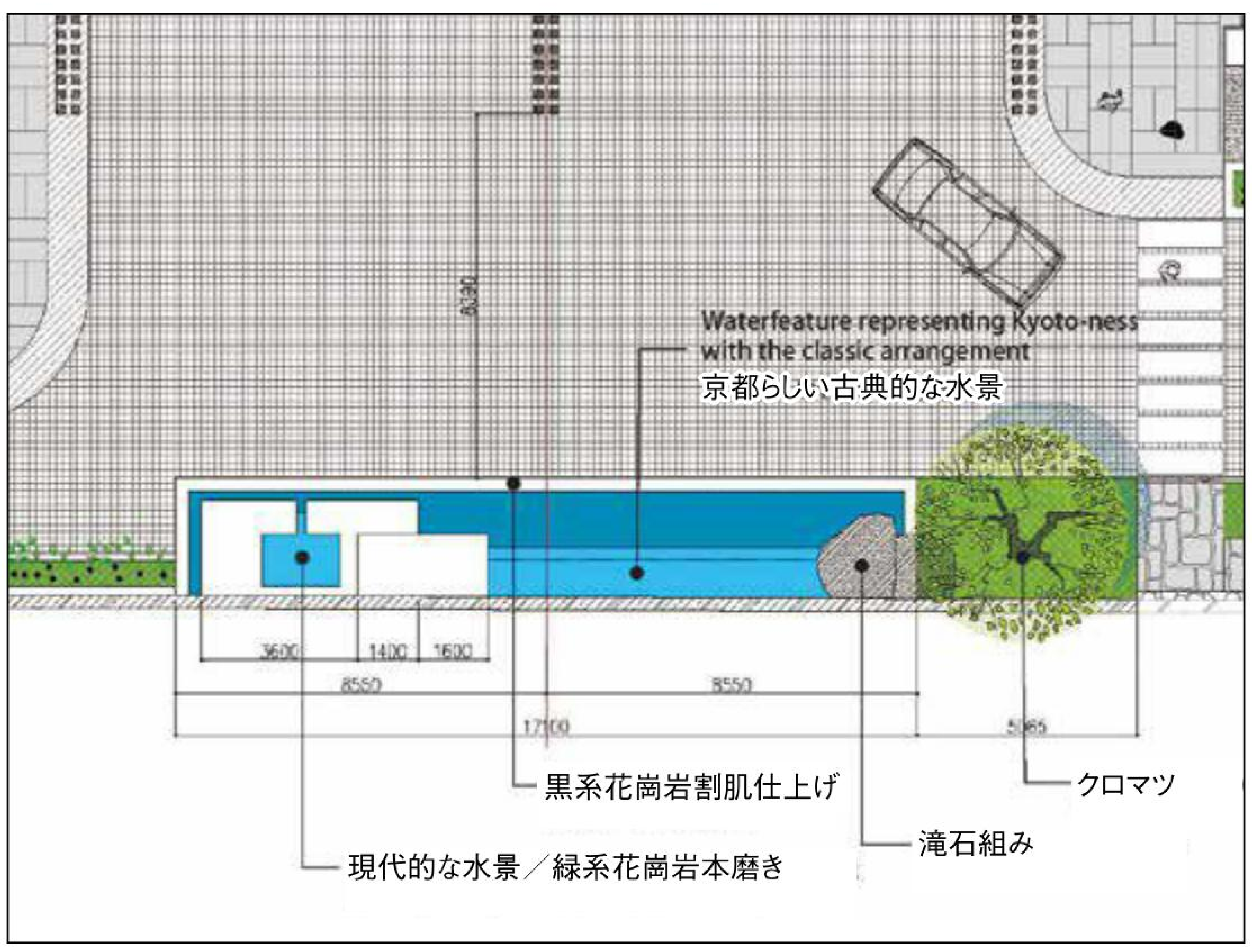


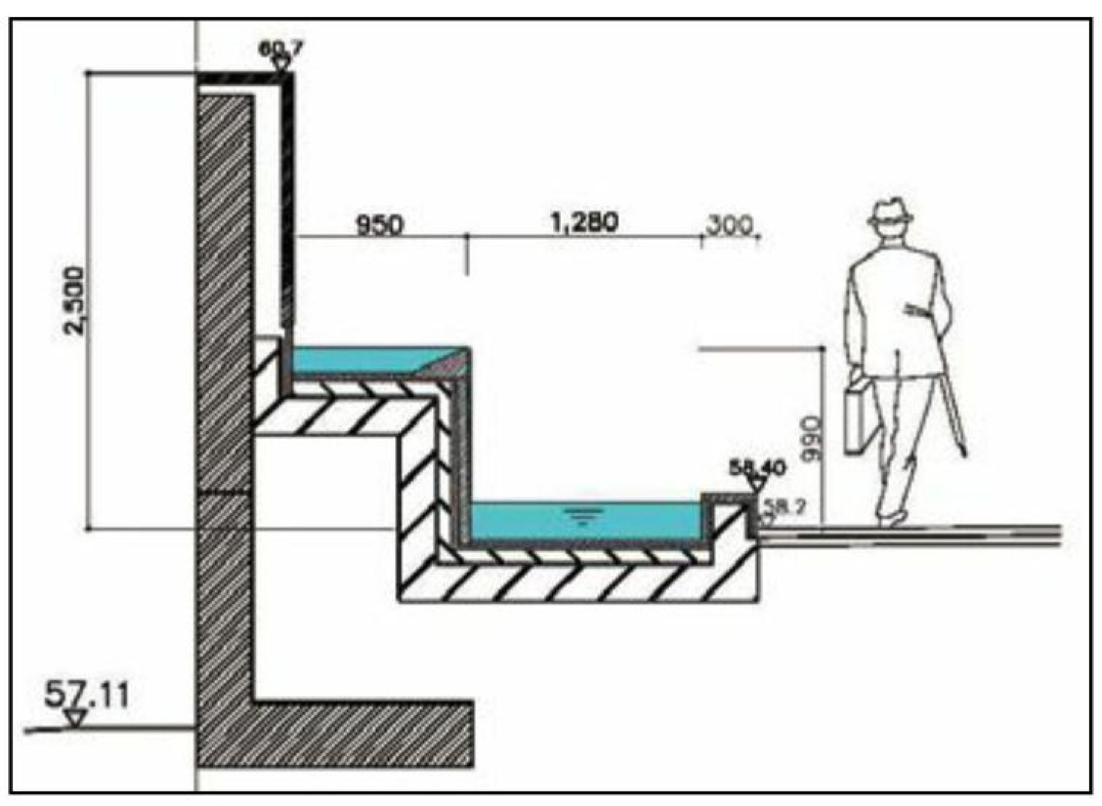
既存築地塀に合わせた北棟の園路

新時代の雅の創造 — ランドスケープ

事業主･運営者が外資系であり、インテリア設計も海外の設計者が担当したことで、ツーリズムにおける世界的な京都の価値観が共有された。建築からインテリア、照明、サイン、アートワーク、ランドスケープに至るまで、京都ならではの繊細な質感を大切にしながら、今の時代が求める｢新時代の雅｣がデザインテーマであった。







【東山を象徴する見返りの水景】
車寄は北側の妙法院に向かって開いている。ホテル玄関での出入りの時に、アイストップとなるよう、東山の地形に起因する湧水と滝をモチーフに、立地特性を象徴する水景を提案した。ホテル全体のコンセプトに基づき、水平を強調した現代的なカスケードと自然の石組みを組み合わせた。



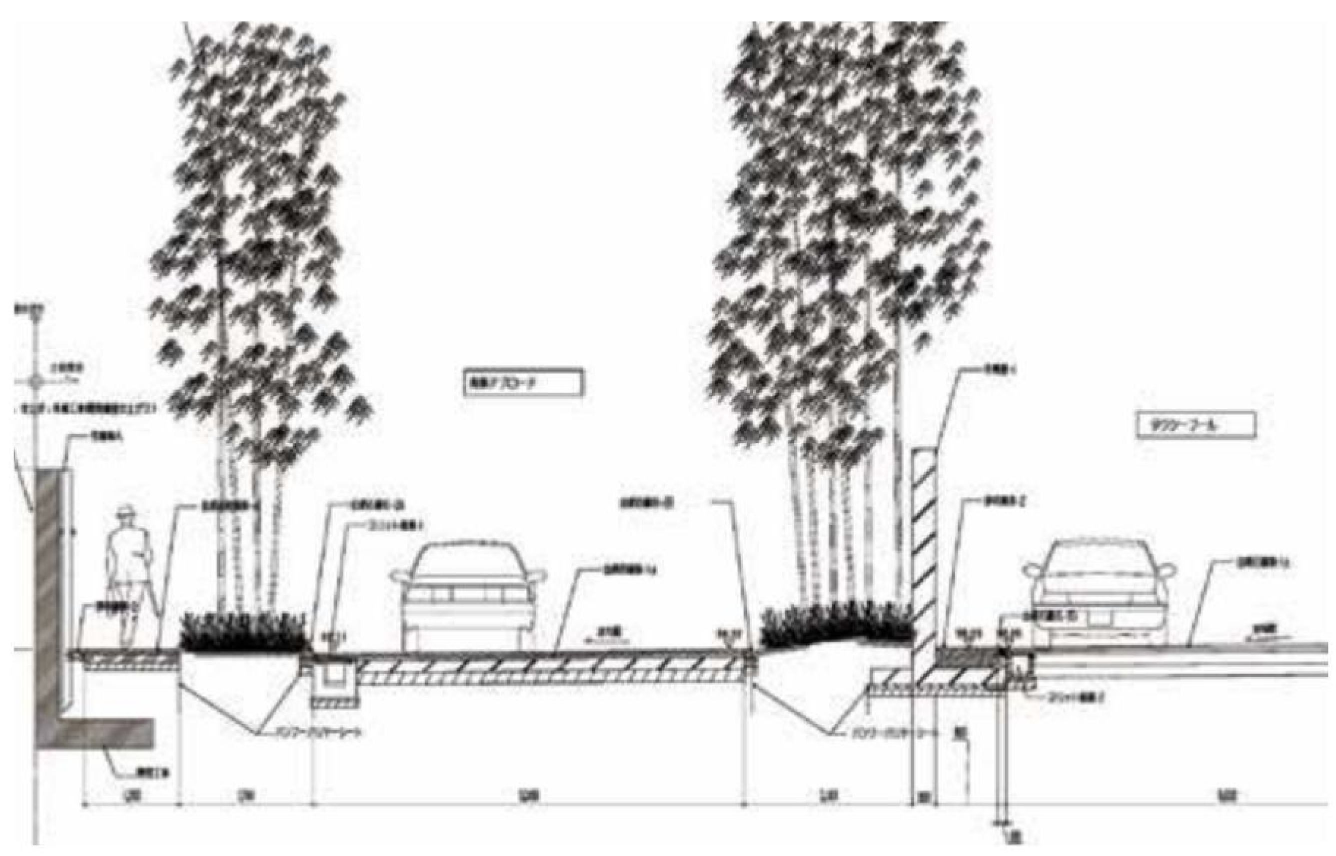
【街並みに調和したゲート】
間口が狭いため、ホテルとしての視認性は確保しつつ、街並みに溶け込む現代的な壁の質感を追求した。いくつものシュミレーションを通して、事業者・京都市とともに質感・色を協議しながら計画を決定した。守衛室を壁の一部に組み入れ、築地塀と同じ高さにすることで、控えめでかつ存在感のあるゲートとなった。植栽は、野趣に富むモミジ類を主体として、将来、妙法院の緑と京都女子大の緑をつなげることを想定している。





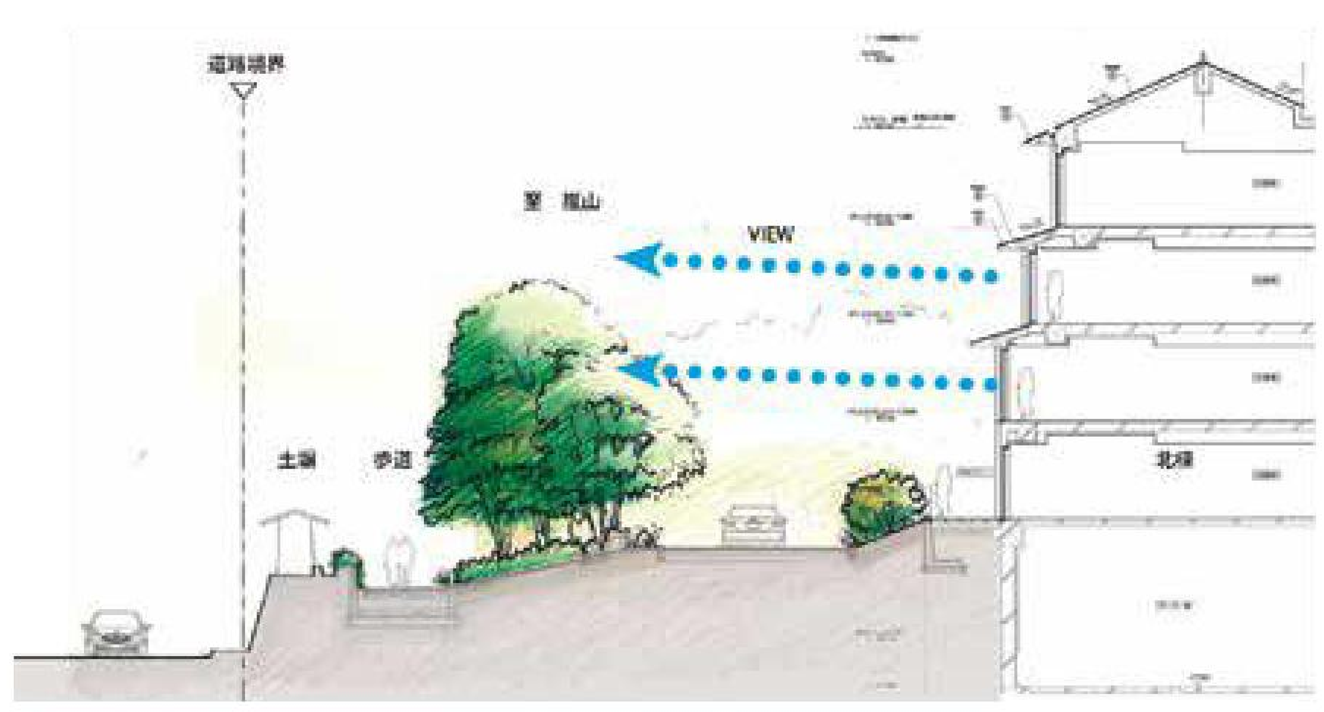


【竹のアプローチ】
常緑の竹のトンネルと石畳によりモダンな京都らしさを表現した。妙法院側に、石畳の歩行路を設けることで、歩行者の安全を確保するとともに、竹林に奥行感を与えている。





【エントランスガーデン】
北棟が面する敷地西側の東大路通り側は、妙法院時代からの築地塀をそのまま活かした。通りに対する施設のボリューム感を抑える効果も想定し、京都の風物詩を象徴するサクラ・モミジによりエントランス全体を植栽で包み込む計画とした。



建築計画について

文=櫻井伸（株式会社久米設計）

場との結び

計画地は三十三間堂や清水寺など、京都を代表する歴史的な寺院、神社が多く残る東山である。その恵まれた立地の中で周囲の環境と呼応するように、ホテルの建築は高さを抑え、勾配屋根を用いている。また、雁行する平面形状や分節されたファサードにより、ホテルのボリュームを軽減させ、日本の伝統建築のもつ繊細さを表現している。
敷地内の800年の歴史を有する「積翠園」や隣接する妙法院の京都でも指折りな豊かな景観を借景としてホテル内部に取り入れ、京都での滞在を特別なものとする演出を意図している。

古との結び

いまや国際的な観光都市となった京都、多くの観光客が寺社仏閣を訪れに来る。京都での滞在をより思い出深いものとするために、日本の伝統建築美にアレンジを加えたデザインは非日常を体感するとともに、伝統から発展した新たな印象をゲストに与える。
総延長290mにも及ぶ平面形状は、ホテル内での移動をゲストに強いることとなる。しかしながら、パブリックスペースやゲストルームを結ぶ廊下は歌舞伎の幕間のように次に観るシーンに期待を馳せるための導入空間として計画を行った。

異との結び

フォーシーズンズホテル京都のデザインに当たっては、多くの海外デザイナーが参画している。海外デザイナーとともに日本の伝統デザインを新たなレベルへと昇華させることで、日本の伝統を感じながらもどこか新しい「JAPANESQUE、日本らしさ」を実現させた。







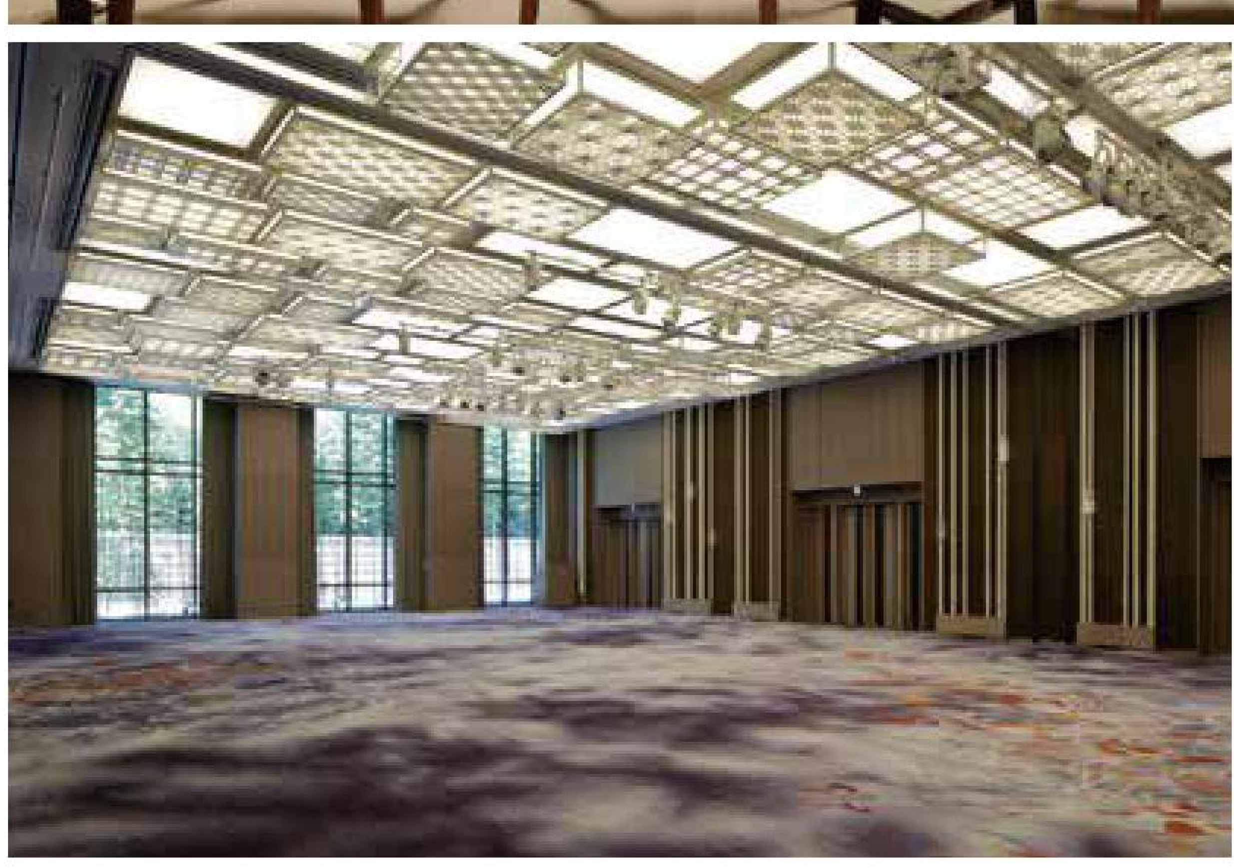
【左】池に映る雁行するファサード。【上】木立をイメージしたレストランのカーテンウォール。【下】ゲストを迎え入れる竹林のアプローチ

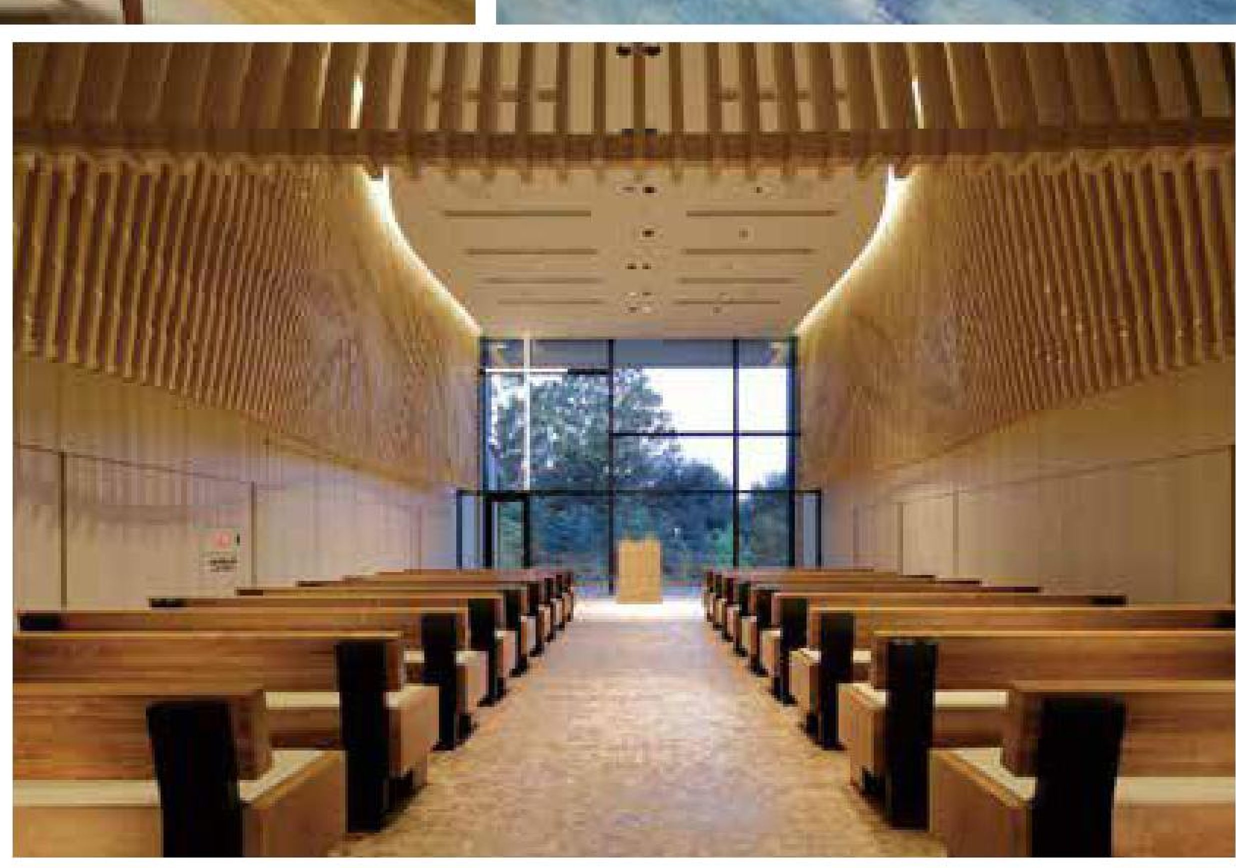


庭園の四季の移ろいを楽しむゲストルーム









【上左】大きな開口部で庭園と一体となるレストラン。【上右】池を望むエレベーターホール。【下左】竹林のアプローチを眺めるボールルーム。【下右】隣接する豊かな環境で厳かな空間をつくるチャペル

造園施工について

文＝渡邊英之（西武造園株式会社西日本支店）

取り組んだ課題

『積翠園』の保全整備が、ホテル建設の前提条件となっているとともに、これだけの池泉庭園を備えたホテルは京都において数少なく、積翠園が開業後に当ホテルを象徴づける、ホテルの持つポテンシャルである事は明白であった。

しかし風致保全地区であるが故、行政からは庭園自体の「保存」が命題として科せられた。「保存」とはいえ、植栽樹木は刻々と変化しており、さらにホテルという利用形態において現状の植栽では「京都らしさ」を享受できる構成ではないと感じ、着工前から大きな課題と捉えていた。

また一方で、池は建築工事の作業ヤードとして、シートと敷鉄板で養生された上でほぼ全面的に埋め立てられており、護岸の石組形状や池泉庭園において重要な景をなす夜泊石などが、無事に保存されているかも、不明であった。

保全計画を思案する中で、「積翠園小松亭址庭園遺構」と題する昭和12年の（庭園家）重森三玲氏の実測図を探し出し、これを拠り所として、「夜泊石」をテーマとした庭園「保全」計画を提案する事とした。この夜泊石という様式は、池泉庭園において、数個の石を直線的に配置した石組みのことを差し、蓬莱思想などからきたもので、神仙島である蓬莱島には、仙薬財宝があるために、それらの物を求めるために、夜、海に停泊している舟の姿を現している。長い旅路を経てたどり着いた船舶が停泊した様子が、にぎわいや繁栄の象徴とも言われており、ホテルにとっても縁起の良い庭園様式である。古都京都に、はるばるの旅路をたどり訪れてくれた利用客が、和のおもてなしを通じ、心身の癒しを感じてもらうホテルになればという思いを込めた。エントランス横の舟形一文字蹲踞もその流れを汲んでいる。

≪夜泊石・石組・滝組の保全≫

実測図や往時の写真を拠り所に、夜泊石や護岸滝組の石組の姿を保存、一部で復元を図った。池の形、島、園路など、いわゆる地割はそのままとした。

≪植生の復元≫

植生に関しては、実測図によると昭和初期の庭園内には、アカマツ、クロマツ、サクラ、カエデ、アカガシ、エノキ、クス、カキ、スギ、ヒノキ、ヤナギ、モチノキ、カシワ、シノブヒバ、ウメ、モチツツジ、ツツジ等々が配されていた。いつの時代も「日本人の美意識」は変わらないと感じ、同様の価値観を持ちながら伝統文化が現代に継承されてきていると考え、積翠園は平安時代の作庭初期もこの「昭和12年7月実測図」に類似する植生景観が形成されていたと推測した。また東山連山が借景として眺められ、これらが一体となった景観がダイナミックに拡がっていたとも推測される。以上より、計画地植生を東山連山と一体化する豊かな彩の樹林とするため、春はサクラの花を、秋は紅葉を楽しめるようにカエデ類を補植する計画とし、コブシ、ウメ、ツツジなどの季節の花々を楽しめるような植栽計画とした。



【事前調査におけるホテル客室（4階）からの景観】



左図❶からの景観。清水寺・東山山林が背景となり、新緑、紅葉時期は象徴的な景観が展開する



左図❷からの景観。4階以下の階上ではクスノキが東山への眺望を一部遮蔽する箇所が発生する



左図❸からの景観。モミジ等の役木が常緑樹林に埋もれている



ゴンドラによる既存高木（10m以上）の剪定。
ホテル客室から東山連山が庭園の背景として眺められ、庭園樹林と一体となった景観を目指した





手水鉢 一文字蹲踞（舟形）

【施工状況】

池の形、島、園路などの地割はそのままとし（写真❶❷）、護岸の石組形状や池泉庭園の要となる夜泊石など重森三玲氏の実測図を参考に復元した（写真❸❹）。護岸付近の掘削など手作業により施工した箇所もあった（写真❺❻）。









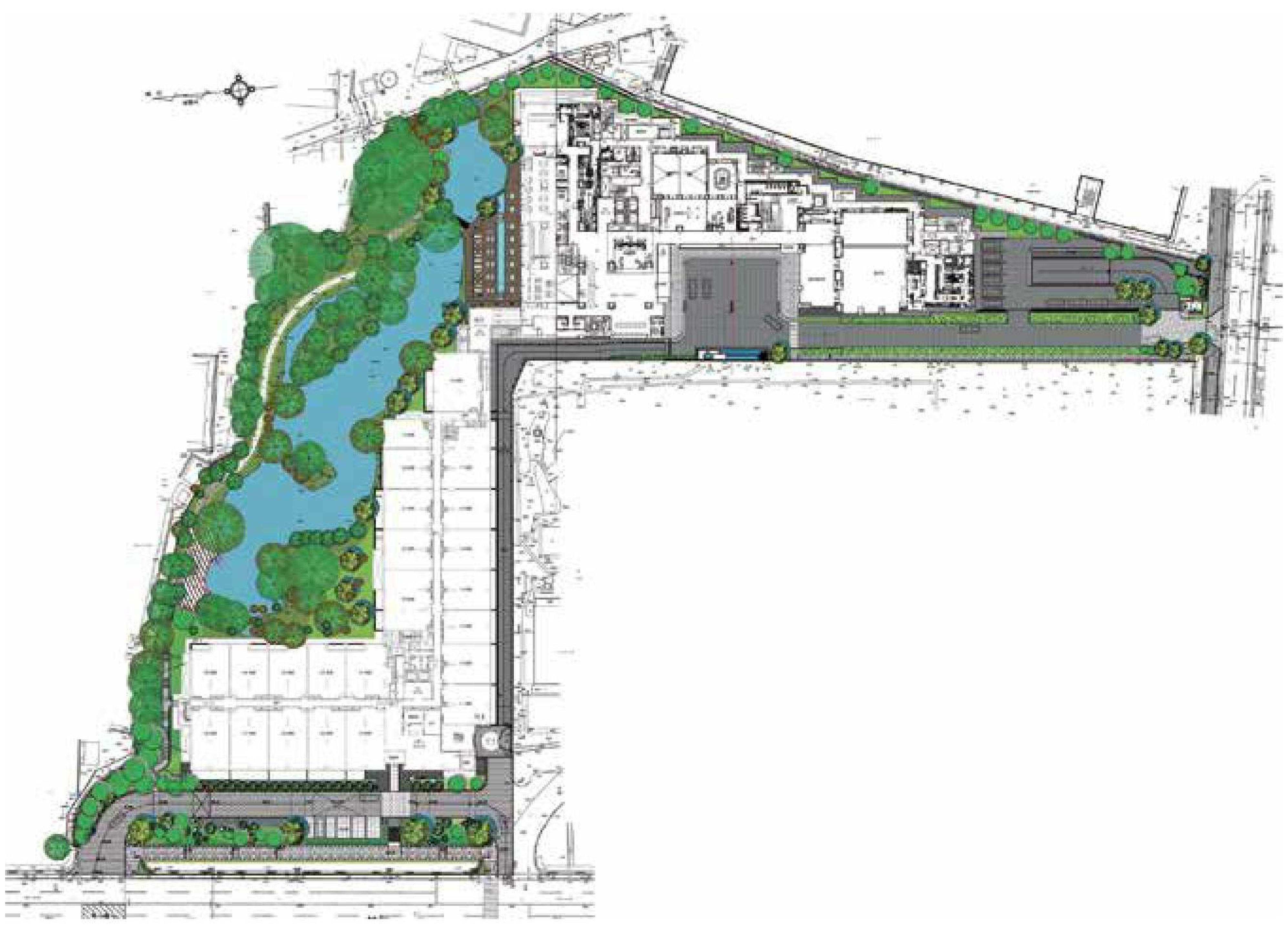








完成した池泉庭園（右）と復元した夜泊石



フォーシーズンスホテル京都

所在地	京都市東山区妙法院前側町445-3
事業者	京都東山ホスピタリティアセット特定目的会社
主要用途	ホテル
設　計	【基本構想】Burega Farnell シンガポール 【基本計画・基本設計・実施設計】 (株)ランドスケープデザイン（塚本英文、大久保宏紀） 【施工監理】村瀬文彦（ワーズ・デザイン） 【計画及び設計協力】西武造園（株） 【建築設計】（株）久米設計 【茶室設計】山本良介アトリエ 【エントランスキャノピー設計】 光井純&アソシエーツ建築設計事務所（株）
施　工	【造園】西武造園（株）（小坂泰文、渡邊英之）
施工期間	2013年9月～2016年6月
規　模	10,500㎡（外構面積）
植　栽	高木／アカマツ、クロマツ、サクラ、カエデなど、中低木／モチツツジ、コブシ、ジンチョウゲなど、草本地被／ベニシダ、セキショウ、スギゴケなど

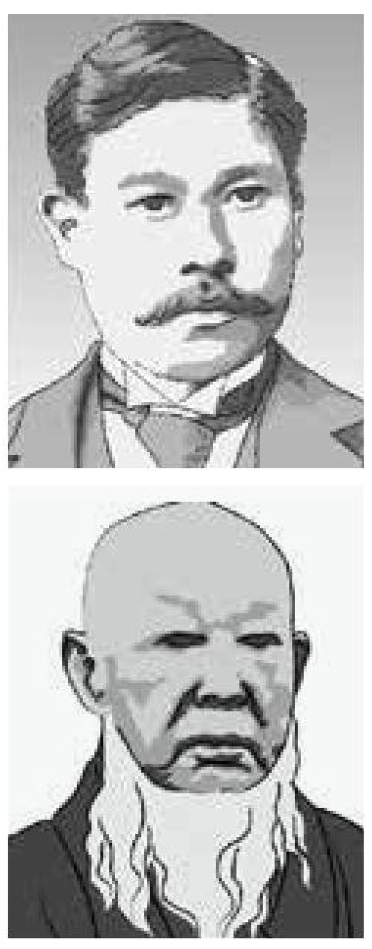
庭園都市江戸・東京──岩崎弥太郎物語「近代ランドスケープの遺産・深川親睦園の復元」その18

28

前回、関東大震災により深川親睦園の西側半分は壊滅し、残る東側半分の庭園寄付への葛藤を紐解いた。
今回、今年が明治改元150年の節目、深川親睦園（清澄庭園）は概成138年。
近代ランドスケープ遺産として、その再生と復元へ一つの姿を提案する。

「夢の庭園」の蘇生を夢見て

久弥は昭和13年に六義園を東京市へ寄付、昭和24年千葉の末廣農場へ隠栖した。昭和30年の春、久弥は末廣別邸でお茶を飲みながら父弥太郎の庭好きから始まった六義園の買い取りと寄付。中でも父弥太郎の執念で概成させた深川親睦園（夢の庭園）の建設と震災後の寄付への葛藤を思い起こしていた。近頃、東京都が西側の製材所用地を買いたいという話を風の便りで耳にした。「夢の庭園」の復元も夢ではなくなり父、叔父へ報告が出来ると安堵していた。その12月久弥はこの別邸で安らかな眠りについた。思い起こせば、前回、久弥が井下課長から寄付を依頼されて病院建設か、庭園寄付か葛藤したが、将来、深川親睦園復元の布石とすることで、父弥太郎の「夢の庭園」を蘇生させる希望を抱き寄付に至ったと書いた。それでは深川親睦園の蘇生（復元）は可能なのか、復元の課題はどこにあり、その鍵は何であるか紐解く節目の時である。



上／岩崎久彌
下／小澤圭次郎

明治改元150年節目の年

たまたま今年は明治改元150年の年である。江戸から東京へ、過去を偲び、未来を展望する節目の年、首都東京では今年「東京150年」の各種行事が企画されている。この150年に蓄積した東京の遺産を次世代へ如何につなげていくか。ちなみに江戸が東京になった日（江戸を東の京とする）は、明治元年7月17日であった。その9月元号を明治とし、明治2年3月28日天皇が京都から東京へ、江戸城は皇居と変更され遷都が完了した。

江戸から東京へ：庭園都市の消滅

連載のテーマ庭園都市江戸・東京はまさに、この150年の黎明期といえる時代に生まれ明治の近代化に関わり各種の遺産を創出した人々（渋沢栄一、岩崎弥太郎等）を軸に関連する造園史を紐解いてきた。かつて、庭園都市・江戸を構成した約千以上といわれた大名庭園は、大政奉還、廃藩置県により消滅していく。消滅した庭園都市に内包されていた行楽地や園遊の場は、明治6年の太政官布達により生み出された「公園」という近代の装置に置き換えられたがその実態は寺社の境内地である。この間、庭園の消滅を嘆いて、個々の大名屋敷・庭園の悲惨な状態を記録した明治の庭園史家小沢圭次郎は、「明治庭園記」（『明治園芸史』：大正4年）のなかで、明治の治世を喜ばしいとしたが、造園事業の衰退は以下の3つの原因と2つの事実をあげている。

●**原因その1**
「地租地税、徴収の結果に属すること」
●**原因その2**
「全国各地、交通利便の結果に属すること」
●**原因その3**
「人身浮沈、土地盛衰の結果に属すること」
●**事実その1**
「地価益騰貴して、庭園減少にいたる事」
●**事実その2**
「家屋建築に驕奢を尚び、庭園興造に倹約を加るに至る事」　（「明治庭園記」より）

深川親睦園は、近代ランドスケープ遺産たりえるか？

その一方、明治の近代化の産業にかかわり財をなした富豪の邸宅と庭園が大阪、京都、東京に次々と生み出されている。そのひとつが「深川親睦園」である。小沢の造園事業衰退の指摘によれば、震災で壊滅した深川親睦園は「原因その3：土地盛衰の結果の「水火の災害により・（中略）・庭園設置の減損縮小」となる。小沢も「明治庭園記」で記述しきれなかった多くの庭園として名前をあげた中に深川親睦園もある。さて「深川親睦園」が他の庭園と大きく異なるのが岩崎家の本邸ではなく別邸として弥太郎が当時の日本の料亭社交を見直し、西洋化の時代を背景に、社員、賓客のため明治中期に構想、建設された約3万坪の池泉回遊式庭園・「交流の庭園」として位置づけられることであろう。さらに付け加えれば、図1に見るように隅田川から正門へ約200mものアプローチ園路を伸ばしている庭園は他に見ない。以上のことからも深川親睦園は近代ランドスケープ遺産の嚆矢とよべるものである。しかし現在の清澄庭園は当時の深川親睦園の半分以下の姿である。この現在の状態で近代ランドスケープの遺産たりえるのか？はなはだ疑問であると考えるの筆者だけではないであろう。

●深川親睦園から清澄庭園への履歴

明治13年（1880）	**深川親睦園の概成**
明治22年（1889）	洋館、日本館完成
明治42年（1909）	池の御茶屋涼亭完成
大正10年（1921）	**児童遊園の公開始まる**（清澄園とよばれた）
大正12年（1923）	関東大震災により壊滅的状態 洋館別棟、涼亭は残る、庭園西側に製材所
大正13年（1924）	**10月東側の庭園を東京市へ寄付**（15541坪）**【清澄庭園】周辺は区画整理の方向**
昭和3年（1928）	大正記念館の完成
昭和7年（1932）	**記帳による制限公開／開園面積：81091**m^2（庭園、開放公園）
昭和20年（1945）	3月大空襲 ほとんどの建物焼失、涼亭は残る
昭和26年（1951）	戦後復興始まる
昭和28年（1953）	大正記念館の再建
昭和47−49年	**西側用地買収：32818**m^2（合計都有地面積：79056m^2）
昭和47年（1972）	無料公開
昭和49から3年間	**第一次整備：西側の公園整備はじまる、防災公園、避難広場として2万**m^2**の収容空間。**
昭和51年（1976）	再び有料公開へ
昭和54年（1979）	**東京都の文化財指定**（名勝）
昭和60年（1985）	池の浚渫工事
昭和61年（1986）	涼亭の全面改修
昭和63年（1988）	**西側の第二次整備**
平成元年	大正記念館全面改築
平成9年	庭園の管理を（財）東京都公園協会に管理委託開始
平成30年	**明治改元150年、庭園概成から138年：庭園面積は当時の半分以下**

文／椎名和美

概成138年、整備完了129年

表は深川親睦園概成から現在の清澄庭園までの出来事を整理してみた。今年は深川親睦園が概成して138年、洋館、日本館が完成してから129年に当たる。弥太郎「夢の庭園」の苦難の歴史が見えてくる。

深川親睦園の再生と復元の課題

現在の清澄庭園を深川親睦園へ再生・復元へと導くための鍵は当時の正門、洋館を含む「庭園の顔」であった西側開放公園にあると考えるのは必然的であろう。それでは近代ランドスケープ遺産と呼べる価値ある姿を再生・復元するその課題は以下の2つである。

①【庭園面積の拡張】清澄庭園では南側に図書館、児童公園、多目的広場など開放区域と西側の開放公園面積がある。これら庭園以外の土地利用は6割程度となる。この結果、清澄庭園は4割弱の庭園で、極めて小さいことがわかる。実質の庭園面積の拡張・復活が課題である。

②【地域防災の枠組みの見直し】この庭園、公園が防災上重要な位置づけにあることは承知であるが、開放公園が庭園へ復元されても防災機能に問題はない。防災機能は、庭園、公園の区別ではなく緑地、オープンスペースの存在機能にあるからである。開放公園が開設されて約42年、周辺には一次避難場所の学校や、小公園、木場公園のような広域避難場所が整備されてきている。庭園復元へ向けた地域の合意形成を図る時期でもある。

深川親睦園復元へのグランドデザイン

それでは深川親睦園の再生と復元はどのような手順が考えられるのか、最終の復元イメージは図1の建物等は除いた西側庭園の復元であるが、都市計画は、そう簡単、短時間には進まない。そこで50,100年をかけた復元へのグランドデザインを考えたい。西側区域のこれまでと、今後の戦略的な段階を考えてみた。（再生：西側開放公園のリニューアル、復元：遺構に基づく庭園の本格的造園整備）

●第1ステージ：都市計画決定、買収、公園開設から現在まで（約50年、復元に向けた都の戦略的？な用地取得、公園整備の時代）●第2ステージ：今後50年にわたる深川親睦園風景の再生を図る（庭園風景再生と合意形成の時代）●第3ステージ：合意形成後に深川親睦園の庭園復元の時代、今回は第2ステージ：地域との合意形成に向けた風景の再生について具体的に提案したい。

【第2ステージ：庭園風景の再生】復元序曲

遺構に基づき西側開放公園をリニューアルする第2ステージは復元への序曲である。その風景再生のシナリオは矢印のように図2の開放公園を段階的に図1深川親睦園西側へ近づけた庭園風景を再生し、地域と合意形成を模索するステージでもある。

図3は、その風景再生計画案である。開放公園区域の現状把握から2つの取り組みエリアに区分した。一つは重点風景再生エリアで開放公園区域と庭園を分断する風景を繋げるエリア。次に遺構風景再生エリアは遺構を開放公園の新たなデザインとして取り入れ庭園風景の再生へ導くエリア。防災機能は確保しつつ、その手立てとして①土地の取得②各種用地の置き換え③遺構の調査が必須である。

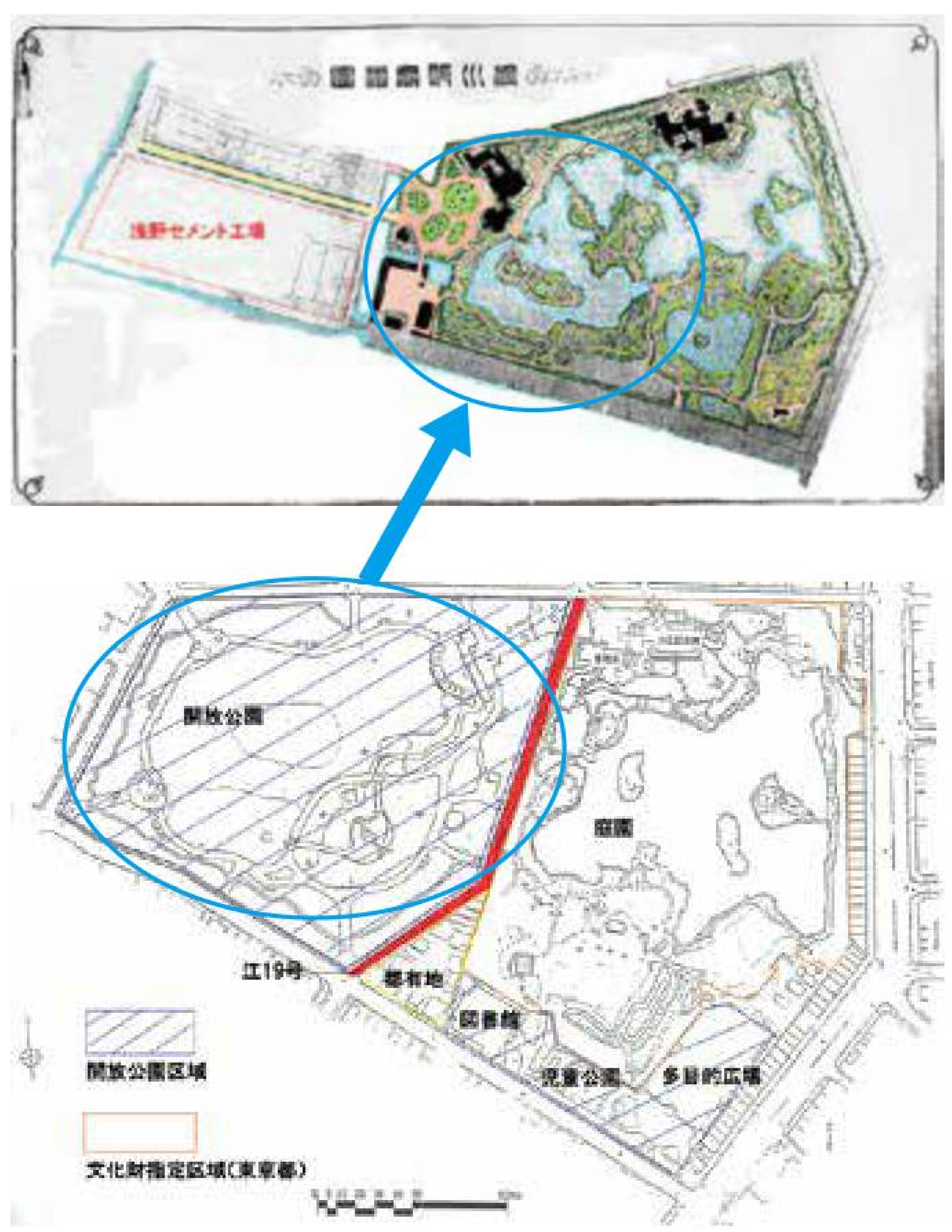


図1（上）／深川親睦園全体平面図（明治27年測量）
庭園本体、アプローチ園路、河岸空地、セメント工場内土蔵：103,507m²（庭園本体面積：91,178m²）
図2（下）／現在の清澄庭園：東側庭園と西側開放公園
庭園：37,434m²（文化財指定面積）
開放公園：43,656m²

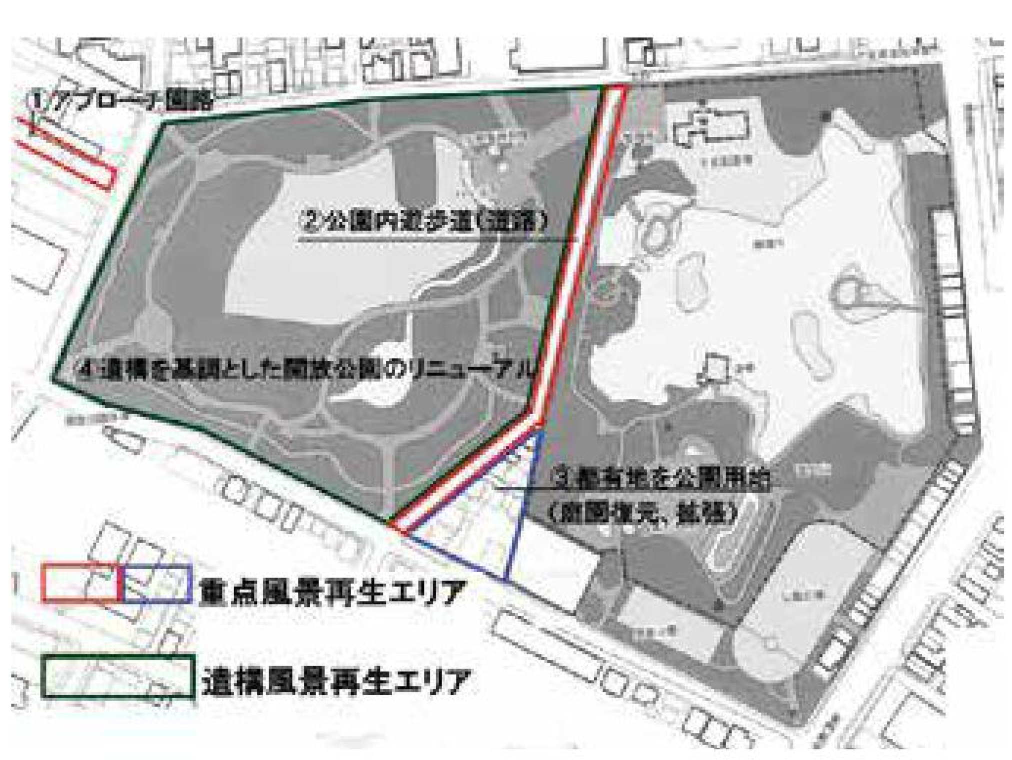


図3／風景再生計画案

これらの手立てを相互に組み合わせ深川親睦園の風景を再生し「見える化」を試みる。その具体的な方向は、次のようである。

①【土地の取得】アプローチ園路

外周区域では深川親睦園を特色づけていた隅田川からのアプローチ園路を復活する。その意味は正門とのつながりを作る造園的な重要な軸を形成していたためである。復元の視点から都市計画を定め、正門と隅田川を結ぶ幅員15m、約200mの用地を確保。この用地は防災の緩衝帯、隅田川の防災水運と公園をつなぐ避難路として位置づけ、底地は道路でも公園でもよい。

②【分断から融合へ】拡張・復元

庭園と公園を分断する道路（江19号・現在一方通行）は道路用地の転換を行わず公園内の遊歩道と位置づけて、公園風景になじむ逍遥空間とする。さらに庭園と隣接する東京都の土木局などの南側三角用地は公園用地とし、庭園面積拡張と復元を図り、深川親睦園の全体イメージが浮かぶよう風景の再生、融合を図る。

③【遺構の活用】遺構風景再生

現在、土地の歴史が見えない西側開放公園を遺構が「見える」公園としてリニューアルする。開放公園内にはかっての深川親睦園の遺構が眠っているはずである。例えば、洋館の遺構、南門、正門、正門橋、池の護岸、引き掘りの護岸などである。遺構調査を行いその分布形態を確認し、開放公園のリニューアルの地割の骨格として、将来は復元の地割として活用する。開放公園で遺構の形態を「見える化」することで利用者が日常的に目にし、深川親睦園の風景を偲ぶことに繋り、復元への共有化と醸成を図り、地域の合意形成を訴求する。今回の資料調査で、次回に詳細にふれるが「正門橋」の遺構が存在していることが明らかとなった。

次回は、岩崎弥太郎物語の完結編。深川親睦園の再生・復元を提案する。

日比谷公園──緑と水の市民カレッジ



公園や庭園、緑地の歴史や自然環境等に関わる展示、東京都立公園の情報、またそこで活動するボランティアの情報を発信する「みどりのⓘプラザ」、公園緑地や環境に関する図書をはじめとする資料を収蔵・公開する「みどりの図書館東京グリーンアーカイブス」、東京の緑と水について幅広く学べる「緑と水の市民カレッジ講座」を実施する緑と水に関する総合的な施設である。

みどりのⓘプラザ──展示の紹介

共催展｜**植物画で見る日本の固有植物**

日本の固有植物図譜原画展

平成30年 11月5日(月)─11月26日(月)

本展覧会は、植物画家・植物画愛好家の団体である日本植物画倶楽部による日本の固有植物の植物画展覧会です。
日本植物画倶楽部では、『日本の絶滅危惧植物図譜』(2004年)、『日本の帰化植物図譜』(2009年)を出版し、植物画を通じて自然の大切さを伝えてきました。
今回、『日本の固有植物図譜』の出版を記念して、図譜掲載作品より、都内公園で見られるシデコブシやユキツバキ等の植物について図譜原画約50点を展示します。
展覧会を通じて日本の貴重な植物の紹介、保全について発信していきます。
美しい植物画の鑑賞にぜひお越しください。



展示ポスター

展示予定のおしらせ

●平成30年12月3日～平成31年1月12日
みどりのⓘプラザ開設10周年記念アンコール展示
「龍馬ゆかりの人々と5つの都立文化財」

緑と水の市民カレッジ
http://www.tokyo-park.or.jp/college/

開館時間……9:00–17:00
休館日………日曜・祝日・年末年始
（12月29日～1月3日）
入館料………無料

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園1-5
TEL. 03-5532-1306
FAX. 03-5532-1307



Information
インフォメーション

第40回Japan Home & Building Showで 第2回景観・ランドスケープ総合展を開催
★㈱マルモ出版もブース出展を予定しています

(一社)日本能率協会は、住宅、店舗・施設に関する建材・製品・設備・インテリアの相乗効果をテーマに掲げた展示会として、毎年恒例の Japan Home & Building Show を開催する。本年度は6つの展示会で構成され、「Japan Home & Building Show」を軸に、「ふるさと建材・家具見本市」「トイレ・バス・キッチン空間・設備フェア」「団地・マンションリノベーション総合展」「イノベーションオフィス」、そして昨年に続き「景観・ランドスケープ総合展」が開催される。今年２回目の開催となる景観・ランドスケープ総合展は、外構まわりから景観形成まで、屋外空間資材に焦点をあてた専門展示会として開催。また、ランドスケープに関連する講演会の開催も予定されている。(展示会の詳細は下記 URL 参照)

■開催日時／11月20日(火)～22日(木) 10:00～17:00
■会場／東京ビッグサイト 東展示棟
■展示規模(予定)／1200社・団体、2200ブース
※合同開催展含む
■入場料／¥3,000(下記URLよりWeb事前予約頂くと無料)
■問合せ(事務局)／※日本能率協会内
TEL：03-3434-1988　E-mail：jhbs@jma.or.jp
〒105-8522　東京都港区芝公園3-1-22
■URL(展示会)／http://www.jma.or.jp/homeshow/

エコプロ2018（第20回） SDGs時代の環境と社会、そして未来へ

アジアを代表する環境･エネルギーの総合展示会『エコプロ2018 ～SDGs時代の環境と社会、そして未来へ』が今年も12月に開催される。今年のテーマは“持続可能な開発目標(以下SDGs)”。政府がSDGsの推進本部を設置し､経団連においても昨年の企業行動憲章でSDGsの達成を掲げるなど、今後SDGs推進の動きは一層盛んになると考えられる。これを踏まえて今年は従来の展示会に加え、持続可能な社会づくりのコンセプトの下、インフラの老朽化対策やIoT、AIを活用したインテリジェント・インフラを出展対象とした新規展示会「社会インフラテック2018」を初めて同時開催する。

■開催期間／12月6日(木)～8日(土) 10:00～17:00
■会場／東京ビッグサイト 東ホール
■入場料／無料(登録制)
■主催／(一社)産業環境管理協会、日本経済新聞社
■規模／出展社数650社・団体、1,450小間（見込）
（2017年出展実績／ 616社・団体、1,414小間）
■来場者数／ 170,000人（見込）
（2017年度来場実績／ 160,091人）
■問合せ(展示会事務局)／
TEL：0120-261-122（平日 9:00～18:00）
Mail：eco-pro@nikkeipr.co.jp
■URL／http://eco-pro.com/2017/

日比谷公園ガーデニングショー 2018 今年も開催中（10月28日(日)まで）

東京都 日比谷公園において毎年恒例のガーデニングショーが本年も開催されている(第16回目)。本イベントは、都心でも有数の美しい緑景観を有する日比谷公園から「花と緑・環境」のメッセージを世界に発信し、これからの都市における「花と緑のライフスタイル」を提案するものである。また、2020 年のオリンピック･パラリンピックに向け、個人や企業、公共の緑が繋がり、東京がガーデンシティ（庭園都市）として世界の人々を「おもてなし」するとともに、都市の花とみどりのあり方を広く発信する契機とする。今年も例年通り、大小様々なガーデン作品等が公園内に並び、マルシェの出店等も行われている。

■開催期間／ 10月21日(土)～29日(日)
10:00～16:00（最終日は15:00まで）
■会場／日比谷公園（東京都千代田区日比谷公園）
噴水広場･第二花壇･にれのき広場ほか
■入場料／無料
■開催内容／ガーデンコンテスト作品展示（ガーデン部門、ライフスタイルガーデン部門、コンテナガーデン部門、ハンギングバスケット部門)、企業・団体テント、グルメキッチンカー等出展、ガーデニングファッションショー、花苗配布、コンサート　ほか
■問合せ(事務局)／
TEL：03-3232-3097　FAX：03-3232-3069
Mail：hibiya-gs@tokyo-park.or.jp
■URL／http://www.hibiya-gardening-show.com/

(公財)都市緑化機構より 『都市の緑３表彰』受賞者が決定

公益財団法人都市緑化機構は、従来実施してきた｢緑の都市賞｣「緑の環境プラン大賞」「屋上･壁面緑化技術コンクール」の３つの顕彰･表彰事業について、「都市の緑３表彰」という冠名の下、緑化に関連する全国の市民活動および企業の環境活動を支援している。現在、2018年度の各賞受賞者を都市緑化機構 Webにて紹介している。

■各賞受賞者(一部のみ抜粋)／
≪緑の都市賞≫内閣総理大臣賞：鶴見｢みどりのルート１｣（神奈川県横浜市）　≪緑の環境プラン大賞≫シンボル・ガーデン部門 国土交通大臣賞：輪島の朝市横蝶～蝶々とあそぶ みんなの庭をつくろう（石川県輪島市)、ポケット・ガーデン部門 国土交通大臣賞：地域の団らん「遊歩道」～フラワー・ピースフル・ロード～（宮城県仙台市）　≪屋上･壁面緑化技術コンクール≫屋上緑化部門 国土交通大臣賞：GINZA SIX（東京都中央区)、壁面・特殊緑化部門 国土交通大臣賞：新山口駅｢垂直の庭｣(山口県山口市)
■問合せ（(公財)都市緑化機構）／
TEL：03-5216-7191　FAX：03-5216-7195
Mail：midori.info@urbangreen
■URL／ https://urbangreen.or.jp/grant/3hyosho

2018年度グッドデザイン賞発表 ランドスケープ関連プロジェクトも多数



GOOD DESIGN AWARD 2018

丸の内駅前広場から行幸通りに繋がる景観（ベスト100選出）

公益財団法人日本デザイン振興会は、10月3日(水)にグッドデザイン賞の2018年度受賞結果を発表した。昨年を294件上回る計4,789件の応募があり、この中から1,353件の受賞が決定。更に今日のデザイン水準を高めるに相応しく、今後のモデルとなりうるデザインとして位置づけられた100件の優秀作品「グッドデザイン・ベスト100(以下ベスト100)」も選出された。今後、更なる審査を実施し、大賞を含む特別賞が選出される(発表は10月31日(水))。
本年度のベスト100では、再整備された丸の内駅前広場～行幸通りのほか、遊歩空間や広場を設けた堤防のリノベーションや、パブリックスペース、工事現場での仮囲いの美術演出、新潟県で開催されている『大地の芸術祭』など、建築ではないプロジェクトが多数選出された。また、アジア諸国を中心とした海外からの応募作品からの選出も多く、本誌前号で特集した台湾からも『台中国家歌劇院(右)』を始め、5件が選出された。



■大賞（特別賞等）発表／ 10月31日(水)
■2018年グッドデザイン賞受賞結果／
受賞件数：1,353件（前年比 -50件）
受賞企業数：945社（前年比 -13件）
審査対象数：4,789件（前年比 +294件）
■関連展示(詳細は下記URL参照)／
1.GOOD DESIGN EXHIBITION 2018
内容：ベスト100 の特別展示や会期中限定の受賞商品のショップ等を開催。
会期：10月31日(水)～11月4日(日)
会場：東京ミッドタウン（港区赤坂9）
2. 私の選んだ一品 2018
内容：今年度のグッドデザイン賞審査委員 86 名が選んだ、お気に入りの受賞デザインを紹介。
会期：10月3日(水)～11月4日(日) ※開催中
※10月28日(日)のみ全館停電のため休館
会場：GOOD DESIGN Marunouchi
（千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル1F）
※1は入場料1,000 円、2は入場料無料。
■問合せ（(公財)日本デザイン振興会）／
TEL：03-6743-3776　Email：info@g-mark.org
■URL／www.g-mark.org/

野外×アート×まちなか「トロールの森2018」開催のお知らせ



今年で17回目となる国際野外アート展「トロールの森」が、都立善福寺公園等を会場として開催される。本年度のテーマは「不在 Absence」。今まであったけれど失われたもの、あるいは“ない”からこそ生まれる余白や余韻、そうしたものへの想像力こそがアートの力ではないかと考え、“不在”であるがゆえに生じる様々な感情や豊かさを問い直すことをコンセプトとして多様なアートが展開される。
会場は大きく２つに分かれ、善福寺公園内では「野外×アート」、西荻窪周辺（JR西荻窪駅〜善福寺）ではまちなか×アートの展示やアクティビティが楽しめる。まちなか×アートでは大学研究室による各種プロジェクトやライブ・公演等も予定されている。
■会場／都立善福寺公園（上池）、西荻窪周辺
■開催期間／11月3日（土）〜23日（金）
■後援／東京都東部公園緑地事務所、杉並区、杉並区教育委員会
■問合せ（実行委員会）／TEL：090-2912-6486
Mail：trolls.in.the.park@gmail.com
〒167-0023 東京都杉並区上井草4-6-2（野田方）
■URL／http://www.trollsinthepark.com

武蔵野の森公園 防災フェスタ ー来て、見て、体験、防災パークー

東京都の三鷹市・府中市・調布市の３市にまたがる武蔵野の森公園において、「防災」をテーマとして、災害時の知識について子供から大人までが楽しく遊びながら学べるフェスティバルが開催される。調布飛行場に隣接し、国内北側に大きな芝生広場を有する武蔵野の森公園は、地震等の災害発生時には延焼火災などから身を守る一時避難場所として重要な役割を担う。では、災害時に市民にできることは何か？本イベントにおいては消火や救命措置などの体験学習を通じて学ぶことができる。防災トイレの設営や炊き出しなど、公園等に避難した後に役立てられる知識も身につけられる良い機会となる。
■会場／武蔵野の森公園 大芝生広場周辺（東京都府中市朝日町3-5-12）
■開催日時／11月10日（土） 10:30〜15:00
■開催内容／初期消火体験、煙体験、起震車体験、応急救命措置訓練、車両展示、ロープワーク体験、防災トイレ設営体験、炊き出し体験、防災ゲーム、防災灯り作り、スタンプラリーほか
■後援／三鷹市、府中市、調布市
■協力／府中消防署、府中警察署、自衛隊府中分駐所
■問合せ（武蔵野の森公園サービスセンター）／
TEL：042-365-8435
■URL／https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/index058.html

スマートイルミネーション横浜 2018 開催のお知らせ



象の鼻パークを中心とした神奈川県横浜市の都心臨海部を舞台に、最先端の環境・省エネルギー技術とアートを融合させた国際アートイベントが今年も開催される。2011年の東日本大震災を契機に、環境に配慮した夜景づくりの重要性をいち早く提言してスタートした本イベントも、今年で開催8回目。国内外からアーティストやクリエイターが集結し、横浜市民と共に「創造的横浜夜景」の表現を試みる。12月末まで横浜市内の企業・商店街等と連携し、横浜らしい夜景づくりを盛り上げる。
※具体的な内容等は下記URL参照
■会場／象の鼻パーク、横浜市内各所
■開催期間／10月31日（水）〜11月4日（日）
※連携プログラムは12月31日（月）まで、横浜市内各所で実施（作品により展示期間が異なる）
■時間／17:30〜21:30
■問合せ（スマートイルミネーション横浜実行委員会 事務局）／
TEL：045-633-9660（平日10:00〜18:00）
FAX：045-662-0082
■URL／ http://smart-illumination.jp/

日本の伝統的な文化・工芸・産業等を発信するフラワーショー『あわじガーデンルネサンス』



ネオジャポニズムガーデン － 綺麗さびの世界

淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」では現在、日本の伝統文化や伝統工芸、伝統産業などを花文化で継承し、新たなジャパンブランドとして世界に発信することを目標としたフラワーショーを開催している。植物館が提案する新たな日本の美意識「綺麗さび」を約100種・2万株の秋の草花で表現した『ジャポニズムガーデン』や、伝統的な園芸植物、子供たちの園芸作品、秋のローズガーデンショー（屋外で実施）など、見所満載な花と緑の祭典となっている。
■会場／奇跡の星の植物館（兵庫県淡路市夢舞台4）
■開催期間／9月22日（土）〜11月11日（日）
■時間／10:00〜18:00（会期中無休）
■入場料／1,500円（70歳以上750円）※高校生以下無料
■問合せ／TEL：0799-74-1200
■URL／http://www.kisekinohoshi.jp/

World Urban Parks ジャパン・（一財）公園財団 主催 海外情報講演会「米国の最新の公園事情」開催のお知らせ

WUPジャパンと（一財）公園財団は平成30年度の海外情報講演会を、下記の要領で開催する。「収益の先の公共性を見据えた米国の公園」と題した講演のほか、今年のWUP世界大会の報告なども行われる。
■開催日時／12月7日（金） 13:30〜16:30
■会場／国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町3-1）
■定員／120名（要申込、申込締切は11月30日（金））
■参加費（当日支払）／一般：2,000円
※WUPジャパン会員および公園財団賛助会員は無料
■CPD／造園CPD認定プログラム 2.8単位
■主催／WUPジャパン、（一財）公園財団
■申込方法／公園財団のWebサイト（下記URL参照）よりダウンロードできる申込書に必要事項を記入し、FAXまたはEmailで下記問合せ先まで。
■講演（登壇者）／
1. World Urban Parks世界大会2018報告
「WUP大会を通じて見た世界の公園マネジメントの動き」
（小野 隆（WUPジャパン指名理事））
2. WUP大会開催地メルボルンの公園事情
（嶺岸さゆり（WUPジャパン事務局））
3. 米国の最新の公園事情
「収益の先の公共性を見据えた米国の公園」
（赤澤宏樹（兵庫県立大学教授、WUPジャパン理事））
■問合せ（（一財）公園財団 嶺岸・松本）／
TEL：03-6674-1188 FAX：03-6674-1190
Email：staff-midori@prfj.or.jp
■URL／ http://www.prfj.or.jp/

『SHARE GREEN MINAMI AOYAMA』10月オープン（開発予定地の暫定利活用）



イメージパース

NTT都市開発株式会社（東京都千代田区）はこのたび、南青山一丁目エリアに更なる賑わいを創出し、地域に開かれた場を提供することを目的として、緑豊かな広場を中心に既存の建物をコンバージョンしたカフェ、ショップ、オフィスからなる施設『SHARE GREEN MINAMI AOYAMA』をオープンした。本施設はNTT都市開発㈱が所有する約1haの開発予定地の暫定利活用事業として創出されたものであり、同社のシェアオフィス事業も展開。名称の通り緑空間をシェアしながら、屋外での新しいワークスタイルとライフスタイルを提案する。緑を眺めながらくつろげるカフェ、季節の植物を購入できるショップ等も併設。暫定利用ながら、地域住民やワーカーなど多様な人々が集う空間となっている。
■所在地／東京都港区南青山一丁目12-32
■オープン／2018年10月6日（土）
■URL（NTT都市開発）／https://www.nttud.co.jp/
■URL（施設）／https://share-green.com/

Products プロダクト

新カタログ

まちの防災家具　コトブキの防災ファニチャー



株式会社コトブキは、新型「かまどベンチ」「トイレスツール」などより使いやすくなった「防災ファニチャー」を発売し、2018年12月中旬（一部 2019年1月）より出荷を開始する。これに合わせて、新カタログ「まちの防災家具　コトブキの防災ファニチャー」を発行した。防災公園や防災ファニチャーはいざという時に機能することはもちろんのことであるが、イベントなどに活用してもらうことで日常生活の中で地域のつながりに貢献し、防災への意識を高めるという役割を持っているとコトブキは考える。「防災ファニチャー」シリーズは災害時の使いやすさはもちろん、イベント等での繰り返し使用や景観への配慮など「日常の中での機能」を向上させ、大きく進化させた。

株式会社コトブキ
http://townscape.kotobuki.co.jp

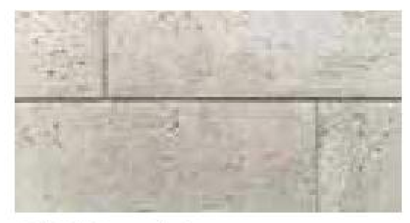
コンクリート床面を彩る押型デザイン床。新しいパターンが追加

デザインクリート「ビシャングラニット」「琉球ライム」





ビシャングラニット



琉球ライム

コンクリート床面に立体感のある自然石や木目模様などの風合いを表現するデザインクリートに、エービーシー商会オリジナルデザインの凹凸が少ないパターンマット２種類『ビシャングラニット』『琉球ライム』が追加された。ビシャングラニットは「ビシャン」と呼ばれる金槌で石材の表面を均一に叩くビシャン仕上げを再現。凹凸が少なく繊細な表情を与える表面加工のひとつである。手仕上げの技術を表現することでより床面に優しい印象を与えるのが特長だ。琉球ライムは、沖縄の一般的な素材である琉球石灰岩（珊瑚や貝殻等が堆積してできた石灰岩）の質感を再現。優しく明るい風合いが特長である。日本に馴染みのある２種類のデザインを加えた全23種類のパターンマットと 20 色のベースカラー（骨材部）、5 色のリリースパウダー（離型材）の組み合わせで 2,000 通り以上の多彩なデザインを可能とする。

株式会社エービーシー商会
Tel.03-3507-7485　Fax.03-3507-7481
https://www.abc-t.co.jp

涼しげなパステル調の花で公園・広場を優しく彩る

サンパチェンス®オーキッド



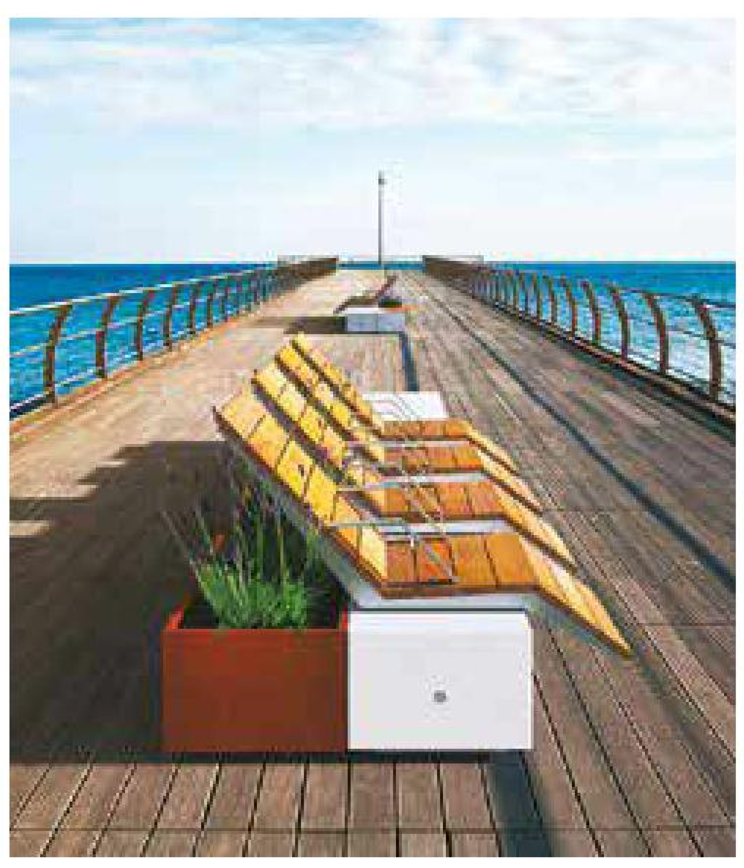
※通信販売では、受注開始は2018年11月下旬より（2019年4月から順次発送予定）。各店舗での発売は2019年4月以降。

サカタのタネが展開するインパチェンス属の栄養系品種『サンパチェンス』シリーズの新品種。涼しげな淡い紫色の花が特徴で、従来多かった原色系とは一線を画しており、より日本人の好みに合った花と言えるかもしれない。存在を主張し過ぎることのないパステル調の花は、公園や広場、街路のポイントなどに植栽しても無理なく溶け込み、やわらかく彩ってくれることであろう。株が大きく育ちやすいため、一株でもグランドカバーとして役割を果たしてくれるのもメリット。水を多く欲するので、特に夏場は毎日水をやるようにして大事に育ててほしい。

株式会社サカタのタネ
Tel.045-945-8872（苗木球根統括部）
https://www.sakataseed.co.jp/

イタリア製ストリートファニチャーブランド

VITAURBANA（ヴィータウルバーナ）コレクション





都市生活は、出会いやコミュニケーション、オープンエアーでの様々な活動によって形成され、都市空間（ランドスケープ）は人々によって生かされている。伝統的な「広場」の概念をベースに考えられた、Metalco（メタルコ）社による VITAURBANA コレクションは、新たな都市生活のあり方を提案するプロダクツ。来るべき洗練されたスマート都市環境を構成する一つのコンテンツとしての重要な役割を担う。本コレクションを含め、同社の提供するシート・プランターモジュールのそれぞれの組み合せにより、都市に生きる人々に新たな居場所を創出することが期待される。

Metalco 社日本総代理店 株式会社アルク
Tel.075-255-6100　Fax.075-255-6110　Mail：arc11@arc-kyoto.co.jp
www.metalco.it/　 www.arc-kyoto.co.jp

Books ブック

PUBLIC PRODUCE 「公共的空間」をつくる7つの事例

西田司、中村真広、石榑督和、山道拓人、千葉元生 編著　　ユウブックス 発行
四六判・256頁　　定価：2,484円（税込）



タイトルのパブリックプロデューサーとは、公共的な性格をもつ場を持続させるための仕組づくりや実践を行う職能を指す。主にハードを設計する建築家やデザイナーと対照的に、ソフトに特化した設計を担うといえばわかりやすいだろうか。地元の団体・グループ等をまとめて管理主体を結成したり、門戸を広げて市民に親しまれるような仕掛けを考案したり……その場所が継続的に末永く使われ、絶えず人が流れ込むような仕組づくりや運用等は最早不可欠。本書は「佛子園のまちづくり」「松陰神社通り商店街」「南池袋公園」等の一定の成果を収めつつある7つの事例について、前述の通り重要な役割を担う“プロデューサー”たちに、建築や街づくり、ランドスケープに携わる５人の若手アーキテクトがそれぞれインタビューし、その仕事を深く追究していくものである。対談形式をとり、豊富な図面やダイヤグラム等を交えた事例集らしさも兼ね揃えていて読みやすい。周辺地域との連携など、参考となる情報も多いであろう。「つくる」だけの時代がとうに過ぎた今、老若男女を問わずぜひ一度手に取っていただきたい。



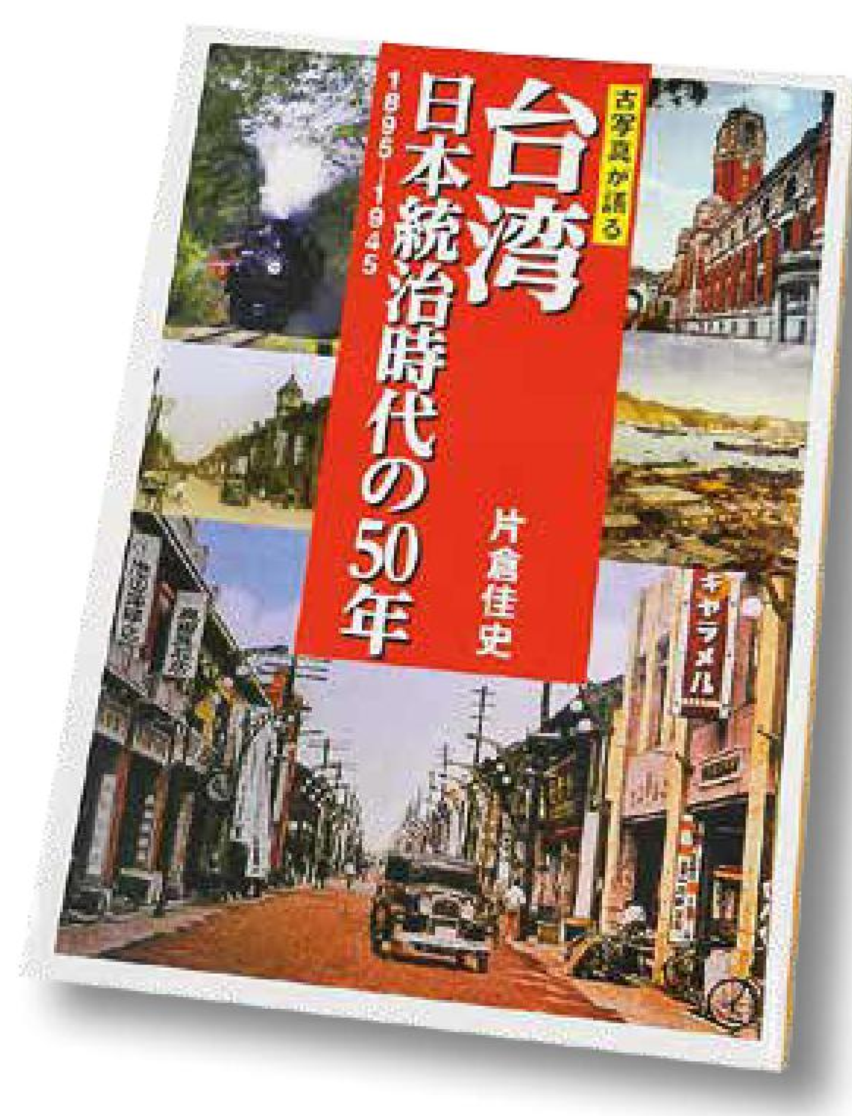
マイパブリックとグランドレベル 今日からはじめるまちづくり

田中元子 著　　晶文社 発行
四六判・242頁　　定価：1,944円（税込）

ひょんなきっかけでまちに立ち、コーヒーを淹れ、道行く人々にふるまうことを始めた著者は、建築や都市が経済や学問よりも人のためにあると感じたとき、建築、都市、人が公共的な関係を築くことに成功していることに気づく。そして、公共やまちづくりは普通の人の普通の生活そのもののサイズや質でできていなければ根付くはずはないことを知り、個人のレベルでできることがまちに具現化でき、もっとまちを、もっと自分自身を楽しむことができたらきっと素晴らしいに違いないと考えた。そのひとつの解が「マイパブリック＝自分でつくる公共」という概念であり、実践を通してその眼差しは「マイパブリック」のフィールドである「地上＝グランドレベル」の質へも向けられる。手間と時間がかかるのがまちづくりだ。一気に推し進めるのではなく、また無理だとあきらめるのでもなく、すべては小さくてささやかな一歩から始まることを気づかせてくれる１冊である。

古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年 1895－1945

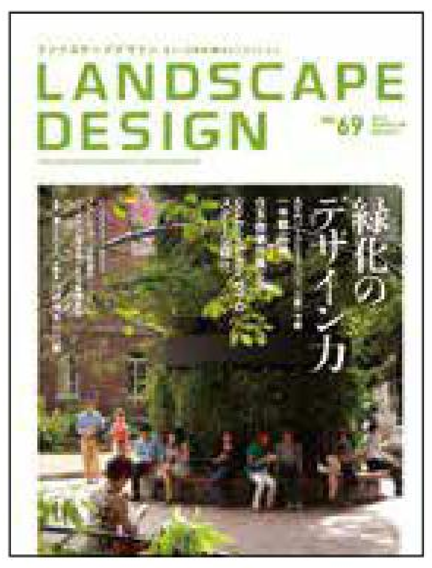
片倉佳史 著　　祥伝社 発行
A5判・272頁　　定価：1,944円（税込）



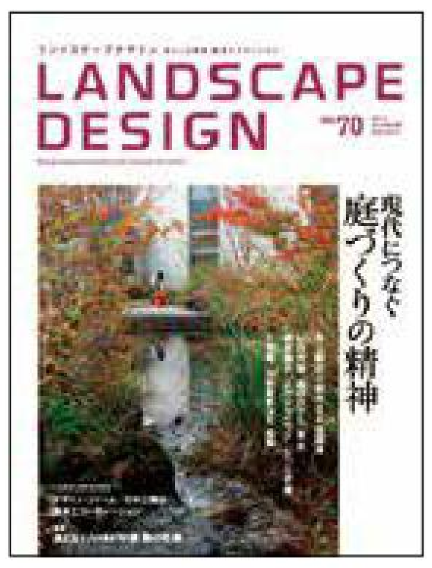
弊誌前号で特集した台湾は、ご存知の方も多いだろうが19世紀末期（日清戦争後）から太平洋戦争の終戦にかけて長らく日本の統治下にあった。この植民地時代に、衛生管理、インフラ整備、教育・文化の根付きなど、日本によって多くの“改革”が起こり、かつて熱帯病が蔓延する未開の地であった台湾は、アジアでも有数の目覚ましい発展を遂げた。本書は、新旧の豊富な画像を交えて、台湾全土における50年間の躍進の歴史を振り返るものである。弊誌にてとり上げた高雄市や宜蘭県、台北市なども登場。如何に多分野において日本が影響を及ぼしてきたか？ それがこの1冊に凝縮されている。やや余談になるが、台湾において都市化した街を歩いていると、日本の都心部とよく似た雰囲気を感じることがある。植民地時代とは建物も街並も大分変わっているであろうにシンパシーを感じるのは、かつて日本の残した目に見えない遺伝子が、今なお根付いているということなのかもしれない。

LANDSCAPE DESIGN バックナンバーのご案内

売り切れ No.1-4 No.6-8 No.20 No.23-24 No.41 No.48 No.60-61 No.64-65 No.75 No.84 No.91-92 No.106 No.108



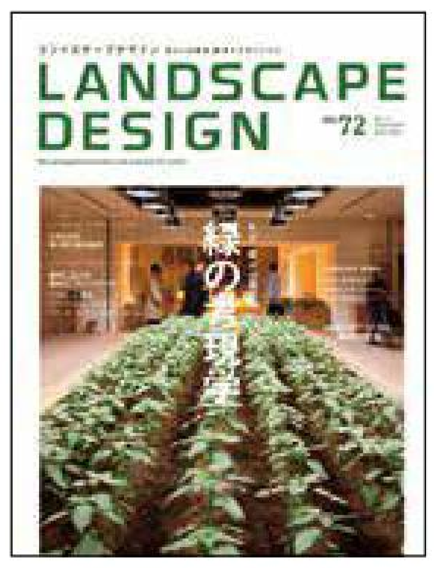
No.69［2009 年 12 月号］
緑化のデザイン力



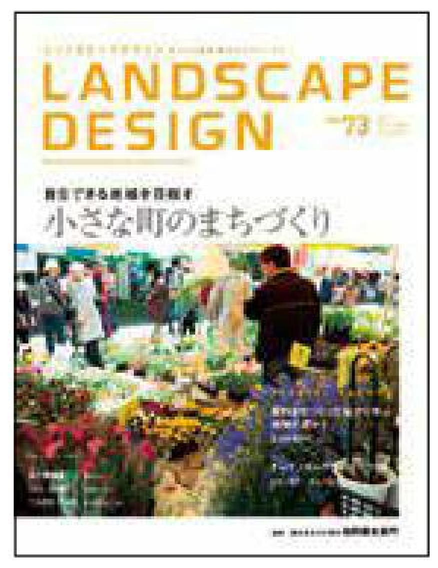
No.70［2010 年 2 月号］
現代につなぐ
庭づくりの精神



No.71［2010 年 4 月号］
生物多様性の風景デザイン



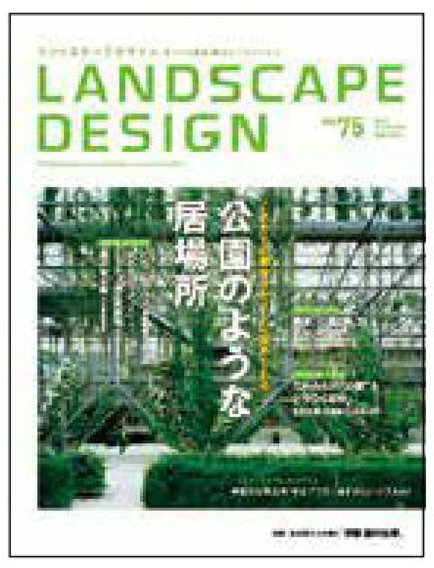
No.72［2010 年 6 月号］
なぜ、緑が必要なのか
緑の考現学



No.73［2010 年 8 月号］
自立できる地域を目指す
小さな町のまちづくり



No.74［2010 年 10 月号］
生きものと共につくる
生物多様性の開発デザイン



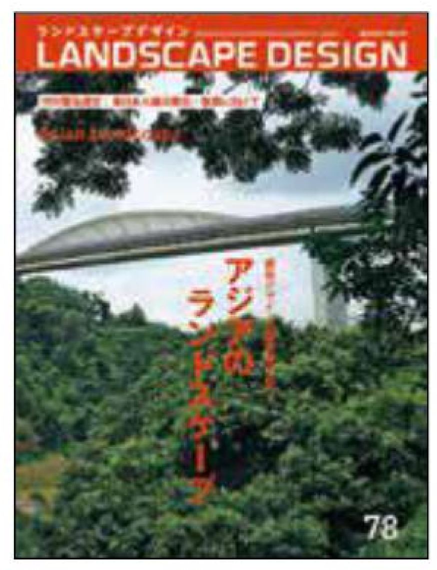
No.75［2010 年 12 月号］
これからの都市デザインに求められる
公園のような居場所
（完売）



No.76［2011 年 2 月号］
新しい都市のイメージをつくり出す
都市緑化とリノベーション



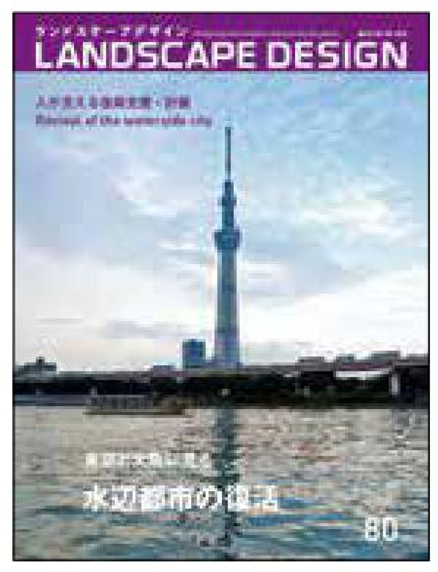
No.77［2011 年 4 月号］
ランドスケープから捉える
パブリックデザイン



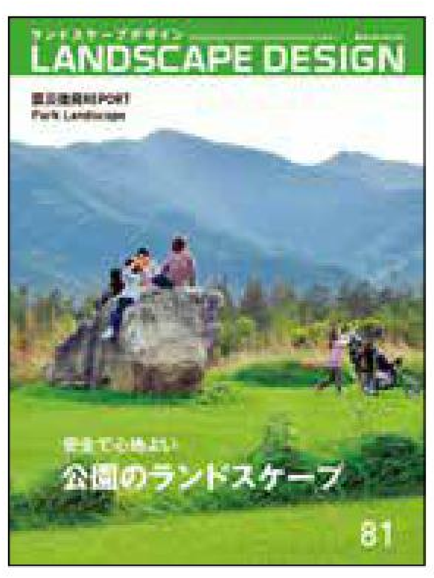
No.78［2011 年 6 月号］
都市デザインの最前線を追う
アジアのランドスケープ



No.79［2011 年 8 月号］
街と鉄道をつなぐ
駅のランドスケープ



No.80［2011 年 10 月号］
東京と大阪に見る
水辺都市の復活



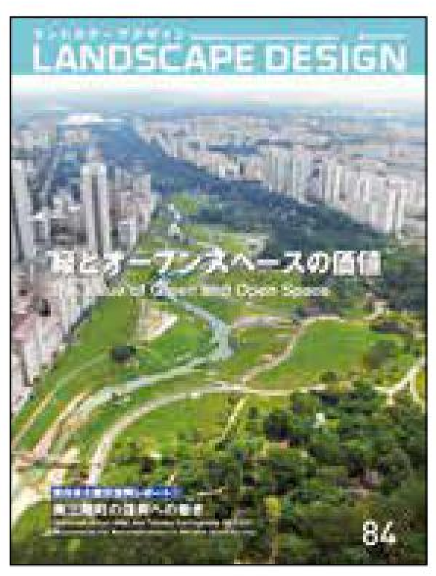
No.81［2011 年 12 月号］
安全で心地よい
公園のランドスケープ



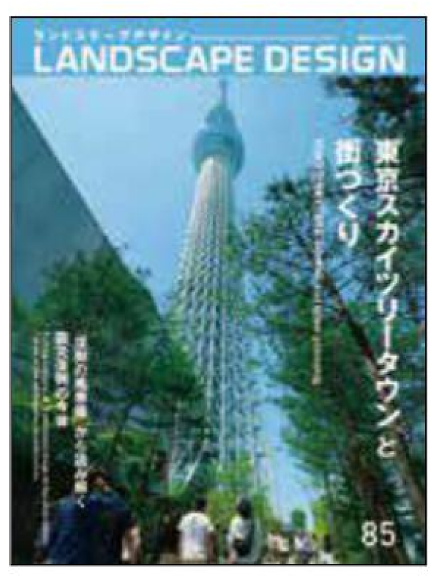
No.82［2012 年 2 月号］
ランドスケープワークス 2011



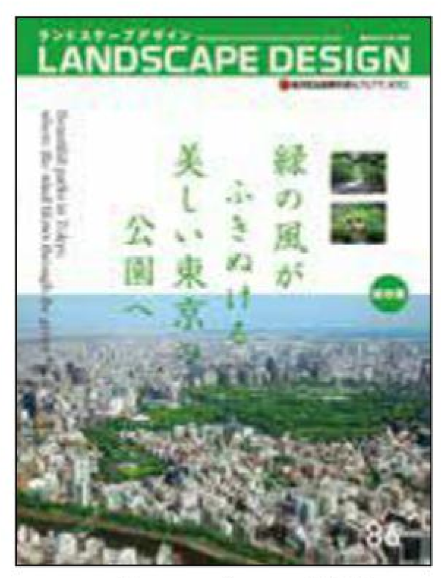
No.83［2012 年 4 月号］
特別養護老人ホームの
「新しい風景」を求めて



No.84［2012 年 6 月号］
緑とオープンスペースの価値
（完売）



No.85［2012 年 8 月号］
東京スカイツリータウン ® と
街づくり



No.86［2012 年 10 月号］
緑の風がふきぬける
美しい東京の公園へ



No.87［2012 年 12 月号］
団地再生とシティスケープ・
デザイン



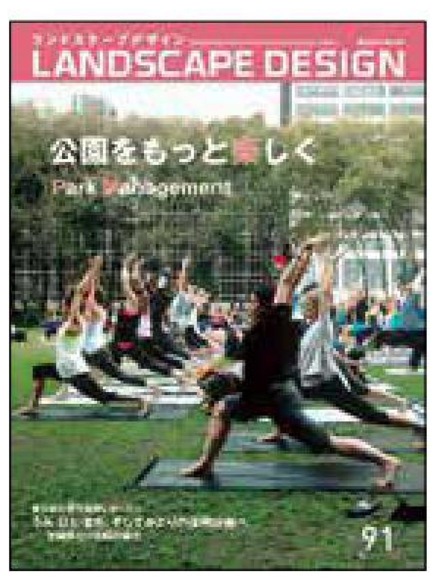
No.88［2013 年 2 月号］
ランドスケープワークス 2012



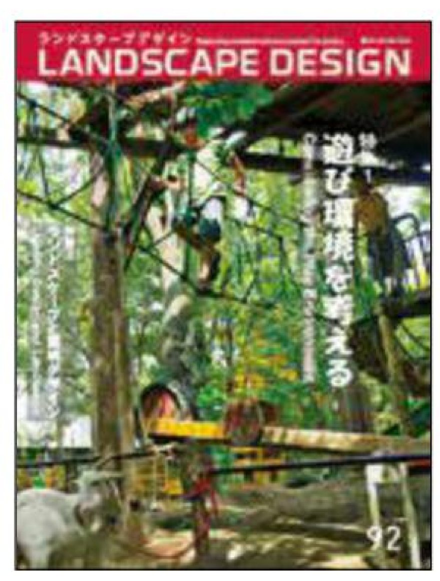
No.89［2013 年 4 月号］
第 29 回全国都市緑化フェア
TOKYO REPORT



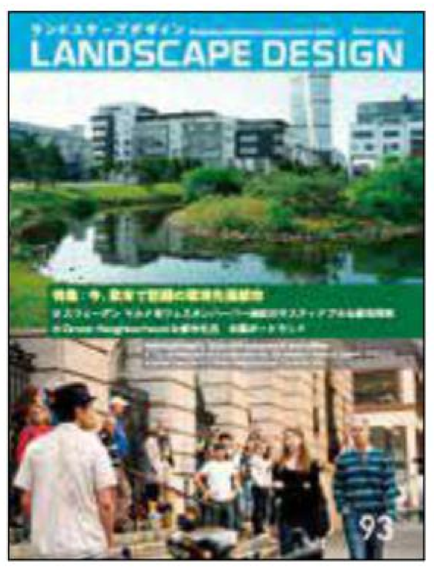
No.90［2013 年 6 月号］
街をリノベーションする



No.91［2013 年 8 月号］
公園をもっと楽しく
（完売）



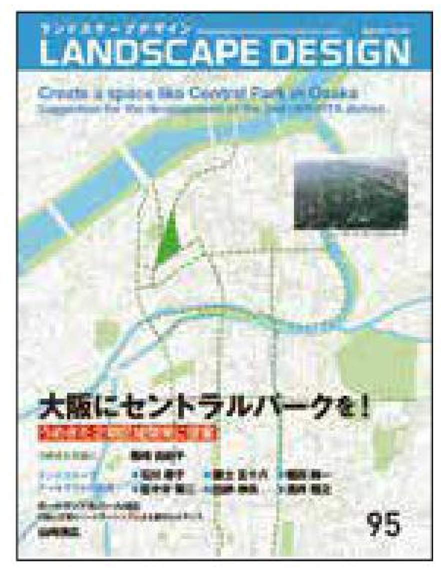
No.92［2013 年 10 月号］
遊び環境を考える
（完売）



No.93［2013年12月号］
今､欧米で話題の環境先進都市
定価1,995円
特集 スウェーデン マルメ市 ウェスタンハーバー地区のサステイナブルな都市開発、Green Neighborhood な都市開発 米国ポートランド他 Works SMA×ECO TOWN 晴美台／ダイワハウス工業㈱、ぽっぽ町田／フィールドフォー デザインオフィス、グランモール公園「美術の広場」部分リニューアル／㈱三菱地所設計他



No.94［2014年2月号］
ランドスケープワークス 2013
定価1,995円
巻頭特集 ヨーロッパのアーバンデザイン 特集 マークイズみなとみらい／ランドスケープデザイン、東京電機大学 東京千住キャンパス／オンサイト計画設計事務所、パークタワー芝公園／フィールドフォー・デザインオフィス、THE WEST MINSTER ROPPONGI／稲治造園工務所、太田川駅前「どんでん広場」／景観設計室タブラ・ラサ 他 連載 淵上正幸の建築・ランドスケープの旅 他



No.95［2014年4月号］
大阪にセントラルパークを！
定価1,995円
特集 うめきたを緑に ランドスケープアーキテクトの提言（石川幹子、進士五十八、稲田純一、佐々木葉二、白砂伸夫、涌井雅之）、都市に自然を 草地による緑化のかたち（ナイジェル・ダネット）他 Works 麗澤大学校舎「あすなろ」／景観設計・東京、くまもと森都心／鳳コンサルタント環境デザイン研究所、ブリリアレジデンス六甲アイランド／E-DESIGN 他 連載 淵上正幸の建築・ランドスケープの旅 他



No.96［2014年6月号］
欧州ランドスケープのニューウェーブ
定価1,995円
特集［インタビュー］クリスチャン・ド・ポルザンパルク オープン街区 パリ・マセナ地区再開発、The City Dune SEB 銀行本社ビル／SLA 他、グランフロント大阪 Works ガーデニエール砧ウェスト／フィールドフォー・デザインオフィス他 連載 淵上正幸の建築・ランドスケープの旅 他 More 教室に木の温もりの学習机が来た／さがみ湖 森・モノづくり研究所 他



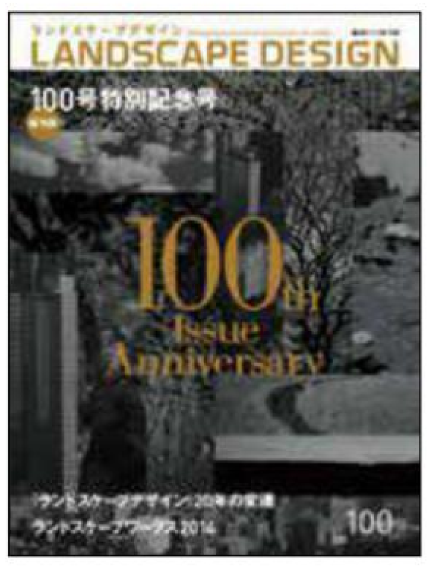
No.97［2014年8月号］
人と都市を繋ぐ緑のランドスケープ
定価1,995円
特集 晴海アイランド トリトンスクエア 植栽管理が育む14年目の緑の景、ブラウドシティ浦和、服部緑地 ほか［インタビュー］谷本良平（晴海コーポレーション代表）Works 東急ハーヴェストクラブ熱海伊豆山／ランドスケープデザイン、ワテラス / 千代田区立淡路公園／GA ヤマザキ等 他 連載 淵上正幸の建築・ランドスケープの旅、東日本大震災復興REPORT、発想考楽のすすめ 他



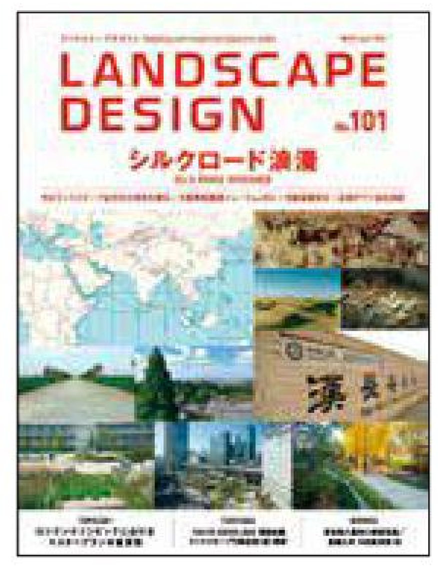
No.98［2014年10月号］
地域に開かれた
キャンパスランドスケープ
定価1,995円
特集 愛知学院大学名城公園キャンパスのランドスケープ、立命館大学 3つのキャンパスプラン、［対談］「森の幼稚園」の建築とランドスケープ 新潟青陵学園幼稚園の計画提案をめぐって他 Works ヤンマーマリーナホテル／セトレマリーナ琵琶湖／芦澤竜一＋稲田純一他



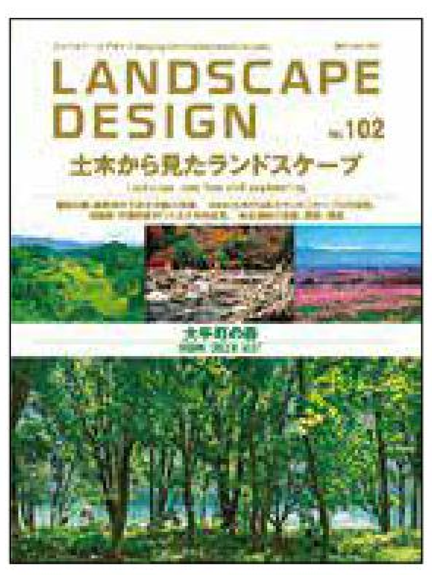
No.99［2014年12月号］
コンパクトシティとまちづくり
定価1,995円
特集 柏の葉キャンパスシティ ランドスケープ、コンパクトなまちづくり（富山県富山市）、つるおかランド・バンク事業、サインが支える観光のまちづくり、世界海洋村構想 他 Works 漢南ザ・ヒル／佐々木葉二＋鳳コンサルタント環境デザイン研究所、あさひかわ北彩都ガーデン / まちなかのオアシス・リゾート／高野ランドスケーププランニング、緑花計 他 More［書評］風景とローカルガバナンス 他



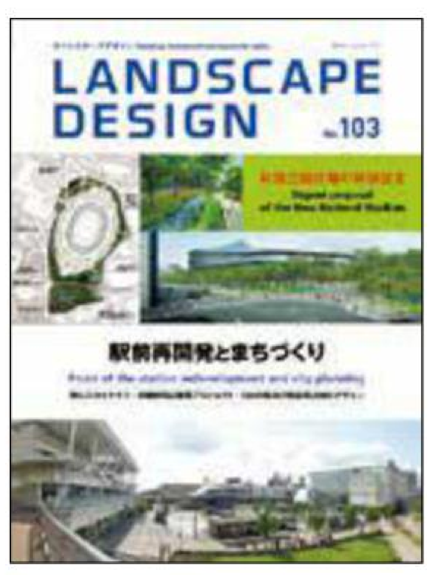
No.100［2015年2月号］
『ランドスケープデザイン』
20年の変遷
定価1,995円
特集『ランドスケープデザイン』のテーマを括るキーワード Works(ランドスケープワークス 2014) 佐久総合病院 佐久医療センター／神田万世橋プロジェクト／飯田橋駅西口地区 第一種市街地再開発事業／伊豆高原の家／新幸橋ビルディング前庭広場 リフレッシュ整備／プトラジャヤ植物園 他 More 話題のランドスケーププロダクツ



No.101［2015年4月号］
シルクロード浪漫
定価1,995円
特集 中日ランドスケープ合作の方向性を探る、中国青島国際フォーラム 2014、甘粛省蘭州市、広西チワン族自治区 他 Works 東京駅八重洲口駅前広場「緑の雲」と「光の帆」／日建設計・ジェイアール東日本コンサルタンツ(株)、創価大学中央教育棟／日建設計・MLS・景観設計・東京 他 More 世界屋上緑化会議 名古屋大会 2015、ランドスケープデザイン100号記念感謝交流会 他



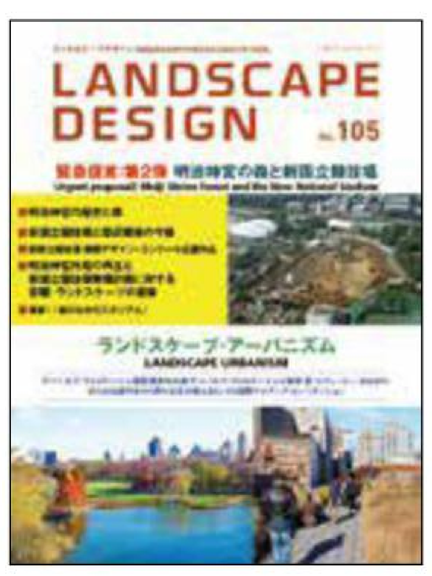
No.102［2015年6月号］
土木から見たランドスケープ
定価1,995円
特集1 警固公園、通潤用水下井出水路の改修、［座談会］土木から見たランドスケープの可能性、造園家 伊藤邦衛がつくる土木的風景、高速道路の造園・景観・環境 特集2 大手町の森 Works 箱根山テラス／オンサイト計画設計事務所、札幌市北3上広場／日本設計、Okazaki Villa／植彌加藤造園 More SEGES／社会・環境貢献緑地評価システム 他



No.103［2015年8月号］
駅前再開発とまちづくり
定価1,995円
新国立競技場の緊急提言 神宮外苑の環境と新国立競技場の調和と向上に関する提言／日本学術会議環境学委員会 都市と自然と環境分科会 特集 狭山スカイテラス、草薙駅周辺整備プロジェクト、日向市駅及び駅前周辺地区デザイン 他 Works さかさ川通りの再整備／蒲田再開発推進委員会、えびの涼風園／ソラ・アソシエイツ 他 More 日比谷ランドスケープデザイン展 2015 他



No.104［2015年10月号］
まちを快適にする緑化マネジメント
定価1,995円
特別報告 新たな修景思想への誘い／ジル・クレマン連続講演会、現代フレンチ・ランドスケープの一断面 ジル・クレマンの庭と公園 特集 としまエコミューゼタウン／㈱ランドスケーププラス、OHANA／㈱長谷工コーポレーション 他 Works おとめ山公園拡張整備計画・設計／石川幹子＋㈱東京ランドスケープ研究所 他 More TOKYO GREEN 2020 FORUM 2nd Round 他



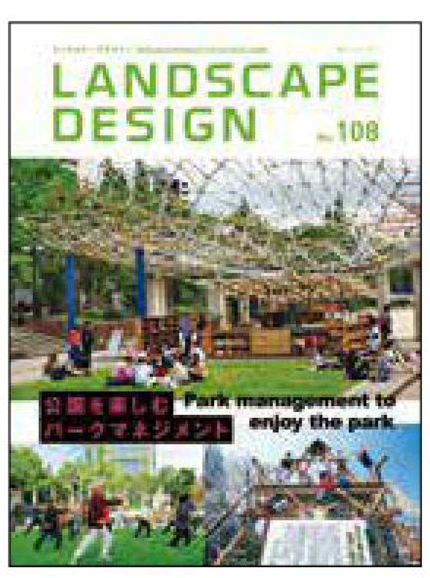
No.105［2015年12月号］
ランドスケープ・アーバニズム
定価1,995円
緊急提言第2弾 明治神宮の森と新国立競技場 新国立競技場と周辺環境の今後／森本智之、ランドスケープ・アーバニズムその本質と日本における可能性、風土自治圏を育む／中村良夫 他 Works 玉川大学／久米設計、八海山雪室／ランドスケープデザイン、奈良の庭／荒木造園設計 More 新山口駅に「垂直の庭」完成／山口市 ターミナルパーク整備部



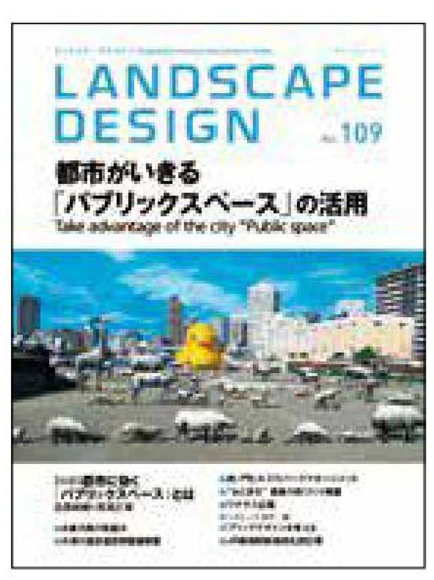
No.106［2016年2月号］
ランドスケープワークス 2015
定価1,995円（完売）
特集 桜上水ガーデンズ／ランドスケープ・プラス、生長の家 赤坂／原宿 "いのちの樹林"／フィールドフォー・デザインオフィス＋清水建設設計本部、ブラウドシティ新大阪／鳳コンサルタント環境デザイン研究所、TOYOSU22 グリーンクロスプロジェクト／日本設計＋オンサイト計画設計事務所他 MORE 自然から学ぶ─竹川清和さんの森づくり



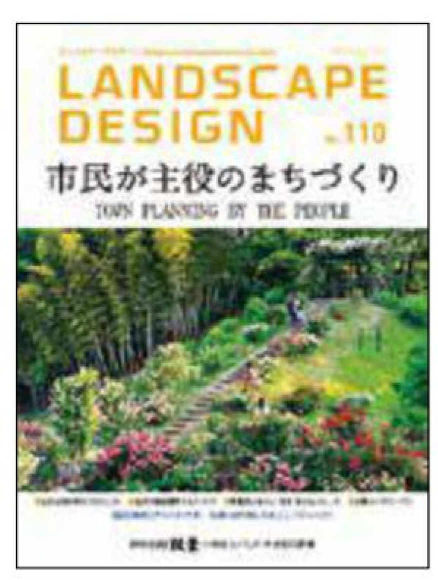
No.107［2016年4月号］
震災復興のための
「コミュニティ」づくり
定価1,995円
特集 石巻・川の上プロジェクト、地域の種 市民の手で進める復興の森づくり、「三陸人つなぎ自然学校」の活動、プレーパウス てんぱくプレーパーク小屋再建プロジェクト、Works オムロンヘルスケア新本社／ランドスケープデザイン、茨木市岩倉町地区防災公園街区整備／ヘッズ大阪、Le Mont Fuji／Atelier kaba 他



No.108［2016年6月号］
公園を楽しむパークマネジメント
定価1,995円（完売）
特集 東京のパークマネジメント、NPO 法人ハマのトウダイ パークマネジメント、朝霞の森、氷見 朝日山公園、都心の公園の育て方、地域に開かれた東高根森林公園、尼崎の森中央緑地、椿森コムナに見る、賑わう広場づくりのスタイル、NPO 法人プレーパークせたがや他 Works 太田公園／景観設計室タブラ・ラサ、ペンブローク麻布ガーデンズ／庄島設計室他



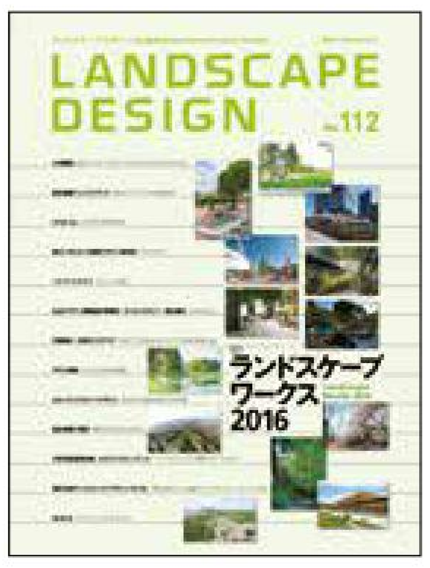
No.109［2016年8月号］
都市がいきる
「パブリックスペース」の活用
定価1,995円
特集［対談］都市に効く「パブリックスペース」とは 忽那裕樹×馬場正尊、水都大阪の取組み、木津川遊歩道空間整備事業他 釜石東部地区 津波復興拠点整備事業フロントプロジェクト1 Works 深圳漢京九榕台プロジェクト／戸田芳樹風景計画、クレディ アグリコール銀行本社のランドスケープ／Takano Landscape Plannning+Atelier Kaba 他



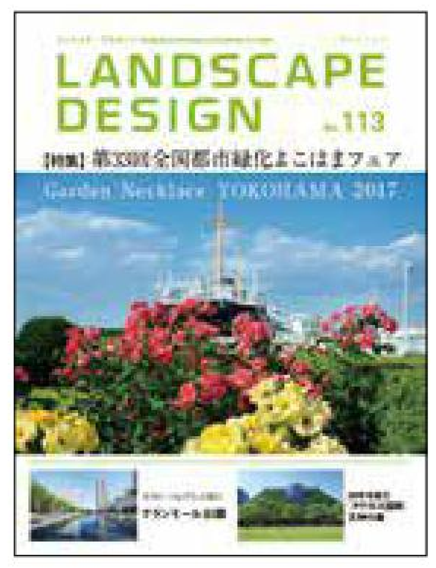
No.110［2016年10月号］
市民が主役のまちづくり
定価1,995円
特集 左近山団地再生プロジェクト／STGK inc.、太陽ローズガーデン他、震災復興 ナミイタ・ラボ他 設景／小林治人（㈱東京ランドスケープ研究所）Works 神田錦町テラススクエア／N.L.A＋日建設計、とおり町 Street Garden／UID More 長崎「巡礼の道」ランドスケープ／五島聖子（長崎大学環境科学部教授）他



No.111［2016年12月号］
子どもの遊び場って何？
定価 1,995円
特集1 子どもの遊び場とは／熊尾重治、ボーネルンド プレイヴィル 天王寺公園他 特集2 その場に生まれる様々な関係を「光り」でつなぐ／富田泰行､画家が絵の具を扱うように「光り」を扱う／小野田行雄他 Works Brillia 狛江 Farm&Gardens／タカ・グリーン・フィールズ他 More アスリート・観客に優しい道づくりに向けた提言／国土交通省道路局他



No.112［2017年2月号］
ランドスケープワークス 2016
定価 1,995円
特集 品川シーズンテラス ノースガーデンとサウスガーデン／大成建設、東京ガーデンテラス紀尾井町／設計組織プレイスメディア、EXPOCITY／鳳コンサルタント環境デザイン研究所、東急プラザ銀座 キリコテラス・数寄屋橋公園／日建設計＋石勝エクステリア、伊勢志摩サミット 国際メディアセンター アネックスの庭／西田正徳ランドスケープ・デザイン・アトリエ他



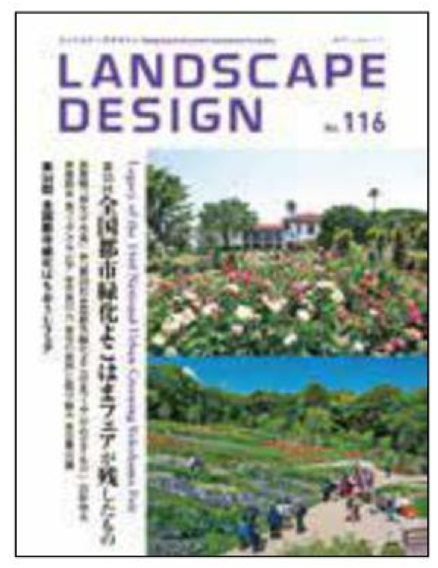
No.113［2017年4月号］
第33回全国都市緑化横浜フェア
定価 1,995円
特集 第33回全国都市緑化横浜フェア、みなとガーデン会場、里山ガーデン会場 Works グランモール公園／三菱地所設計、マリン アンド ウォーク ヨコハマ／アール・アイ・エー東京支社、鹿島建設横浜支店、ランドスケープデザイン More〈対談〉20年を経た「アクロス福岡」天神の森／エイ・エフ・ビル管理、内山緑地建設、京都ランドスケープデザイン展他



No.114［2017年6月号］
オープンスペースとしての 街路・街路樹
定価 1,995円
特集 2020東京オリンピック・パラリンピックに向けた街路樹の樹冠拡大／藤井英二郎、丸の内仲通り、江戸川区の街路樹行政、社会実験から見える街路の活用、桜を巡る東北の人々と復興の今／桜野良充他 Works 東根市公益文化施設 まなびあテラス／山下設計＋ソラアソシエイツ、明石の庭／荒木造園設計他



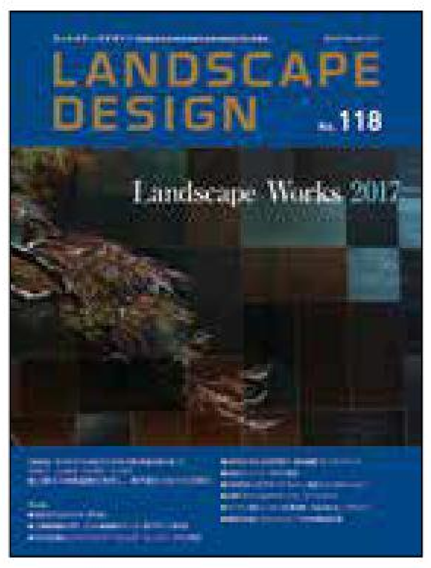
No.115［2017年8月号］
公園をもっと使おう！
定価 1,995円
特集「公園」を使い倒す／町田誠、井の頭公園アートマーケッツ、民間参入を、公園の魅力アップにつなげる公益還元システムの構築／東京都公園協会、みまもりの家／清水靖枝他､新連載 小口健蔵が行く｡パークマネジメントの最前線!他 Works 深川ギャザリア／グラック他 More「僕の作品の素材は社会です。」殿敷侃他



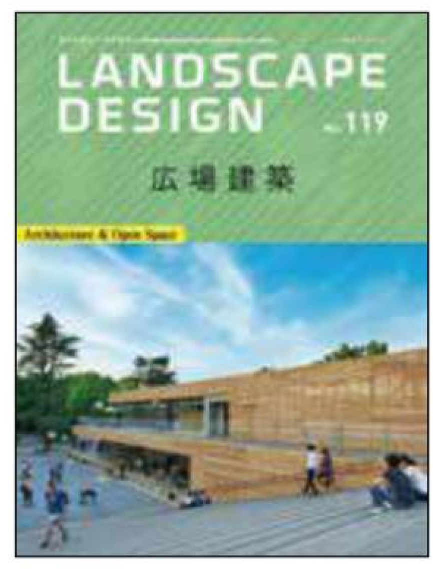
No.116［2017年10月号］
第33回全国都市緑化横浜フェアが残したもの
定価 1,995円
特集［寄稿］横浜市長林文子／第33回全国都市緑化よこはまフェアを振り返って、第33回全国都市緑化よこはまフェアがめざすもの／白砂伸夫、Garden Necklace YOKOHAMA2017、第34回全国都市緑化はちおうじフェア他 Works 福徳の森／日本設計＋榊原八朗他



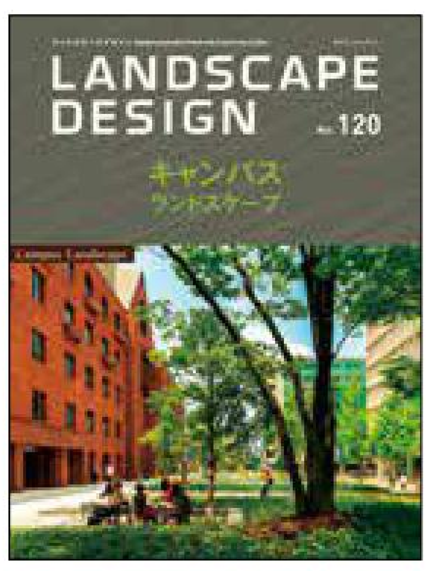
No.117［2017年12月号］
グリーンインフラ
定価 1,995円
特集［インタビュー］涌井雅之 グリーンインフラについて話そう、ホトリア広場／三菱地所設計、［対談］グリーンインフラを語ることはランドスケープアーキテクトの職能を語ること、エネルギーの自給自足を実現し、地域の新たなコミュニティの場をつくる他、Works MAJES MOTO-AZABU 他 GARDENS／戸田芳樹風景計画 More PIOTR KOWALSKI 風人他



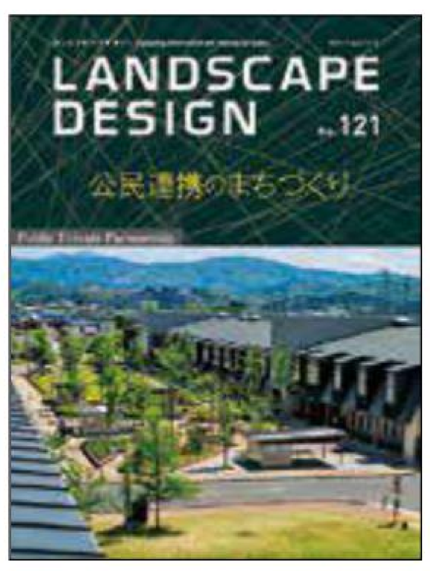
No.118［2018年2月号］
ランドスケープワークス 2017
定価 1,995円
巻頭特集【座談会】サカタのタネ本社ビル 22年の緑化技術を振り返って 特集 左近山みんなのにわ／STGK、上野動物園弁天門・子ども動物園すてっぷ／景デザイン研究所、天王寺公園エントランスエリア“てんしば”／ヒュマス＋竹中工務店、GINZA SIX GARDEN／設計組織プレイスメディア、京都グランベルホテル／ソラ・アソシエイツ、コーナン港北インター店園芸館「Gardens」／グランツ他



No.119［2018年4月号］
広場建築
定価 1,995円
巻頭特集 日比谷パークフロント／ランドスケープデザイン 特集 名城公園 tonarino／マウントフジアーキテクツスタジオ、天理駅前広場 CoFuFun／デザインオフィス nendo、YOSHI PAVILLION／芦澤竜一＋永井拓生＋松岡拓公雄＋滋賀県立大学（芦澤竜一研究室＋永井拓生研究室）他 Works 椙山女学園大学附属幼稚園・保育園／環境デザイン研究所他



No.120［2018年6月号］
キャンパスランドスケープ
定価 1,995円
巻頭特集 太倉裕泌庭／積水ハウス，坂倉建築研究所＋設計組織 PLACEMEDIA 特集 近畿大学東大阪キャンパス西門広場／E-DESIGN, NTTファシリティーズ、愛媛大学城北キャンパス／／白砂伸夫＋ARTFUSION、実践女子大学日野キャンパス／STGK Inc.、［インタビュー］仙田満 大学キャンパスはみんなでつくる Works リヴァージュの庭／佐々木葉二他



No.121［2018年8月号］
公民連携のまちづくり
定価 1,995円
巻頭インタビュー 木下斉（エリア・イノベーション・アライアンス代表理事）：公民連携事業は地方の「自治意識」を変えられるか、オガールプロジェクト，オガール広場、なつかしさのあたらしさをつくる、公園がまちを変える─宮塚公園他 Works 赤坂インターシティ AIR／日本設計他 More 木材資源革命／塩田政利（ニッコー代表取締役）他

大好評
発売中



No.122［2018年10月号］
台湾ランドスケープの今
定価 1,995円
CLOSE-UP 衛武営国家芸術文化中心／メカノー 巻頭インタビュー 台湾のランドスケープ事情と政治の関係／石村敏哉、特集 冬山河森林公園 生態緑舟／高野ランドスケープ・プランニング㈱台湾支店、宜蘭のまちづくり 田中央工作群＋黃聲遠による「維管束」活動、大安森林公園他 Works オオソラモ野田みずき／拓匠開発、シロアナ＋ウイン他

LANDSCAPE DESIGN 定期購読

年間定期購読料（6冊） **11,000** 円（税込）

ここがお得! 定期購読

1. 割引価格でご提供いたします
   定期購読なら1冊あたりの単価は1,833円。
   年間で970円お得です。
2. 送料無料で、ご希望の住所までお届けいたします
   定期購読中は発売日に合わせ、弊社より雑誌をお送りします。
   もちろん送料は無料です。

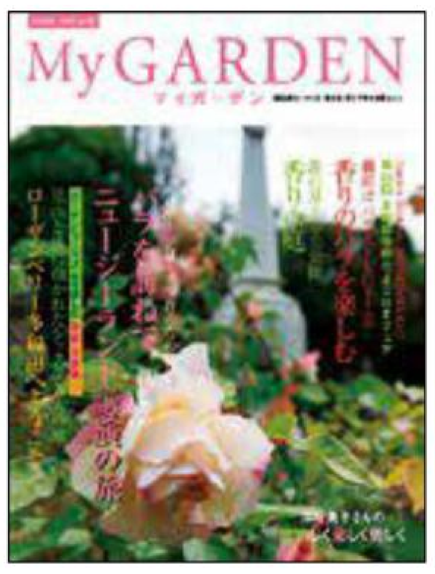


定期購読のご案内

★お申し込みは巻末の郵便局の振込用紙にてご入金ください。
★購読満了の際にはご案内いたします。
★銀行振込をご利用の方は、ご一報いただいた上、右記口座へお振込ください。　三菱UFJ銀行 渋谷中央支店（普）5294495 株式会社マルモ出版
★問合せ／㈱マルモ出版（担当：一ノ瀬）　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション708　TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387

MyGARDEN

バックナンバーのご案内

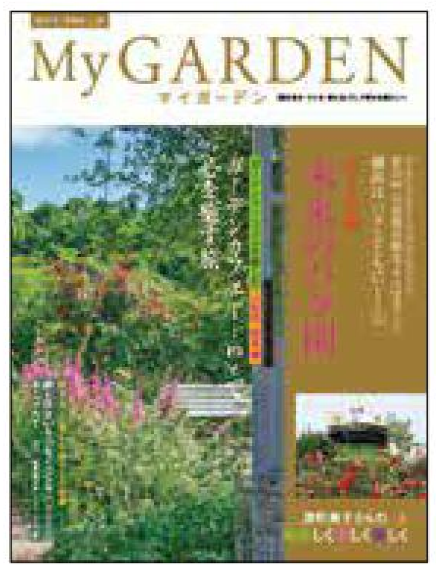


No.80（2016年9月発売）

バラを訪ねて ニュージーランド講演の旅

定価 1,200円

●バラを訪ねてニュージーランド講演の旅／御巫由紀●横浜は バラとともに 3 ●香りのバラを楽しむ／白砂伸夫●レストランオーナー笹生新さんの「つるバラ」ものがたり●ガーデンツーリズムを楽しむ VOL1 京都・米原編 ローザンベリー多和田へようこそ●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか

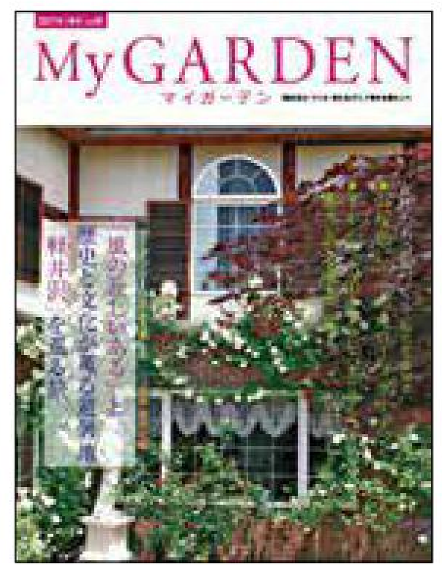


No.81（2016年12月発売）

山下公園 未来のバラ園

定価 1,200円

●【特集】横浜は バラとともに 4 ●山下公園「未来のバラ園」／白砂 伸夫●群馬県高崎クリスマスローズガーデンより ウィンターガーデンへようこそ／富沢 登●ガーデンツーリズムを楽しむ VOL 2 秋田・岩手編「ガーデンカフェ Time」で心を癒す旅●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル銀座スクエアほか

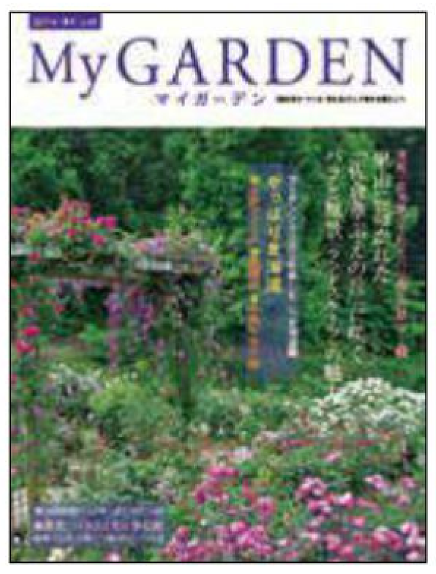


No.82（2017年3月発売）

「風の丘しいある」と歴史と文化が薫る避暑地「軽井沢」を巡る旅

定価 1,200円

●【特集】女性たちの庭づくり：お屋敷につくったローズガーデン／北川洋子、華やかさの中にもしっとりと趣ある庭を描く／吉田ゆみ子●「風の丘しいある」と歴史と文化が薫る避暑地、「軽井沢」を巡る旅●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか

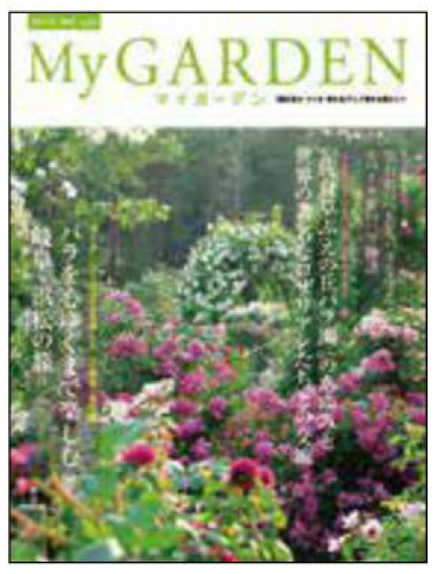


No.83（2017年6月発売）

やっぱり北海道!!

定価 1,200円

●里山に抱かれた「佐倉草ぶえの丘」に咲くバラと風景（ランドスケープ）の魅力／前原克彦●やっぱり北海道!!●東京、バラとともに歩む街●第33回全国都市緑化よこはまフェア日本大通りフラワーフェスタ●第19回国際バラとガーデニングショウほか

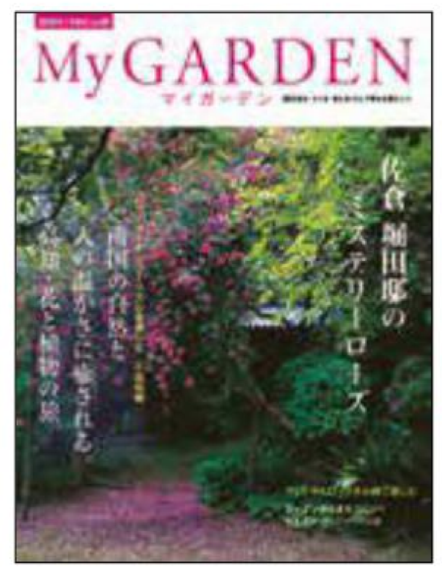


No.84（2017年9月発売）

バラを心ゆくまで楽しむ 岐阜・浜松の旅

定価 1,200円

●ルベールコレクション―❶ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●「佐倉草ぶえの丘バラ園」のあゆみと世界の著名なロザリアンたちとの交流●バラを心ゆくまで楽しむ岐阜・浜松の旅●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



No.85（2017年12月発売）

南国の自然と人の温かさに癒される。高知・花と植物の旅。

定価 1,200円

●佐倉堀田邸のミステリーローズ●ルベールコレクション―❷ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●南国の自然と人の温かさに癒される。高知・花と植物の旅。●クリスマスローズをお庭で楽しむ●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか

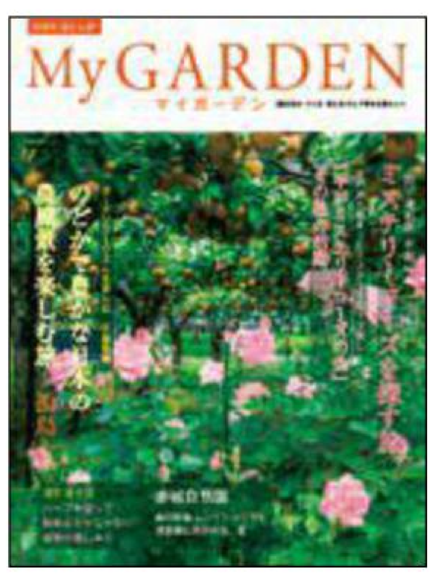


No.86（2018年3月発売）

いにしえより続く植物と共にある暮らしを探る旅へ～京都・奈良～

定価 1,200円

●四季折々に美しい草ぶえの丘バラ園の風景●ルベールコレクション―❸ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●明治・大正・昭和を生きた陶工 河井寛次郎 ～その暮らしと庭と～●いにしえより続く植物と共にある暮らしを探る旅へ～京都・奈良～●第2回バラ管理ネットワーク会議ほか

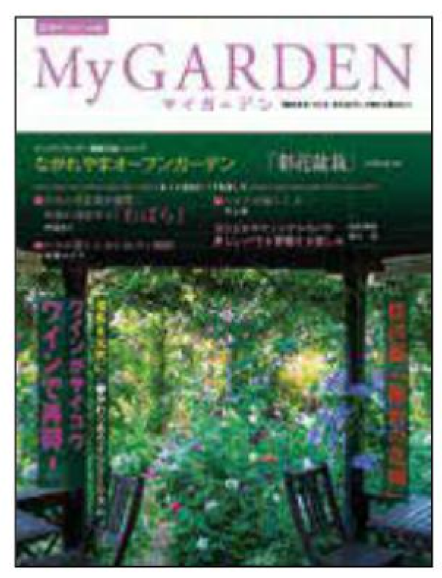


No.87（2018年6月発売）

のどかで豊かな日本の農風景を楽しむ旅～福島～

定価 1,200円

●山口・津和野・宇部 ミステリーローズを探す旅／白砂伸夫、国司淑子●のどかで豊かな日本の農風景を楽しむ旅～福島県～●赤城自然園 森の妖精レンゲショウマと深き緑に抱かれる、夏●【第20回】国際バラとガーデニングショウ●深町貴子流 ハーブを使って眺めるだけじゃない植物の楽しみ方ほか



No.88（2018年9月発売）

ながれやまオープンガーデン

定価 1,200円

●ながれやまオープンガーデン●日本の美意識を体現し世界に発信する「わばら」●バラの愛らしさに気づく瞬間 後藤みどりさんが提案するバラの楽しみ●ルベールコレクション 最終回 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●福島を元気に❶かわうちワインツーリズム●彩花盆栽／清香園●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか

定期購読のご案内

MyGARDEN 定期購読

季節ごとに届く年4冊。プレゼントにも最適です！



年間定期購読料（4冊） **4,400** 円（税込）

ここがお得! 定期購読

1.割引価格でご提供いたします
定期購読なら1冊あたりの単価は1,100円。
年間で400円お得です。

2.送料無料で、ご希望の住所までお届けいたします
定期購読中は発売日に合わせ、弊社より雑誌をお送りします。
もちろん送料は無料です。

★お申し込みは巻末の郵便局の振込用紙にてご入金ください。
★購読満了の際にはご案内いたします。※中止の場合はご連絡くださいますようお願いします。
★銀行振込をご利用の方は、ご一報いただいた上、右記口座へお振込ください。　三菱UFJ銀行 渋谷中央支店（普）5294495 株式会社マルモ出版
★問合せ／㈱マルモ出版（担当：一ノ瀬）　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション708　TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387

NEXT ISSUE No.124
LANDSCAPE DESIGN

次号124号は
2018年12月22日発売予定

広告掲載企業

特集 Landscape Works 2018

国内外で活躍するランドスケープアーキテクトの
注目すべき近作プロジェクトを一挙紹介いたします。

●内容が変更になる場合がございますのであらかじめご了承下さい。

急募 マルモ出版 編集・制作スタッフを募集しています



日本で唯一のランドスケープの専門誌「LANDSCAPE DESIGN」
およびガーデン雑誌「MyGARDEN」のさらなる誌面充実を目指し、
マルモ出版では現在、新しい編集・制作スタッフを募集しています。

■**仕事内容**／雑誌「マイガーデン」「ランドスケープデザイン」の編集・デザインなど
※いずれは取材、撮影、企画営業など、雑誌づくり全般に携わりたい方大歓迎！

■**募集条件**／Adobe InDesign の使用経験がある、社会人経験3年以上の方
■**就業時間**／10:00～18:00（原則）　■**雇用形態**／正社員
■**休日**／土日祝（完週休2）、年末年始（12月30日～1月4日）　■**給与**／委細面談
■**勤務地**／本社（渋谷区南平台町）　■**加入保険等**／雇用、労災、健康、厚生

【申込方法】㈱マルモ出版の下記住所まで写真付履歴書・職務経歴書をお送りください。
Tel：03-3496-7046（平日 10:00～18:00）
住所：東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション 708



品切れたあの号も ワンタッチで読める

LANDSCAPE DESIGN

携帯電話・タブレット 専用アプリを配信中！

印刷版より 50%OFF

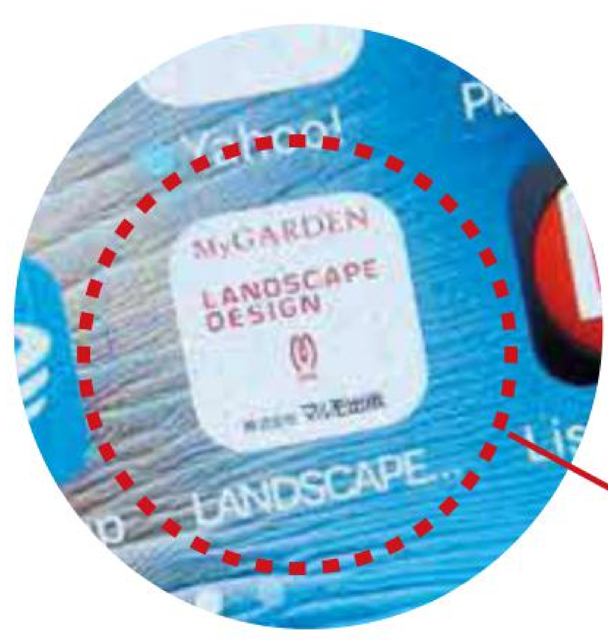
価格/号 **960円**（税込）

Google Play または **Apple Store** より
ダウンロードいただけます（アプリのダウンロードは無料です）

検索 Word ［ランドスケープデザイン］［検索］

アプリ版は こんな方におすすめです

1. 書店などで売り切れてしまったバックナンバーを購読したい方（No. 64以降なら全て購読可能）
2. 外出先で急に読みたくなった方
3. 本棚の容量を節約したい方
4. 営業やプレゼンテーション用に使用したい方



アイコンから…

ダウンロード後は、トップ画面からアイコンをタップ！
すぐ専用ページにアクセスできます。



出先でも！



コーヒータイムでも！

※画像はすべてイメージです

【アプリ版のダウンロード・ご利用方法】

GooglePlay もしくは AppleStore より「ランドスケープデザイン」で検索するか、下記 URL よりアクセスし、ダウンロードしてください。その後、アプリより希望の号を選択し、ご購入下さい。

世界最大級の電子雑誌サービス
ZINIO™
https://www.zinio.com

世界62ヶ国以上で購入・閲覧が可能です

主な購読可能国／アメリカ、カナダ、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、ニュージーランド、中国、香港、日本、韓国、台湾、シンガポール、インド、デンマーク、ドイツ、スペイン、フランス、ベルギー、イタリア、オランダ、ノルウェー、ポルトガル、ロシア、スイス、フィンランド、スウェーデン、イギリス ほか

【GooglePlay】 https://play.google.com/store/apps/details?id=com.audiencemedia.app3409
【AppleStore】 https://itunes.apple.com/jp/app/landscape-design/id1289138643?mt=8&ign-mpt=uo%3D2



ランドスケープデザイン 第123号
2018年12月発行（偶数月発行）
編集発行人／丸茂 喬
発行所／㈱マルモ出版 〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション708 ☎03-3496-7046
定価1,995円 本体1,847円

雑誌19135-12

4910191351286
01847